

---

# 利知未シリーズ中学編 『幸せの種』

茅野 遼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

利知未シリーズ中学編 『幸せの種』

### 【Nコード】

N5648C

### 【作者名】

茅野 遼

### 【あらすじ】

館川利知未<sup>たてかわ りちみ</sup>（旧姓・瀬川<sup>せがわ</sup>）27歳になる彼女は、中学時代に知り合った、現在、自動車整備工場の整備士として働く夫・倉真<sup>そうま</sup>26歳との間に一人目の子供を授かった。現在、妊娠4ヶ月。利知未は大学病院で働く外科医だ。一人、休日にお腹の子供に優しく語り掛けている。それは倉真と出逢う頃までの、中学時代の懐かしい思い出話だ。当時、かなり少年チックでヤンチャ者だった彼女は、その中学時代に初恋を覚え、初潮を迎える。倉真とは別に初めての恋人を得た頃までの、三年間の思い出話だった。これは、主人公・利知

未の、幸せな結婚までの、長い長い成長物語の、始まりの章である。

## 一章 現在へと繋がる 始まりの初夏（前書き）

この作品は、ある出版社のコンテストに応募し、最終選考で落ちてしまった作品です。

決して、未成年の喫煙や、ヤンチャ行動を推奨するものではありません。

本文上、今から大体、20年程前の中学生が、主人公になります。その年代の方には、懐かしく感じて頂ければ、良いなと思います。ご理解の上、利知未ワールドを、お楽しみ下さい。

## 一章 現在へと繋がる 始まりの初夏

幸せの種

茅野 僚

プロローグ

彼女は、今。

自分の体の中に宿る、新しい命と、静かに会話する。

「私が、あなたのお父さんと知り合ったのは、もう、十二年前の事。  
……あの頃の、倉真は」

どうし様も無い、不良少年。一つ違いの、弟の様なアイツ。  
……何時から、どうして、私は彼を、愛し始めたのだろうか？

けれど、一つだけ言える事は。  
「あなたは、私と倉真の、愛情の証。 まだ、顔も見た事のないあなたを、私は、あなたのお父さんと同じくらい、愛している」  
……だから、元気に生まれて来て。

全てが始まったのは、あの街。  
肉親との縁が薄かった彼女。 瀬川<sup>せがわ</sup> 利知未<sup>りちみ</sup>は、まだ中学一年生の少女時代に、家族と離れて、一人。 あの下宿へやって来た。

中学一年の、四月の終わりから。 沢山の、姉妹の様な下宿仲間と過ごして来た、約十年間。

初めて利知未を見た時。 下宿の若い女性大家、野沢のさわ 里沙りさは驚いていた。 その容姿と、口調、行動。

これは、大変な店子を引き受ける事になったと感じた。けれど、同時に。

里沙は利知未の個性を、一つの覚悟と共に受け入れ、愛してくれた。

始まりは、その愛情。

そして、これから出逢う事になる、大切な仲間達との繋がり。

それが、今。 母親になろうとする、落ち着いた一人の女性である彼女を作り上げた。

これは、今の伴侶 館川たてかわ 倉真そうまと出会う頃までの、利知未の大切な、思い出のお話。

## 一章 現在へと繋がる 始まりの初夏

### 一

それは利知未が、ふたつきはん 神奈川県にある里沙の下宿に入居して、やっと二月半を数える頃。

利知未が、この二ヶ月半を過ごして来た下宿は、私鉄線の駅まで徒歩三十分はかかる場所にあった。 電車を利用する為には、バスを利用して十分。 利知未の通う中学校までは、徒歩三十分。

まだ所々に緑地も残されている、暮らすには申し分のない街だ。

その年七月初旬の、十四時頃の事だった。

下宿から西。地元民からホテル街と呼ばれている一角を過ぎ、更に西へ向かって二十分も歩いた先に、小さな川があった。河原には雑草も生い茂り、時間潰しに、ゴロリと横になるには向いていた。

利知未は学校を、午前中で勝手に早退して来た。この河原迄の道筋、途中にある公園のトイレで私服に着替えて来た。

寝転がっている利知未の脇には、スポーツバッグが転がっている。口には火の着いたタバコが、啞えられていた。

「……かつたりーな」

呟く。口の端から煙が昇る。

両腕枕にしていた右腕を、頭の下から外し、啞えタバコを指に挟んだ。

深く一吸い。盛大に煙を吐き出す。

「火事じゃねーよな」

頭の上の方から、声が降って来た。軽く上半身起き上がって、振り返る。

「何だ、お前。こんな時間に何してる？」

その起き上がった上半身を視界に認めた、三十代半ばに見える男性が利知未を見て、少し驚いた様に両眉を上げた。

「昼寝してんだよ。他に何してるよーに見えんだよ？」

「俺には、年齢にそぐわない行為を、している様に見える」

「だから何だよ」

「一応、大人として忠告をする義務がある」

「で？」

「まだ中学生だろう？ その行為は、憲法違反だ」

「……変な言い方するな」

「そうか？」

呑気そうな表情を見て、利知未は微かに笑ってしまった。

その男性は雑草を踏んで、利知未の近くまでやって来た。

「ボーズ、学校はどうした」

「……ボーズ、ね」 小さく呟く。

男は隣に立つて、利知未を見下ろしている。再びタバコを唇に挟み、川の流れに視線を移す。

「行くだけ無駄だ」 疲れた様な声で、言い切ってやった。

「冷めた事を言うヤツだな。可愛げの無いガキだ」

「ンなもん、無くたって死にやしないよ」

「しかし若年から、そう言う物を覚えると、成人になった頃には、肺癌の恐怖と戦うハメに陥るぞ」

言いながら、腰を下ろした。買いた物袋を脇に起き、自分がタバコを吸い始める。

「同類じゃん」

「俺は少なくとも、高校までは吸わなかった」

「対して変わりやしねーよ」

「……そりゃ、そーだな。」

美味そうに一吸いする。利知未のタバコは小さくなってしまい、仕方なく地面に押しつけて火を消した。

「中学何年だ？」

「関係無いだろ」

「まだ三年じゃないだろ？ って事は、二年か、一年か……。どっちにしろ、余り優等生じゃ無さそうだな」

「鋭いねー、その通り」

バカにした様な口調で言い捨て、新しいタバコを一本出した。

「良い度胸したガキだな。普通、見ず知らずの大人に喫煙を注意されたガキは、逃げ出すモンじゃねーのか」

「じゃ、俺は普通じゃねーンだろ。これからは、個性の時代だぜ」



？」

悪びれもせずに、火を着ける。

「とんでもないヤツだな」

「ほっとけよ、通りすがりのオジさん。　こんなガキ相手にしても、何にもイイ事ねーよ」

「自分で言うか？」

男は呆れてしまった。　しかし面白いヤツだと、興味を惹かれた。

「お前、名前なんて言うんだ？」

「あんたは何者だよ？」

「おお。　俺は、ここから十分くらい歩いた所にある、喫茶店でマスターやってるモンだ。　お前は？」

「たんなる不良中学生だよ」

「……そうか」

この少年は、意外と頭が良い様だと思った。

ただ、捻くれた答え方をしている訳では無い。　肝心な所は適当に話題を反らしながら、かわしている。

「そろそろ、店に戻らないとな。　……お前、これから学校に行く

気も無いんだろう。　珈琲でも飲みに来いや」

「金、持ってる」

「珈琲の一杯くらいは、奢ってやるぞ」

取り敢えず、このまま置き去りにするのも問題な気がした。

「……変な大人だな」

「そうか？」

「普通じゃねーよ」

「これからは、個性の時代、何だろ？」

さつき面倒な話題から逃げ様と思い、自分が口にした言葉を逆利用され、『やられた』と、思った。

この男は面白い。　着いて行って見ようか？　という気になった。  
「ンじゃ、奢られてヤルよ」

尻を払いながら立ち上がった。　足元のスポーツバッグを担ぐ。

「おう」

タバコを地面で揉み消して、男も立ち上がった。

「歩きタバコは、止めておけ」

利知末の口から、タバコを摘み取った。

「分かったよ」

そのタバコを、自分でまた取り上げ、靴の裏で消した。

「慣れてるな」

利知末の様子を見て、変な感心をした。そしてまた両眉を上げる。

「デカイな。百六十、あるか？」

「背？ あるみたいだな。あんただって結構デカイじゃん」

「俺が中学一年の頃は、百六十無かったと思うぞ」

少年の眉が、ピクリと動く。

「……何で一年だと思った？」

カマを掛けて見た質問に、どんぴしゃりと返してくれた。男は微

妙にほくそ笑む。

「やっぱり、一年か」

利知末はまた、『やられた』だ。

何となく、こんな会話に覚えがあった。今は離れて暮している  
長兄、裕一は、利知末の性格を良く見抜いていた。

何かを問われて誤魔化そうとして、こんな風にカマを掛けられて  
ボロが出る。その光景にそっくりだ。

「そーだよ。……イヤな特技だな」

「伊達にお前の倍、生きてる訳じゃない。お前がまだまだ青いん  
だ」

ニヤリとされて一瞬ムカツとする。だが、その怒りは一瞬で消え  
た。

その男の呑気そうな表情は、どんな攻撃を受けても崩れそうに無  
い。

「行くぞ。着いて来い」

買い物袋を持ち直し、男は呑気に歩き出した。

河原沿いに暫く歩き、途中を下宿方面へ曲がって行く。位置的には、あの下宿よりも、やや北西になるようだった。

道を曲がって五分も歩いた時、一軒の店の前で立ち止まる。看板には『喫茶&バー・アダム』とあった。

「この店が俺の城だ。ま、入れや。」

正面の扉を、鈴を鳴らして入って行った。

店内は、個人経営の喫茶店としては、少し広かった。L字型のカウンターに椅子が16脚。

四人掛けのテーブル席が、衝立を挟んだ向こう側に3つ。窓に沿うように並べられた二人掛けのテーブル席が6つ。道路側には、六人掛けが出来る様にセットされた席が一つあり、更に四人のテーブル席が二つ。

出入り口の鈴の音を聞いた、従業員の声がした。

「いらっしやい…、ああ、お帰りなさい。」

二十代後半に見える、セミロングヘアの女性が、笑顔で男を迎えた。

「閑古鳥が鳴いているな。」

「この時間ですから。」

二人の会話を聞きながら、スポーツバッグを肩に担いだ利知未が、店の中に続いて入る。

「あら、可愛いお客様。いらっしやいませ。」

利知未に笑顔を見せる。その男、アダムのマスターが言う。

「河原で拾ってきた野良猫だ。ホットミルクでも出してやってくれ。」

「苦いヤツ、頼むよ。」

利知未は二人に、ノウノウと言い放つ。

「生意気な野良だ。飲めるのか？」

「何だよ、さつきは珈琲奢るって、言ってたくせに。」

その様子を見て、女性がクスクスと笑い出す。

「面白い子ね。良いわよ。苦いヤツ、お出ししましょう？」

「話の解るお姉さんで良かったよ。」

利知未は、ニヤリと笑った。

「本当に良い根性してやがるな。」

マスターはカウンターに入って行った。利知未も、カウンターの隅の席に腰掛けた。灰皿を見つけて、タバコを出す。火を着け、一吸い。

「あら、随分とおマセな子猫ちゃんね。」

利知未は『子猫ちゃん』と表現された事に、やや顔を顰めた。

「…猫は人間より、早くに年取るんだぜ。」

「それもそうね。」

軽く眉を上げ、目を少し見開く。珈琲を出してくれた。

「この店の従業員は、随分物分りが良んだな。」

カウンター内で作業をし始めていた、マスターに声を投げた。

「砂糖とミルクは、そこに在るわ。」

女性が指差して教えてくれる。

「いらねー。」

利知未はそのまま、ブラックで口に運ぶ。

「お前、何時からそんな飲み方してるんだ？胃に穴があくぞ。」

「昔からだよ。甘い、苦手なんだ。」

「つくづく可愛げの無いガキだな。」

「そんなモンいらねーよ。無くても困らねーし。」

マスターは女性に問い掛けた。

「翠、コイツいくつに見える？」

「そうね…、十四、五歳にも見えるけど…。」

「中学一年だそうだ。」

マスターから、翠と呼ばれたその女性は、今度こそ驚いた。

「うるせーな。イイだろ、ンなこと。」

「まー…、上手がいるモンね。私が中学の時に付合っていた彼も、随分マせていたけど…。」

片手を頬に上げ、目を丸くしていた。利知未は、やはり少年に見えているらしい。まあ、イイか。何時もの事だ。と思った。

啞えタバコで片頬杖をつき、何となくメニューを手に取って見た。ぱらりと捲る。珈琲の名前が沢山、並んでいる。興味を持った。

「なあ、これは、オリジナルブレンドってヤツ？」

翠が表情を変え、ニコリと答える。

「そつよ。興味あるの？」

「ああ。俺はもう少しコクって言うか、苦味が強い方が好きだ。」

「生意気な事を言うな。」

マスターが口を出してきた。驚きと、少し嬉しそうな響きがあった。「生意気で悪かったな。…一ヶ月くらい、散々、珈琲入れさせられてた時がアンだよ。」

この四月、ホンの一月半程の間、ニューヨークの母親の所にいた時の事だった。夜中まで仕事を持ち込んでいた母親に言われて、必ず一晩に二、三回はドリップ式の珈琲を入れさせられていた。

マスターが、作業を中断して近くに拠つて来た。

「お前、もしかして、もう酒も飲むのか？」

「…飲まないように見えるか？」

「いいや、見えん。」

「ちよつと、マスター。何考えてるのよ？」

「高校入ったら、バイトに來い。美味しい珈琲の淹れ方、教えてやるぞ。」

「何、勧誘してるの？」

「こんな閑古鳥鳴いてンのに、バイト雇う金、あるのかよ？」

「今日は、時間が悪かったんだ。普段は結構、忙しいんだぞ。」

「そーなの？」

「まあ、そうね。本当に忙しい時間は中と外、五人居てもテンテコマイしてるわよ。…でも、マスター…、」

「有望な人材を発掘せにや。これから大変だろ？」

「って言っても、まだ中学一年なんでしょ？この子。」

「コイツが高校に入る頃には、店はもつと忙しくなる見込みだ。」

「…お気楽な店主だな。あんたも大変だね。」

利知未の言葉に、翠が吹き出した。

「本当、面白い子ね。マスターが気に入る訳だわ。」

「何だよ、それ。」

これ程、『面白い子』と連発されるのも始めてなら、従業員勧誘を受けたのも始めてだ。まだ中学一年なのだから、当然ではあるが。

「お前、中学を出たら、高校くらいは、行くつもりがあるんだろう？」

「学校は嫌いだ。…けど、まあ、そうなるんだろうな…。」

「だったら、真面目に学校へ行っておけ。成績がどうしても、生活態度さえ問題無ければ、入れる学校くらいある。」

「…お言葉だな。で、高校入ったら、ここへ来いつて事か？」

「そう言う事だ。流石に中学生は雇えん。」

「当たり前だろ。労働基準法違反だ。」

「…お前、中一の癖に、良くそんな言葉がポンポン出てくるな。」

「耳年増ってヤツなんだよ。どーでもイーだろ、ンな事は。」

冷めてきて、飲み頃になった珈琲を、一気に喉に流し込んだ。

空になったカップを嬉しそうに見て、マスターが言う。

「お前好みの、もうチョイ、コクのある珈琲、ブレンドしてやるよ。」

空いたカップを、下げて行った。

「お前が、それを飲んで納得したら、今の話、ちゃんと考える。良いか？」

「…俺が納得したらな。真面目に学校行く事も、考えてやるよ。」

「よし、約束だ。男に二言は無いな？」

『男、ね…。』

心の中で、呟いてから答えた。

「ああ。約束するよ。」

「よっし、待ってる。」

「あーあ。マスターに火が着いちゃったわ。」

翠が肩を竦めて、笑って見せた。

それから一時間ほど掛けて、マスターが一杯の珈琲を出した。

「出来たぞ。自信作だ、飲んで見ろ。」

何本目かの煙草を揉み消し、水を飲んで口を洗ってから、利知未はその珈琲を口にした。良い香りだった。

「…。」

「どうだ？」

「…美味しいじゃん。」

「当たり前だ。俺が腕に抛りをかけて、ブレンドしたものだ。」

腕を組んで、胸を少し反らす様にして、微笑んだ。

「…解ったよ。学校、明日からちゃんと行くよ。」

「約束だ。」

「ああ。二言は無いよ。…基本設定が、間違ってるけどな。」

後半の呟きは、マスターには意味が解らない様だった。利知未は二やりと笑う。今度、制服姿で来てやろう。そう思った。

「翠、メニユーが一つ増えたぞ。」

「名前は？」

「オリジナル・モカ・ブレンド。」

「はい。メニユーに書き込んでおきます。いくらにするの？」

「…そうだな。」

利知未を見た。

「お前なら、いくら払う？」

もう一口飲んで見て、考えた。

「…五八〇円くらいだな。」

利知未の値踏みに、満足げな微笑をみせ、翠に言った。

「五八〇円だ。」

「解りました。」

「そんなんで決めて、良いのかよ？」

「いいんだよ。サブタイトルは『野良猫のホットミルク』だな。」

「何なんだよ、それは。そう言っただけで注文したら、コイツが出てくるのか？」

「内輪の合言葉みたいなもんだ。今度は、小遣い持って来い。」

「一ヶ月に二、三回くらいしか飲めねーな。」

マスターは、ニヤリとして答える。

「合言葉で注文したヤツは、三八〇円に負けてやる。」

「そんな約束して、良いのか？」

「構わんさ。どうせ、お前と翠しか知らない事だ。な？」

「そうですね。私が店に出てる時に来たら、レジを受けると言う事で。」

ニコリと、利知未を見た。利知未も、小さく笑ってしまう。

「…変な店。」

「良い店だと思うが？」

マスターが、自慢気な笑顔を見せた。利知未は、この店が気に入った。

「…また、来ても良いのか…？」

「勿論だ。高校入るまでに、この店の味を知り尽くせ。」

「そんな金掛かる事、無理だよ。」

「出世払いでも構わんぞ。」

「何年間、ただ働きさせられるんだよ。」

「そうさな…。これから約三年間通い続けて貰って、その後一、二年は掛かるかもしれないな。」

「気のナゲー話した。」

「そうだな。」



それから暫くして、利知未は席を立った。

翌日から、以前よりは確りと、学校にも行く様になったのだった。

## 二

翌朝、何時もより、余裕を持って食事へ下りて来た利知未に、里沙は半分、驚いたような表情で、挨拶を交わした。

「今日は早いわね。」

「早く起きちゃ、マズイかよ？」

「私は、手間が省けて助かるわ。…それにしても、また制服が、随分、皺だらけね。」

昨日、スポーツバッグの中にメチャクチャに突っ込まれたまま、長時間放置された制服が、抗議行動に出たらしい。

「どーせ今に夏休みだし、ほっとしても平気だろ。」

さつさと席に着く。玲子が早速、睨みを効かせる。

「あんたって、本当にいい加減ね。もう少し、周りの迷惑を考えて行動して欲しいわ。」

「俺が皺だらけの制服着て、誰に迷惑が掛かるって言うんだよ？」

「その事じゃない！昨日、また無断で、早退したでしょう！？同じ家に住んでるって事で、私が、あんたの担任に、呼び出されたの！」

利知未は両肘をテーブルに付いた姿勢で、パンを口へほおりこむ。

「…変なセンサーだな。本人に確認すりゃ済むものを。」

玲子が両手でパン！と、テーブルを叩いた。

「学校にも居ない、何処に居るかも解らない人に、直接話を聞く方法があったら、教えて欲しいわ！」

「恐れ顔。」

「里沙さん！どうかして下さい！この人！！」

玲子から訴えられ、里沙が、やや困った様な顔をした時、朝美がダ  
イニングへ入って来た。

「おはよう、朝っぱらから、また、やってんの？」

「ああ、朝美。おはよう。」

「今回は何？」

「瀬川さんが昨日、無断で早退した事で、私が迷惑したんです。」  
朝美が自分の席へ着きながら、利知未に言う。

「成る程ね。あんたが原因みたいなんだし、素直に頭下げたら？」

「何だよ、朝美まで。…判ったよ、悪かったな。」

玲子は、その利知未の態度に、また力チンときてしまう。

「本当に反省してる様には見えない。」

「じゃ、どーしろって？」

「もう少し真面目になるか、さも無きゃ別の学校へ行ってくれない。」

吐き捨てるような玲子の言葉に、朝美が言った。

「真面目につてのは、イイとして、学校変われつてのは、ちょっと  
言い過ぎだね。…解ってるよね？」

朝美は、玲子が賢く、普段はかなり冷静な性格である事を理解して  
いる。ただ、利知未が相手となると、ついつい、感情的になってし  
まい、言い過ぎてしまう傾向にある事も。

「…そうですね。悪かったわ。」

チラリと利知未を見て、小さな声で玲子が言った。

利知未は、里沙が作ったスクランブルエッグを、レタスにソーセ  
ージと一緒に巻き込みながら、口へほおりこむ。ゆっくり租借し、  
呑込んでから朝美に言う。

「…別に。俺がそんな事で傷付くよーなタマに見える？」

「言い過ぎた言葉つてのは、相手がどう思おうと、言った本人が後  
で、後悔するような事があるのよ。素直に頷いときな。」

「…ウィーっす。」

牛乳を飲み切り、食べかけのパンを口に咥え、立ち上がった。

「じゃ、俺、もう行くよ。」

「早過ぎじゃない？」

黙って三人の会話を聞きながら、朝食を取っていた里沙が聞く。

「早めに行つて、センサーに詫び入れとくよ。じゃーな。」

「そう。行つてらっしゃい。」

利知未がダイニングを出て行く。玲子は落着いて、食事の続きを進めた。

「…イイお姉さんね。」

里沙が、笑顔で小さく呟いた。朝美は、変わらず平静な表情で、パンを契つて口に運ぶ。

「血の繋がらない弟妹と仲良くやるのは、経験あるから。」

玲子が微妙に、顔を上げた。それに気付いた朝美が言う。

「あたし、義母の連れ子の弟が居るんだよ。利知未は、その弟を相手にしてるみたいなのがするんだ。妹は居なかったから、玲子はあたしの新しい妹みたいなモンよ。」

「…そうなんですか。」

「そ。だから、敬語止めてよ。堅苦しいから。あんた、実家でもずっとその言葉使いだつたの？」

「そんな事は無いけど。」

「まあ、急ぐ事も無いのじゃない？ どうせ、まだまだ、一緒に暮らして行くのだから。」

「それもそーだね。」

里沙の言葉に、朝美が頷いた。

「でも、そう言われたら、私は瀬川さんと、姉妹にならなければいけないって、事ですか？…それは、ご免です。」

俯いて、少し膨れた玲子を見て、朝美と里沙は小さく笑った。

「玲子の弟、優等生なんだってね。そりゃ、利知未が相手じゃ、敬遠もするか。」

「智紀君だつて、優等生だつたでしょ？」

「智紀は、昔からそうだった訳でも無いから。って言っても、利知

未程のヤンチャモノでもなかったけど。」

「ヤンチャは、朝美よね。」

「あははは！そーだね。だから、利知未の事も少しは解るよ。」  
笑顔で会話をしている二人に、玲子は憮然とした表情で言った。

「お二人とも、随分、お心が広いんですね。」

「玲子は、もう少し肩の力抜いても、イーンじゃない？」

「…そうでしょうか。」

「そーだよ。」

それから直ぐに、三人は朝食を終えた。里沙は二人を送り出し、一日の雑務に取り掛かった。

玲子と利知未が通う中学校の職員室。まだホームルーム迄には三十分以上もある時間だった。

利知未は、担任の体育教師、松田の前にいた。

「昨日は、済みませんでした。」

ペコリと頭を下げる。

「自分から謝りに来るとは、中々、感心な態度だな。」

この男性教師は、まだ四十代前半で、頗る元気が良い。利知未は中学一年。この頃には、まだ存在していた、必要とあらば愛の鞭も飛ばす様な教師だった。しかし一度厳しく叱咤し、生徒も聞き分けさえ良ければ、その後は、その事について、ぶり返すような事もしない。

利知未は他の生徒より、やや遅れて、この学校に入学し、通い始めた訳だが、既に職員室の常連となっていた。頭をコズカれた事も、両手の指では足りないくらいだ。

「同居人に、朝っぱらから、嫌味を言われたからね。」

口も悪い。しかしそんな事にいちいち目くじらを立てれば、この生徒とまともな会話をするのは、不可能だと言う事も、既に解っていた。

「お前は、テストの成績だけは良いんだ。もう少し真面目な生活態度を心がければ、良い高校に進む事も出来るんだぞ。勿体無いと思わんか？」

「まだ一年だよ。そんな先の事、考えた事ねーもん。」

「困ったヤツだな。どうして、そんなに学校に来るのを嫌がるんだ。」

「来てもツマラねーから。」

二人の会話を、離れた席から、厳しい事で有名な教頭が、仏頂面で眺めていた。利知末の言動に対して、口を差し挟みたくて仕方が無い。

「運動部に入って、大きな大会目指して、打ち込んで見たらどうだい？」

「また、それかよ。バレー部の勧誘なら、前も言っただけど、お断りだよ。」

バレー部の顧問は松田だ。つまらなそうな顔をして、松田が言った。「折角の長身を生かさない手は、無いと思うがな。まだまだ伸びそうだ。」

椅子に座ったまま、腕を組んで、横に立っている利知末を見上げる。「瀬川は、何でも良いから、何か学校生活での生活目標を立てる必要があると思うぞ。」

「生活目標ねー…、取り敢えず、担任に呼び出される回数を減らすつてので、どー？」

松田は、軽く両眉を上げ、感心した様な表情を見せた。

「中々、良い目標だな。それなら先ずは、無断欠席、遅刻、早退を減らして貰おうか？」

「…いいよ。その代わり、同居人に自分の事で、探り入れるの、止めて下さい。」

「お前が問題を起こさなければ、その必要も無い。」  
利知末は少し、仏頂面をした。

「結局、ソレかよ。…分かったよ。気をつける。」

「生活態度が改まったら、今度は、その言葉使いを直さないとな。」

松田に言われ、利知未は口をへの字に曲げ、目線を外して言い直す。

「解リマシタ、今後、気ヲツケマス。」

「何だ、敬語、使えるんじゃないか。」

松田は利知未の言葉遣いに、豪快な笑顔を見せた。

「デハ、失礼致シマス。」

頭を下げながら、担任教師を睨みつけた。松田はニヤニヤしている。

「大人しく教室に居ろよ。」

「ハイ。」

後ろを向いて、舌を出した。利知未が職員室を出て行くと、教頭が松田を呼び出した。

それから利知未の無断欠席、遅刻、早退は減った。変わりに保健室の常連となり、養護教員の顔馴染となってしまう。ついでに、問題児と称される学校の顔役とも、馴染み深くなってしまうのだった。

七月中旬、平日の十五時頃。アダムはいつも通りの暇な時間帯だ。

「この前の子猫ちゃん、あれから一度も、顔を出しませんね。」

翠が、カウンターの隅に座り、賄いを食べながらマスターに言った。

「そーだな。しかし、あのブレンドは中々、評判が良いぞ。」

「そうですね。味覚は、良いみたいだったわ。」

利知未の為に作った、オリジナル・モカ・ブレンドは、メニューの中でも、やや高めな金額設定だった。

しかし、あれから約十日経った今、何人かの常連が注文をしており、中々良い評価を残してくれている。

「ま、猫は気紛れだからな。その内また、ひょっこり現れるだろう。」

「本当に、野良の子猫みたいな顔をしていたわね。」

翠が思い出して、クスリと笑った。

翠が食事を取り終わり、再び客が入り始めた店で立ち働いていると、入り口の鈴が鳴り、一人のセーラー服姿の少女が現れた。

「いらっしやいませ。」

店の中に踏み込み、席の埋まり状態を眺めている横顔を見て、翠が言う。

「貴女、下校途中？先生に見つかったら、大変なんじゃない？」

「私服だったら、良いのかよ？」

声を聞き、首を傾げる。少女が顔を翠の方に向け、ニヤリとして言った。

「『野良猫のホットミルク』」

「……あなた？！」

「そー。こないだはどーも。瀬川 利知未。城西中学一年、手の着けられない不良女子中学生。よろしく。」

「……女の子だったの……。」

「男だって、言ったか？」

「……俺、何て言ってるんだもの。判らなかつたわよ。」

「翠、ブレンド上がったぞ。」

カウンターからマスターが声を掛けた。カウンターからこの店の出入り口は、死角になっていた。

「ハイ、ただいま！……マスター、子猫ちゃんが来ました。」

ブレンドをトレーに載せながら、翠が小声で伝えた。そこに、セーラー服姿の利知未が、現れた。マスターが振り向き、啞えタバコを落としてしまい慌てた。その様子を、利知未はニヤリとして眺めた。

カウンターの、この前と同じ片隅に腰掛けて、利知未が言った。

「やっと金、送られて来たんだ。『野良猫のホットミルク』頼むよ。」

「……お前、女だったのか……？」

落としたタバコを拾い上げ、灰皿で揉み消しながら、マスターがや  
っと口を開く。

「同じ事、二回も言わなきゃならないのかよ。」

小さく溜息をして見せ、改めて自己紹介をする。

「瀬川 利知未。城西中学一年。手の着けられない不良女子中学生  
…。因みに、この前会った時に男だと言った覚えは、一度も無い。」

「…あんな調子じゃ、言われなくてもそう思うだろ。」

マスターが呆れ顔で言った。

「だから、基本設定が間違えてるって、言ったんだ。」

「そう言う意味だったか…。」

「俺が女だと、何か不都合な事でもあるのかよ？」

「いや、無い。…ホットミルクだな？」

「野良猫のね。」

「畏まりました。」

マスターが、店主らしい笑顔で頷いた。

例の珈琲を出しながら、マスターが言う。

「学校には真面目に行ってる様だな。」

「約束は約束だからな。」

「義理堅いやつだ。」

小さく笑う。利知未は出された珈琲を口にした。

入り口の鈴が鳴る。店内は今、四割がたの客席が埋まっている。

店の奥から制服姿の従業員が現れる。

「おはようございます。」

「おう、ご苦労さん。…そろそろ五時か。」

「結構、客入ってくるじゃん。」

「だから言っただろう。この間は時間が悪かったんだ。これから夜  
に向けて、結構、繁盛するぞ。」

「メニューも増えてるんだな。」

「夕方四時半から、ちよつとしたディナーメニューを出すんだ。夜  
は、アルコール中心のメニューに変わる。」



「…成る程ね、喫茶&バーな訳だ。…ビジネスホテルの客が夕飯を食い、ラブホテルの客が酒を飲む訳だな。…いい立地条件じゃねーか。」

利知未の言葉を聞き、マスターは感心したような顔をする。

「お前、意外と頭が良いんだな。洞察力がある。」

「そんなご大層なもんじゃねーよ。この辺りの土地鑑があれば、誰でも気付く事だろ?」

「もう少し、大人ならな。」

「どーせ俺はガキだからな。」

「捻くれるな、誉めてるんだ。…何か食っていくか?」

「…良いよ。夕飯入らなくなる。」

「そうか。お前、何処に住んでいるんだ?」

もう一口、珈琲を飲んでから答えた。

「…この店は、学校と下宿の間にあるんだよ。」

マスターが、またびつくりした顔をした。

「下宿?中学生がか?」

「色々、事情つてヤツがあんだよ。同い年の女と、高校二年の女も同じ下宿に住んでる。…大家在、まだ若い女性なんだ。」

「成る程な。」

「そーゆー事。」

珈琲を飲む。流石に制服姿の時は、タバコは吸わないようにしている。

「そろそろ、夏休みだな。」

マスターが話題を変えた。

「そーだな。」

「実家に帰ったりするの?」

「実家なんて言える物はねーんだよ。…どーだって良いだろ、ンな事。」

「…そうだな。」

会話の中で、この利知未と言う少女が、何故、こんな風に捻くれて

しまったのか感じ始めていた。どうやら、家庭の事情が複雑らしい。また一人、従業員が現れた。挨拶を交わす。

「翠、ご苦労さん。コイツの会計、先にしてやってくれ。終わったら上がって構わんぞ。」

翠が抛つてきて、伝票を見せた。

『ノラH・M：三八〇』そう、書いてあった。

夕方六時頃に下宿へ戻り、服を着替えて、取り敢えず宿題を先に済ませた。『担任からの呼び出しを減らすため』だ。面倒臭いが仕方無い。

それから、夕食へ降りて行き、先に食事終わらせていた玲子と入れ違いに、ダイニングキッチン椅子へ座る。

夕食を出してくれながら、里沙が言った。

「今日、手紙が来ていたわよ。お兄さんから。レターボックスに入れておいたから、後で持つて行つてね。」

このダイニングキッチンの片隅に、二階の部屋数と同じ数に仕切られたレターボックスが置いてある。結構しゃれたデザインだ。インテリアデザイナーの里沙がデザインし、何時も仕事で利用している近所の工場で、形にして貰った物だ。

「どっち？」

「裕一さんから、だったと思うけど。」

利知未の表情が、やや明るくなる。里沙はその表情を見て、笑顔になる。

「サンキュ。」

利知未は少しソワソワして、何時もよりも早くに、夕飯を腹に収めた。

急いで食事を終え、手紙を持って自室へ引き取ったのだった。

利知未が、そんな態度を取る事は、滅多に無い。何時もは、嬉しい事があっても、態と捻くれた様な言動で、誤魔化してしまう。里沙は利知未が素直に、喜びを隠そうとしない、こういう態度を見ると、いくらホツとするのだった。

### 三

夏休みに入った。

下宿の店子達は、保護者代りの里沙に一応、成績表を見せる。里沙は、教師から問題点などを指摘されている時は、それを頭に入れて、両親に宛てて簡単な手紙をしたためる。

店子達は、その手紙と成績表を持って実家へ帰る。長期休みの一定期間を、親元で過ごす為だ。必ず帰らなければならない事も無いが、玲子と朝美は、間の一週間から二週間程度を、親元で過ごす事になっていた。

「八月の中頃までには、戻ります。」

里沙に挨拶をして、玲子が実家へ戻って行ったのは、七月の終わりだ。約二週間を実家で過ごす事になる。朝美は八月の始めから一週間程を、名古屋の親元で過ごす事になっていた。

朝美は、父親の仕事の都合で、引っ越す事になった時、実の母親との思い出あるこの土地へ、一人で残る事に決めた。下宿の店子、第一号だ。

この広過ぎる一軒家の留守を、一人で預かっていた里沙が、空き部屋を有効活用する事を理由にし、下宿を始める切っ掛けの事件が起こったのは、朝美がまだ、高校一年生だった去年の事だ。

明日には、親元へ帰郷？する朝美が、リビングのソファで寛ぎなが

ら、里沙と話をしていた。

「あたしは、来週には戻ってくるから。」

「もつとゆっくりしてくれば良いのに。智紀君と、何処かへ遊びに行く計画は無いの？」

「智紀は、あたしが戻ってくるのと同じ位に、剣道部の合宿でいなくなっちゃうの。タマには、夫婦水入らずにしてあげないと気の毒じゃん？」

「また、そんな捻くれた事言つて。朝美は本当に利知未と姉妹みたいよ。」

「捻くれ方が似てるって言いたい訳？あたし、利知未ほど酷くないよ。」

「言いたい放題、言ってくれんじゃん。」

ダイニングから出ていきながら、利知未が言った。手にはアイス珈琲を持っている。

「何よ、気が利かないね。ついでにあたしと里沙の分、持って来てくれたっていいじゃん。」

「朝美と里沙は、紅茶党じゃねーのかよ？」

「あら、どうしてこの家にあんな立派な珈琲メーカーが置かれているか、気が付かなかった？」

里沙も笑いながら聞く。

「里沙の、仕事相手の為じゃねーの。」

「それだったら、インスタントでも構わないと思わない？」

「…そー言うモンか？」

「そう言うものよ。入れて来てくれるのかしら？」

「…しゃーねーな。タマにはサービスしてやるよ。」

そう言つて、再びダイニングに引っ込んで行く。

「珍しい！利知未が素直に言う事聞くなんて。」

朝美が里沙に、目を丸くして見せた。

「利知未、今日は午後から大事な人とデートの予定があるから。機嫌が良いのよ。」

里沙が小声で教えてくれた。

「まさか彼女って事、無いでしょうね？」

「利知末も一応、女の子なんだから。」

クスクスと笑いながら、里沙が言った。

「じゃ、まさか彼氏とか？！生意気じゃん。」

「あの子にとつては、彼氏よりも大切なお兄さんが今日のデート相手よ。あの子に彼氏がいるような気配は、全く無いでしょ？」

「…なーんだ。お兄さんね。ま、そりゃそーか。」

ダイニングから声が飛んできた。

「ホット？アイス？」

「ホットで良いわね？」

里沙が朝美に聞き、朝美が大声で答えた。

「ホット二つ、よろしく！」

「了解。」

利知末の声が聞こえ、珈琲の良い香りが流れてきた。

暫く話しを続けていると、トレーに砂糖とミルクも一緒に乗せ、二つの珈琲カップを利知末が運んでくる。

「お待たせ致しました。」

喫茶店のウェイターよろしく、軽く礼をしてテーブルの上に並べ置く。

そんな風に、ちょっとした茶目つ気を現す利知末は珍しい。二人は少し驚いた顔を見合わせる。

「冷めない内に飲めよ。」

トレーを小脇に抱え、立ったままで利知末が言った。砂糖とミルクを、それぞれ自分の前の珈琲に入れ、掻き混ぜて口に運ぶ。

「…あら。」

「…結構、イケル。」

里沙と朝美が目を合わせた。美味しかった。

「当然だろ？誰が入れたと思ってんだよ。」

利知末は自慢げな表情だ。

「意外な特技ね。」

「本当。」

「珈琲のプロのお墨付きだぜ。」

「何、それ？」

「秘密。」

夏休みに入って直ぐ、利知未は開店前のアダムへ遊びに行っていた。

突然、朝から表れた利知未に驚きながらも、マスターと翠と、その日朝からバイトへ入っていた女性は、笑顔で迎えてくれた。利知未はアダムの従業員一同と、すっかり顔馴染みになっていた。

試しに、ドリップ式で利知未に珈琲を入れさせたマスターが、出て来た珈琲を一口飲み、感心して頷いた。

「俺の見る目は確かだったな。早く高校生になれ。バッチリ鍛えてやる。」

そう言った。

「だから、気が早過ぎだっけ言うんだよ。」

利知未は照れ臭さを、いつも通りに捻くれた態度で誤魔化したのだった。

「里沙、俺、今日は昼飯いらねーから。」

「デートは午後からじゃなかったの？」

「チョイ遅くなっても良いんなら、飯、奢るってさ。兄貴が。」

「そう。判ったわ。じゃあ、朝美と二人だけだし、おソーメンでも湯でましようか？」

「良いよ、それで。」

「じゃ、そーゆう事で。」

リビングを出かけて、振り向いた。

「なあ、今度、違うマメ買ってきてても良いか？」

「珈琲豆？良いけど、お小遣いで足りる範囲にしてちょうだいね。」

「当たり前。じゃーな。」

踵を返し、廊下にくくりビングの、扉の影に消えて行った。

その日の昼過ぎ。

下宿最寄りの駅前で、利知未は時計を眺めながら、兄貴を待つ。

軽く鼻歌交じりで上機嫌な様子だった。十分後、改札から一人の青年が、利知未の姿を認めて、大きく手を振りながら現れた。

「裕兄！」

利知未も手を振って、改札へ向かって走り出す。約、四ヶ月ぶりの再会だった。普段の利知未を知っている者が見たら、驚いて動きが止まるかもしれない。それ位、明るい、良い笑顔を兄に向けていた。「利知未！元気だったか？…お前、また背、伸びたか？勉強はちゃんとしてるか？学校、行ってるんだろっな？」

「そんなに一気に、聞かないでくれよ。」

ちょっと怯んでしまいながらも、笑顔で利知未が答えた。裕一も、自分の矢継ぎ早の質問に、少し照れ臭い様に笑う。

「悪い。そうだな。」

「元気だったし、学校にもちゃんと行ってるよ。勉強も、一応やってる。背は、あれから七センチくらい伸びたみたいだ。去年買ったばかりの夏物のパンツが、ツンツルテンだよ。」

「ははは！それで短パンか。珍しい格好してると思ったよ。」

今の利知未の服装は、ジーンズの短パンにタンクトップ。その上に白いヨットパーカーを羽織っていた。

タンクトップのお蔭で、どうやらちゃんと少女らしくは見えていた。

「仕方ないから、自分で切った。だから裾上げなんか、して無いだろ？」

「そうだな。じゃー、これから服でも見に行くか？」

「その前に昼飯！腹ぺこだ。」

「そうするか。何が食いたい？」

「何でも良いよ。どこ行こうか。」

「そうだな…。ちよつと商店街眺めて見るか。」

「だったら、こつちよりも、反対の駅前の方が、色々あるよ。」

利知未が先に立ち、踏み切りのある方へと歩き出した。

裕一にとって、歳の離れた妹は、何よりも大切にしたい可愛い存在だ。ただ、昔からどうも、その外見に流されて、男のような言葉使いと行動が身に付いてしまっている様子が、ちよつとした悩みの種だった。

「裕兄、今年は幾つくらい山登ったんだ？」

「ン？ああ、今年はまだ一つだ。」

「へー。その割に、真つ黒だな。」

「登山訓練は、やっているからな。お前は相変わらず真つ白だな。」

「こんな炎天下で、スポーツするヤツの気が知れないよ。」

「海とか、プールは行かないのか？」

「金掛かるじゃん。節約してんだ。」

裕一が、趣味としている登山も、通っている医科大学も、金が掛かる。

利知未達の母親は、かなり稼いでおり、子供達が大学を出るまでは、多少なりとも、母と離婚した父親も、養育費を払ってはいる。それでもやはり節約は大切だ。勿論、裕一も、普段はアルバイトをしている。全寮制の高校にいる次兄、優も、長期休みはバイトをしている筈だ。

「あーあ、早く義務教育、終わらねーかな…。」

踏み切りが上がるのを待ちながら、利知未が呟いた。

「お前、高校はどっちにするんだ？」



母親とアメリカで暮すか、日本に残るか？そう言う意味だった。

「……こっちで行きたいな。一応、その約束だよ？」

「……まあ、そうだけだな。」

「あのヒト、裕兄に、なんか言っただけ来たのか？」

「あのヒトって言うのは、止めるよ。母さんだろ？」

「……そんな呼び方、虫唾が走る。」

頑なな様子に裕一が小さく息を吐く。電車が通り、その音は聞こえない。

「……まだ中一だからな。先の事は、ゆっくり考えれば良いよ。」

「ソーするよ。」

遮断機が上がった。再び歩き出す。

駅向こうの商店街に着き、店を探した。

「冷やし中華も良いな。」

ラーメン屋の前で、利知未が言う。

「折角、奢ってやるんだから、もう少し違うの選んだらどうだ？」

「って言われてもなー。あ、じゃー鰻！」

丁度、炭火で焼かれている蒲焼の、美味そうな匂いがある。

「鰻も良いな。」

「……やっぱヤーメタ。折角だから、デザートも食える所にしよう。」

「甘いもの、苦手だろ？」

「かき氷は別。」

「成る程。暑いからな。」

ニコリとして、裕一を引っ張って定食屋へ向かった。確かに、かき氷は置いてある。だが、利知未が裕一をそこに連れて行った理由は、味と量、何より値段だった。節約をしなければ大変なのは、裕一の方だ。趣味に金と時間が掛かる。勿論、大学にも。

勉強と登山訓練の合間に、一生懸命バイトをして溜めたであろう金を、自分の為にあまり使わせたくなかった。

利知未のその思いは、裕一には判っていた。だが、気付かない振りをして、引っ張られるままに、その定食屋へ入る。

食事を終え、利知未がかき氷をスプーンで突き崩す様子を眺めながら、裕一は最初に出された麦茶を飲んだ。庶民的な良い店だった。味も量も値段も、文句無しだった。幼い頃から、おふくろの味に親しむ機会が無かった二人には、何となく嬉しい味でもある。

利知未も満足そうに、氷を口に運んでいる。

「裕兄、食わない？」

スプーンですくった氷を、裕一の口元へと腕を伸ばして差し出す。

裕一は素直に口を開いて、一口貰った。

「やっぱ、夏はコレだよな。」

ニコリとした利知未の顔を、笑顔で見ている。仲の良い兄妹だ。店主の奥さんと思われる、お運びをしている女性が、微笑ましい気分で二人を見ていた。

「後で、大家さんの所へ挨拶に行かないとな。」

「今日は、夕方じゃないと居ないよ。午後から出るって言ってたから。」

残り少なくなったかき氷を平らげながら、言った。

「じゃあ、その前に、お前の服を見に行くか。」

「いいよ。適当に着回してるから。最初っから切ってないジーンパンは、まだ大丈夫だし。」

「上着も小さくなってるんじゃないか？」

「優兄の古着があるよ。また、着なくなったの送ってもらう。」

「お前、一応、女なんだぞ。俺や優の古着ばかり着てるのも何だよ。」

「気に入ってるの、多いぜ？」

「…全く。」

呆れて笑ってしまう。その呆れ顔が、アダムのマスターに何となく似ていると、利知未は思った。へへ、と、小さく笑ってしまった。

「何か面白い事でも、あったのか？」

「何でも無い。」

「そうか？思いだし笑いはムツツリ助平がするって、昔、言われた事があったな。」

「何だよ？それ。」

「小学校の頃、そんな事を言ってる時期があったんだよ。思い出した。」

「何だよ、それ言ったら、俺が助平って事になるのかよ？クダラネ！。」

笑い出す。裕一が軽く咎める。

「まだ、俺って言ってるのか？何時になったら治るんだ。」

「一生治らないかもな。」

「困った妹だな。」

「ビョーキなんじゃねーの？裕兄が医者になったら、特効薬作ってくれよ。それ、待ってるから。」

「それは、診療医の仕事じゃないだろ。」

「あはは。そっか。じゃ、諦めてくれ。」

また、呆れた笑顔を見せた。利知未はやっぱり、マスターを思い出す。

「あー、食った食った！そろそろ行こう。」

「本当に、何時になったら、もう少し女らしくなってくれるのかな……。」

呟いた裕一に、笑って見せた。

「何時かなるかもしれないじゃん？何時になるかは解らねーけど。」

「早く見て見たいよ。」

立ち上がる。利知未も笑って立ち上がった。

店を出て、駅の南北、両商店街を探索した。途中の衣料品店で、裕一は利知未にジーンズとサブリナパンツを一本ずつと、Ｔシャツと半袖の綿シャツ、それと、女の子らしいデザインのキャミソール

を一枚ずつ買ってくれた。本当はワンピースを買おうと思い、試着室に押し込めて見たが、利知未が嫌がったので没になった。

その代りで、キャミソールになったのだ。

ワンピースを試着した時、利知未を見ていた店員も、裕一も酷く残念がった。中々、可愛らしく似合っていたのだ。

その後、裕一が本屋で医学書を探した。その間、利知未は雑誌を立読みして時間を潰した。

夕方四時ごろ、そろそろ里沙も戻っただろうと、下宿へ向かった。

「ただいま。」

「お帰り。早かったじゃん。」

大荷物で帰って来た利知未と、連れの裕一を迎えてくれたのは、朝美だった。里沙は夕食の材料を買いに出かけたと言う。

リビングで、利知未が入れた珈琲を飲みながら三人で話していると、里沙が帰宅した。

「始めまして。利知未が、お世話になっております。兄の、裕一です。」

立ち上がって、キッチリと礼をする。一応、手土産を持参していた。

「まあ、ご丁寧に、どうも済みません。管理を任されております、

野沢里沙と申します。」

お互いに挨拶を交わす。

里沙は話している内に裕一の人柄を感じ、好印象を持った。

その後、里沙に勧められるままに、下宿で夕食をご馳走になり、八時過ぎ頃、利知未の事をしきりに気遣いながら、裕一は帰って行った。

「どうしようもないヤツですが、これから、宜しくお願い致します。」

そう言って、何度も、何度も頭を下げて行った。

里沙と朝美は、裕一の前での利知未を見て、今朝の茶目つ気を持った利知未の行動と、その理由を理解する事が出来た。

あれは、本来、利知未が持っている、素の部分であるらしいと思った。

朝美は智紀と居る時の自分を思い出し、里沙はその時の朝美の雰囲気を感じ出した。

そして二人は、利知未の、その普段からは想像できない、驚きの素顔も知る事が出来た。

利知未には、良く気が付く、世話焼きな顔があつたのだ。

例えば、裕一が調味料を探していると、直ぐに気が付いて手渡す。飯茶碗が空になれば、直ぐに立ち上がり、お代わりを注ぐ。空いた食器は直ぐに邪魔にならない様に脇へ避ける。そして食後に、さつと茶を出す手際の良さ！

それは、利知未が本当に兄を慕っているからこそ、行動であつたのかもしれない。兄を良く見て知っているからこそ、直ぐに反応出来る。

もしそれだとしても、普段の利知未からは、中々想像できない姿だ。

もしかしたら将来、意外と良いお嫁さんになる素質を持っているのではないか？…そんな感想を、二人は持ったのだった。

#### 四

朝美が名古屋へ行き三日、玲子も、下宿に戻ってくる迄には、十日もある八月の一週目。

利知未は面倒臭いながらも、学校で指定された体育の水泳実習、五日間を、さつさと片付けてしまおうと、二日続けて学校へ行った。

午前と午後、両方解放されているタイミングが、夏休み前半から中盤に掛けては、この二日だけだった。指定日数中の四日を、一気に消化してしまった訳である。

今日で消化しきれると言う最終日。利知未は学校へ向かう途中の道で、ある面倒事に引つ掛けてしまった。

それは、プールの解放時間の十時迄には、まだ三十分程の余裕がある、九時半過ぎ。丁度一ヶ月ほど前、アダムのマスターに声を掛けられた、河原沿いの道を通りかかった時だった。

「……ンだー？しけてやがんな。これっぽっちかよ？」

「……返せって、言ってんだろ！？」

河原から、柄の悪い声と、負けん気だけは強そうな、声替り前の少年の声がした。

「なんだ？」

そう呟いて、声のした方を覗いて見た。

顔も身体もボロボロになりながら、自分より二、三十センチは上背のある相手に、必至になって飛び掛って行く、少年の姿が在った。「カツアゲー！？ダサイ事やってンな！」

つい、大声で叫んでしまう。少年の攻撃を面白がりながらかわし、更にその鳩尾辺りへ蹴りを入れ、少年を転がしてから、柄の悪い男が利知未に睨みを効かせてきた。

「ダサイだと？テメー、良くそんな口利けるな？」

「ダサイからダサイって、言っただけじゃん？大体あんた、その転がってるのまだ小学生じゃねーの？」

「だから何だってンだよ？金持つてりや関係ネー。」

「……アツタマくん、そー言うの。自分より小さい子やお歳よりは大切にしろって、教わらなかったのかよ？」

「……イイ度胸してんじゃねーか、お前もボコられテーのかよ？！」

転がっている少年は、本格的に気を失っている様子だった。口から血を流している。早く手当てをしないと、もしかしたら内臓がどう

になつてゐるかもしれない。

そんな不安を感じ、利知未は河原へ滑る様に降りて行つた。

その場に降り立ち、少年を庇う様に立ちはだかった。バッグを軽く斜め後ろへ投げ捨てる。男がバカにした笑いを向ける。

「何だ？女かよ？へ、イイ根性してるじゃねーか。」

利知未は学校へ向かう途中だった。セーラー服姿だ。

「女だから何だよ？言つとくけど、喧嘩だったら負けねーよ？」

小学校二年の頃から、ニューヨークで暮す事に成るかもしれないと言ふ前提の元、護身術として、合気道を習い始めていた。

そして、小学校を卒業するまでに、既に修了免書を貰つていた。

男は本格的にバカにし始め、高笑いをする。ニヤついた顔面のまま、利知未に撲りかかつて来た。

「上等じゃねーか！」

自分よりも十センチは小柄な、セーラー服姿の女に負ける訳は無いと、思つていた。軽く脅してやれば、その場で座り込み、泣き出すんじゃないかとさえ思っている。隙だらけだ。

利知未は軽く左足を引いてその男の拳を交わすと、勢いが付いているその右腕を掴んで、力の流れに逆らわない様に弾みをつけてやった。

呼吸モノである。この際、利知未側の力の強さなど関係無い。

男は自分の勢いと体重に押され、そのまま前へつんのめってしまった。

不様にすつ転ぶ。利知未は男の首を、後ろから手刀で打ち据えた。急所だ。小さくうめいて、そいつはそのまま気絶をしてしまった。

「だーから、負けねーって言ったじゃねーか。」

気絶している男に吐き捨て、そいつの身体を仰向けに転がし、ポケットから少年が奪われた財布を抜き取った。

踵を返して、少年の脇に跪く。軽く、頬を叩きながら声を掛けた。  
「おい、大丈夫か？目、覚ませよ？」

「…うん。」

小さくうめいて、少年の瞳が微かに開いた。

少年は、焦点のボヤけた視力を、回復させようと努力した。

心配そうな表情が自分を見つめている。自分よりも年上の、少年…？

視点を瞳だけで動かす…。セーラー服！？

一気に目を見開いた。身体中が悲鳴を上げる。

「イ…、痛てっ、っ、っ…。」

「おい、大丈夫か！？何処が痛むんだ？腹は、大丈夫か？頭はハッキリしてるか？！」

腹は、痛い。口に鉄の味が広がっている。歯が一本、グラグラしてるみたいだ…。それでも、何とか動けるかもしれない…。

頑張って起き上がろうとした。腹は痛いけど、どうにか頑張ってしまった様な感じはしなかった。

少年は、何度か小さな悲鳴を上げながら、やっとで上半身を起き上がらせた。利知未は手を貸してやった。

体が起き上がると、直ぐそこで伸びているヤツに気が付いた。驚いてビクリとする。その拍子にまた身体が悲鳴を上げる。…声も上がる。

『…こいつ…、もしかして…？』

自分を助け起こしてくれた、セーラー服姿の少女を見る。

「ほら。お前の財布、これか？」

自分の財布を、顔の前に持ち上げて、問い掛けられた。

「…うん。そうだよ。」

歯が一本ぐらついているから、普通に言葉を発し難かった。少女は財布を、シャツの胸ポケットに押し込んで寄越した。そしてニコリと笑う。

「お前、結構、根性あるじゃん？」

少年は、恥かしくなって俯いてしまう。

『頑張って向かって行ったのに、アッサリやられて気絶しちゃった



よ…。…それで女に助けられた。』

恥かしいのと、口惜しいのとで、何も言葉が出なかった。

少女が立ち上がり、スカートの汚れを軽く払った。

「立てるか？」

前屈みになり、手を差し出す。少年はその手を取るのを躊躇っている。自分で手を地面につき、立ち上がろうと踏ん張った。

暫くその様子を、黙って見守った。男が自分で頑張ろうとしているのを、直ぐに見かねて手を出しちゃ、傷つけてしまいそうだ。

利知未は少年が、何とか途中まで自力で立ち上がるのをじっと見守っていた。腰が地面から上がり、確りと立ち上がろうとし、ヨロケて再び転びそうになるまで。

絶妙なタイミングで、少年の身体を支えた。

「良く、頑張ったじゃねーか？」

「…へへ。」

少年がやつと笑顔を見せた。少年の身長は低かった。一四〇センチちょっとと、言う所だろうか？小学校四年生くらいかと思った。

「…有難う、オネーサン。」

利知未は、ちょっとくすぐったい気分になった。これまでも、制服姿で男に間違えられる事は流石に無かったが、年下の少年から「オネーサン」と呼ばれるのは慣れていない。今まで住んでいた場所の、近所の子供達からも、利知未の事は「利知未！」と、そのまま呼び捨てにされていた。それが普通だった。

少年に肩を貸し、空いた肩にはバックを掛ける。

「送って行くよ、家、遠いのか？」

「ここから、三十分は掛からないけど…。」

「どの辺りだ？」

「…駅北商店街の、北側の外れなんだ。」

「そうか…。」

利知未は考えた。それなら、アダムへ連れて行った方が、早いの

では無いかと思った。そこで怪我の手当てをしてから、送って行った方が良さだろうと、結論を出す。

「じゃ、まずは手当てが先だな。それから送る。近くに知り合いの店があるんだ。…十分くらいなら、歩けるよな？」

「…大丈夫だと思うよ。」

背負って行った方が、楽だろうとは思ったが、きっと、この少年は嫌がるだろうと感じた。それなら、歩かせた方が良さかも知れない。

河原から、やっとの思いで道へ出て、ゆつくりと歩く。

「そー言えば、お前、名前は？」

「手塚 宏治。オネーサンは？」

「瀬川 利知未。…オネーサンっての、止めてくれないか？」

「どうして？」

「…言われなれてないんだ。何か、変な感じがする。」

「ハハハ、変なの。」

笑った拍子に、腹筋が刺激されてまた痛む。「イテテ…」と声が漏れた。

「オネーサンじゃなくて、瀬川さん、城西中学？」

「ああ。」

「おれ、来年から後輩だ。」

「…六年か？」

少し驚いた。少年が、傷が痛むのとまた違う所が痛いような顔をした。

「背が低いから、何時も三、四年と間違われるんだ。そう思ってた？」

「…悪い。…逆だな。」

「年上に見られるの？」

「大体ね。」

「じゃ、二年か一年なんだ。少なくとも一年間は学校で会う事になるね。」

「そーだな。」

「…中学に入ったら、喧嘩、教えてくれよ。」

いきなり真面目な顔をして、少年、宏治が言った。

「…お前は充分、強いと思うけどな。」

「どうしてさ？さっきだって…、」

俯き、口惜しそうな顔をする。

「…解ったよ。考えとく。」

「…頼むよ。」

利知末が言いたかったのは、喧嘩ではなく、心の強さの事だった。

この少年は決して弱くなど無いと、利知末は思っていた。

体が小さく、力も余り強くない様だが、ボロボロに成りながら、自分よりも大きな相手に立ち向かって行く事が出来る。強い心を持った少年だ。利知末の中では、充分、賞賛に値する。

アダムに着いたのは、十時半を少し過ぎた頃だ。店は開店前。

利知末は、この前、来た時に教えて貰った裏口から、店へ入って行った。

傷だらけの少年を支えた、制服姿の利知末に、開店準備をしていたマスターが気付いた。

「…！いたい、どうしたんだ？」

「悪い。救急箱あったよな？貸してくれよ。」

カウンター近くのテーブル席に、宏治を座らせた。

「それは構わんが…。何処から連れてきたんだ？」

休憩室へ救急箱を取りに行きながら、利知末が言った。

「マスターと、始めに会った河原。」

「…何があつたんだ？」

店からマスターの声が聞こえる。

休憩室では、翠が出勤して制服に着替えていた。利知末を見て驚いた。

「あら、どうしたの？こんな早くから制服姿で。」

「怪我人、運んで来た。救急箱、この上だよな？」

上下二段ロッカーの、一番隅の上の段を開けた。目的の物を持ち、すぐに店内へ取って返す。

「怪我人って？」

不安になった翠が、急いで着替えを済ませて、利知末の後を追いかけた。

宏治の手当てをしながら、心配そうにしているマスターと翠に、事情を話して聞かせた。

「俺、あーゆーの大嫌いなんだよ。」

話している内に、段々と腹が立ってきて、一頻り文句をぶちまける。宏治は利知末の言動に、少々ビビッてしまった。

「もう良いよ。…おれが、弱いのがいけないんだ。」

「お前は弱くなんか無いって、言っただろ？あーゆーバカが、力任せに暴れ捲ってんのが、強いって事だと思っていたら、大間違いだ。」

手当てを終え、利知末に例の珈琲と、宏治にホットミルクを出してくれたマスターが、カウンターの中で呆れたような顔をした。

席は、カウンターの隅、トイレに近い三席へと移っていた。左に宏治、右に翠が座っている。後五分もしたら、店を開ける時間になる。

従業員も、ランチタイムパートが出勤して来ており、顔馴染となった利知末の剣幕に目を丸くしていた。

「まあ、利知末の言う事にも、一理あるわね。」

翠が、利知末を宥める様に言う。

「しかし…。お前が、喧嘩ね…。」

マスターは、普段のやや捻くれて冷めた様な利知末が、そう言った事に熱くなっている事の方が、意外だった。そして、懸念も浮かぶ。…制服姿で立ち回ったんだ。休み明け、登下校には十分注意した

方が良いかもな。」

「返り討ちにしてやる。」

ぼそりと呟いた利知未の言葉に、ますます不安が募ったのだった。

「お前な、多勢に無勢って言葉、知ってるか？」

「知ってるよ。」

「そう言うヤツらは、仕返しにどんな手を使ってくるか、解らないんだぞ？一人で来ると思わない方が良い。」

マスターが諭す様に話し出す。元々は、頭も働く利知未だ。考えは直ぐに追い付いて行く。

「…そりゃ、そーだけど。」

「それに、もしかしたら敵は、そいつ等だけじゃ無いかもしれない。」

いくらか落着いた様子の利知未が、冷静さを取り戻してきた。

「どう言う事だよ？」

「…色々さ。同じ学校にも、お前の目立った行動に立てつくヤツも出てくるかもしれない。それだけじゃないぞ？学校側だって、あんまり騒ぎが大きくなれば、どんな処分をするか…。」

「…、三年の内申書は、メチャクチャだろーな。」

しかし、それ程シヨツクな様子は無かった。珈琲を口に運ぶ。

「それだけで、済めば良いけどな。」

「ま、成るよーに成るだろ？」

ニヤリと、笑った。それまで、黙って会話を聞いていた宏治が呟いた。

「もしも、何か大変な事になったら、おれの所為だ…。」

マスターと利知未は顔を見合わせた。

マスターは、宏治に労わり深い笑顔を見せる。

「大丈夫だ。手の着けられないジャジャ馬相手に、ちょっと脅しを掛けて見たただけだよ。」

利知未も、少し肩を竦めて、ニヤリと言う笑いを、宏治に向けた。

「お前の所為なんかに、なりやしねーよ。…元々、結構、睨まれて

るんだ。それに、今回は正当防衛だろ？」

「…。」

俯いてしまった。翠が、優しく宏治の肩へ手を置いた。

「心配しないで。きっと大丈夫だから。」

店は既に開店していた。早めの昼食を目的に、何人かの客が入り始めている。利知未は、これ以上忙しくなる前に、店を出ようと思つた。

「…送るよ。もう、一人で歩けるよな？」

宏治が頷いた。それを確認して席を立つ。

「じゃ、開店前から、悪かったな。」

「送って行くんだな？…気を付けろよ。」

「解ってるよ。翠さんもサンキュー。」

「どう致しまして。また、いらつしゃい。」

「勿論。また来るよ…。じゃーな。」

宏治を促して、静かに裏口から出て行つた。

宏治の家までは、何事も無く辿りついた。

宏治は、『バッカス』と言うスナックを一人で切盛りしている母親と、七歳違いの兄との三人暮らしだった。

店は、自宅から五分ほど歩いた場所に、在ると言う。

手当てをされた、傷だらけの次男を連れてきた、制服姿の利知未を見て、母親は当然驚いた。しかし、利知未も驚いた。

その母親は、驚いた次の瞬間、宏治の姿を見て、笑い出したのだ。「まー、随分と良い男になってきたじゃない。箔がついて丁度良いかも知れないわね。」

笑いながらそう言った。そして利知未には、深深と頭を下げた。

「迷惑を掛けちゃったようね。ごめんなさい。…ありがとう。」

「…そんな頭、下げないでよ、おばさん。」

当惑した利知未の言葉に、笑顔でもう一言。

「おばさんって呼ばないで。老け込んだじゃうから。」

「？」

「息子以外には、美由紀と呼ばせているのよ。客商売だから、若々しくいたいでしょう？」

利知未は目を丸くした。その様子を見てクスリと笑う。

「可愛いお嬢さんね。お名前は？」

「…瀬川です。」

「下の名前は、何て言うの？」

「…利知未です。」

何となく敬語になってしまった。その自分に驚いた。変な感じだった。

「そう、利知未さんね。よく覚えておくわ。…本当にどうもありがとう。こんな弱つちいのも、大事な息子だから。…もうちょっと鍛え直さないといけないわね。」

コロコロと笑った。利知未は、美由紀に興味を持った。

「今度、店を覗かせて下さい。」

「あら、スナック何かに興味あるのかしら？…良いわ、今日のお礼に、今度、開店前にも見にいらっしやい。北商店街外れの『バツカス』ってお店だから。夕方四時頃から五時頃までなら、開店準備してるわ。」

「分かりました。じゃ、失礼します。」

普段の調子が出ないまま、利知未は、手塚家を辞去したのだった。

## 五

八月も中旬を過ぎ、実家へ戻っていた玲子も、再び下宿に帰っていた。

二十四日の朝、朝食の席で玲子が言う。

「瀬川さんが居ないと、私もストレスが溜まらなくて、清々します。」

「本当は逆に、発散する相手が居なくて、寂しいんじゃないの？」

朝美がニマリと笑う。

利知未は昨日から、二泊三日の予定で、裕一が一人暮らすアパートへ行っていた。

「勝手に想像して、変な事、言わないで下さい。…私、本当にあの人を見てると、イライラするんです！」

「ハイハイ、そういう事にしておきましょう？」

少し、ムツとしたような顔をする。だが玲子は、直ぐに何時もの冷静さを取り戻して、止まっていた手を動かし、朝食の続きを取り始める。

「…そう言う事に、しておいて下さい。」

朝美は、少し笑顔だ。玲子はそう言う態度を取りながら、意外と利知未の事を、心配もしている様だった。

数日前。利知未は、顔に傷を付けて帰って来たのだ。

玄関を入った利知未を、最初に見たのは玲子だった。

「瀬川さん?! どうしたの、その顔…!」

何時もらしからぬ、素っ頓狂な声を上げた玲子を、利知未は口端の血をＴシャツの肩で拭いながら、小さく笑って見た。

「どーって事ねーよ。…転んだだけだ。」

「転んだって、何処で転んだらそんな怪我をするの!？」

まだ、驚いている。利知未は靴を脱ぎながら、そっけなく答えた。

「河原。…里沙! 救急箱!!」

廊下へ上がりながら、奥に声を掛けて、リビングへ行きかける。

横を通り抜けて行く利知未の腕を掴んで、玲子は言った。

「里沙さんは、朝美さんと外出中よ。…全く、仕方のない人ね。」

利知未を引っ張って、自分からリビングへ入って行く。

「そんな怪我じゃ、自分で手当てなんて出来っこないでしょ?」



ソファに、利知未の肩を押して座らせた。棚の救急箱へ手を伸ばす。  
「…ヤサシーじゃん？」

利知未が、ニヤリとして呟いた。

「…煩いわね。…私一人しかない所に、自分で手当て出来そうもない怪我をした同居人が帰って来たんだから、仕方ないでしょ。義務よ。」

乱暴に消毒薬を、頬の傷に吹き掛ける。

「…イテッ…！傷に凍みるンだけど…、もうチョイ、優しくしてくれねー？…テテテ…、」

「贅沢言わないで！手当てして貰ってるだけでも、感謝して欲しいわ。」

手の甲にも、怪我をしている。剃刀傷のようだった…。玲子はそれを見てまた驚く。…いつたいこの同居人は、何処で、如何して、こんな変な傷を作って来たのだろう…？

そこにも、容赦なく消毒液を吹っつけた。

「イテ！…こー言う傷は、擦り傷より凍みるんだよ…。丁寧に頼むよ？」

玲子は、利知未の顔をチラリと見て、絆創膏を、ペチッと張りつけた。

「イッテ…！…乱暴だな…、」

利知未がぼやく。玲子は、無言で傷の手当てを続けた。

「はい、終わり！…女の癖に、何で、平気で顔に傷なんか作って来るのよ？…呆れちゃうわ。」

救急箱を片付けながら言った玲子に、利知未は、またニヤリとして返す。

「仕方ねーだろ？顔からコケたンだから。」

本当は、喧嘩傷である事は、最後まで黙っていた。

アパートの最寄り駅へ、利知未を迎えに来た裕一が、傷だらけの

妹を見て目を丸くした。

「お前、何したんだよ……？」

「イー女に成ってんだろ？」

ニヤリとする利知未に、呆れた顔を見せる。

この妹は、昔から近所の悪ガキと喧嘩をして、何時も傷だらけだった。

それほど驚く事でもない。それよりも、スポーツバックを肩に担いだ妹の、その服装を見て、微かに笑顔が漏れて来た。

「それ、着て来たんだな。」

「折角、買って貰ったんだからね。……一応、着て来ないと。」

「良く似合ってるじゃないか。……顔のバンソーコーが無ければ、もっと良いんだけどな？」

「知らねーの？こーゆーファッションが流行ってンだぜ？」

そっぽを向いて、笑いながら舌を出す。

「初耳だよ。」

笑ってしまった。利知未も笑顔で歩きだす。

「優兄は、いつ来るんだ？」

「優は、明日一日だけ、遊びに来るよ。」

利知未は、ちよつと下を見て、少し残念そうな笑顔になる。

「そっか。……折角、久し振りに三人揃って、過ごせると思ったのにな。」

「そうだな。……仕方がないよ。年末年始は、一緒に過ごせるだろう。」

「……うん。……年末か。まだまだ、先だな……。」

「あつという間だよ。たったの四ヶ月だ。」

寂しそうな妹に、優しい笑顔を向けた。

裕一達は、両親の離婚、約二年後。母が仕事でニューヨークに行ってしまったからの八年間を、兄妹で親戚の家に暮した。

始めの二年は、父方の親戚で過ごし、正直肩身の狭い思いをしていた。

その後、母方の大叔母に預けられた。

母の母。つまり、祖母の妹で、裕一達の母親にとっては叔母に当たる。その老夫婦は、この三人を大層可愛がつてくれ、三人は、その夫婦が亡くなってしまった去年の冬まで、その家で暮らした。

兄妹が、一番幸せでいられた五年間だった。

その後、ホンの三ヶ月間をまた別の親戚の家に預けられ、…その家には、世間一般から煙たがられるような、どうしようもない息子が居た。

それが原因となり、兄妹で話し合った。…その結果、四月から裕一はアパートで暮す事にし、次兄の優は全寮制の高校へと編入した。そして利知未は、一端はニューヨークの母親と暮して見る事にし、約一月半、母の元に居たのだった。

しかし、母娘はどうしても折り合いが悪く、利知未から泣きの連絡を受けた裕一が、勉強の合間にあの下宿の存在を探し当て、そして利知未は、他の生徒に遅れる事、約一ヶ月。今の城西中学へ、転校生として通い始めた。

そんな過去があり、この兄妹は長い間、支え合って生きて来た。

利知未が今、「久し振りに三人揃って過ごせると思ったのに」と言った言葉の裏には、そんな事情が在った。

母親の元から戻った利知未の様子が、それまでと微妙に違っていた事に、裕一は気が付いた。

どんな事があり、何が妹に影響してしまったのかは、推測する事しか出来ない。ただ、裕一は妹に、昔のような笑顔が戻る事だけを祈って、この約四ヶ月間を過ごして来た。

その意味で、あの下宿に利知未を預けた事は成功だったと思っている。

裕一のアパートは、六帖一間、キッチンが三帖分ほどしかない、風呂無し、トイレ付きと言う、本当に質素な物だった。荷物も少な

い。

勉強机と本棚。それに箆笥が一竿と小さなテレビ、一応、電話は在る。

ベッドは返って邪魔になるからと、夜は布団で眠っている。登山道具は、押入れの下半分と、三帖しかないキッチン片隅にあるダンボール箱に入っている。

利知未は、着替えを詰めてきたスポーツバックを勉強机の脇に置き、外で待っている裕一の所へと取って返した。これから昼食を取りに行く。

「お待たせ！」

借りていた鍵を裕一に手渡して、並んで歩き出す。

「裕兄の部屋、相変わらず何つにも無いよな。ツマラなく無いのか？」

「寝に帰るだけ、みたいな物だからな。テレビがあれば時間は潰せるよ。」

「ソー言うモンか？」

「ああ。それに、勉強も忙しいからな。」

「そーだな。…ついていつてんのかよ？勉強。」

利知未の言葉に、笑ってしまう。

「お前に心配される様じゃ、どうしようもないな。」

「何だよ、一応、心配してやってんのに！」

ムツとした表情で言った、妹の顔を見て、また笑えた。

「大丈夫だよ、今の所は。本当に大変なのは、これからの三年間だ。」

「そーなのか？」

「ああ。」

「ふーん。」

見合わせていた顔を反らし、前を向いて歩く。

「何が食いたい？」

「ラーメン！」

「また、お前はそう言う物を選ぶ。成長期だから、もうチヨイ、栄養のバランスが良いもの食べよ？」

「栄養バランスは、いつも里沙が考えてくれてるよ。里沙の料理、美味しいんだ！裕兄もこないだ食ったじゃん。」

「そうだったな。そうだ、お前、言葉使いはこの再、後回しでも良いから、料理、教えて貰って来いよ。」

いきなり提案されて、利知未はやや面食らった。

「ばあちゃんから、習ってたよ？」

「レパートリー、増やしておけよ。俺が大学出て、何処かの病院で働き出したら、一緒に住むんだからな？」

利知未は、目をぱちぱちさせて、驚く。

「：アメリカ、行かなくても良いのか：？」

「どっちにしろ、高校は日本で行くんだろう？三年後じゃ、まだ、

お前は高校二年だ。二年間は、一緒に暮らせるよ。」

利知未が顔中で笑顔を作る。弾んだ声を出した。

「そーだな！そしたら、もしかして、優兄も二年くらいは一緒に居られるかな？だって、三年後ったら、優兄もまだ大学三年だろ？」

「そうなるな。：だから、お前が俺達の胃袋、支える事に成るんだ。美味しい物、作れるようになってくれよ？」

「ソー言う事なら、任せておけよ！里沙に色々、教えて貰っておくよ！」

「お前は器用だからな。期待してるよ。」

「ああ！」

明るい表情が戻った利知未を、裕一はホッとした気持ちで見た。

それから利知未の希望通り、ラーメン屋へ入って昼食を済ませると、薬局で、利知未の怪我処置用に消毒液、銭湯に持って行く為、携帯用のシャンプーやボディソープ、歯ブラシなどを買い込む。

そこそこの荷物を抱えて、書店で立読みをして時間を潰した。最

後に夕食の材料を買い込んで、夕方、アパートへ戻った。

夕飯は、利知未が作った。昔、大伯母に教わって覚えた料理だった。

夕飯を終え、八時前に銭湯へ向かった。その道すがら、裕一が言う。

「ちゃんと、覚えていたんだな。」

「何を？」

「おばあさんに教わった料理だよ。…懐かしい味だったな。」

「俺も中々、やるだろ？料理実習の時間とか、面倒臭くて。」

「どうしてだ？」

「だって、昔、覚えた事ばかり、ヤラされるんだぜ？クラスの女子に全然、料理とかやった事、無いヤツがいてさ、フォローしてやんのが、大変だよ。」

少し、ふて腐れたような言い方をする。

「安心したよ。…上手くやってる様じゃないか。」

「学校？」

「ああ。お前はとも、捻くれ過ぎてるからな。上手く行かないんじゃないかと思って、心配していたんだよ。」

「…面倒事、起こしたくないからね。」

マスターの事を思い出したが、言わずにおいた。

『世話好き親父がいてさ、色々、煩く言われるんだよ。』

心の中だけで、言っておいた。

風呂から戻り、利知未の絆創膏の後を処置し直す。

裕一は、利知未の、右手の甲に付いた剃刀傷を見て、驚いた。

「お前、いったいどんなヤツらと喧嘩したんだ？」

「ン？…あー、これは草で切ったんだよ。葉っぱの鋭いヤツ、あるだろ？」

本当は違う。しかし、黙っている事にした。

宏治を助けた時の柄の悪い連中に、最近、良く喧嘩を吹っかけら

れていた。その中に、剃刀を持ったヤツもいた。

「…本当だろうな？」

「裕兄に嘘、言っただうすんだよ？」

「…なら、良いけどな。」

探りを入れて見ても良いが、取り敢えず、本人から何か行つて来るのを待つ事にした。

その夜、一組の布団で兄妹は眠った。利知未にとって裕一は、兄であると同時に、親のような存在でもあった。

寝付くまでに色々と話をして、利知未から安らかな寝息が聞こえ出したのは、深夜二時近くの事だった。

翌朝、八時近くに利知未が起き出すと、裕一がキッチンで、朝食の準備をしていた。裕一も一人暮らしをしてから、自炊をしている。山に入つた時などは、飯盒を使って何かしら作るのだから、全く出来ないと言う事は、元々、無かった。

「やっと起きたか？飯にしよう。」

顔を洗いに出てきた利知未に、声を掛ける。

「はよ、裕兄。何作ってんだ？」

寝ぼけた目を、擦っている。背だけは高いが、そんな様子を見てみると、まるで小学生の样だった。

「昨日、炊いた飯が、まだあるからな。味噌汁と目玉焼きで良いだろう？」

バシャバシャと、流しで顔を洗っている利知未が、水浸しの顔を上げてブーイングを起こした。

「エー！？なんか、野菜はないのかよ？」

「昨日の残りの煮物くらいなら、あるぞ？」

「…仕方ネーな。それで勘弁してやるよ。」

手で顎に滴ってきた水を払って、肩に掛けていたタオルを使う。

朝食を終え、暫くした頃、玄関をノックする音が聞こえて来た。

「あ、きつと優兄だ!!」

嬉しそうに玄関を開けた利知未の目の前に、ひよろりと細長い体形をした少年が立っていた。顔の、利知未と同じ所に絆創膏が付いている。顔立ち、裕一よりも利知未に似た感じだ。

「オッス。…お前、相変わらずだな…。」

利知未の顔の、絆創膏を眺める。

「優兄こそ、同じトコにくっついてンじゃん？」

「オレのは部活でついたんだ。寸止め下手な奴がいてさ。」

言いながら、靴を脱いで利知未の前を通過する。

「よう、良く来たな。お前も、相変わらずそうだな。」

部屋から出て来た裕一が迎えた。隣に立つ。

「…お前も背、伸びたな。」

やや、上を見る。

「成長期だよ。」

この兄弟は、背が高い。裕一も181センチあるが、優は、どうやら185センチには、成って来たようだった。利知未も、女にしては背が高い。どうやら瀬川家の血筋らしい。そう言えば、ニューヨークの母親も164センチはある。

「折角、三人揃ったんだから、どうか遊びに行こうよ!」

利知未が、二人の兄に声をかけた。

「麦茶の一杯ぐらい、出してくれねーのかよ?」

優が言った。裕一は、その様子を笑って見ている。

「分かったよ、一杯だけな。」

利知未が答えて、冷蔵庫から麦茶を出して優に渡した。

「サンキュ。」

「な、何処行こうか!？」

まだ、麦茶に一口も付けていない優を、急かす様にせつつ。

「あー、煩いヤツだな。もう少し落着かせろ!」

と、利知未の頭を、優が小突く。

「ってーな!暴力兄貴!」



「へ、お前はそれ位でどーにか成るようなか弱い女じゃネーだろ？」  
「お蔭様でね！」

利知未が舌を出した。裕一は相変わらずの二人の様子を、穏やかな笑顔で見守っていた。

それから、煩い利知未に背中を押され、三人で電車を乗り継いで、大きな自然公園へ向かった。昼は何処かで食べる事にし、利知未と優は、公園のアスレチックで競争をした。裕一も付き合った。

裕一は登山で体力があり、優は空手部で、いつも鍛えている。その兄達と、小さな頃から転げ回っていた利知未も、中々、素早い。お互いに罵倒を浴びせながら、風のようにアスレチック施設を掛け抜けた。ゴールした時、その様子を眺めていた見物人が、拍手をしてくれた。

楽しい一日を過ごし、アパートへ戻った。夕食はまた利知未が作った。

夕食の席で、裕一の卒業後の話しをした。

「イーンじゃねーの？　そう言う生活も楽しそうだ。」

優が頷いた。狭い六帖の部屋で、座卓を囲んでいた。

「じゃ、優兄も賛成、何だな！？」

利知未は、嬉しそうな声を上げる。

「お前の料理の腕も、まあまあみたいだしな？　精々、美味しいモン作れるようになっておけよ。」

「任せろよ！」

明るい食事が終わり、夜八時ごろに、優は帰って行った。寮の門限が十時と言う事だった。

それから、今夜も銭湯へ行き、昨日と同じ様に、一組の布団で休み、翌日、昼過ぎに利知未は下宿に帰って行った。

本当は、もう少し裕一と過ごしたかったが、明日からまた、裕一

のバイトが始まる。ただ、三年後の約束が出来た。それが楽しみだった。

利知未の気持ちは、晴れやかだった。

だ、続きます。）

幸せの種 第一章 了（まだま

## 一章 現在へと繋がる 始まりの初夏（後書き）

一章を最後までお付き合い下さいまして、ありがとうございます。  
これから、利知末の世界は、まだまだ、続いて行きます。この主人公達に、もしも少しでも、好感を持つて下さいましたら、もう暫らくのお付き合いを、お願い致します。

## 二章 センパイ（前書き）

利知<sup>りち</sup>未<sup>み</sup>の、中学時代の懐かしい思い出話、第二章です。中一の夏休み最後に、利知未は長兄・裕一<sup>ゆういち</sup>が一人暮らすアパートで、次兄・優<sup>すぐる</sup>と三人で、楽しい一日を過ごしてきたばかりです。さて、二学期。今度はどんな出来事が、利知未を待っているのでしょうか…？この話は、決して未成年の喫煙、ヤンチャ行動を推奨するものではありません。

ご理解の上、お楽しみ下さい。

## 二章 センパイ

### 二章 センパイ

—

楽しかった夏休みは終わり、二学期が始まっていた。保健室で利知未は、授業のサボり仲間と話している。

「お前、最近、川中の奴等と揉めてんだって？」

「耳が早いじゃん？別に、俺から突っかかってんじゃねーよ？」

「アイツ等、タチワリーからな…。何かあつたら声かけるよ？加勢してやるぜ。」

「サンキュー。でも、今んトコ、ヘーキだよ。」

「…だろーな。」

三年の、顔役グループのナンバー2だった。名を、櫛田 猛と言う。名前通りの乱暴者だ。

利知未は、櫛田と大喧嘩をした事がある。転校して来て、まだ一ヶ月も経っていない頃の事だった。

最近は、少しは真面目に学校へも来る様になった利知未だが、その頃は良く、授業を無断で抜け出して、私服で街をブラブラしていた。

櫛田とは、商店街の小さなゲームセンターで会った。

「おい、お前！」

いきなり呼び止められて、振り向いた。

「一年に転校して来た、瀬川じゃねーか？」

「ソーだけど。あんた、誰？」

「オレの事を知らねーとは。…クラスのヤツから、教わんなかったか!？」

「知らねー。で、誰なんだよ？」

タチの悪そうな顔立ちをしていた。カツアゲでもする気なのかと思ひ、利知未は最初から、挑戦的な態度を取っていた。

「噂通り、良い根性した女だな。…少々、生意気だから、シドーしてくれってな、一年から言われてンだよ？」

面倒臭い事になったと思った。取り敢えず、店の中で暴れるのは、利知未のポリシーに反する事だった。

「ナシ付けよーってンなら、外に出よーぜ…？」

睨みを効かせて、誘い出した。

「良いだろう。」

場所を変え、路地裏に出た。

「で、何が気に入らネーって？その一年。」

「お前に痛い目、見せられたって話した。」

「…何てヤツだよ？」

一人、思い当たる相手がいた。しかし、そいつは本当にどうしようもない奴だった。痛い目に合う事になった理由は…。

実は、利知未に振られたのだ。

利知未は、中世的な、綺麗な顔立ちをしていた。ただ、年の平均より高い身長と、細身の体、普段の言動は、どう見ても少年のようだった。この夏、河原で知り合ったアダムのマスターが、その性別を正しく把握できないまま、数時間を過ごしたのは、まだ二ヶ月前の事だ。

転校して来て直ぐ、利知未は男女問わず、その容姿から妙な人気が出てしまっていた。制服姿でいれば、中々、綺麗な女の子だ。体育の時ジャージ姿になれば、今度は格好良い男の子に見える。

中学一年と言えば、そろそろ徐々に色気も出てくる年頃だ。女の子は勿論、早熟だし、男の子も小学生時代から変わり、男女の差と言うモノに興味を示し始める。それが、原因だ。

数日前、ちよつと突つ張つた感じに見せていた、隣のクラスの男子から、利知未は体育館裏に呼び出された。そこで告白された。利知未は面食らつた。そんな事は始めてだった。更にそいつは、かなり早熟だった。

告白方になつてなかった。いきなりキスをしようと迫ってきたのだ。

利知未は容赦無く投げ飛ばした。

「名前は言えねえな…。後輩の名誉に関する事だ。」

「…ソーかよ？どう聞いてきたか知らね けど、こつちの者同士、拳で決めよーぜ？」

構えた利知未に、櫛田はへへつと笑つて見せた。

「話が早えーじゃねーか。気に入つた！望み通り、拳で決めてやる！」

飛びかかつてきた櫛田をさらりと避けて、後ろからトンつと押してやった。櫛田は姿勢を崩して、ゴミバケツに突つ込んだ。

しかし直ぐに立ち上がり、蹴りを放つ。利知未はそれも軽く避けて、同じ方向へ力を流す様に、蹴りで返した。櫛田はまたバランスを崩す。今度は転ばずに踏ん張つて、振り向いて言つた。

「妙な技、使うヤツだな。何処で覚えた？」

「昔、ちよつとね。」

利知未はワクワクし始めた。戦い涯があるヤツだと思った。

「そろそろ決めてやるよ！」

身体ごと突つ込むようにして、ストレートパンチを放ってきた。身を屈めて拳を避け、利知未は自分の拳を、そいつの鳩尾に入れた。

ボディーブローだ。利知未の力だけならば、大した衝撃も無かつただろうが、そいつは自分が突つ込んで行つた勢いで、倍以上の衝

撃を受けてしまった。膝が折れる。利知未はくりと体を回転させて、首筋裏の急所に手刀を放った。…それで、勝負は着いた。

利知未は怪我一つしていない。一対一の喧嘩で、利知未を傷付ける事は、先ず不可能だった。

合気道の技だけではない。利知未の素早さと、常に相手の隙を見抜く目は、通常の相手に喧嘩で負けると言う事を、知らなかった。

昔から、四歳も年上の優と、兄弟喧嘩を繰り返して来た経験もある。ただ、優相手の喧嘩なら、三回に二回は負けてしまうのだが…。

しかし利知未は、この櫛田と言う先輩を気に入った。

後輩の名前は出さずに、真っ向から自分と喧嘩をし、少しは持ち堪える事の出来る腕もある。ゴミバケツから素早く復活した身のこなしも、感心出来る。

ハンカチを水に浸してきて、ゴミバケツへ突っ込んだ時に出来た、頬の傷を拭ってやった。傷に凍みて、櫛田が目を覚ました。

「お前、」

「何だよ？蹴りは着いたよな、まだやるのか？」

「…いや、いい。…潔いんだよ、オレは。」

「言葉は、使い様だな。」

笑った利知未に、櫛田は、照れ臭そうな笑顔で答えた。

「…あのさ、苅谷ってヤツじゃネーの？その一年。」

「…それは、言えねーな。」

利知未はまた、櫛田を見直す。

「ま、良いよ。じゃー、思い当たる事の、理由だけ言わせてくれよ？」

「…。」

「体育館裏でさ、いきなりキス迫って来たヤツがいてさ。…思わず投げ飛ばしちゃったよ。」

櫛田が、びっくりした顔をする。これは、正しい理由を聞かされて



いなかったんだと、利知未は判断した。

「……ソニー事。」

「……アイツ……！」

「……って事でさ、これから仲良くしてくれよ？センパイ！」

右手を出して、櫛田の右手を、握手の様に握った。そのまま、立ち上がらせようと引つ張る。櫛田は左手を地面に着いて、素直に立ち上がった。

それが、五月中旬の事だった。今は九月。二学期が始まって、まだ一週間も経っていない。

「貴方達！随分、元気な様ね？もう授業に戻るんじゃない？」

ベッドの周りに掛かっているカーテンを、バサツと勢い良く開いて、養護教員の佐渡 容子が、仁王立ちしていた。

「ア、イタタタタ！まだ頭が……。」

櫛田が、態とらしく腹を押えた。

「センパイ、そこは腹だよ？」

利知未が軽く吹き出して、突っ込んだ。

「そーね。瀬川さんも、もう熱は下がったんじゃないの……？」

額に手を当てる。やっぱり、と言う顔をした。

利知未は、体温計を布団で擦って温度を上げると言う、良く、小学生在な休みをする時に使うような、チンケな方法でベッドを借りていた。

大体が、佐渡がカーテンを開けた瞬間、ベッドの端に腰掛けて、足をブラブラさせていたのだから、バレない訳がなかった。

利知未は軽く舌を出して、笑って言う。

「ア、やっぱバレた？」

佐渡は手をこまねいて、困った顔で利知未を眺める。どうも、この子の笑顔は憎めない。

ヤンチャな小学生が、間違えて、お姉さんのセーラー服を着て、中学校に来てしまった様な、そんな雰囲気的笑顔を見せるのだ。それに、テストの成績も頗る良い。転校をして来て一週間程は、何の問題も起こさず、大人しくしていた。無断欠席、遅刻、早退をしていたのは、五月に入ってから七月の始め迄の、約二ヶ月だった。その頃に担任から言われて、何度かカウンセリングを行った事がある。

その時は、行動事態には、確かに問題がある生徒ではあるが、気持ちの芯の部分は、それほど酷く病んではない様な印象を受けた。丁度、保健室友達になった櫛田にも、同じ様な印象がある。ただし、櫛田は成績も悪い。

「バレた？じゃ、ないでしょう。健康な生徒に開放するベッドは、生憎、ここには無いのよ。早く教室に戻りなさい！」

利知未は首を竦めて、ベッドから飛び降りた。

「ヨーコさんが恐いから、俺は戻るよ。じゃーな、センパイ！」

佐渡は両手を腰に当て、元気に歩く利知未を見ていた。利知未が入り口で、振り返った。

「ヨーコさん、」

「なに？瀬川さん。」

ニヤリ、として利知未が言った。

「アンマ恐い顔していると、小皺が増えるよ？」

「余計なお世話です！」

飛んできた枕をヒョイツと避けて、利知未は保健室を逃げ出した。後ろから、櫛田の笑い声が飛んで来た。

それから利知未は、残りの授業を真面目に受け、給食を確り平らげ、五時間目の体育で大活躍をした。担任の松田は呆れ顔だ。

「瀬川。お前、三時間目、頭が痛いって、保健室へ行っていたんじゃないかったのか？」

走り幅跳びで四メートル近くの距離を出し、五十メートル走で六秒代後半の高記録を叩き出した利知未に、松田は呆れて言った。

「エ？もー治ったぜ？健康そのモノだろ？！」

「言葉！」

「煩せーな…。モー治リマシタ！センセイ！ゴ心配力ケテ申シ訳アリマセン！」

「よし！次！」

利知未は舌を出し、順番を終えて大人しく並んでいる生徒の列に付いた。

「ね、ね、利知未！陸上部、入りなさいよ？！」

体育座りをし、詰らなそうに、膝に頼杖をついている利知未の脇へ、斎藤 貴子が寄って来た。彼女は、利知未が転校して来た時、始めの席順で前にいた生徒だ。利知未と違って背が低く、可愛らしい感じの少女だった。しかし、気が強い。積極的でもあった。

初登校の日。やや異質な雰囲気で、全体から遠巻きに見られていた利知未に、初めて声を掛けたのも貴子だった。

授業中にくると振り向き、「教科書、持つてる？」と、聞いた。首を振る利知未を見て、その隣の席の男子に意見した。

「見せてあげなさいよ！…うわ、すごい落書き！！」

男子生徒の教科書を覗き込んだ。手を上げ、教師に言う。

「先生！瀬川さん、武田の教科書じゃ勉強、出来なさそうだから、あたし、武田と席、変わって良いですか？」

窓際の席だった。右隣しかいない。それで、ぶつぶつ文句を言う武田を、蹴っ飛ばすような勢いで、隣の席へ移動してきた。

その後、利知未が妙な人気者になって行き、学校で何かと注目されるのが煩くて、無断欠席、遅刻、早退をし始めた後も、貴子は相変わらずの態度で、利知未と仲良くしてくれていた。

気が強く積極的な背の低い少女は、それから利知未の、クラスで

数少ない友人となった。貴子の所属は陸上部だった。

「運動部なんてカッターじゃん？皆、良くヤルよな。」

「勿体無いよ。運動神経、良いのに。あたしなんか、速いの足だけでもん。もうちょっと背が伸びれば、良いんだけどな。」

剥れた顔をする。彼女は長距離の選手だ。マラソンなら一年女子の中で、誰にも負けない。

「走ってて、楽しいか？」

利知末と同じ様に、膝に頼杖をつけていた顔を、ニツコリとさせる。  
「楽しいよ。」

「ふーん。」

号令が掛かった。そろそろ五時間目も終わりだ。六時間目は数学だ。  
『カッターな……。サボっちゃおうかな……。』

思いながら立ち上がり、たらたら走って、集合して行った。

結局、六時間目は貴子の監視で、サボる事が出来なかった。仕方なく、真面目に授業へ出た。本人にとっては迷惑な話したが、良い友人である。

貴子は今日こそ、利知末を陸上部に引っ張って行こうと思っていたる。

利知末は放課後の清掃時間、ゴミ捨てに行く理由をつけてサボり、適当な時間を計って、戻る事にした。

その時、正門の外から校内を監視している、川上中学のイカレたブレザー姿を見つけた。

誰も巻き込むつもりはない。教室へ戻り鞆を持って、ホームルームを蹴って、正門へ向かった。

「瀬川はどうした！？」

帰りのホームルーム開始時、松田が生徒に聞いた。

「知りませーん！さっき鞆持って、出て行きました。」

立花 勇樹。クラスでも、お調子者の部類に入る男子だった。意外

と利知未とは仲が良い。貴子繋がりだ。

「ちよっと、ユーキ！何で止めなかったのよ！？」

貴子が、近くの席から声を上げた。

「一応、声掛けたんだけど、無視された。」

「今日こそ、部活に連れてこうと思ってたのに！」

口惜しそうに、貴子が言った。

「ったく、アイツは…。まー良い。とにかく連絡だけしてしまう。」

松田がぼやいて、連絡事項を伝えると、急いで教室を出て行った。

ホームルームの時間。教室以外の校内は、静かだった。利知未は堂々と一人、正門へ向かって行った。

門を出た途端、川上中学のイカレたグループが、利知未を取り巻く。

人数は五人。その内二人は女だ。剃刀を使うのは、女の一人だった。

「毎度、毎度…。態々お迎え、ゴクロオさん。」

ニヤリと笑い、塀を後ろにしたまま、五人を均等に視界へ入れた。

男三人が前列、女二人が後列でニヤニヤしている。前列の真ん中にいるのが、以前、河原で、宏治を相手にカツ上げをしていた、身長170センチ程の、柄の悪い奴だ。

「この前は三人だったのに、新しいお友達まで、連れてきたのか…。」

「

利知未が、呟くように言って、軽く溜息をついた。

「どーしてもオレのダチが、お前に挨拶したいって言うモンでよ？」

真ん中の男が言う。ジリジリと、輪を狭めてきた。

「場所が悪リーな…。」

心の中で呟く。五人対一人の喧嘩なら、横幅が狭く、自分の後ろに、もう少し余裕があるような場所が良い。

「コイツ等も、一応バカじゃないって事か…。」

もう一度、溜息をついた瞬間、新しく加わった体格の良い男が、飛びかかってきた。利知未は左に避けて、その攻撃をかわした。男は塀にぶつかりそうになり、拳を開いてバン！と音を立てて止まった。「成程…。すばしっこいヤツだ。」

ニヤリとして、利知未を睨んだ。利知未も睨み返す。ニヤリとし返して、輪の外へ出ようと、向きを変えた。

そこに剃刀を振りかぶって、女が襲いかかる。利知未は、その剃刀を持った腕の手首に、自分の左拳をぶち当てた。手を返して、女の手首を掴む。

脇を抜けるようにして後ろへ回りながら、その腕を擦じり上げた。塀に女の手をぶつけて、凶器を落とす。

「痛くてー！ー！！！！！」

悲鳴の様な女の声が上がる。その動きの間、3秒から5秒と言う所だ。そのまま女を転がした。変な体重の置かれ方になっているのだから、バランスを崩しやすい方へ引つ張ってやれば良い。道が出来た。

利知未は走り出す。兎に角こんな動き難い所では、埒が明かない。「テメー！逃げるのか！？」

直ぐに残りの四人が追い掛けてきた。利知未の足に追いつく奴が、果たして何人いる事か…。

利知未は四人を、公園まで誘き寄せた。公衆トイレの裏側に、丁度良いスペースがある。遊び場では、小さな子供達に被害が及んでしまう。

利知未の足に、追い付いて来た奴はいなかった。利知未はゆっくりと、息を整える時間を確保できた。

「…テメー…。なんつー…足の、速さ、だ…。」

追い付いてきた奴が、喘ぎながらヨロヨロと構えた。

「…もしも亀よ、亀さんよ、…タバコの吸い過ぎじゃネーの？」  
節をつけて少し歌い、ニヤリとして見せた。

「上等だ！」

息が上がった相手に、利知未が負ける筈は無かった。しかも公園には、足の速い順に追いついて来る。

三十分後。公園のトイレ裏に伸びている奴らを見つけた子供が、大声で泣き出した。慌てて親が走り寄り、その惨状に目を丸くした。……利知未の姿は、既に無かった。

## 二

朝、利知未は、酷い腹痛に襲われて、目を覚ました。  
起き上がろうとして、クラリとする。

『何何だ……？ いったい……』

やっとでベッドから這い出し、トイレへ向かった。パジャマのズボンが、何となく気持ち悪い感じがしている。

個室に入り、下着を脱いで啞然とした。

「これ……！？……ついに、キチャツタって事が………？」

キヨロキヨロと中を見回して、朝美が棚の上に置きっぱなしにしていた生理用品を取り、使用方法をじっくりと読んで見る。

『……下着も替えなきゃ……』

取り敢えず二つ貰い、一つを使用し、残りを持ってトイレを出た。

「なんか、ガサガサして変な感じだ……」

ぼやいて見た。

部屋へ戻り、改めて下着を履き替えて、処置し直す。ついでに着替えも済ませて、ベッドを確認して見た。

「漏れては、いなかったんだ。」

ホッとする。下着とパジャマのズボンだけ、洗えば済む。

部屋を出て、階下へ向かった。

階段を下りて来た足音に、朝食の準備をしていた里沙が気付いた。まだ六時半。誰が下りてくるにしても、早過ぎる時間だ。

気になって、足音がしていた方へ顔を出した。利知未が浮かない顔をして、脱衣所のある方向へ、向かつて行く所だった。

「あら、珍しい！もう制服に着替えたの？」

利知未は、手に持っていた汚れ物を、反射的に後ろに隠した。

「なに？今、隠したの。」

「…何でもない！洗濯機、これから回すんだよな？」

何時もと様子が違う利知未。気になった。近付いて行き、後ろに隠している物を覗き込んだ。利知未は、今度は前に抱え持つようにする。

チラリと見たのは、パジャマのズボンの様だった。首を傾げる。パジャマを洗うのなら、上着もある筈だ。

「ちよつと、見せてね？」

利知未の手から、それを取り上げた。

「あら…。血液汚れじゃない！」

里沙は思い当たって、笑顔になる。

「返せよ！」

慌てて取り戻した利知未が、赤くなっていた。

「おめでとう。…お赤飯、炊かなきゃ？」

「イーよ！そんなの！……恥かしいから。大体、何でおめでとうなのか意味分からねーよ。こんなの、面倒臭いだけじゃないか。」

利知未らしいと思った。里沙は優しく、言って聞かせる。

「子供を産める身体になるって事は、素晴らしい事よ？貴女が今ここにいるのだから、お母様が初潮を迎えて成長して、お父様と知り合い、愛し合った、その結果なのだから。」

利知未は俯いたまま、ふて腐れたような顔をしている。

「私もそう。私のお母様が初潮を迎えて、成長してお父様と知り合い、愛し合って、その結果として私が生まれて来たの。…女性に生



理が無ければ、私も貴女もどうやって生まれてこられる……？それに、私達の未来の赤ちゃんも。」

「……俺は、自分の子供に辛い思い、させたりするくらいなら、赤ちゃなんて欲しくないよ。」

呟くように吐き捨てる。里沙は、利知未の家庭の事情を思い出した。「何を決めつけているの？……利知未が将来、どんなお母さんになるか何て解からないでしょう。……子供に辛い思い何かさせない、貴女の理想のお母さんになれば良いんじゃない。」

「……話し、違うよ。」

「違わないわよ？……その内に、解る様になれるわ、貴女なら。」

里沙は、この夏に裕一と、夕食を共にしていた時の利知未を思い出していた。

「……いつか、大切な人が出来て、その人との赤ちゃんが、欲しいと思えるようになったらね？……今は、面倒臭いかもしれないけど、きつといつか、女に生まれた事を感謝出来る様になれるから。」

「……そんなの、解からないじゃないか！……洗ってくる。」

ふて腐れたように言い捨て、早足で脱衣所へ向かって行く、利知未の後姿に、気遣わしげな瞳を向けた。

利知未は脱衣所で、洗面台に水を張って、汚れ物を自分で洗った。血液汚れには馴染み深い。水洗いの必要と、石鹸を使うと良く落ちる事等は、喧嘩で作った血液汚れを落とす時と、同じ様な物だと思った。固く絞ってから、これから洗う服が入った洗濯機の中に、ほおり込む。

それから、何となくキッチンへ向かった。

四人分の朝食を作っている里沙の元へ行き、手伝い始める。面倒臭い事が嫌いな利知未だが、この夏に裕一のアパートへ泊まりに行ってから、良く料理を手伝うようになっていた。いつも、朝食の準備時間などには、起きて来られない。だから、夕食準備の手伝い専

門だ。

「あら、助かるわ。」

里沙は何も聞かず、変に探りを入れる事もせずに、素直に、その利知未の手伝いに感謝をして見せてくれた。

その朝、利知未は、何時もより早くに下宿を出た。

数日前、利知未は学校で川上中の奴らの待ち伏せを受け、そして公園で、そいつ等を伸ばしたばかりだった。まだ五日も経っていない。起きた時からの体調の悪さで、機嫌も頗る悪くなっていた。しかし、何より困るのは、この貧血だ。

今日、もしもまたアイツ等がやって来た時、体調の悪さが仇にならない事だけを祈って、待ち伏せの危険が少ない、早い時間に出て来たのだ。登校路は、大丈夫だった。

教室で、利知未はボーっとして過ごした。日直よりも早い時間だ。保健室も、まだ養護教員の佐渡はいない時間だろう。

何よりも、今まで経験が無い酷い貧血で、頭さえ働かない。シヨツクもあつた。その内に、ウトウトしてしまった様だった。

「うわ！瀬川がいる！？」

男子生徒の声で目が覚めた。ゆっくりと顔を上げて、頭を巡らせた。

「…細居か。…日直なのか？」

「…ソーだけど、お前、なんか凄い顔色してんな？具合、悪いのか…？」

細居 直哉は、貴子と仲の良い、立花勇樹と仲が良い。

と言うより、立花が、そのお調子者の性格で、クラスの中でも比較的人気者なのだ。立花の将来の夢の一つに、お笑い芸人と言うのがあるらしい。

心配そうに顔色を見ている細居に、利知未は無理に口の端を上げるような笑顔を見せた。

「何でも、ねーよ。」

「保健室、行ったほうが良いんじゃないか？」

「まだ、ヨーコさん来てないんじゃないか。」

「どーかな？」

細居は、自分の机に鞆を置いた。

「朝練、無かったのか？」

「あつたよ。早抜け。」

「ふーん。」

確かサッカー部だ。立花も同じ筈だった。利知未は、再び机に突つ伏した。細居がまた、言った。

「やつぱ保健室、行った方がイイよ。…ついてってやるか？」

優しい性格の持ち主だった。三人の弟妹がいる兄貴だと、聞いた事があつた。面倒見が良いのだろう。

「…いーよ。適当に時間見て、自分で行くから…。暫くほつといてくれ…。」

「…分かったよ。ンじゃ、日直の仕事するかあ。」

やや、面倒臭そうな声を上げ、窓を開けたり黒板消しを叩いたり、そついった仕事を始める。偶に、チラリ、チラリと利知未の様子を見て、気にしてくれていた。

利知未は、ホームルームの始まる前に、保健室へ向かった。教室にはあれから五、六人の生徒が増えていた。

保健室に姿を現すと、佐渡が驚いた顔をする。いつも健康で、授業をサボりに現れる利知未が、真つ青な顔色で、軽く腹を抑える様にして入って来たのだ。演技ではなく、本当に辛そうにしている。

「また、凄い顔色ね…。」

椅子に座つた利知未の顔色を、覗き込む。

「今日はサボりじゃねーよ？本当に辛いから、来た。」

「そんなの、顔見れば解かるわよ。…貧血？」

顔に手を伸ばし、瞼の下を裏返して見る。真つ白だった。

「…後、腹痛…」

「瀬川さん、生理まだだったわよね？」

「……。」

俯いてしまう。その様子で、解かったようだった。

「来たの？」

俯くように、頷いた。

「おめでとう。…やっと女の子になったのね。」

「まただ…。俺には、おめでたいなんて思えねーよ…。」

クスリと、笑われた。ふて腐れた様子が、小学校低学年の男の子のようだった。セーラー服を着ていなかったら、判らないかもしれない。

「説明は、小学校四、五年生で受けてきたわよね？」

頷く。その時も、そんな面倒臭そうな物は、一生いらなと思った。

「じゃ、改めて説明もしないけど…。生理痛、酷そうね？薬上げるから、飲んで暫く休んでいなさい。担任には私から伝えておくから。」

「

利知未は、目を剥く様にして顔を上げる。

「松田に、言うの！？」

「言わなきゃ仕方ないでしょう。」

「だって……。」

また、俯いてしまった。佐渡は小さく笑って、優しく言って聞かせる。

「恥かしいかもしれないけど、大丈夫よ。松田先生は保健体育の先生なんだし、高校生になるお嬢さんだって、いらっしやるんだから。」

「

「…そー言う問題かよ…？」

「そう言う問題じゃ無いかしら？…とにかく、薬飲んで。」

立ち上がり、棚から薬を出して手渡してくれた。水を汲んでくる。

「朝食は、食べてきてるわね？」

頷いて、水を受け取り、薬を飲んだ

ベッドへ横になると、ほんの二、三〇分ほどで眠ってしまった……。

次に目を覚ましたのは、どうやら二時間目と三時間目の、間の休み時間らしかった。閉められたカーテンの向こうから、聞き覚えのある声が、佐渡と話をしている。

「瀬川さんの様子は、どうですか？」

貴子の声だった。休み時間に、様子を見に来てくれた様だった。

「良く眠ってるわ。起きて大丈夫そうだったら、授業に出るか、お家へ帰るか、本人に確認して連絡します。」

「分かりました。……起こしちゃったら可哀想だから、私、このまま教室に戻ります。」

「そうね。来てくれた事、伝えておくわ。」

「はい。お願いします。失礼しました。」

戸の開く音がして、また新しい声が聞こえて来た。

「キャ！ごめんなさい！」

「おっと、ヘーキか？……お前、瀬川のクラスメートだな？」

今度は、櫛田の声だった。貴子呼び止めている。

学校でも有名なグループの、中でも有名な上級生に聞かれて、貴子は恐る恐る答えた。

「……はい、そうですけど……。」

「瀬川、大丈夫なのか？」

その言葉を聞いて、驚いた。

「えー？……ええ、はい。まだ、良く眠ってるって……。」

「そーか……。引き止めて悪かったな。」

「……いえ。」

素直に廊下を歩き出し掛けて、貴子は意を決し、振り向いた。

「あの、利知未……、瀬川さんと、どう言う……？」

保健室に入りかけていた上級生が、顔を向けた。左右の眉が、互い

違いに上下していた。…恐い顔だ。

しかし元々、気の強い貴子は、やや怯みながらも視線を外さない。次の瞬間、貴子はまたびっくりする。その恐い顔が、余り、作り馴れて無さそうな、不器用な笑顔を作ったのだ。

「ダチだよ。心配すんな。じゃーな。」

そう言つて、保健室に入つて行つた。貴子は啞然と見送つた。

「ヨーコちゃん！瀬川、まだ居るつて？」

気安く名前にちゃん付けで呼ばれて、机に向かつていた佐渡が振り向く。

「まだベッドは空かないわよ。タマには真面目に授業受けなさい。」直ぐ机に向かい直した。櫛田はノウノウと、隣の椅子に掛ける。背凭れを前に腕を寄せ、その上に頭を乗せる。

「これでも仲間内じゃ真面目なホーだぜ？オレ。」

「比べるレベルが低過ぎるのよ。まだ瀬川さんと比べてくれた方がマシね。」

「ヒッデー事ユーよな。ヨーコちゃんはさ。」

櫛田は、こんな事くらいで素直に教室へ戻るタマでは無い。授業開始のチャイムが鳴つた。

「ほら、三時間目が始まつたわ。戻りなさい。」

「ここ出たつて、オレが素直に教室行く訳ネーじゃん？」

「だから？」

「そのままフケて、街で補導されるよりは、マシなんじゃねーの？」佐渡は溜息をついた。確かにそれもあるので、こう行つた生徒を保健室から無理矢理に追い出すような事は、余りしない。彼等はまだ義務教育中の身だ。

「ダチの事が心配なんだけど？」

「…勝手になさい。」

「サンキュー。」

櫛田は椅子を立つて、利知未の寝ているベッド回りのカーテンを

開け、隣のベッドの端へ座った。

利知未は目を開いていた。腹の痛みは治まっていたが、頭はまだクラクラするようで、起き上がる事は出来なかった。

「目、覚めてたのか？…珍しいな、瀬川が本気で具合ワリーって？」  
ベッドの上で、仰向けになったまま、利知未が言う。

「だって、初めてだよ。」

「だろーな。…川中の奴ら、またお前、襲ったって？」

声を潜める。佐渡に聞かれると拙い。

「…五日くらい前にね。…また、ソロソロお友達つれて来やがった。」

「お前、ソロソロ、ヤバイんじゃないの？」

「…かもね。あれ以上増えられたら、厄介だ。」

小さな溜息をつく。その様子に、櫛田が言った。

「リーダーとナシつけてきた。…戦争だ。」

利知未が驚いた。

顔役ナンバー1の名前は確か、都筑 経一。利知未とも櫛田繋がりで顔見知りだ。無口で、良く分からない男だった。

利知未は余り好かれていないような気がして、なるべく自分からは近付かない様になっていた。

「マジかよ？だってあの人…、」

「実は意外と瀬川の事、気に入ってる見たいだぜ？…あーゆーヒトだからな、解らねーかも知れねーけど。…それにヤツ等、最近こっちのシマ荒らし過ぎだ。都筑も切れ掛けてんだよ。」

「…そうなのか？」

「ああ。ウチの生徒も最近、被害受けてるのが多いんだ。」

「…俺がアイツ、伸した所為かな…？」

不安になった。腹いせに同じ学校の生徒を狙う事だって、有得る。

「…って、ユー訳でもねーよ。今年入ってから目立ってたんだよ…。  
向こうの前の頭が卒業しちまってから、押さえが効かなくなってる

らしーぜ？」

「…なあ。」

「なんだ？」

「その戦争、俺も連れてってくれよ…？」

「…そー来ると思っただぜ。…一応、そのつもりだったんだけどな。」

「いつだ？」

「来週。こつちもメンバー集める必要あるからな。」

「そっか、分かった。」

来週なら、自分の体調も回復している筈だ。利知未は少しホッとした。

「…ところで、今日はかなりマズそうじゃねーか？」

櫛田が話しを変える。利知未は素直に頷いた。

「チヨイね、マズイ。」

櫛田がニヤリとして言った。

「ボディーガード、いらねーか？」

「…？」

「オレが無料で引き受けてやるぜ？」

利知未は小さく笑う。やっぱ、面白れーセンパイだ。そう思う。素直に、櫛田の申し出を受ける事にした。

「今週いっぱい、頼もーかな。」

「任せな。」

櫛田はそう言っで、軽くそっぽを向いて、付け足した。

「兵隊守るのも、隊長の勤めだからな…。」

利知未は気が付かない。櫛田が別の意味で、少し照れている事に

…。

「サンキュー、隊長。」

具合の悪いまま、少しだけ無理をして、笑って見せた。



櫛田は、あれから本当に一週間、利知未のボディガードとして下校時に付き添った。朝は、恐らく奴等も行動を起こさないだろうと言ふ事で、毎日放課後、保健室で待ち合わせた。

その間、奴等が現れたのは、一度だけだった。

利知未が保健室で休んだのは、木曜の事だった。その日は何事も無かった。仕掛けて来たのは、土曜の事だ。利知未は、まだ少し調子が戻ってこない。櫛田の喧嘩の実力は、中々の物だった。怪我也多いが、相手には倍から、三倍はやり返す。

利知未が合気道の技を駆使して戦うのに対して、櫛田の喧嘩は、そのもの、喧嘩だ。撲る、蹴る、張り倒す……。

利知未はいつも奴等と蔓んで来る女二人と、弱そうな奴、一人、二人を相手にすれば良かった。二人で八人の川中グループを倒した。櫛田が、利知未と一対一の時に負けたのは、女だと思って見縊っていた所為もあったようだ。

本人に言わせると、その見縊っていたと言ふ所から、自分の実力不足なんだと言ふ事になるらしい。だからあの時、潔く負けを認めた。

その日は櫛田を下宿に上げて、傷の当てをしてから帰って貰った。玲子は部屋におり、その姿を見なかった。里沙は不在だ。買い物に行くと言ふ旨の、メモが貼ってあった。

朝美が偶々、帰宅してきた時間と重なり、目を丸くして言った。

「何よ？随分、気合入った彼氏、連れてんじゃない？」

「彼氏とかじゃねーよ。学校のセンパイ。」

手当てをしながら、利知未が言った。櫛田はバツの悪そうな顔をして、視線を天井に向けている。

「へー、そう？ま、イーけど。里沙が見たら卒倒しちゃうかもね？」  
「買い物中だつてさ。」

「成る程、成る程。ま、ごゆっくり！」

部屋に向かつて行く。利知未は小さな声で吐き捨てた。

「何が、成る程、だよ。」

櫛田は何も言わなかった。

水曜の帰り道、櫛田が言った。

「時間、決めたぜ。」

「いつ、何処でヤルんだ？」

「土曜、十四時。廃工場跡。」

「ハイコージョー？そんなの何処にあった？」

「ウチの学校のもうちヨイ西。メンバーはオレやお前入れて、二十人弱って所か。」

二人は、河原沿いの道を歩いていた。

「ヤツ等、何人くらい集まんだろ……？」

「さーな。二、三十人って所じゃねーか？」

「向こうのが多いのか？」

「ソーユー連中の比率が、ウチより多いんだよ。」

櫛田の言葉に、利知未は少し、不安になる。比率が多いと言う事は、その中で伸し上がってくる実力の持ち主とは、どの程度の力量なのか……？そして、城西メンバーの、実力は……？

櫛田が、ニヤリと笑う。外見は本当に柄が悪く見える。普通の笑顔を作る事など、無さそうなタイプだ。

「心配すんな。こっちの実力は折り紙付だ。オレも中々ヤルと思わなかったか？」

確かに、言葉通りの実力はある。これでナンバー2と言うのだから、都筑は更にヤルのだろう。

「城西が結構、平和なのは、オレらグループが、代々かなりの実力

を持つて来てるからなんだぜ？…外の連中は、手を出せない。」

この辺りの中学は、危ない学校が多かった。利知未達が通う城西中学は、それでも比較的安全な学校だ。だが、その裏事情は知らなかった。

「ま、見てろよ。どの程度ヤルのか…。」

拳を手に当てて、パンと頼もしげな音を上げた。

それから二日間、櫛田は、もう大丈夫だと言う、利知未の言葉を無視して、問題の戦争の日まで、ボディガードを続けた。

「ウチの重要戦力だからな。」  
そう言っていた。

土曜日。学校は半日で終わる。

利知未は授業後、櫛田達のグループが集まる学校の駐輪場に向かった。

体育館の隣にある、使用頻度が少ないトイレで、ジーンズ姿に着替えてきていた。セーラー服の、やや短いスカートでは動き難い。

「よ、来たな！切り込み部隊！」

櫛田の次ぐらいに、利知未と良く言葉を交わすナンバー4が、最初に声を掛けて来た。田崎 真と言う、二年だ。

「俺は、切り込み部隊なのか？」

「櫛田と一緒に、始めに撲り込んでもらいたい。」

都筑が、重々しく告げる。

「何人になった？」

「二十三人。結構、猛者揃いだぜ。」

ナンバー3、やはり二年の橋田 了だ。

「心配すんな。オレが付いてるぜ。」

櫛田が、やっと声を掛けてくれた。利知未は少しホッとする。櫛田の、本当の強さを知ったからだ。確かに、強い。自分が勝てたのは、

奇跡だったのかも知れないと思っている。

その内にゾロゾロと、城西メンバーが集まって来た。柔道着姿の体格の良いヤツや、普段は顔役グループの影に隠れてしまうようなチンピラ紛いの格好をした奴もいる。女は利知未一人だった。一年生から三年生まで揃っている。その中に、苅谷の姿は無い。

苅谷は、利知未に投げ飛ばされ、櫛田に嘘がバレてから、大人しくなっていた。どうやら、キツイお仕置きを戴いたらしかった。

利知未は知らない。その時、櫛田が言い切った事を。

「瀬川はオレが惚れた女だ。二度と手え出すんじゃない！」  
そんな事を、言われていたとは。

「ソロソロ、時間だな。」

都筑が呟いて、立ち上がった。

「テメーら！！気合入れていけ！！特に二年！！今日の功労者に来年おれの跡を任すぞ！！！」

都筑の言葉に、全員が氣勢を上げた。利知未は、こんな世界を見た事は無かった。圧倒されてしまった。

後ろから背中を軽く押され、振り向いた。

「勇ましいだろ？」

櫛田がニヤリと、囁いた。

全員でゾロゾロと、十分ほど西へ向かった所に、廃工場が在った。

利知未はこの町に来て、まだ半年にもならない。この方向に来た事は無かった。川上メンバーが既に到着していた。

「良く逃げ出さなかったじゃねーか！？城西！！！」

今の頭と思われる、ひよろひよろと身長が高い男が甲高い声を出す。利知未はその声が気に入らなかつた。地面につばを吐く。

「それはこっちの台詞だ！またぞろ、随分、引き連れて来たモンだ

な！？」

櫛田が答える。都筑はどつしりと構えている。

『迫力負けだな、川中。』

利知未は心の中でそう思う。

確かに、三十人どころか、四十人以上もの頭数があるが、勢いは断然、城西が上だった。個人個人の實力も、格が違うような感じを受ける。一人ノルマ敵二人だ。問題は無さそうだった。

「川上！これは戦争だ！！負けたら二度とウチのシマ、荒らすんじゃないぞ……！！？」

低い、良く響く声で都筑が言った。向こうの頭は、既にやや及び腰だ。

「城西！テメーらが負けたら、大人しくシマー譲れよ?!」

「良いだろう。」

都筑の言葉に、櫛田が続けた。

「テメーらが負けたら、シマ譲れとは言わねーが……二度とウチの生徒に手えー出すんじゃないぞ！」

「良いだろう。」

暫く沈黙が続く。櫛田が軽く利知未に合図を寄越して、声を上げた。  
「……ソロソロ、おっぱじめよーぜ……！！」

「望む所だ……！」

相手の言葉が終わるか終わらないかの内に、利知未が飛出して行った。櫛田も直ぐに続く。川中の連中は、いきなり飛出してきた利知未に虚を付かれた。見た目は、他の城西メンバーの中では小さく、細い。非力そうにも見える。しかし、素早い。

利知未と櫛田が連中の中に飛び込み、利知未が慌てて襲ってくる奴等を合気道の技で交わしながら、倒して行く。櫛田は相変わらず、喧嘩拳で暴れまわる。櫛田の拳で一人目が吹っ飛んだのを合図に、城西メンバーが踊り出した！

雑魚がボロボロとヤラれて行く中、川中の頭が逃げ腰になった。利知未が早く、それに気付いた。

「櫛田センパイ！！！奴等の頭が！」

声を投げた。利知未よりも、その近くにいた櫛田が気付く。

「テメー！！逃がすか！！」

怒鳴って、丁度、櫛田に襲い掛かって来た奴の凶器、木刀を蹴り上げた！逃げ掛ける奴の足元に丁度良く飛んで行き、前の地面にぐさりと刺さった。変な悲鳴を上げて、そいつの腰が引ける。

「ヤルじゃん！」

襲い掛かる奴の攻撃を避け、受け流しながら利知未が言った。

「当然だ！！」

櫛田も、木刀を蹴り飛ばされた奴の首筋を、組んだ両手で撲りつける。巨体が崩れる。腰が引けていた川中リーダーの脇に、何時の間にか城西二年ナンバー3、橋田が回り込んでいた。

「ゴシューショー様！！」

叫んで、回し蹴りを奴の腹に叩き込んだ！：奴はあっけなく、崩れた。

「勝負あり！！」

都筑が叫ぶ。城西メンバーは、その時、自分に襲いかかって来ていたヤツ等を一撃、二撃で倒すと、引き上げの体制になる。川中メンバーの生き残りは、ホウホウの体で逃げ出した。

結局、城西の大將が出て行く必要も無く、戦争はあっけなく終わった。

都筑は殆ど動かず、どうにかこうにか乱闘を抜けて近付いてきた、腕に覚えがあるような連中を、蠅を払う様に軽くいなして終わった。

全体の所用時間、一時間弱。恐らく、四十分ほど。

城西メンバーは、殆ど大きな怪我も無く、大体平均一人で二人ずつを倒してしまった。櫛田と利知未は二人で合計十二人程度は引き受けた。

櫛田が七人、利知未が五人。因みに二年ナンバー3・4は合計で

七人。

その戦争後、利知身の回りにも、一応の平和が訪れた。

顔役メンバーとも全体的に親しくなり、二年の田崎の影響でギタ―を始め、橋田の影響でバイクに興味を持ち始めた。

櫛田が利知未の事を、そう言う意味で気に入っている事には、全く気が付かなかった。まだまだ、恋愛には興味を持ってない利知未だった。

櫛田も敢えて、そんな雰囲気を利用未に求め様とはしなかった。普段はやっぱり弟分、否、妹分としての利知未を見守る、いい兄貴だ。

「センパイ！今度、美味しい珈琲、飲ませる店、連れてってやるよ。」  
相変わらず保健室で二人、サボリ仲間だ。

「お前、珈琲党か？生意気だな。」

隣のベッドで、両腕枕をした櫛田が言った。

「生意気って事、ねーだろ？それでも味には煩いんだぜ？」

利知未も隣のベッドで、寝転がっていた。

「じゃー今度、何か作って持って来いよ。調理実習やってんだろ？」

「いーぜ。こう見えても中々ヤルんだ。吼え面かかせてやるよ。」

「へー、そいつは楽しみだ。ヨーコちゃんに胃薬用意して貰わねーと？」

利知未が膨れた。

「何だよ、それ！失礼なヤツだな。」

「上級生に向かって『失礼なヤツ』って事、あるかあ？普通。」

「どーせ、俺は普通じゃネ かな。」

アツカンベーと、舌を出した利知未の顔を、楽しげに眺めていた。

「二人とも！相変わらず、元気にしてるわね…？」

カーテンを勢い良く開け、仁王立ちをする佐渡養護教員、登場だ。

二人は同時に首を竦め、揃って舌を小さく出した。

「瀬川さん、随分と貧血も良くなった様ね？授業、戻れそうかしら…？」

三日間、言われ続けている。

十月。利知未はまた、めでたく？大体、一月の間隔で持つて、二度目の生理がやって来ていた。先月、初めて来た時に比べて、随分と楽になっていた。それでも貧血は襲ってくる。

「まだ無理です。」

全く無理そうに見えなかった。だが、佐渡も段々と、この状況に慣れ始めてしまった。校外で補導されるよりはマシなのも確かだ。

「…そう。で、櫛田君はまだ、お腹痛いのかしら…？」

「死にそう。」

「随分顔色の良い、病人ね？…あなた達、いい加減にしなさい！」  
櫛田の布団を剥いでした。

「あなた達つての、酷くねー？ヨーコさん。一応、俺は貧血してんだぜ？」

「あら、そうだったわね？じゃ、栄養バランスについて、もう一回説明してあげるわ。」

「げ、またあー！？」

「瀬川さんが確りと納得して、自分の体のコントロールがちゃんと出来る様になるまで、何度だってしてあげるわよ…？」

ニッコリと、笑った。利知未は元気に飛び起きた。

「ア、良くなったよ！ありがと、ヨーコさん！俺、教室戻れそうだし！」

さっさとベッドを下りて、カーテンを大きく開いた。

「じゃ、センパイ、お大事に！」

軽く手を上げ、歩いて行く。

「おー。またな！」

櫛田も両腕枕の片腕を外して、軽く手を上げて見送った。

「さー、櫛田君には何の説明が良いかしら…？」



佐渡が、ベッドの櫛田をニツコリとして見下ろした。

「…オレも、タマには真面目にジユギョー受けに行くかな?！」

櫛田も飛び起き、少し慌てて保健室から逃げ出した。

勝ち誇った笑顔の佐渡が、後姿を見送った。

その週の調理実習で、親子丼と吸い物を作った。利知未は用意の水筒と、弁当箱に一人分を詰めていた。

「誰に持つてくの?」

貴子が覗き込む。利知未はさらりと答えた。

「上級生にダチがいるんだよ。」

貴子は先月、保健室の外で擦れ違った、強面の先輩を思い出す。

「…ね、利知未…。もしかして、目がこーんな垂れた、眉毛を細くしてるリーゼントで短い学生服、着てる人の事…?」

「良く知ってるな。ソーだよ。」

「…持つてく時、あたしも一緒に行って見て良い…?」

恐る恐る聞いて来た。利知未は、意外と言う顔をする。

「恐くねーのか?」

「恐いけど、興味もあるんだもん!」

軽く笑ってしまう。

「いーよ。でも放課後だぜ?」

「良いよ。チョットくらい部活遅れたって!」

「分かった。」

そう言う事で、その日の放課後、あのグループの溜まり場になっている、怪しげな応援団部室に、二人で尋ねて行った。

「応援団の人だったの?!」

「それ以外に何が出来るよ?」

「…ソーかも。」

ノックもしないでガラリと、ドアを開けた。

「よ！櫛田センパイいるか？」

二年の田崎が振り向いて、笑顔を見せた。実は、彼はこのメンバーの中では意外と良い顔の持ち主だった。貴子が一瞬、見とれてしまった。

「奥にいるぜ。何、持って来たんだよ？」

「調理実習で作った親子丼。人の味覚信用してなかったから、思い知らせてやろうと思ったんだ。」

「あ、成る程。呼んでやるよ。」

田崎が奥に声を掛けると、櫛田がのそりと現れた。

「持って来てやったぜ？」

「待ってたぜ。胃薬もアンのか？」

櫛田がニヤリと笑う。

「そう言う事いうんなら、別のヤツに食わせても構わないぜ？」

「膨れるなよ？じゃ、味見してやるか！」

強面の顔が、やや嬉しそうな顔になる。利知末も自信いっぱいに笑った。

ストックしてあった割り箸を、口と片手で割って、親子丼を食った。

意外と美味かった。吸い物も口にする。

「どーだよ？まだ胃薬、いるかよ？」

利知末は腕を組んで、自慢げに胸を反らした。

「意外な特技だな…。悪かったな。見直したぜ？」

見た事の無い笑顔を見せられて、利知末も少し照れ臭かった。

田崎はクスクスと、笑いを噛み殺していた。櫛田の問題発言は、応援団部の中では全員が知っていた。

貴子は黙ったまま、田崎を見ていた。一目ぼれだった。

暫らくして、貴子は利知末に声を掛けられて、慌てて部活へ向かった。

利知未はそのまま部室に居残って、メンバーが集まるまで、田崎からギターを教わり、一応の活動が始まった頃に、帰る事にした。声を出す訓練と、旗持ちの訓練が主だ。見ていても詰らない。帰り際に軽く手を振るようにして挨拶をすると、櫛田が軽く手を上げて答えてくれたのだった。

#### 四

十一月に入った。学校では、十月に体育祭も終わっており、月末から始まる期末テストにも、まだ間がある。ある意味、呑気な空気が流れている時期だ。

その呑気な空気の中、文化発表会と言う、利知未にとってはただ、面倒臭いだけの恒例行事が行われた。

体育祭後の利知未は、その運動神経の良さが校内にバレて、運動部からの勧誘攻撃を受けてしまった。

その隠れ蓑として、応援団部のマネージャーと言う立場に、名前だけ登録した。だからと言って何をする訳でも無い。強いて言うなら買出し部隊だ。掃除や洗濯などは一年団員の仕事だった。

とは言え、この応援団部と言うのは、何かの大会前しか真面目に活動をする事は無い。基本的には二年三年の、実力者数名の溜まり場だ。

櫛田などは、保健室にいない時は大体、ここで授業をサボっている。

前日に校内発表を終えた、文化発表会の本番。  
今日は父兄や、近隣の住人達が、学校に招待されている。  
城西中学では、毎年バザーも行っており、各家庭から贈答品などで頂いた不用品や、生徒が作った袋物や雑巾等も即売している。  
教室は臨時の展示室になっており、発表の無い生徒も全員が、部活単位やクラスのグループ単位で、何らかの係りを持っていた。  
応援団部は毎年この日、校内警備の役目を仰せつかっている。  
したがって、利知末も一応、部室に入り浸っていた。

何となく暇で、机に頬杖を付いていた。思いついて利知末が言った。

「田崎センパイ、ギター貸してくれよ？」

部室で、マツタリと寛いでいる田崎に声を掛ける。

「イーゼ。チョイ待ってな。」

ダラリと座っていた椅子から立ち上がり、田崎が自分のロッカーから、一本のギターを出して来た。利知末に渡してくれる。

「サンキュ！」

受け取り、バンドを肩から掛けて、ちよつと弾いて見た。

「中々、様に成ってきたじゃん？簡単な曲なら弾けるんじゃないの。」

「やって見た事、無いよ？まだコードを覚えたくらいだ。」

顔を上げて、利知末が言う。

「コード覚えてりや弾けるよ。試しにこれ、やってみな？」

そう言つて田崎は、二枚の楽譜を貸してくれた。利知末は早速、チャレンジして見る。

何回か突っかかりながらも、利知末は三十分も掛けて、その曲を弾けるようになった。簡単な物だったが、どうやら飲み込みが早い様だった。

「お前、イー勘してんな！？」

少年誌を手に取り、眺めながら聞いていた田崎が、目を上げた。

「そーか…？自分じゃ良く解ンねーよ？」

「タイしたモンだよ。その楽譜、やるよ。」

「貰ってつても、ギター持ってねーよ。」

田崎がニコリとした。

「そのギター、貸しといてやるよ。」

「いーのか！？」

利知未が目丸くして驚く。

「実は、新しいの買ったんだよ。暫くそっち使うから、好きなだけ練習して来いよ。」

「マジ！？」

「大マジ。」

「ヤッター！」

喜んで、ライブ中のギタリストよろしく飛び上がってギターを鳴らした。

「お、決まった！」

田崎も面白そうに、口笛を吹いて寄越す。部室の戸が開く。

「何、遊んでんだ！？田崎、見回り時間だぞ！」

櫛田だった。

「ウイーっす！一年、正門横っすか？」

「そうだ。大川と野田、連れて一周して来い。」

「了解！瀬川、どうする、ついて来てみるか？」

「イイ。ギター弾いてる。」

「ソーか？」

チラリと、櫛田を見た。櫛田が両眉を上下にして、軽く睨みを効かせた。

肩を竦めて、田崎は部室を出て行った。

『櫛田さん、マジなのかな…？』

利知未を惚れた女だと言って、苅谷に制裁を加えた時の事を思った。

その時、部室にはナンバー1から4までの実力者と、二人の三年がいた。部室の外では、一年から二年までの部員が勢揃いして、聞き耳を立てて様子を伺っていた。それで、部内では暗黙の了解が生まれていた。

即ち、【瀬川に手を出すな！他のヤツ等にも手を出させるな！】だ。

そのお蔭で、どうしても校内で目立ちがちな利知未が、大した面倒も感じずに、平穏な生活が出来ている。しかし、利知未本人は知らない筈だ。

『ま、良いけどな。…したら来年、オレ達が睨み効かせないと…。』  
来年度、副団長ほぼ確定の現実力ナンバー4としては、気を引き締めて掛からなければならぬ仕事になりそうだった。

部室では、利知未が楽譜に集中している様子を、櫛田が机に片頬杖を付いて眺めていた。

「…お前、橋田からはバイク、弄らせて貰ってるんだって？」

「ああ。バイクも面白いよ。センパイは興味ネーの？」

楽譜から顔を上げずに、利知未が答える。

「オレかあ？…オレは、バイクより喧嘩だな。」

「ハハハ！らしーじゃん！？」

顔を上げて笑う。その笑顔を眺めるのは、楽しい事だった。

利知未に女を感じる事は、先ず殆ど無い。苅谷の一件で言った言葉は、どの程度のものかと言えば、気に入った後輩の今後を、平和に過ごさせてやりたいと言う思いが、強いくらいだった。

では今、どう思っているかと言えば…。櫛田自身、微妙な感じだった。

可愛いヤツとは、思う。保護してやらなきゃならない相手だとも思う。

しかし、自分は来年の春には卒業してしまう。その後の事も心配だ。偶には、利知未を見てどきりとする事もある。保健室で本気で弱っていた利知未を見た時や、何かに不安を感じている時の利知未。怪我の手当ての時、間近にその顔を見る事に成った時。

近くで見ると、利知未は綺麗な顔をしていた。ちゃんと女の子らしく見える綺麗さだ。普段は、その表情や言動から、どうしても少年っぽく見られ易いが、意外と美味しい飯を作ることが出来ると言う、女の子らしい特技も持っていたりする。

『飽きない女だ。』

最近、そんな風に思っている。無邪気な様子も、彼女の事を知るほど、可愛らしく見えてくる。

『やっぱ、マジ惚れなのか…？』

最近、櫛田はそんな風に感じ始めていた。

利知未が曲を完奏した。ニコリと、快心の笑みを見せた。

櫛田は眉を上げ、その器用さに感心した。

利知未はその後、曲を完全に覚えるまで繰り返し練習した。

田崎が見回りを終えて戻って来るまで、約二時間。戻った途端、完璧に演奏をして見せた利知未に、本気で驚き、新しい楽譜をくれた。

「今度はチョイ、時間掛かりそうだ。」

ニコリとして、嬉しそうに楽譜を鞆へ仕舞う。その利知未に櫛田が聞く。

「もう今日は、やらねーのか？」

「根詰め過ぎると、楽しい事も楽しく無くなっちゃうだろう？だから今日は終わり！田崎センパイ、橋田センパイ何処にいるんだ？」

「さっきは、正門横で一年監視してたけど？」

「サンキュー。チョイ、行ってくる！」

ギターと鞆を部室へ置いたまま、楽しそうに部屋を出て行った。

「忙しいヤツだ…。」  
見送った櫛田が呟いた。

正門横で、一年の団員に声をかけた。

「あれ、橋田センパイは？」

下端団員が椅子から立ち、姿勢を正して答えた。

「例の、駐輪所っす！」

「ソーか…。サンキュ。…」

軽く笑顔を作って、手を上げて利知未が正門を出て行った。利知未が門の影に消えるまで、団員は直立不動だ。

何故そうなるのか、本当の理由を利知未は知らない。学年順、九月の戦争功績者順で、部内で格付けされている、と言う事になっていた。

本当の理由は『実力ナンバー2・副団長の女』と意識付けられているからだ。利知未と馴れ馴れしく口を聞く事を許されているのは、部内では実力者四人と、三年生だけとなっていた。

田崎の来年度の懸念は、その辺りにあった。今の二年が、櫛田が卒業した後に、どう言った態度を取るのかが不安要素だ。

利知未は、そんな事は全く知らない…。

例の駐輪所というのは、学校の駐輪所ではなく、近所にある学習ホールの駐輪所の事だ。

ここは中学校だ。どんな理由があろうとも、その駐輪所にバイクを止められる筈が無い。そんな物が見つかったら、途端に没収だ。下手をすれば警察沙汰になる。

「橋田センパイ！バイク見せてくれよ？」

いきなり後ろから現れた利知未に、橋田は一瞬驚いた。

「…何だ、瀬川か…。先公が来たかと思った。」



「そんなん、トックにバレてンじゃネーの？」

笑いながら、利知未が言う。

「証拠掴まれないや、問題ネーだろ？」

「ソーなのか？」

「ソーなんだよ。で、整備、見に来たのか？」

「ああ。バイクの構造って、面白レーよな！」

「イーぜ、勝手に見てな。…先公が来たら言えよ？」

「了解！」

無邪気な顔をして、橋田の作業を見学し始めた。途中途中で質問が入り、橋田は作業を続けながら、説明をしてくれる。利知未は物覚えが良く、一度聞いた事は大体覚えていた。最近はずっと突っ込んだ質問も飛出してくるので、橋田は自分でも勉強を始めた。

「俺は将来、レースのパドックに入りたいんだ。」

そんな事を言っていたくらい、バイクが好きな橋田だった。

利知未の質問に答える為に、勉強を始めたくらいだ。邪魔者扱いする事は無い。返って感謝しているくらいだった。

一通りの整備を終え、バイクに跨ってエンジンを回した。そのまま、利知未を振り向いて聞いた。

「瀬川は乗らネーのか？」

「興味はあるけど、無免だろ！？」

「そんなん言ったら、俺だって無免じゃねーか？」

「それもソーだ。」

「背、あるから足もつくだろ？ここでチョイ乗って見ないか？」

駐車場は広く、今は止めてある車も殆ど無かった。

「面白ソーだな…。」

利知未の呟きを聞き逃さないで、橋田が言った。

「教えてやるぜ？」

暫し考えて、ニヤリと笑った。

「じゃ、教えてくれよ。」

「任せな！」

橋田は免許を取りに行くと最初に教えられる、バイクの引き回しからやらせた。非力そうに見える利知未が、どの程度、出来そうか判断する為だ。利知未は何をするにも飲み込みが早く、引き回し、引起しを直ぐに覚えてしまった。バイクのサイズは二〇〇だ。

教習所で中型二輪の教習に使うのは四〇〇なので、いくらか軽いには軽い、中学一年女子が引回すのは、やや骨が折れる筈だった。橋田自身は体格も意外と良く、背も一七〇センチ近い。筋肉もそこそこ付いている。利知未の細い体からは、思いも寄らない強い力を見て取り、口笛を吹いた。

「中々、ヤルじゃネーか？そんなくらい出来りゃ、エンジン回しても平気そうだな。」

納得して、利知未を運転席に座らせてくれた。始めはスタンドを掛け、タイヤが浮いた状態でエンジン始動、ギアチェンジ、ブレーキの掛け方を説明した。利知未はそれも直ぐに飲み込んでしまった。

「教習所行っても、この順番で覚えるんだぜ？兄貴がやってたんだ。」

「兄貴がいるのか？」

「ああ。東城高校にいるぜ。今二年。」

東城高校と言えば、朝美が通う高校だった。学年も同じらしい。

帰ったら朝美に聞いて見ようと思い、興味を持った。

「やっぱ、気合入ってンのか？」

「応援団のOBだ。」

「マジ！？」

「元副団。俺の喧嘩は兄貴仕込みだ。」

軽く片目を瞑って見せる。

橋田は一重瞼で、やや細い釣り目で、眉無しだ。元々は濃い眉の持ち主で、箔を付ける為、自分で剃り落として入学をして来たぐらゐの奴だった。頭にも剃りが入っている。ウイंक等すると、少し異質な雰囲気になる。…気はイイ奴だ。

「チヨイ、走らせるか？」

「出来ンのかな…？」

少し不安そうな利知未に、気のイイ笑顔を見せた。

「ローギアからセカンドくらいまで回して、止めてみな。あつちの端まで大体三十メートルくらいあるから、スピード十〜二十キロで走らせれば、平気だよ。ブレーキ踏んで、速度が落ちたら、左のクラッチな？」

利知未は小声で反復し、スタンドを掛けたまま、もう一度、動作を確認した。

「やって見る。」

自分で納得して、スタンドを外した。イザ、スタート！

始めは、恐る恐るアクセルを回す。バランスを取るのは直ぐに慣れた。言われた通りセカンドまで上げながら、速度は二十キロ以下で走らせた。

たった、それだけだ。直ぐに止めてエンストを起こしてしまったが、物凄く興奮し、そして気持ち良かった。

この瞬間から、利知未はバイクのファンになったのだった。

「エンスト起こしちゃった！」

アチャー、と言うような利知未の表情に、笑ってしまう。

「ヘーキだよ！そんなくらいで壊れやシネーから！」

笑いながら、大声で言った。

「笑う事ネーだろ！？」

利知未の剥れ声が飛んで来た。更に笑ってしまった。

「そっちから走らせて来い！無理しネーで、降りて向き変えろよ！？」

「分かった！！」

元気に答えて、引回して向きを変えたバイクに乗り直し、利知未がこちらに戻ってくる。その表情は、生き生きしていた。

『俺が、瀬川のこんな顔見たって言ったら、櫛田さんに張り倒されるかあ?!』

橋田は笑いながら、心の中ではそう思っていた。

現実力ナンバー3と言う事は、このまま行けば来年度の団長は、自分が勤める事になる。ややプレッシャーもあるが、名譽な事だ。来年の団長・副団長に課せられるだろう仕事の中、利知未を取り巻く環境整備は、橋田にとっても少々、悩み所だった。

しかし橋田と田崎は、利知未の事は気に入っている。

自分達の影響で、ギターとバイクを始めた後輩だ。喧嘩も強い。変な話したが、校内仕切り屋としての、仕事の足手纏いになる心配だけは無さそうな女だ。無邪気な様子も、可愛いと言えない事はない。い。

城西中・応援団の仕来りとして、団長・副団長の女は、それが下級生ならキツチリと守って行く事も、一つの決まり事だった。過去にも、こういう例は二、三回あった事だった、らしい。

橋田も、伝え聞いた事なので、定かとは言い難いが。

それならそれで、気合を入れ直そうと、橋田は思っていた。

橋田が一年の時、その兄貴に良く面倒を見て貰っていたと言う事で、櫛田は義理堅く、弟である了の面倒も、良く見てくれた。その恩返しの意味もある。

『ま、義理はハタサネーと、男が廢るよな。』

バイクに跨り、無邪気な笑顔を見せている利知未を眺め見て、改めて心の中で呟いていた。

この年の文化祭は、応援団部員が隅々まで目を光らせていた事が効を奏して、無事に終わる事が出来た。

部活の三年は、ここで引退と言う事になる。応援団部も一応、形はそうなるが、影の仕事の部分では、現三年も卒業までは引退できない。

部活動としての権限譲渡のみ、翌週の頭に行われた。

団長、副団長の鉢巻と白手・派手な襷を、新団長・副団長が譲り受ける。

城西中・応援団の旗持ちは、毎年二年の仕事だ。その為に、一年の時から、その候補には、肉体訓練と、練習が義務付けられて来た。その譲渡式は伝統となっており、その中の行事として、三年から後輩へ、新団長率いる新応援団から三年への、エール交換を行う。

これが、広い運動場の端と端とで行われる物で、旗持ちなどは式典場所である屋上から延々、重い団旗を掲げ歩く事になる。

運動部の生徒も、この恒例行事は楽しみにしているのだった。

新団長・副団長は、予定通りに団長・橋田了、副団・田崎真で決定した。利知末もマネージャーとして、譲渡式に参加した。そしてこの応援団の、格好良い所を見つける事が出来た。

その時、都筑・櫛田・橋田・田崎の四人を、改めて見直したのだった。

## 五

十一月末から、十二月頭に掛けての期末テストも、無事終わった。利知末は二学期、あれだけのサボりとヤンチャを繰り返して来たにも関わらず、相変わらず学年トップクラスの成績を収めていた。

医科大学に通う秀才の長兄・裕一が、昔から良く利知末の勉強を見てくれていた事、利知末本人が意外と物覚えが良く、しかも何をやっても器用にこなす性格であった事が、今の利知末の成績を培っ

た。

その分、やや面倒臭がりな性格に、育ってしまった。

当時の通知表の評価は、偏差値判定が主だった。為、教師から見れば、本当だったら成績が余り良くななくても、真面目に頑張る生徒に良い数字を与えてあげたい所だが、涙を飲んで、利知未の様な生徒に、五段階評価の5をつける事に成ってしまう。

利知未の成績は、そんな訳で意外と良い。ただ、美術や家庭科など、提出された作品を評価する事で数字をつける教科は、いつも、1、2の最低ラインをさ迷う事になる。

調理実習は良くても、裁縫実習で、割烹着やパジャマを作ったりするのは大嫌いだ。美術も彩色をいい加減に仕上げ、作品を未完成のまま、提出してしまう。期末テストには、その教科もペーパーテストがあるが、基本的に、テストの点数は、参考までにしか評価されない。

一学期に引き続き、里沙は、利知未の成績表を見て呆れる。利知未の性格が何て良く現れている数字の並びだ。判り易い…。

更に学校からの通信欄も、頭が痛い内容だった。

終業式の日。

相変わらず応援団部室は、溜まり場になっていた。

利知未はその日も、櫛田や都筑、新団長・橋田、副団長・田崎など適当に遊んで、夕方四時頃に帰宅した。

帰宅した途端、里沙に呼ばれてリビングへ入った。

ソファに向かい合って座った里沙が、小さな溜息を漏らす。

「…あなたって子は…」

「何だよ、落としてネーじゃん？」

肘掛に片頬杖を突き、そっぽを向いている利知未が、惚けた顔をしている。

「そう言う問題じゃありません！…通信欄、読んでいるわよね？」  
滅多に怒らない里沙も、流石に頭を抱えてしまっている。

「何々？『非常に元気が良く、一部の生徒から良く慕われている様ですが、授業への出席率に問題があります。』成る程『生活態度も一学期に比べ、改善されてきましたが…』松田、誉めてくれてんじゃない？」

「その先を、良く読んで貰えるかしら…？」

里沙の笑顔が引き攣っている。珍しい。しかし、利知未には面白い。  
「えー、『危険と思われる行動も多く、怪我也多いようです。言葉使い等もう少し改善し、落ち着いた行動が出来るよう、ご家庭でも指導をお願い致します…』。だってさ。タイした事、書かれてネーじゃん。」

「貴女の事を、良く見て下さっている様ね…？文章は柔らかくなっているけど、『危険と思われる行動も多く、怪我也多いようです。』太字で下線まで入っているわ…。どう言う事が、想像できない貴女じゃないでしょう…？」

九月の戦争は、学校にも知れ渡っている事だった。メンバーも大体、把握されているらしい。通報者がいたのだ。恐らく、川中のどいつかが腹癒せでやった事だろうと、応援団の有力者達も言っていた。

「だから？」

利知未は、『我、関せず』と云わんばかりの呑気な態度だ。

「ご家族に、何て説明を差し上げれば良いの…？」

里沙も肘掛に、軽く頬杖を付いてしまった。また、溜息一つ。

「イーよ。何にも言わなくて。」

サラリと言い切る。

「そー言う事で、手紙もいらないから。ンじゃ。」

通知表をテーブルの上から持ち上げ、鞆に仕舞った。そしてソファ

から立ち上がり、さつさとリビングを出て行ってしまう。

その、他人事のような態度に呆れ、里沙はつい、そのまま利知未を見送ってしまった。

年末の二十九日から、年明け一月三日までの、五泊六日。利知未は、裕一のアパートへ行く事になっていた。

その前後は、裕一のアルバイトが入っている。優も今回は三十一日から一月三日の三泊四日で泊まりに来る事になっていた。嬉しいが反面、一つ気懸かりもあった。

十二月に入ってから生理が、まだ来ていなかった。一週間以上遅れている。初潮を迎えたばかりの時期には、良くある事だと佐渡が言っていたが、もし裕一の所への宿泊中に来たら、やはり嫌な感じだ。

『遅れツイデに来年まで来なきゃイーのに……。』

利知未は今、そんな事を思っていた。

二十九日までの、およそ五日間。利知未は休み明けに提出物がある教科の、全体から三分の二程の勉強を、さつさと終わらせてしまった。

裕一の所でゆっくりと過ごしたい為だ。その間、偶にはアダムにも顔を出したりしていた。

二十九日、朝。下宿を出た利知未は、裕一のアパートへ向かう電車の中で、急に貧血に襲われた。

『…ヤナ予感するな……。』

つり革に体重を預け、上半身を折るようにして立つ。近くの席は空いていたが、座ると返って、拙い事になりそうだと思って立っていた。そして下車予定駅の一つ前の駅で、一度トイレに降りた。

個室に入り、確認した。まだ汚れてはいない。それには安心する。



『…やっぱ、面倒臭。…アレ、使おう。』

顰めていた顔が、何かひらめいたような表情に変わる。

バックの底の方をごそごと探り、ある物を出した。

『こっちの方が、まだマシだ。』

そう思う。前回、三回目の生理が来た時に、初めて使って見た。元々、じっとしている事が少ない利知未にとっては、丁度良い道具だった。

始めはやはり戸惑ったが、慣れて来ると調子が良い。ズレて漏れてしまう心配も無いし、風呂にも入れる。トイレの度に換えなくても良いので、荷物もコンパクトに納まる。

慣れた様子で処置を済ませ、バッグの底に仕舞い直して、トイレを出た。次の電車に乗って、裕一のアパートへ向かって行った。

この夏、裕一の所へ泊まりに行った時には、まだ初潮も無く、素直に無邪気なままで、兄と一組の布団に入り、眠った。

里沙も、保健室の佐渡も、『子供を作る事が出来る身体に成った事は、良い事だけど、今まで以上に気を付けなければいけない事が出来たのだから、これからは責任を持って、注意して行動しなければいけない。』と、口を揃えて言っていた。

何かがある訳は絶対無いが、今夜、夏のように一組の布団に入るのは、やはり何となく、してはいけない事のような気がして来ていた。

利知未の表情は、再び浮かない物になっていた。

『…あーあ…。女って、面倒臭…。』

溜息をついた時、電車が下車予定の駅に、タイミング良く到着した。

裕一は今日も、駅まで利知未を迎えに来てくれていた。

「お前、顔色悪いな。大丈夫か？」

開口一番、気遣わしげな言葉を掛けられ、利知未は無理に笑顔を作る。

「そーか？元氣だぜ。裕兄こそ、何か疲れてんじやネーの？」

「気の所為だよ。…さてと、お前が、どのくらい料理、出来るようになったて来たか、楽しみだ。今夜は何を作ってくれるんだ？」

裕一も笑顔を作り、話しながら歩き出した。

「優兄が来たら、鍋やりたいんだよな。どうせ、お節料理なんかはまだ作れネーし。…来年もまだ無理かな…？」

自分が覚えてきた料理のレパートリーと、それを覚えるまでの期間を考え合わせ、呟いた。

「お節料理かあ…。おばあさん、毎年作ってくれたな…。」

「うん、そーだった。でもさ、何でお節って甘いの多いんだ？俺、煮物や数の子くらいしか、美味いって思わなかったぜ？」

ちよっと、不服そうな顔をする利知未に笑えた。利知未と話をしていると、いつも笑わせて貰える。

素直なのか、捻くれ者なのか？子供なのか、大人なのか？？利知未は、様々な両極端な性質を併せ持っている。ある意味、凄く個性的な性格だ。

「俺も良く解らない。どうしてだろーな？」

「寒露煮くらいなら食えるンだけだな…。今夜の飯、酢豚とか食いたく無い？裕兄。」

話をクルリと戻して、利知未が裕一の顔を見る。反応を見たい。

「作れるようになったのか？！」

嬉しいのと、驚いたのと、両方ない混ぜになった様な顔をした。利知未はやや満足そうに、へへっと笑う。

「里沙に教わって来た。裕兄、好物だったよな？」

「ああ。…優は、苦手みたいだったな。」

「だから、今夜か明日って思った。大晦日は蕎麦作るだろ？で、優兄が来たら、正月は鍋も良いかなって、思ったんだ。」

「良いな。楽しみだよ。」

嬉しそうな笑顔で、利知未を見る。利知未は少し照れた。顔を前に向けて、照れ臭い表情を隠す。

「明日は、調理実習でやった親子丼でも作るよ。」

そう言えば、と、櫛田の事を思い出した。

『見直したって言われたよな。あン時…。』

また、少し照れ臭いような気分が増した。

櫛田の事は、裕一とも、優とも、また違ったタイプの良い兄貴だと思っっている。応援団部の実力者達の前では、兄貴という様な気分になってつい、実兄達の前にいる時と同じ、素の自分に戻ってしまう。それはそれで楽しい。

最近は学校に行くのも、前ほど詰らなく無くなっていた。

裕一は、何かを思い出した様な妹の横顔に、夏に会った時より、やや大人びた雰囲気を感じた。ちゃんと女の子らしく、成長して来ているような気がする。喜ばしい事ではある。…言葉使いは、相変わらずだが…。

アパートへ着き、昼食を簡単に済ませ、裕一は利知未の通知表を見せて貰った。本当は余り見せなくなかったが、ここでは裕一が親替りだ。渋々とバックから出して来た、妹の様子を見て、少し頬が緩む。ざっと目を通して、裕一が言った。

「随分、出し難そうにしていたから、てっきり成績が落ちたのかと思っただよ。…相変わらずな数字だな。」

口角を下げ気味にして、情けないような笑顔を見せる。

「通信欄も相変わらずだな。けど、授業への出席率に問題があるって、お前、学校で何してるんだ？」

「…遊んでたりして。」

利知未は、視線を天井に反らして、小さく舌を出している。

実際、最近は保健室へ行くよりも、応援団部室で時間を潰している事の方が多いくらいだった。そこに行けば、誰かしらがいた。

特に良く顔を合わせるのは、櫛田と橋田だった。この二人、応援団の先輩・後輩関係の中でも、特に仲が良い。

そこから偶に、学校を抜け出して、橋田のバイクに乗せて貰ったり、櫛田と三人でつるんで、街中へ出掛けたりしている。そんな時、利知未は必ず私服に着替えていた。団部の二人は、揃って短い学ランのまま、気にもしないで出掛けて行く。

適当に遊んでから部室へ戻り、制服に着替え直して、午後の授業だけ受けに行ったりもしていた。

「…まあ、問題行動が多いのは、昔からだっただけだな…。」

裕一は呆れて、里沙ご同様に溜息をついた。

「それより裕兄。買い物、行こうよ！…それとも、勉強してるか？」  
「店、解るのか？」

「こないだ来た時に、大体覚えたよ？だから、金だけくれたら、俺が買い物済ませてくるけど？」

説教に入る前に、逃げ出すつもりだ。裕一に勉強をする時間をあげたいのも本音だ。トイレにも行きたかった。

「折角だから、そうして貰おうか？…続きは夜に、たっぷり話しましょうか？」

逃げたがっている事など、直ぐに感付く。ニツコリと言った裕一の笑顔を、利知未は冷や汗を流しながら見た。…裕兄には敵わない…。

裕一から金を受け取り、急いでアパートを出て行った。

利知未が買い物へ出掛け、少し時間を潰してから戻り、夕食の準備をしている間、裕一は、休み明けに提出期限が来るレポートを纏めていた。

妹の心遣いは有難い。実際、冬休み中のバイトがない日を、弟妹との時間に充てており、レポートを書く時間は、睡眠時間を削って作っていた。利知未の『疲れてんじゃネーの？』の一言は、的を射

ていた。

夕食を作り終え、利知未が、裕一の様子を覗きに来了。

「裕兄、切り良かったら、飯にしょーぜ？」

「ン？ああ、出来たのか？…良い匂いがするな…。楽しみだ。」  
振り向いてニコリと、笑顔を作った。

『利知未のお蔭で、今夜はちゃんと眠れそうだな…。』

心の中で呟いた。立ち上がって、座卓を用意した。

食事の途中で、利知未が箸を口の端に咥えて、呟く様に聞く。

「な、布団、二組、敷けるよな？」

「座卓、片付ければ平気だよ。」

裕一は、利知未がまた、同じ布団に入りたがるのでは無いかと思っていた。

夏も、ちゃんと二組出そうと思ったが、利知未本人が、『昔みたいに一緒に寝たら駄目か？』と、幼い頃のような不安げな顔で言った。それで、そのまま一組しか出さなかった。

利知未は、ホッとした顔をした。

「だよな。…裕兄、飯、お代わり注ぐよ。」

笑顔で手を出す。裕一は最後、一口だけ残っていた飯を口に入れた。

「頼む。美味しいよ、飯が進む。」

「だろ？里沙にも誉められたよ。覚えが早いってさ！」

裕一のお代わりを注ぎながら、ニコリと笑った。

銭湯から戻った後、裕一は通知表についての説教を再開した。利知未は嫌々ながら、大人しく聞いていた。

話が終わってから、利知未が自分で二組の布団を用意し、就寝準備を始めた。裕一は少し驚いたが、何も言わないで置いた。

そろそろ、そう言う年頃なんだろうと納得し、利知未の様子を眺めた。

翌日も、利知未は我が俣に裕一を連れ回したりせず、大人しく自分の勉強をしながら過ごした。食事の準備は、全て引き受けた。勉強に飽きてくると、適当に散歩に行ったり、買い物に出掛けたりした。お蔭で裕一のレポートも、かなり進める事が出来た。利知未としては、勿論、裕一の邪魔をしたくないという思いもあった。それと生理中の貧血で、元気に活動する事が少々億劫な気分でもあった。

翌日は大晦日。優が裕一のアパートへやって来た。勉強もレポートも一区切り付いた二人に、大掃除を手伝わされた。

夜、テレビで歌番組を眺めながら、年越し蕎麦を食べる。優が蕎麦を啜りながら、ぼやいた。

「……ったく。着いた途端に雑巾、渡されるとは思わなかったぜ。」

「仕方ないだろ？一応、ここが俺達の、実家代わりなんだから。」

利知未が同じく、蕎麦を啜りながら答える。

「悪かったよ。けど、気持ち良いじゃないか？綺麗な部屋で年を越した方が。助かったよ。」

裕一も笑いながら言った。優は小さく肩を竦め、また、ぼやく。

「ま、そーだろーけど。」

「……けど、早いよな。去年の今日だよ。……ばあちゃんが倒れちゃったの。」

利知未が、寂しげに呟いた。裕一も頷く。

「……そうだったな。」

「二日、墓参り行こうぜ。」

蕎麦を食い終わり汁まで平らげた優が、後ろ手を着いた姿勢で言う。

「命日か。」

「ああ。」

裕一が思い出し、優が肯定した。利知未も蕎麦を食い終えて言う。

「行こうぜ？」

「そうだな。」

微かな笑顔で、裕一がもう一度、頷いた。

午前〇時まであと三十分を残す頃、利知未が思い付いた。

「な、二年参り行こうよ。近くに神社あったじゃん？」

大叔母の話で、暗くなりがちだった兄達が、顔を見合わせた。

「行くか！去年は、それドコじゃなかったモンな。」

「じゃ、二年分のお祈りでも、してこよう。」

裕一も明るい笑顔を取り戻した。利知未はニコリと頷いた。

近所の神社で初詣を済ませ、振舞いのお屠蘇と汁粉を貰う。利知未は甘い物が嫌いだ。裕一のお屠蘇と、自分の汁粉を取り替えてしまう。

「お前、何、生意気な事してんだよ？」

優が、自分のお屠蘇を飲み干して、利知未を小突いた。

「ってーな！直ぐ頭ぶつ癖、止めるよな？！」

利知未も、お屠蘇を飲み干していた。裕一は呆れて眺め、甘い汁粉を口にする。その様子を見ていた年配のオジさんが、裕一に新しいお屠蘇を渡してくれた。

「元氣なポーズ達だな。アンちゃんも大変だねえ。」

「あ、済みません…。一人は、妹なんですけどね。」

困った様に笑って見せた。オジさんは驚いた後、笑い出した。

「そりゃ、済まなかったね。元氣な嬢ちゃんだ！」

豪快に笑う。利知未と優は新年早々、口喧嘩を始めていた…。

「こら、二人とも！新年早々、神様の前で喧嘩するな。」

裕一は、お屠蘇を飲み干してから、二人の仲裁に歩いて行った。

二日、約束通りに大叔母の墓参りへ出掛け、夜、三人で鍋を囲んだ。

三日の昼過ぎ、優と利知未は帰って行った。帰り道も二人は、賑やかな口喧嘩をしていた。裕一は、苦笑いして、元氣な弟妹を見送

った。

## 六

三学期が始まっていた。

まだ正月気分が抜け切れないでいる生徒達の目の前に、中間テストがぶら下がっている。

各教科のテスト範囲が発表され、ワタワタと慌てふためくクラスメートを尻目に、利知未は応援団部室で、サボり続けていた。

「お前も、相変わらずイイ根性してんな……。」

櫛田が、呆れ顔で言った。

「センパイこそ、んな所でサボっててイイのかよ。進路決まったのか？」

呑気な様子で、部室に置いてあった、少年誌を眺めている。

「言ってなかったか？オレの進路は、東京の寿司屋で職人修業だ。」雑誌から目を上げて、びつくりした顔をする。

「聞いてないぜ？センパイ、寿司なんか握れんの？！」

「握れネーから、修行すんだよ。」

「……、そう言う事か。ま、確かに、勉強よりも向いてそうだよな？」ニコリと、櫛田の進路に、肯定の意志表示をする。

「……まーな、その内、握れるようになったら、食わせてやるぜ。」

「楽しみだな、期待しとくよ。」

「まあ、任せとけ。」

ニツと、笑って見せた。櫛田は変わらず、利知未の事を気にしてはいた。

二学期の終わり頃、橋田と二人でこの部室でサボっていた時、瀬川の面倒を見てやってくれと、後輩に頭を下げていた。



「うつす！キツチリ、面倒見させて頂きます！」

と、現・団長の橋田は、胸を叩いて請け負ってくれた。

テスト期間中に、利知未は以前から言っていた、『美味しい珈琲を飲ませる店』に、櫛田を連れて行った。勿論『アダム』の事だ。

「また、お前は。とんでもないダチ、連れてきたな……。」

マスターは、目を丸くして驚いた。

「世話に成ってるセンパイなんだよ。卒業したら寿司職人になるって話しだから、味覚をテストしてやろーと思つて、連れて来た。」  
カウンター席へ腰掛けながら、利知未が言った。

「お前、そーゆーつもりで案内して来たのか？なんつー、生意気な。」

櫛田も呆れ顔だ。その言葉に、マスターが反応した。

「利知未は、手が掛かるだろ？俺も随分、手を焼かされた。」

「何だよ、それ？最近は大人しくしてんだろ？！」

「良いストレス発散口を見つけた様だからな。で、何時もので良いのか？そっちの気合入ったお客さんは、何に致しますか？」

櫛田は利知未の隣の席で、腕を組んで、少し仰け反るような姿勢をして、利知未とマスターを眺めていた。

「センパイ、腹減ってんだろ？何か食ってみろよ。この店、珈琲も美味しいけど、飯も中タイケるンだぜ？」

「……そーだな、……何か適当に食わせて貰えるっすか？」

何となく何時もの様子と違う櫛田に、利知未はクスクスと笑っていた。

応援団は、上下関係に厳しい。正しい敬語は中々使わないが、目上に対しては、そこそこ、礼儀を弁えた態度を取る。櫛田は最上級生として、利知未の前に現れたのだから、今、目上のマスターに対する言葉使いも、その態度も、利知未の目からはチグハクな感じに見えていた。

「では、ランチタイムですので、Bセットを、お出ししましょう。」  
マスターは店主として、この気合が入った利知未の先輩にも、それなりの態度で接してくれた。数分後、カツカレーの大盛りが出て来たのだった。

中間テストも、利知未の成績は頗る良かった。中学校の三学期、次の行事はマラソン大会である。

マラソン大会は、真面目に参加した。貴子に無理矢理、引っ張っていかねながら、スタートラインに並んだ。一緒に走ろう等とは言わない。

「あたしは絶対、優勝して見せるんだから。利知未も、せめて完走して見せてよね？」

と、言われたので、面倒臭いながらも、たらたらと走り出した。

貴子は予告通り、一年女子の部優勝。しかも、校内新記録のタイムを叩き出して見せたのだった。陸上部でも長距離の、期待のホープである。

三学期はテストだらけだ。その分、利知未が応援団部室にいる時間もいくらか減る。次は、実力テスト。その少し後には学年末テストだ。

普段の授業は、相変わらずサボりの常習犯だった。

実力テストの後、利知未は担任から呼び出しを受けた。

「お前、学校へは来るようになったが、授業の参加率は相変わらずだな。」

呆れ顔で、テストの成績通知表を眺めている。

「勉強はキツチリやってんぜ？」

「言葉！」

「ウィーす……。勉強ハ、真面目ニヤツティマスガ？」

言葉を注意されれば、直ぐに敬語には直すが、その度に、感情も何も無い、ロボットが喋っている様な棒読みになる。その様子に、また松田は呆れた。

今回は、他の生徒へテストの成績通知表を渡した、ホームルームの時間、教室にいなかった瀬川を呼び出していた。利知未は、その日、久し振りに保健室にいた。

大体月一回、三日間ぐらいは、保健室の常連をしていた。

つまり、あの日だ。仮病ではなくベッドを借りに来る生徒を、佐渡も追い出す訳にはいかない。三日目になり、顔色が良くなつてから、またニコリとして栄養バランスの説明されたプリントを持ち、ベッドの隣に立てば良い。それで利知未は逃げ出す。

「まあ、兎に角だ。学校と言うのは、勉強をする為だけに来るのではなく、集団行動の基本を確りと身に付ける為にも来る場所である訳だから……」

毎度お馴染みの説教が始まり、利知未は耳に蓋をした。

意識を、全く別の所へ持つて行った。松田の言葉は、右から左だ。利知未が視線を向けた先に、怪我だらけの橋田が、教師の前に立たされているのが見えた。アレ？と思い、暫く観察した。

「……また、喧嘩か？お前達は……。全くどう言うつもりなんだ？」

説教をしているのは、応援団部の顧問になっている、社会科の担当教師、住野だった。

「城西の生徒を守るのも、我、応援団部の義務でありまっすー！」

職員室中に響く声で、団長・橋田が答える。

その時、職員室にいた誰もが、その大声に注目していた。

松田も説教を止めた。そちらに注目する。

「何だよ、面白ソーな事、やってンな！」

思わず、声を上げてしまった。松田が利知未を見る。

「何が、面白そうだ！？お前は……」

利知未は思い付いた。橋田と同じ様に、両足を肩幅に広げ、腕を後ろに回し、やや胸を反らすような姿勢に直して、元気に言った。

「指導、有難うございまっす！以後、気を付けまっす！！部活動の時間なので、失礼致します！！」

応援団式で礼をし、クルリと向きを変えて、職員室の出口へ向かう。途中で、『あ！』という顔をして、呆気にと取られていた松田の席に取って返し、机の上のテスト成績通知表を、ひょいっと、摘み持った。我に返った松田に腕を捕まえられる前に、駆け足で職員室を出て行った。

職員室の注目は利知未に集まり、橋田に説教をしていた住野の言葉も止まっていた。橋田は、吹き出しそうな顔をして、必至に笑いを押えた。

直ぐに、学年末テストの時期だ。

その頃には、三年の団部メンバーの、進路も決まっていた。

「しかし…、何だな…。」

机の上へ足を投げだし、椅子の背凭れに背中を預けた、行儀の悪い姿勢で、櫛田がぼそりと呟いた。

「…何だよ？」

利知未は相変わらず、片頬杖で、マンガ雑誌を眺めている。

「…早えもんだな。後、一ヶ月で卒業だとはな…。」

櫛田のぼやきに、目だけを上げて、利知未が言う。

「何だよ、センパイ。感慨深げに呟いたりして？柄じゃなーじゃん。」

「煩せー。タマには、こんな気分になる時だつてアンだよ。」

頭だけ起こして、利知未を軽く睨み見た。利知未は眉を上げ、軽く肩を竦めて小さく笑う。

「喧嘩した時、以来だ。センパイに睨まれたの。」

「そーだったか？」

再び、頭を寝かす。頭は後ろの低い棚に、枕を置いて乗せていた。

櫛田は良く、こんなバランスの悪い格好で、昼寝をしていた。冬には、南向きの窓から柔らかい日差しが差し込んで、暖かい部屋だ。「そーだよ。…でも、確かに早よな。あれから九ヶ月も経ったんだ。」

利知未はマンガを閉じ、両頬杖を突いて、だらけた姿勢の櫛田を眺めた。

最近、妙な噂が、利知未の耳に入っていた。

「三年の応援団元副団が、一年のマネージャー瀬川と、付き合っているらしい。だから、瀬川に手を出せば、応援団員に制裁を加えられる。」

そんな噂だ。

貴子はその噂を聞くと、『友達だつて、本人が言つてたんだから、そんな事はない。』と、訂正してくれているらしい。

利知未は、その手の噂話には耳を貸さない事にしていた。面倒臭いのは嫌いだ。ムキになって否定したつて、無駄な労力の消費だ。そんな風に思っている。だから、どんな噂が流れ様とも、自分にとってのパラダイス・応援団部室から、離れるような事も無い。

「あのさ、センパイ。面白い事、言われたんだけど。」

何となく、話題に乗せて見ようと思った。櫛田は姿勢を変えずに聞いた。

「何だ？」

「俺、センパイの女なのか？」

ガタン！と音を立てて、櫛田が椅子のバランスを崩し、転げ落ちそうになる。無様に転がる事だけは、何とか免れた。

「…誰がんな事、言つてた？」

姿勢を直しながら、櫛田が聞く。利知未は、ややびっくり顔だった。「誰つて、そんな噂が流れてるらしいって、クラスの女子が。」

櫛田は、小さく息を吐いた。

「…何だ、噂か。…で、お前は何だったんだ？」

「知らなかったって、言つといたよ。…つつーか、そー言うの、マトモに相手してたって、疲れるだけじゃん。」

櫛田が鼻で笑う。…コークー奴だ、コイツは。

「それで良いんじゃないか。オレが卒業しちまえば、ンな噂は消えるぜ。」

「だよな。…別に、構わなーケドな。お蔭で面倒な事無くて済んでるし。」

どうでも良さそうな顔をして、利知未は再び、雑誌を開いた。櫛田はなんとも言えない笑顔で、その様子を眺めていた…。

更に二週間の時が流れ、学年末テストも、無事に終わった。この三学期、後は、卒業式を残すのみだ。

城西中学では、卒業式の式典中、応援団が指揮つて、全校生徒でのエール交換を行う。

上級生側からは元団長、副団長と、団部三年メンバーが代表で進み出、下級生側からは現団長、副団長、一、二年の団部メンバーが進み出る。

その為、テストが終わってからの約二週間、応援団部は珍しく活動をしていた。訓練だ。

利知未は、マネージャーと言う立場なので、当日は大人しくクラスの自分の席で、待機している事になる。

その練習の活動期間は、時間潰しも兼ねて、応援団部室の整理整頓を手伝いながら、一応、真面目に部活動へ参加していた。

「げ、これ、三年の私物じゃん！？どーすんだ？」

棚を片付けていて、色々な物を見つけてしまった。

利知未がこの部室に出入りするようになって、慌てて隠し場所に設定した棚から、青年誌・エロ雑誌を始め、実に様々な物が出て来

た。

「これ！？どこで使ってたんだ！？」

何故か避妊具まで出てくる。良く解らない…。男だらけの応援団で、何故こんな物が必要になるというのか？しかも開封済みで、使いかけだ。

ガラリと、扉が開いて、三年の応援団部員が一人、入って来た。

「うわ！瀬川！！何でお前がそんなモン見つけちゃったんだ！？」

二年の頃、旗持ちをしていた鶴川 淳二と言う先輩だった。

「鶴川センパイ、丁度良い所に来たよ。これ、三年の私物だろ？持つて帰るか、捨てるかしてくれよ？」

顔を顰めた利知未から、視線を反らしながら顎を掻く。

「ワリー、持つてくよ。」

利知未が、その様子を見て、疑わしそうな顔つきをする。

「…もしかしてコレ、センパイの…？」

「エ？いやあ…、誰のだ！？こんなモン、ここに在っても仕方ないから、おれが処分しておくよ、うん。」

避妊具を、ズボンのポケットに仕舞い込んだ。利知未は益々、怪しそうな顔をした。鶴川は他にも、ライターや扇子、懐かしのベーゴマやモデルガンなど、一纏めにして抱え込んだ。

「こっちの雑誌は？センパイのじゃネーの？」

「ン？ああ、それは櫛田のだよ。」

「櫛田センパイ、青年誌読んでたんだ。…俺が、ここにいる時には見てなかった見たかったけどな。」

パラパラと捲り、怪しげなシーンを見つけてしまった。慌てて閉じる。

「ハハ、そりゃ、女の前じゃ読めねーよ。」

笑いながら利知未を見た。利知未は、少し照れながらも、先ほどの怪しいシーンのページを、また、ちょっと開いて見る。興味本位だ。

「おい、止めとけて。そんなトコ櫛田が見たら、怒鳴られんぞ？」

「…うわ、エゲツな…。何がイーンだ？こんなの…。」

タイミングと言うのは、悪い時には徹底的に悪い物だ。次に部室へ入って来たのは、櫛田だった。

「…ン？おいコラ！！瀬川！！お前、何見てんだ？！！」

流石は元副団だ。その大声で棚が揺れた。利知未と鶴川は首を竦めた。

つかつかと利知未の隣へ歩いて来て、雑誌を取り上げた。

「…ったく、お前は…。」

ぶつぶつ文句を言う。

「ンな事、言ったって、部室の片付けしてたら出て来たんだ。シヨ  
ーがネーだろ？大体、こんなモン、隠しておく方が悪いんだ。」

腕を組んで、そっぽを向く。少し顔が赤い。櫛田はつい笑えてしまった。

「男見てーな態度ばつか取っても、やっぱ女だな。何、赤くなってるんだ？」

雑誌を丸めて、ポコンと利知未の頭を撲った。利知未は、撲られた頭に両手を上げ、アツカンバーをしてやった。

時間が経つのが、コレほど早く感じた事は無かった。

櫛田と、応援団の仲間達と過ごして来た、ほんの数ヶ月が、卒業式という一区切りの日を迎えた。

利知未は珍しく、朝から気分が沈んでいる。中学の卒業式は、午後一時半から始まる。午前中は、同じ学区内の小学校で、卒業式が行われているのだ。宏治も、きっと今頃は、新品の学ランを来て、式に出席している頃だろう。

卒業生は午後から登校し、一度教室に集まり、最後のホームルームを受けてから、並んで体育館へ向かう。下級生は既に、席に着いている。



「卒業生入場！」

号令で、三年一組から順に行進してきた。都筑は二組、櫛田は四組、後二人は、三組の生徒だった。相変わらず団部メンバーは、気合いの入った制服を着ている。しかし、この城西中学が比較的、平和な学校でいる事に、応援団の乱暴者達が一役買っている事は、周知の事実だ。眉を顰める保護者は少ない。

挨拶から国歌・校歌斉唱、卒業証書授与、来賓挨拶、送辞・答辞と進み、応援団指揮の元、エール交換が行われ、それから、式歌斉唱で卒業生退場だ。エール交換は、この学校ならではの名物行事であり、それを毎年楽しみにしている来賓もいる。

「諸先輩方のーっ！！前途を祝しーっ！！三・三・三・七拍子　っ！！」と、在校生が一斉に手を叩く。その後、エールを送る。

エールを送られた後、卒業生から元団長が声を上げる。

「我母校　っ！！城西中学校のーっ！！益々の発展を祈りーっ！！エールを送るっ！！フレーッ！！フレーッ！！城西！！！」

そして、卒業生が元団長指揮の元で、一斉にエールを送る。

中々、見ごたえのある行事だった。応援団旗も、新二年生が翻す。父兄の中には、毎年このタイミングで泣き出す人がいる。

利知末も、このタイミングでジーンと来てしまった。

そして卒業式が終わり、応援団部室でも、祝賀の席を用意する。

謝恩会まで終わらせて顔を出した三年を、部室のあるクラブハウスの廊下に、ずらりと並んだ下級生が迎えた。

今年の祝賀会は、やや豪華だ。利知末が貴子に手伝って貰いながら、二、三品の肴を作ってやった。

この部員達は、隠れて酒も飲んでいたのだ。利知末も何度か相伴させて貰って来ていた。

料理を手伝って貰った貴子も招待した。貴子は恐れながらも、田崎に会えると思ったので、利知末に引つ張られるままに参加した。

「三年間、ご苦労様でした！！！」

「ご苦労様でした！！」

下級生に迎え入れられ、宴会が始まる。一年は控えめに飲み、二年は三年の接待に忙しい。宴会が進み暫くした頃、利知未は櫛田が呼んでいるからと田崎に言われ、部室を出て行った。

「何だよ、酔っ払ったのか？」

学ランを肩に掛け、校庭の階段に座っている櫛田に、後ろから声をかけた。櫛田が気付いて、軽く振り返る。

「おう、ワリーな。摘み作ってくれたって？美味かったぜ。」

「そんな事か。俺はまた、酔っ払ったから介抱しろとでも、言われるかと思つたよ。…良い腕、してんだろ？」

隣に座り、ニコリとして見せた。櫛田も頬を緩めて言う。

「ああ、感心したぜ。…瀬川、」

「なんだ？」

「…いや、何でもネー。……イイ女になれよ。」

それが、櫛田から利知未に送られた、中学最後の言葉になった。

幸せの種 第二章 了 （次回は、9月7日 更新予定です。）

## 二章 センパイ（後書き）

二章も最後までのお付き合い、ありがとうございます。二章より、利知未・中学二年生時代に突入です。

ヤンチャ者の利知未の行動範囲が、また、広がっていきます。来週金曜日、夜10時頃までには、確実にお届け出来るよう、只今、編集集中です。

宜しかったらまた、お付き合い下さいませく（――）くペコリ

### 三章 桜から、夏・新しい出会いへ…（前書き）

利知末の懐かしい中学時代の思い出話、第三章です。この作品は、'80年代後半から'90年代初めを時代背景としたフィクションです。

先輩を卒業式で送り出し、中学二年に上がった利知末の興味は、バイクとギター。さて、利知末の行動範囲は、何処まで広がって行くのか…？

この作品は決して、未成年の喫煙、ヤンチャ行動を推奨するものではないです。ご理解の上、お楽しみ下さい。

### 三章 桜から、夏・新しい出会いへ…

#### 三章 桜から、夏・新しい出会いへ…

##### 一

桜吹雪、舞い散る、四月。

利知未は無事に、中学二年へと進級した。

三月の末日、利知未は卒業した櫛田が東京へ発つと聞いて、橋田・田崎らと、駅まで見送りに出掛けた。

櫛田は気合の入ったリーゼントを角刈りにし、耳に着けていたクリップタイプのアクセサリも外し、真面目な服装で現れた。それを見て目を丸くした利知未と、その様子をクスクスと笑いながら眺めている田崎に、櫛田は相変わらぬの睨みを効かせる。橋田は一人、笑いを噛み殺して、腕を後ろに回して、直立不動だ。

「ンだあ?! 文句あンののか?」

「…いや、似合うじゃん!」

利知未もクスクスと、笑ってしまう。

「ったりめーだ! コレから気合入れて、仕事に励もうと言う男に向かって、ケナしたりしたら、承知しネーぞ!」

片目を細くし、片眉を器用に上げ、柄の悪い顔を見せた。

「つつーか、真面目に働こーって言うヤツが、ンな睨み効かしてて、イーのかよ!」

利知未も負けずに言い返す。田崎はやつと笑いを収めていた。

「余計な世話だ。お前こそ今度、会う時は、もう少し女らしくなってるよ。オレがソイツを認めたら、特上の寿司でも奢ってやるぜ。」

「何で、皆して同じ様な事、言うかな…。」

利知未が、膨れっ面をした。兄や玲子の事を思い出す。最近、そ

ここに貴子まで入っていた。

櫛田は、その膨れっ面を見て吹き出した。本音の部分では、可愛くも見えている。だが、そんな事は露ほども見せない。

電車が駅に近付いて来た。橋田がやつと口を開く。

「櫛田さん、世話に成りました！お元気で。」

「おう、お前もな…頼んだぞ。」

チラリと、利知未の事を見てから言う。橋田は、その意図を汲んだ。「うつす！」

一言、頼もしい笑顔で頷いた。田崎も声を掛ける。

「世話になりました！後、確り継がせて頂きます！」

「おう、任せた。」

電車が止まり、扉が開く。乗り込み掛けた櫛田に、利知未が言った。「センパイ、色々サンキュー。その内また会おうぜ！」

「そうだな。その内な。」

軽く手を上げ、櫛田らしい笑顔を作る。ニヤ、と言う表情だ。

「じゃーな！元気で！！」

「お前もな！」

言葉を交わしたタイミングで、櫛田が乗り込んだ電車の扉が閉まった。

橋田と田崎は、応援団式礼をして、その電車を見送った。利知未は電車の窓に、櫛田の姿が見えなくなるまで手を振った。

それから、橋田がバイクで下宿まで、送ってくれた。勿論、無免だ。

この年、下宿には新しい住人は入らなかった。朝美は高校三年。春休みの始め、一週間ほど戻った親元で、今後の進路の話しも、少しかけて来た。

下宿に戻った日、利知未の部屋に来て報告してくれた。

「あかし、後二年、ここに居れそうだよ。」

ニコリと笑っていた。利知未にとっても、仲の良い相手と一年でも

長く一緒に居られる事は、嬉しい事だった。

特に利知未は、朝美が出て、もしも他の住人が入らない場合は、玲子が唯一の下宿仲間と言う事になる。玲子とは相変わらず折り合いが悪い。

ただ喧嘩相手というのは、やはり必要だ。利知未も玲子も、文句を言い合っている割には、生き生きとしている様にも見える。利知未から見たら、優と同じような関係かもしれない。

利知未は春休みの前半で、裕一のアパートへ二泊三日の泊りがけで出掛けてきた。その内、一泊二日の間、優も泊まりに来ていた。相変わらず二人は、喧嘩ばかりしていた。

けれど今回の喧嘩理由は、利知未にとって本気で頭に来る事だった。

嫌なタイミングでまた、生理が来てしまった事が発端だ。

ソレが来たのは、裕一のアパートへ泊まった翌朝だった。

朝、目を覚まし、トイレに向かうと、血液が便器を汚した。

『またかよ…。サイアク。』

一端トイレを出て、生理用品を持って再び個室へ入る。トイレから出たり入ったりしている利知未の様子を見ても、裕一には直ぐにピンと来なかった。当然と言えば当然だ。

「利知未、腹でも壊したのか？」

再び出て来た利知未に、裕一が気遣わしげな声を掛けた。

「…何でも無い。」

少し赤くなりながら、不機嫌そうな返事をした。

利知未は、その汚物をどう処理するか悩んだ。男の一人暮らしの部屋に、女子トイレに置いてあるような汚物入れを置くのも、嫌な気がする。だからと言ってトイレの度に外へ出掛けるのも考えモノだ。少し悩んで、タンクの影に紙袋を置く事にした。ゴミ出しは自分

が行く事にすれば良いと、結論を出す。それで、兄に見つけられなければ、何とかなると思った。

暫くすると優がやって来た。来た途端トイレに入った。利知未は一瞬、嫌な予感がした。そして嫌な予感と言うもの程、的中率が高いものだ。

「げ、何だよコレ!？」

トイレから、優の声が上がった。

「どうした？」

部屋から裕一が出て来た。利知未は何故か、ビクリとしてしまった。トイレから出て来た優が、ニヤニヤと利知未を見る。

「お前、やっとキタんだな？」

その表情と、その言葉に、利知未の頭に血が上ってしまった。

戸惑い、恥かしさ、口惜しさ、訳の判らない悲しさ…。

その複雑な感情に任せて、優の頬にビンタを食らわせた。

優の頭が、その勢いで、左から右に90度近く弾かれた。

「優のバカ野郎!!」

叫んで、アパートを飛び出してしまった。

裕一は一瞬、驚いて動きが止まる。だが、直ぐに利知未を追い掛けた。

優は、呆気にとられていた。

走っている利知未の目から、涙が出て来た。自分でも何故、泣いてるのは判らなかった。ただ、何となく口惜しい、そして、悲しい。

闇雲に走り続け、ひっそりとした公園を見つけた。誰もいない。その公園のブランコに腰掛ける。涙が、まだ止まらない。唇を噛む。『なんで俺、泣いてんだよ…?どうって事、ネーじゃん?だって、仕方ないんだ。』

自問自答。



「きつとで生理の所為だ。この日は、いつも気分がイライラする……俺、何で女ナンカに生まれちゃったんだろ……？」

里沙は、いつか女に生まれた事を、感謝出来る日が来るからと言っていた。けれど今の利知未には、そんな日が来るとは思えなかった。

まだ初恋さえも覚えが無いのだ。好きなヤツは結構いるが、恋愛とはまた違う。男も、女も同じ好きだ。友達、仲間。そんな感じだ。「利知未！こんな所まで、走って来たのか……」

裕一が声を掛けながら、近付いてきた。利知未はピクリとして、泣き顔を見られ無い様に俯いてしまう。

「……知らなかったよ。……ご免な、気付いてやれなくて。」

利知未の近くまで来て、立ち止まって優しい声を掛けてくれた。また、涙の量が、ちよつとだけ増えた。

裕一も戸惑っている。女の子の身体の事だ。男である自分が如何すれば、妹の気持ちを解してやれるのか、見当も付かない。

母親が近くにいれば、こんな時、何とかしてくれるだろうに思っただ。

「……何で、裕兄が謝るんだよ……？言わなかったんだし、知らなくて当たり前だろ……？」

小さな声で、利知未が言った。

「……そうだな。言い難いよな、きつと。……ケドな、一応、知識だけはあるよ。だから、……何て言うか……、」

言葉は中々、浮かんでこない。何て言ってやれば良いのだろう……？

戸惑いながら、軽く曲げた右手を自分の口元に持っていていき、真剣に考える裕一の姿が目に入り、利知未は少し、無理をして笑って見せた。

「良いよ、仕方ねーモン。解ンなくって当然だ。……アンマ、気にしないでくれよ？……あーあ、兄貴達にもバレちゃったし、隠してても仕方ないよな。……ゴミ箱、トイレに置いて良いかな……？」

涙を払って軽く首を傾げた利知未に、裕一は少しだけ安堵した。

「ああ、置いとこ。…お前がいない時は、ペーパーの芯でも捨てる様にすれば、構わないだろ？」

「そうしてくれよ。普通の蓋の付いてるヤツ、買って行こう？」

ブランコから立ち上がった。まだ少し戸惑っている裕一の腕に、ぶら下がるようにくっついた。

「財布、持ってるか？」

「ポケットに、入れっぱなしだ。」

お尻のポケットを、利知末がぶら下がっていない方の手で、ポンツと叩いた。

「…ンじゃ、行こっか？」

そして、来た道を引き返した。

ゴミ箱を買ってアパートへ戻ると、外廊下の手摺に寄り掛かる様にして、優が待っていた。利知末に叩かれた頬が、まだ赤かった。

「…お帰り。」

仏頂面で言う。利知末はぷいと、横を向いてしまう。

「ただいま、…優、謝っておけよ…？」

さつさと、部屋へ入ってしまった利知末の後姿を見やって、優に言った。

「…分かってるよ。…あーあ、ったく、面倒臭 なー！」

手摺に寄り掛かり、天井を仰いで優が言う。利知末と優は、顔も体形も似ているが、性格もそっくりだ。優は、裕一に背中を押されて、玄関の戸を潜った。

利知末は、直ぐにトイレへゴミ箱を置いた。ゴミ袋変わりに、スーパーのレジ袋をセットする。個室を出ると、優が壁に寄り掛かった姿勢で、口をへの字に曲げている。無視して、裕一のいる部屋へ向かおうとした。

「…悪かったな。」

優がムツツリと謝った。利知末は視線をチラリと優に向け、膨れっ

面で部屋へ向かっていった。

利知未は裕一よりも、優に知られる方が嫌だった。年が近いからか、喧嘩相手だからかは、自分でも良く判らない。だから、始めに優が取った態度に対する怒りは、中々、納まらなかった。

その日、利知未は銭湯から出るまで、優と口を聞かなかった。

優の方は、今までだったら取っ組み合いで大喧嘩をしていた妹が、口も聞かないような態度で怒り続けているのに、妙な気分だ。

夕飯の時、利知未が作った料理を口にしながら、心の中で呟いた。  
『まるで、女みたいな怒り方してンな…』

そう思っ、思い直した。利知未は元々、女だ。妹で、弟では無い。そう言えば何となく、雰囲気も女らしく成った様に見える。料理の腕も上がっていた。口を開けば相変わらずだが、黙っている限りでは、ちゃんと妹として見えていた。

そして優は反省した。確かに可哀想な態度を取ってしまったかもしれない。裕一には、普通に笑顔も見せる利知未に、心の中で改めて頭を下げたのだった。行動に移せないのは、性格だ。

裕一と優は銭湯で話しをした。利知未のいない所で、じつくりと話しが出来る、良いタイミングだ。

「なんか…、妙な気分だよな。アイツが取っ組み合い無しで怒ってるの。」

優の言葉に、裕一も少し困った表情で頷く。

「俺は正直、どうして良いか判らないよ。事が事だからな…」

「女の身体のナゾって、ヤツだよな。…オレも判ンね。…ほっとくしかネーじゃネーの？」

優は浴槽の縁に両腕を寄せ、顎をその上に乗せてだらけている。

「…お前は、自分で利知未を怒らせた割には、呑気だな。」  
呆れてしまった。利知未と優は、本当に性格が似ている。

「兄貴は色々、扱い使い過ぎなんだよ。…ま、仕方ねーか。…今ま

でが今までだモンな。」

裕一は、父方の親戚の家でも、大叔母の家でも、また別の親戚の家でも、三兄弟の年長者として、長い間、責任を持って行動してきた。

弟妹の面倒を良く見、生活態度にも気を付け、世話に成っている親戚の家族に対して、いつでも礼儀正しく振舞ってきた。

その生活が、今の裕一の人柄を作った。お蔭でいつも実年齢より、四、五歳年上に見られていた。落着いた雰囲気を持っている。

「お前達が、いつも伸び伸びと笑ってるのが、一番嬉しかったんだよ。」

父親のような笑顔を見せた。優は、兄には敵わないと思う。

兄がいてくれたから、自分も利知未も、いつも笑って過ごして来られた。

「…感謝してるぜ。」

ぼそりと呟いた優に、裕一は笑顔で答えた。

風呂から上がると、利知未が膨れ面で二人を迎えた。

「遅いよ！湯冷めしちまう所だったぜ。」

「悪かった。久し振りに、優と話し込んでたよ。」

利知未は、面白く無さそうな顔をする。

「ふーん…。どーせ俺の悪口でも、言ってたんだろ？」

優を横目で睨む。そんな雰囲気を見ると、夕飯の時、優が利知未に感じた女の子っぱさは、また何処かへ隠れてしまう。

「ケ、悪口言われるような覚えでも、あるのかよ?!」

いつも通りに、頭を小突こうとして止めた。反射的に首を竦めた利知未が、そろそろと、目線だけで優を見上げた。フン、とそっぱを向いている。

「気味ワリーな…。」

利知未が呟く。裕一は、その様子を見て頬が緩む。

「気味悪いって事、無いだろ？ 優も今日の事は反省してるんだ。そろそろ許してやったらどうだ？」

利知未は、剥れた顔をして唇を尖らせる。小さく俯いて、勢い良く腕を頭の上に振り上げ、偉そうな顔をして言った。

「しゃーなーな、許してやるよ！ 許してやるけど、頭撲る癖、ツイデに止めてくれよな。」

横目で優を見た。優は、そっぽを向いたままだ。

「…馬鹿になつたら困るからな、止めてやるよ。」

吐き捨てる様に呟いた。利知未はまた、その言葉に反応する。

「知らなーの？ 俺、優兄より成績イーンだぜ！？」

「だから何だよ？」

「…別に。優兄も、もうチヨイ勉強に力入れたら？」

「一言多いんだよ！ お前は！」

撲るのは止めると宣言したばかりだと言うのに、優は思わず、利知未の頭を小突いてしまった。

「ってーな！ 舌の根も乾かない内って、言うんだぜ？ コーユーの！」「へ。」

舌を出す優に、アツカンベーと返す利知未。その様子を裕一は、苦笑しながら眺めていた。

翌日、嵐のように騒がしかった弟妹が帰って行くと、裕一は珍しく、寂しさを感じた。

『何とか、一発で国家試験を通って、一日も早く三人で暮らせる様に…。頑張るとしよう。』

二人の笑顔を思い出し、気持ちも新たに、四年目の大学生活を送ろうと決心したのだった。

そして、四月。

舞い散る桜に背中を押され、新一年生が、城西中学の正門を潜る。父母と連れ立ってやってくる、新品の学生服の中に、利知未は見知った親子を見つけた。

「瀬川さん!!」

新品の学生服が、大きく手を振って走ってくる。

「宏治!…久し振りだな。少しは背、伸びたか?」

「うん、あれから三センチくらいは。」

照れた様に笑う宏治の後ろから、美由紀が、ゆっくりと歩いて来た。

「お久し振りね、利知未さん。店を覗かせて欲しいって言うってから、ずっと来なかったわね。」

笑顔で、利知未に声を掛ける。

「…あれからチョイ、色々あったので…。」

美由紀の前では、何となく何時もの調子が出なかった。利知未は無意識に、自分の母親と比べている。…こんなお母さん、良いな。

しかし、その気持ちに、自分で蓋をしている事にも気付いていない。

「おう、瀬川の後輩か?」

気合が入った団長・橋田が口を出した。

今、正門の中では各部、勧誘活動が忙しい。応援団も一応、机を並べていた。宏治親子はやや、びっくり顔だ。

「瀬川さん、応援団なの?」

宏治が、目を丸くして聞いた。

「ウチのマナージャーだ。お前は瀬川の後輩か?」

「…違います。前、ちよつと。」

言葉を濁す宏治の変わりに、美由紀が笑顔で口を出した。

「ウチの弱つちい息子が、去年、利知未さんに助けて貰ったの。…貴方、随分、喧嘩が強そうね?良かったらウチの息子、鍛えてあげて。」

新入生の保護者に、そんな事を言われるとは思ってもいなかった。

今度は橋田が驚いた。

この春。利知未には、新しく弟分が増えたのだった。

## 二

新学年のクラス編成で、利知未は一組から四組になった。貴子も同じだ。噂では、問題児・瀬川のお目付け役として、松田が声を上げたらしい。

担任は、国語の年配女性教師で、須加と言う。父兄からも信頼の厚い、良い教師らしい。四組は出来の良い生徒と同じ比率で、問題児と言われる生徒が編入されていた。

二年から三年は、クラス換えをしない学校だった。このクラスメイトと、二年間を過ごす事に成る。玲子は成績優秀者が多い、一組になった。

四月の末、ゴールデンウィークがやって来た。

利知未は、里沙の下宿に来て一年だ。その間の事を一言で表すなら、正しく『喧嘩三昧の日々』とでも、表現すれば良いのだろうか。月の中旬、橋田と田崎は先手を打って、川上中学へ出向き、睨みを効かせて来ていた。今年の川上中学の頭は始めから怯えており、腕っ節で片を付けるまでも無く、話し合いのみで、この一年の平穏を約束させてきた。田崎の案だったらしい。良い参謀だ。

と言う事で、どうやら今年は、平和な日々を送らせて貰えそうだった。

更にその後、利知未が知らない所で団議が行われていた。

櫛田から預かった可愛い妹分、利知未を取り巻く環境整備を兼ね、新団員・九名の新入生に、団の規律を覚えさせる為だった。その新

団員の列に、宏治も並んでいた。

元々、背も小さく非力でもあるが、利知未が、宏治は見所のあるヤツだと言っていたので、特別に入団を許可された。補欠入団みたいな物だ。

城西中学応援団部は、これまでも、その裏の仕事にも堪えられるような、気合が入ったヤツばかりを入団させてきた。スカウト制にも近いものがある。大体が入団したがる奴等からして、普通じゃないのが多い。

そして宏治は、生傷が絶えない一年間を送る事に成る。

ゴールデンウィークに入る直前、利知未が放課後の応援団部室に寄って行くと、団長・副団長始め、新三年の団員が四、五人と、新二年生でも腕が発つ奴二人が、集まっていた。一人は、今年の旗持ちを務める、高坂 崇史だった。利知未の新しいクラスメートでもある。

「おう、瀬川。丁度良かった。チョイ買い出し頼んで良いか？」

橋田が、利知未を見た途端に言った。

「何だよ？ 久し振りに顔出したつてのに、買い出しかよ？」

不服そうに言った利知未の様子に、田崎が笑った。

「連休入る前に、軽く宴会でもやろうかって話したよ。勿論、瀬川も参加すんだろ？ 私服になって、チョチョイツと頼むよ？」

利知未は、私服をロッカーへ入れっぱなしにしていた。橋田と田崎は、先刻承知だ。利知未は、ふ、と軽く息を吐いて頭を掻く。

「シャーネーな。金は？」

「待ってる、徴収すつから。」

橋田が言つて、その場の団員達から、金を集め出した。

集められた、四千九百八十七円と言う、半端な金額の金を利知未に渡すと、全員揃って訓練に出て行った。団部の訓練場所は屋上だ。校庭は運動部の縄張りだ。応援する立場の者が、応援するべき相手



の邪魔をしては、お話しにならない。この時期は各運動部、春季大会を控えている。五月は応援団も忙しい。

利知未が服を着替えていると、ノックの音がして、宏治が部室へ踏み込んだ。ジーンズのファスナーはまだ上がっておらず、シャツも頭から被って、下ろし終わるかどうかのタイミングだ。宏治は慌てて戸を閉め、廊下から声を上げる。

「失礼しました！」

ン？と、利知未は思った。利知未が知っている宏治なら、ここは「ゴメンナサイ！」だろうと思う。ささとシャツを下ろし、ジーンズを確り履いてから、利知未はガラリと戸を開けた。

「何、畏まってんだ？」

戸の横に直立不動の、宏治の姿があった。

「着替え中とは知らず、失礼致しました！」

また、気張ったような敬語を使う。

「兎に角、入れよ？」

「はい！失礼致します！！！」

きつちり礼をして、利知未の後から部室に入る。利知未は変な感じだ。

部室へ入り、椅子へ座って机に片頬杖を付き、直立不動の宏治を眺めた。やや俯いてしまっている。良く見ると顔に怪我をしていた。「どーしたんだ？その顔。」

少し驚いて、利知未が聞いた。

「二年の先輩に、稽古付けて貰いました！」

「はあ？稽古！？…そーか、俺にも言ってたモンな。マジに腕っ節上げたいのか？」

宏治は、頑なな様子で頷いた。利知未は小さく溜息を付く。立ち上がり、棚から救急箱を取って来た。机の上に置きながら、声を掛ける。

「座れよ。イー顔が台無しだぜ？」

宏治が顔を上げ、驚いた顔を見せた。

「…自分でやります！」

「イーから、言う事聞けって。ほら。」

宏治の肩を押して、椅子へ座らせた。自分も椅子を一脚用意して、向かい合わせに並べて手当てを始める。

「恐れ入ります。」

小さく宏治が呟いた。作業しながら、利知未が言う。

「…な、宏治。その堅苦しい言葉、何とかならネー？」

「上級生に対する礼儀も、教わってます。」

「…そりゃ、そーかも知れネーケドさ。俺は別に団部の先輩って訳じゃネーし…、ダチだと思ってたんだけどな。」

「瀬川さんには、特に礼儀正しくする様、指導受けてます。」

小さな声で、宏治が言った。利知未は少し驚く。

「何で俺に？」

「下級生一同、指導されてます。」

利知未は去年の戦争功労者として、今や全団員がその名を知っている。

一般生徒には漏れ無い様に計らっているが、団部の新人には、その事も伝えられたと、宏治が言った。

「…ソーユー事が…。」

手当てを終えた利知未が、救急箱を棚に片付けながら呟いた。

椅子へ掛けて、俯いてる宏治を振り向く。

「宏治は、それで俺の事どう思ってたんだ？…恐いとか、思ったのか？」

宏治が顔を上げた。首を傾げる。

「そうは思わないです。瀬川さんは、おれの恩人だし、…感謝、かな…？うん、感謝してます。」

自分で自分の言葉に納得をしてから、利知未の顔を見た。

少しだけ笑顔になった宏治を見て、利知未は少々照れ臭い気がした。感謝なんて言葉、言われた事も無い。

「……ンじゃ、学校以外では、今まで通りにしてくれよ。何か、お前にそんな態度取られたら、妙な感じがするぜ。」

椅子に、つかつかと進んで行き、ガタンと音を立てて座り直した。

宏治は暫し考えてから、ニコリと頷いた。

「ソーします。」

そして立ち上がって、深深と礼をして言う。

「手当て、有難うございました！訓練、戻ります！！」

まだ少しタドタドしいながらも、団部式の挨拶をして、部室を出て行った。

利知未は、それを見送ってから買出しへ出かけた。

そんな事があって、今。ゴールデンウィークの一日目だ。

利知未は今日、初めて宏治の母親の店『バツカス』へと、行つて見ようと思っている。

まだ午前中だ。元々は寝起きの悪い利知未だ。学校も無いので、朝も九時近くまで、呑気に惰眠を貪っていた。

ノックがして、朝美が顔を出した。

「利知未！……って、まーだ寝てんの！？里沙が朝食の後片付け出来ないって言ってるよ。早く起きてきな！」

窓へ向かい、カーテンを思い切り良く開いてしまった。

「……ンン？眩しいなあ……。」

利知未は寝ぼけたまま、目を擦って、のんびりと起き出した。

「……全く、あんたって子は。呆れちゃうくらいの寝ぼすけだよ！ほら、さっさと起きて……！」

布団を剥いで、利知未を引っ張った。

「分かったよ、起きればイーンだろ……？！飯食いに行けば……。」

まだまだ寝呆けながら、朝美がいるのも構わずに、服を着替え出す。

「うわ！一応、ブラ着けてたんだ！？良くサイズあったね。」

朝美の言葉に、顔を顰めた。

「ウルセーな、どーだつてイーだろ？」

ぶつぶつ文句を言い始める。箆笥から優の古着を出してざっくりと着込み、ジーンズに履き替えた。着替えを終えた利知未の背中を押して、部屋を出ながら朝美が言う。

「あんた、どうせ暇でしょ？さつさとご飯終わらせて、ちょっと買い物付き合つてよ？」

「えー？！カッターな…。何、買っただよ？」

「夏服。後、まだ少ないけど水着も。そろそろ目欲しいデザインが出回ってるから、参考に眺めて来ようと思って。」

「…イーケド、夕方までには終わるよな？」

欠伸をしながら、利知未が言う。

「夕方から、何か予定あんの？」

「…チョットな。」

利知未は顔を洗い出す。

「そんな遅くはないから。」

「分かったよ。朝美、タオルくれよ。」

「待つてな。」

朝美は言いながら利知未の部屋へ入り、勝手に箆笥を開けてタオルを一本、持つて来て渡してやった。

それから利知未は階下へ降り、里沙に給仕をして貰って朝食を済ませた。再び自室へ向かうと、朝美が階段を登ってくる利知未の足音に気付いて、ドアから顔を出す。

「さつさと支度してね！」

「このままで良いじゃん。」

「そーんな、男か女か判んないカッコで、行く気？水着見てる時、嫌な思いすると思うけど？」

「じゃ、どーしろつてんだよ？」

不服そうに口をへの字にした利知未を、朝美は自室へ引つ張り込んだ。

数分後、パンツルックでも、それなりに女の子に見える服装をした利知未が、朝美に手を引かれて、下宿を出て行った。

「朝美の服、チョイ小さいと思う。」

利知未は膨れっ面だ。いつも兄のお古を着込んでいる利知未にとって、女物のピタリとした洋服は、どうも窮屈だ。元々、七分丈の袖デザインのＴシャツは、どうしても小さいようなイメージに感じた。「何言ってるのよ？それが丁度良い大きさなの！あんななんか、横幅はＳサイズでも良いくらい。」

「ソーは思えなー…。」

朝美は、今の利知未よりも五センチほど背が低い。１６０センチ無いくらいだ。洋服はＭサイズ。それで大体、丁度良い。利知未は今、１６４センチ程度の長身だった。しかし胸も無い変わりに、ウエストも細い。身長に合わせれば横幅がブカブカだし、横幅に合わせれば丈が短い。どうしても優の、メンズの古着が丁度良く感じる。

朝美に引つ張られながら、そっぽを向いて不機嫌そうな顔をしていた。

電車に乗って、横浜まで出た。駅ビルのファッションフロアで、朝美は利知未を連れ回して、あっちこっちと忙しい。利知未の両手には、大きなショッピンングバックが三つも下がっている。

「まだ買う気かよ…？」

ボトム・トップ・ワンピース・キャミソール…、それぞれ散々見て回り、全部で五着と夏のバックまで購入していた。それでもまだ飽きないで、サマーセーターの棚を物色している。利知未は呆れ顔だ。「なに言ってるのよ？今、見てるのはあんたの服だよ。今日の荷物持ちのお駄賃なんだから。」

「イーよ、そんなの…。だったら昼飯奢ってくれよ？」

そろそろ午後一時近い。もう二時間も、ショッピンングを続けていた。「つつーか、大体、良くそんな金、あるよな。」

「アルバイトしてたもん。」

「ドコで？」

「ファーストフード屋。知らなかった？駅前で。」

「…知らネー。」

「夏迄はやってる予定だから、今度くればイーじゃん？ポテトくらいならサービスしとくよ。」

棚の物色を続けながら、ニコリと笑った。

「あ、これ、利知未に似合いそう。」

爽やかなブルーで、ザックリと編まれているサマーセーターを、棚から引っ張り出す。両手が塞がっている、利知未の着丈に合わせて見て頷く。

「このデザインなら、Mで丈は平気そうじゃん。どー？」

「どー？って言われても…。」

仏頂面だ。それでも、まあまあ似合っている。

「決めた！じゃ、会計してくるから。そしたらチョットご飯食べて、八階の水着展示フロアに行こう。」

とつとレジに向かって行った。

「あーあ、一服してえ…。」

ぼやいて、朝美をその場で待った。

「あのさ、屋上のラーメンでイイぜ？」

レジを済ませて、戻って来た朝美に言う。

「ま、あんたがそれで良いんなら、構わないけど。」

「ソーしてくれよ、…天気も良かったよな。」

「ふーん、天気ね…？」

朝美が疑わしそうな目を、利知未に向けた。利知未は視線を無視し、先に立ってエレベーターへ向かった。

屋上に出ると、利知未は売店に背中を向ける姿勢で、売場よりもやや遠い席へと陣取った。朝美は、利知未の目的は承知だ。自分にも覚えのある事でもあるし、文句を言わずに、後へ従ってやった。席に付いた途端、パンツの尻ポケットからタバコを出し、火を着け

る利知未を、少し呆れ顔で眺めた。

「先に、なんか買ってきてくりゃイーじゃん。」

煙を吐き出して、利知未が言った。中学二年にはまず見えはしないが、それにしても何と言うか、濃慣れている。様に成って見えるから恐ろしい。朝美は素直に席を立て、売店へ向かった。

それからラーメンと、お好み焼きを昼食代わりに食べ、予定通りに水着の展示を眺めてから、下宿へ戻った。

「その服、最近、着て無いから、あんたに上げるよ。それと、これも持ってきたな。」

部屋へ荷物を運び込んでやった利知未に、買って来たサマーセーターと、出掛けに利知未が、ここで着替えて行った洋服を一纏めにして、袋に突っ込んで渡した。

「…一応、貰っとく。サンキュ。」

「どー致しまして。もう少しニコニコしてお礼、言って貰いたいところだけど。ま、勘弁してやるか。」

腰に手を当てニコリとして、部屋を出る利知未を見送った。

着替えをするのが面倒臭くなった利知未は、その服装のままで、再び出掛けて行った。

夕方五時前にバツカスへ着いた。店の扉をそつと開けて、顔を出した。

「すみません、まだ、開店前で……、」

振り向いて、笑顔で言い掛けて、美由紀は驚いた顔をする。

「あら、利知未さん！店、覗きに来たの？」

さつきと、また違う笑顔で聞いた。利知未は何故か照れる。

「…はい。…邪魔しても、良いですか…？」

「どーぞ。いつたい何時、顔出してくれるかと思ってたわ。」

そう言って、店内に迎え入れてくれた。

「今、準備中だから。ちょっと座って、待ってて貰える？」

「はい、失礼します。」

相変わらず、美由紀の前では、毒気が抜けてしまふ利知末だった。

店の中をキョロキョロと見回した。小さい店内で、カラオケがある訳でもない。九人掛けのＬ字型カウンター席と、四人掛けのボックス席が三つ。その中で、忙しげに立ち働く美由紀。

取り敢えず、隅のカウンター席に腰掛けると、美由紀がオレンジジュースを出してくれた。利知末は、ペコリと頭を下げた。

「また、宏治がお世話になってるみたいね？有難う。」

カウンターの準備をしながら、お礼を言ってくれた。利知末は、やはり何となく照れ臭い。少し赤くなって俯いてしまふ。

「別に、タイした事してないし。」

「だんだん、宏治の顔付きが変わってきたわよ。応援団って、厳しいのよね。…思い出したわ。私も、通っていた中学なのよ。」

「そうなんですか？…昔から、団部ってあったんだ。」

「城西中学の、応援団部の歴史は古いのよ。昔から、あの学校での立場も同じ。私達の頃は、人数も、もっと多かったんだけど…。時代かしらねえ…。段々、ああ言う気合の入ったコ達も減ってきたみたいよ。」

コロコロと笑った。

その後三〇分ほど、美由紀から昔の応援団部の話を聞いた。利知末は美由紀の初恋相手が、当時の応援団部員だった事を聞き、入学式の日になんと、気合の入った橋田に声を掛けていた事を納得した。

「昔のツツパリって、格好良かったのよ？利知末さん達からは、想像できないかもしれないけど。」

「…今のヤツ等も、結構、格好良いと思う。」

「あら、そうなの？じゃ、今度、誰か連れていらっしやい。私がじっくり、吟味してあげるから。」



美由紀は笑いながら言った。その美由紀に、利知未は益々、興味を惹かれたのだった。

### 三

六月。梅雨の季節。

今日も朝からしとしと降り続ける雨に、利知未は思わず溜息を付く。

今は授業中だ。最近、少しは真面目に、教室にいる事も増えて来た。

理由としては応援団部室に行っても、仲が良かった櫛田が卒業した所為か、橋田も以前よりは部室に入り浸る事が減ってきた事がある。

田崎は以前から、意外と真面目に授業を受けていたので、部室で顔を合わせる事が元々、少なかった。

その代わりと言っては何だが、最近はクラスメートで団旗持ちの高坂と、丁度、去年の橋田・田崎コンビのように実力を競っている同じく二年、大野 俊平が、どうやら入り浸り気味のようだ。

給食の時間になって高坂が教室へ戻って来た。さつさと平らげて、また教室を出て行く。暫くして廊下から声が掛かった。

「瀬川！チョイ、イーか？」

「何だよ？自分の教室で廊下に呼び出しかよ。」

「良いから、チョット来いよ。」

利知未はカッタルそうに椅子を立った。貴子が少し心配そうな顔をする。その貴子に、「ヘーキだよ」と声を掛け、廊下へ出て行く。

廊下には、隣のクラスの大野も待っていた。

「…で、なんだよ？」

「一年の手塚、お前の知り合いだろ？」

宏治の名前が出て来たので、少し驚いた。

「それがどーした？」

「堀田高のヤツに、ボコられたらしい。」

「マジかよ！？何時？」

先週末、宏治が買い物に出掛けた時、その途中で行き成り襲われたと言う。どうやら、この春卒業した川中のOBが、高校でまた上手い事、どうしようもない奴等に取り入り、面白半分で城西の学ランを来た、弱そうな一年を襲ったようだった。宏治もつくづく運が無い。

「で、お礼参りに行く事にした。」

「橋田センパイや、田崎センパイは承知か？」

「ああ。さつきチヨイ、報告してきた。」

黙っていた大野が答える。

「敵の人数も少ネーし、取り敢えずオレ等が出る事にしたんだよ。」

「で、手塚が絡んでるだろ？お前、どうする？」

利知末は暫く考える。確かに宏治が絡んでいるのなら、無視は出来ない。宏治は今や団部全体が公認の、利知末の弟分だ。だからこそ、この二人も利知末に声を掛けてきた。

宏治が補欠入団のような待遇なのは、利知末の一言があつたからだ。

「…何時だ？」

「今週末。明後日、土曜の昼に出る。」

「成る程。」

利知末はこの所の悪天候続きで、少々ムシャクシャしてもいた。

「相手は高校生なんだろ。平気か？」

「団長・副団、オレ等と瀬川。五人で何とかなるだろ。大体が手塚が団員って事も知らネー潜りだぜ？」

高坂がへ、と息を吐く。自信満万だ。

この二人、確かに今は実力高位者だが、やはり去年の団長・副団の実力には遠く及ぶ訳も無い。利知未は少々、不安も感じる。

現団長・橋田は中々ヤル事を知っているが、田崎はパワーの点でやや、弱い所がある。頭が切れるタイプで、パワー不足は知己でカバーしていた。そして二年二人の実力が如何程の物か、把握し切ってはいいない。

『ま、イーか。成るように成るだろ。』

そう心の中で呟いて、お礼参りに参加する意思を伝えた。

その日は、真面目に授業を受け、帰宅した。

翌日。利知未は二時間目から、久し振りに部室で時間を潰した。恐らく、こんな話しになっっているのだから、橋田も今日は顔を出すのでは無いかと踏んでいた。

三時間目になり、橋田が田崎とやって来た。

「珍しいな、瀬川。今年に入って、真面目になったンじゃなかったのか？」

田崎も珍しく、授業を抜け出してきた筈だった。

「センパイも、珍シーンじゃん？」

眺めていた雑誌を閉じる。

「高校への、お礼参りだ。色々、準備ってモンが有るんだぜ？」

田崎がニツと笑って見せる。

「高坂と大野、今日は来てネーのか？」

「朝は来てなかったぜ。どっかで気い入れてンじゃネーの？」

「ソーか。まあ良い。先ずは瀬川と話するか？」

橋田が田崎へ、軽く視線を向けた。田崎も頷く。

「そーだな。…本題、入るぜ？」

利知未にも視線を向ける。利知未も頷いて見せた。田崎が話し始める。

「敵は堀田高だったよな？…オレ、チョイ知り合いがインだよ。」

ニヤリとして見せた。知り合いツテで、今回の相手の事を少しリサーチして見たと言う。

「どうやら、他県からの入学者らしくてさ。一年のヤツなんだと。」

「で、川中OBの口車に乗ったって事か。」

利知未が呟く。田崎が一つ頷いて見せて、話を続けた。

「中学時代、結構なヤンチャ者だったらしくてさ、入学した時から鼻息の荒いヤツだったラシーぜ？ 実は堀高でも目立ってて、煙たがられてるって話した。っつー事で、今回オレ達がお礼参りしてボコったとしても、その後、堀高の上が出て来る心配は先ず無い。」

「何人いるんだ？」

「そいつと、取り巻き二、三人。そのウチの一人が、川中出身って訳だ。」

「ンじゃ、頭数は四対五って事か。」

「ソーなるな。…丁度良い相手だ。高坂達の力、試させて貰えるよ。」

「センパイは出ネーのか？」

「先ずは後ろで控えさせて貰う。…心配すんな。ヤバそうだったら直ぐ出てヤンぜ？」

少しだけ不安そうな顔色になった利知未に、田崎が頼もしい笑みを向けて言った。それで少し安心する。

「…で、瀬川。」

「なんだ？」

「お前、本当に着いてくか？」

いきなり橋田に問われて、利知未は少しびっくりする。

「俺が出てくと、なんか問題あんの？」

「…そう言う訳じゃネーよ。ただ、今回は敵も四人だからな。お前が出なくても何とかなる。」

橋田の本音は、櫛田から預かっている利知未を、余りヤバイ事へ首を突っ込ませたく無い、と言う所だ。利知未ならそう言う所に出したとしても、足手纏いになるとは思ってはいないし、返って強力な

助っ人である事も事実ではある。

「今回は、俺の弟分絡みだろ？一応、ケリ着けネーと気分がワリいぜ？」

「そうか…。ま、それなら、それで構わネーよ。好きなだけ暴れる。」

「ソーするよ。…心配してくれテンのか？サンキュー、センパイ！」  
ニコリとした利知未に、少々照れ臭い気分になった。橋田は視線を窓の外へ向け、相変わらず振り続く雨を眺めた。

利知未はその後、真面目に授業を受ける事にした。

昼休みになって、漸く高坂が学校へ来た。

「午前、ドコ行ってたんだよ？」

「テーサツ。」

「偵察？面倒な事やってンな。田崎センパイに会ったか？」

「インや、会ってネー。」

「話し、して来いよ。大野も連れてった方が良いぜ。」

「そーだな。」

そう言つて、高坂は再び教室を出て行つた。

高坂と大野は、偵察兼、堀高付近の下見に出掛けていたようだった。

放課後、利知未が部室へ顔を出すと、橋田・田崎・高坂・大野の四人が、明日の襲撃についての会議をしていた。清掃時間から続けていたらしい。

「お、来たな。明日、何処でヤツ等を待つか、決まったぜ。」

「何処だよ？」

「ヤツ等の溜まり場になつてる店、確認して来たんだよ。」

大野が答えた。利知未は気の無さそうに「ふーん」と言いながら、手近な椅子に掛けて片頬杖を突いた。

「何だよ？詰まんない顔して。」

高坂が聞く。利知未は、店の中で襲撃するのはポリシーに反する事だ。

「店の中で暴れんの、ヤなんだけどな。」

高坂をチラリと見て、視線を机の端に移す。

「じゃ、誘き出すか？」

大野が提案した。

「なんか良い案、ネーかな……。」

利知未が自問する様に呟いた。橋田は以前、櫛田が良く座っていた席の椅子の背凭れに、背中を深く預けて、腕を組んで上を見ていた。田崎はその斜め前の椅子に掛け、利知未同様、机に片頬杖を突いて思案顔だ。

元々、考えるより行動タイプの高坂は、壁に凭れ立ち腕を組んで天井を仰いでいる。端の席で、背凭れを前に椅子を跨ぐ様に座った大野も、何か案を捻り出そうと頑張っている。そのまま暫く沈黙が続く。

「……俺が、掻き回して誘き出すか。」

不意に利知未が呟いた。方法は浮かび掛けている。

その場の四人の頭には、櫛田の事が浮かんでいた。

今回のお礼参りは、利知未本人が『ケリを着けないと気分が悪い』と言っていた。今更、利知未の参戦に反対は無いが、必要以上に危ない事をさせるのは、また話が違う。

部内での利知未の立場は、本人の意思とは無関係に『姐さん』なのだ。

「面白そーな事、思いついた。」

四人の意思など知らない利知未が、ニヤリと笑って見せた。

翌日、利知未はセーラー服姿のままで、お礼参りに参加した。色仕掛け、と言う訳ではない。そんな物、利知未は持っていない。今回、敵が『城西中の学ランを着た弱そうな生徒を面白半分で襲

った』と言つ理由で宏治をボコつたと言つなら、見た目に強そうな野郎が出て行くよりは、自分が出て行つた方が上手く誘き出せるだろうと思つた。

利知未は服装を乱したツツパリではない。見た目は真面目な学生だ。ヤツ等の溜まり場になっている店は、見た目に危ないヤツ等が屯しているような店だ。

そこに見慣れないセーラー服姿の、真面目そうな女が入つて行くだけで、目立つだろうと踏んだ。要するに短絡馬鹿の集まりだ。

ああ言うヤツ等は、何時でも誰に対しても、自分は危険なヤツだと振れ回っていないと、落着かない。

利知未は店に入ると、出入り口近くの席へ着いて適当にオーダーをし、タバコを出して火を着けた。目立つ上に目立つ。

その様子を店外から窓越しに、高坂達は冷や冷やしながら監視した。

利知未の近くに、ヤツ等の一人が近付いた。一言、二言言葉を交わして、利知未がいきなり、その顔を目掛けてグラスの水を引つ掛けた。ガタン！と音をさせて、残りのヤツ等が立ち上がる。利知未は、水を掛けてやつた奴の脛を蹴り、隙を付いて店を走り出た。ヤツ等が追い掛けて飛出してくる。

脛を蹴られた奴は、ヒョコヒョコと片足を引き摺って走っていた。「高坂！」

道路の向こうから、利知未が声を投げた。高坂と大野も、同じ方向に向けて走り出す。計画通りに、近くの空き地を目指した。

空き地の隅。木陰で橋田がタバコを吸い、田崎が呑気に缶珈琲を飲んでいた。先頭を走つて来た利知未を見止めて、二人はヤレヤレと立ち上がる。のんびりと空き地の中ほどに向かう。

利知未・高坂・大野が振り向いて、追い掛けてきたヤツ等を迎えた。

「このアマ！イー度胸してんじゃネーか！？」

脛を蹴られた奴が、睨みを効かせて見せる。利知未は、どこでも良い様な顔をして見せ、頭を掻いて返す。

「良く言われるぜ。」

更にジリジリとしてきた連中に、高坂が声を上げた。

「先週、ウチの後輩ボコったヤツア、ドイツだ？！！」

「随分、律儀なヤツ等だな？今時、お礼参りとは！」

進み出てきたのは、角刈りを、そのまま伸ばしっぱなしにしたような頭をした、体格の良い男だった。そいつに体格勝ちをしているのは、利知未達の中では高坂だけだった。橋田も、それなりに良い体格をしているが、そいつに比べれば幅がやや狭い。

「お前か？！」

「だったらどーだつて？」

「キツチリ、礼させて貰うぜ！！！」

短気な高坂が、走り出した。

「中坊が、粹がってんじゃネーぜ！！！」

ヤツも吼えて、向かって来た高坂と組み合う形になった。大野も意外と素早く、背の高い細身のヤツに向かって行く。

利知未は後に続いて、残りの二人を相手にした。脛を蹴られた奴と、川中のOBだ。

走り出た利知未の両側から、二人が襲い掛かった。先ずは脛を蹴られた奴の攻撃を、身を屈める様にしてかわし、回り込みながらそいつの腕を掴んで、後ろに擦り上げる。パワーはあったが、利知未に比べればその動作は鈍い。変な悲鳴を上げる。敵の腕を擦り上げた姿勢の利知未に、川中OBが斜め横から、飛び掛る様にして襲いかかる。

腕を持った奴の身体を、そいつに向かって、後ろから蹴りを入れて押し出した。川中OBは仲間の身体を何とか交わした。蹴られた奴はつんのめる。転びはしなかった。数メートル先で踏鞴を踏んで止まる。利知未は、川中OBを睨みつけた。



「可愛い弟分ボコらせたの、テメーだな…？」

利知未の睨みには、迫力があつた。高校生の不良が一瞬、怯むほどだった。

後ろで乱闘を眺めていた田崎が、思わず口笛を吹く。

「瀬川、結構な迫力だな。」

呑気な様子だ。橋田は全体を眺めていた。高坂と大野が相手にしているヤツ等は、中々な腕っ節を持っていた。中二と高一だ。体格も踏んで来たであろう場数も、桁が違う。

「おう、出るぞ。」

低く田崎に呟いて、高坂と大野の喧嘩に進み出た。二人共ボロボロだ。それでも気迫は負けていなかった。

「了解。」

田崎も呑気な見学体制から気分を変え、表情を引き締めて歩き出した。

組み付いていた姿勢から弾き飛ばされ、高坂が転がった。直ぐに体制を立て直して向かって行こうとする。その肩を押えて、橋田が呟いた。

「良くやった。…休んでろ。」

「団長…、」

顔も身体もボロボロだが、気迫だけは、その表情にまだ残っている。「選手交代かあ？別にこっちは、かまわネーがあ？」

へらりと笑った敵の顔面に、橋田の懇親の力が籠った拳が襲った！一瞬、気を抜いていたそいつは、その勢いで後ろにグラリと傾きかける。体制を整える隙も与えずに、必殺技の回し蹴りが、鳩尾に決まった！

あつという間に、ケリが着いてしまった。

高坂は啞然とした。そして、直ぐにへへつと笑って、呟いた。

「…やっぱ、敵わネーな…。」

田崎は、大野を組み敷いている敵の背中に、後ろから膝を入れた。同時に大野も敵の頬を拳で張った。流石に堪った物では無かったら

しい。

「体格も、力もちゲンだ。悪く思ふなよ？」

田崎はニヤリと笑い、崩れた敵を見下ろした。

「助かりました。」

大野が敵の身体の下から抜け出して、田崎に言った。

「後は……」

と、振り向いた時、利知未は川中OBに、留めのボディーブローを見舞っていた。もう一人は既に、伸びて転がっていた。

「ゴシューショー様。」

横にクズ折れた敵に目もくれず、目に掛かっていた髪を払い上げる。そして、利知未は振り向いて、ニヤリと笑った。

「そっちも片、着いた見てーじゃネーか？」

怪我一つ負っていないその姿を、一同啞然と見つめてしまった。

橋田が声を立てて笑い出した。ボロボロになった二年二人を、誇らしげな微笑で眺めやる。

「瀬川にや、敵わネーな!？」

高坂と大野も、照れ臭そうな笑みを見せた。笑った拍子に傷が痛んで、顔を顰めた。田崎も、面白そうな顔をしていた。

二年二人は、三年二人に肩を貸されて恐縮しながら。利知未は、その後ろを呑気な様子で、のんびり歩いて堀高へ向かった。筋を通しに行ったのだ。

今の堀高の頭に面会し、経緯を報告して「お騒がせ致しました!」と、頭を下げる。

筋を通してきた中学生に、堀高の頭は感心した。今後は確り目を光らせる事を約束し、ボロボロな二年二人の手当てを、後輩に命じた。

手当てをしてくれた一年が、田崎の知り合いだった。音楽仲間だ。兄がバンドをやっていると言う。変わった活動をしているバンドらしかった。自分の趣味と違う音楽をしているので、自分は参加し

てい無いんだと言っていた。

その数日後。田崎に誘われ、利知未は『FOX』と言うバンドの見学へ行つて見る事にした。あの堀高生の、兄貴のバンドだ。

初めて入ったライブハウスの雰囲気、利知未はワクワク、ドキドキしていた。ここは楽しい場所だ。中学生が入るのは、色々問題がありそうだが、また来たいと思った。

ライブの後、『FOX』のリーダーと酒を飲んだ。

利知未がまだ中学二年の女だと聞いて、驚きながら興味を示した。  
「コイツ中々、筋がイーンすよ。」

田崎にそう聞いて、改めて今度、練習スタジオへ遊びに来いと誘ってくれた。

そしてまた、利知未の行動範囲が広がった。

#### 四

六月二十三日。利知未の元に、裕一から荷物が届いた。縦長のバツクで意外と大きい。

『誕生日おめでとう。優と金を出し合つて買ったよ。喧嘩されるよりはまだ安心だからな。上達したら、聞かせてくれよ?』

と、書かれた手紙が入っていた。

「マジかよ!? やつた!!!」

部屋で大声を上げた利知未の声に驚いて、朝美が顔を出した。

「何、届いたの?... あ、エレキギターじゃん! お兄さん?」

「ああ! まさか、本当に貰えるとは思わなかった...!」

利知未は早速、チューニングを始めた。

「あたしもアンタに、プレゼントがあるんだけど?」

朝美が渡してくれたのは、スツキリとしたデザインのサマージャケットだった。身体のラインが、綺麗に出るタイプのジャケットだ。「良いのかよ？折角バイトして溜めた金、使って。」

「ソー言う事を気にしないの！生意気だよ？オネーサンが可愛い妹分の為に選んで来た洋服を、まさか、いらなんなんて言わないよね？」

腰に手を当て言った朝美に、利知未はニコリと笑顔を見せた。

「サンキュ、貰っとく。朝美は誕生日、九月だよな？」

「九月十六日だよ。期待しておくよ。じゃーね。」

朝美はそう言って、軽く手を上げて部屋を出て行った。

翌朝、利知未は田崎から借りっぱなしになっていたギターを持って、部室へ行った。教室に置いておく訳にはいかない。

部室には、お礼参りの傷跡がまだ目立つ高坂と大野が入り浸っていた。

「よ、朝っぱらからサボりかよ？」

上機嫌な利知未の様子に、二人は怪我だらけの顔を見合わせる。

「何だよ、何か良い事でもあったのか？」

大野が言う。例のお礼参りから、この二年三人には妙に強い連帯感が生まれていた。

「へへ、マーな。」

取り敢えず自分のロッカーに、田崎のギターをしまった。何となくではあるが最近、利知未は一年の頃より、いくらか女らしい雰囲気も出始めてきた。普段、仲間と騒いでいる時は、まだまだ男同士の様だが、セーラー服姿でニコニコしている様子は、それなりに可愛くも見える。

「こないだ田崎センパイと、ライブ見に行つて来たんだ。」

ロッカーの扉を閉めながら、利知未が話題を変えた。

「ライブ？あー、あの堀高生の兄貴がやってるバンドか？」

「ソー。中々、楽しかったぜ？高坂と大野なら、私服で行ったら高校生くらいに見えるんじゃないか？今度、見に行かないか？」

「面白ソーだな。行くか？」

「ソーだな。」

「じゃ、今度の金曜、空いてるか？」

利知未は二人が座っている椅子の近くへ、近寄りながら聞いた。

「今ントコ、ヘーキだ。」

「オレも。」

「放課後、駅前で…、六時ごろで構わネーか？」

大野の家が、やや遠かった事を思い出した。自転車通学者だ。

「構わネーよ。私服、持ってくつから。」

「ンじゃ、決まりな？」

ニコリとした利知未に、二人声を揃えて「おう」と返事をした。

それから利知未は教室へ行き、高坂と大野は相変わらずサボりを決め込んで、町へ繰り出して行った。

出掛けた先で、二人が話している。高坂が言い出した。

「最近、瀬川チヨイ女っぽイトコあるよな？」

「ソーだよな。…ヤバイかも知れねーぞ。」

「何が？」

「三年の一部がさ、どーも最近、怪しいんだよ。」

学校では出来ない会話だった。二人は二年だ。三年についての噂話は、団部規律としてご法度だった。

「去年さ、瀬川が櫛田さんの女って事で、おれ等、今みたいに話し出来なかったろ？おれ達は同学年だったし、戦争時のアイツの活躍も目の当たりにしてたから、押さえ付けられたって、それほどストレス溜まらなかったじゃネーか？」

「マーな。確かにアイツ、ツエーし。こないだのお礼参りだって怪我一つ無かったモンな。」

頭を使うのは得意で無い高坂と、それなりに考えて行動する大野だ。

そういうタイプ同士は、丁度良いバランスで繋がる。

「でさ、今の三年は、瀬川やおれ等の上級生だろ、当然。」

「当たり前だな。いくらオレでも、それ位は頭働くぜ。」

高坂の言葉に、軽く笑ってしまった。

「ソー言う事じゃネーよ。…つまりさ、今のおれ等がもし、下級生の女に、去年の一般二年が、瀬川相手に取らされてた様な態度を強制されたら、やっぱストレス溜まるとオモワネーか？」

暫く考えて、高坂が頷いた。

「ソーだな。…つまり、その憂さをハラそうって三年がいるって事か？」

「そんな気配が、一部の三年にあるんだよ。」

高坂と大野は、利知未を仲間として完全に認めている。現二年の中で、利知未と対等に会話をする事が許されているのも二人だけだ。自然、守らなければ成らないと言う意識も生まれてくる。

どう言う思考回路で、その結論に結びついたのかは良く解らないが、高坂はキリリと表情を引き締めて呟いた。

「もうチョイ腕っ節、上げといった方が良いかもな。」

大野は、高坂の短絡意識を汲み取った。

「お前、三年敵に回して戦争でもおっぱじめる気か？」

「…そう言う事じゃネーのかよ？」

真面目な顔をして聞き返す高坂に、呆れ半分で笑ってしまった。

「短絡過ぎだ。先ずは、もうチョイ詳しいトコ確認して、団長に声掛けとく方が得策だろ？おれ等が三年敵に回してどーするよ？下級生に示しつかネーだろーが！」

「…その程度か？なんかチクリ見てーで、気ワリーな。」

「団規だろーが。覚えてるか？」

「そんな団規、あつたか？」

「団部内の抗争は是を厳しく禁ず。力は同胞を守る為に振るう物である。ってな？第二章・第一文。」

「ソーいや、あつたな、そんなの。」

「一年の頃、散々やったじゃネーか？…全く、呆れる程の物覚えの悪さだな。瀬川の記憶力、チョイ分けて貰えよ？」

眉を上げて、笑いながら高坂を見た。

橋田と田崎も、三年の一部の、やや異常な雰囲気は感じていた。利知未の事だ。多少の事でどうにか成ると思っではいなかったが、やはり最近の、利知未の雰囲気の変化に、怪しい事件を引き起こし兼ねないと思う。去年、三年の私物の中に含まれていた物がある。つまり、そう言う年頃と言う事だ。喧嘩では勝てないかもしれないが、別の暴力についてはまた、別物だ。

去年までの利知未が相手なら、そちらの方向の心配は先ず無かった。

最近、巷でも青少年保護法違反の事件が後を立たない。時代が危険な方向に進んで行っているのだ。

橋田と田崎は、櫛田から利知未の事を任されている。何があっても守り通す義務が在る。そこで、参謀・田崎の思案は別の所にあった。

「瀬川、部室から遠ざけた方が、良か無いか？」

昼休みに応援団部室で、橋田と話していた。

「ン？ああ、佐伯達の事か？」

「そうだよ。アイツ等、最近ヤバ目な感じで瀬川、見てンじゃネーか。」

「同じ年の男の事だ。何となく、怪しげな雰囲気は感じている。」

「確かにな。…最近の瀬川、タマに妙に女っぽい雰囲気出すからな。」

「オレ、姉貴がいるからさ、女の成長って身近で見てんだよ。けど女っぽくなり始めると結構、変化が早いんだよな。つい昨日までヘーキで取っ組み合いの喧嘩したりしてた癖に、いきなり『キャ！』とか黄色い声だして、階段上がる時スカート押えたりすんだよな。偶々、脱衣所で顔があったりすると、悲鳴上げてタオルとか齒ブラ

シとか投げてくんだぜ？別に姉貴見たって欲情しネーっての。」

田崎には二歳違いの姉がいた。田崎も中々、良い顔の持ち主だ。その姉も、外見は綺麗な顔の持ち主だ。橋田は兄がいるだけなので、田崎のそんな話を聞くと感心してしまう。

「ソー言うモンか？俺は良く解らネーケドな。」

「ソーなんだよ。で、こないだの堀田高の知り合い、覚えてンだろ？」

「ああ。兄貴がバンドやってるとか言う。」

「そのバンド兄貴、瀬川を気に入ってさ。弟ヅテで、バンドのボーカルにスカウトして来てんだよ。」

初耳だ。しかし、だから何だと言うのか、橋田はまだ考えが巡らない。

「だからさ、そっちに瀬川が参加するようになれば、団部に来る事も減るんじゃないかと、思ったワケだ。」

「しかし、瀬川の意味はどうなるんだ？」

「だからって、アイツがもしこのまま、そう言う雰囲気が出て来た時に、狼の群れにほおり出しく訳にも、イカネーだろ？…正直そう言う問題は、オレ達の手におえネーぜ。」

両手を軽く上げて、田崎が溜息をついた。

確かに、危険な場所から遠ざけるのは、良い案かもしれない。事実、そういった問題は、橋田達の手にはおえそうも無い。

「ソーかも知れネーな…。そのバンドは安全なのか？」

「安全だと思うぜ？今ボーカルやってる女も普通の短大生だし。リーダーは堀高のダチの兄貴だ。ベースリストもドラマーも、オレらに比べればよっぽど安全な世界にいるヤツ等ばかりだ。」

まだ少し懸念を隠せない様子の橋田に、田崎は笑って見せた。

「ライブハウスは、オレも成るべく顔出しして様子見とくよ。」

そう言われ、橋田もその案に乗ってみる事にした。マネージャーとしての名前は返って、そのままの方が都合が良いかも知れない。

「ソーだな。…後は、瀬川が何て言うかだな…。」



一応、二人の話し合いはここまでになった。暫くすると当の利知未が、部室へ顔を出した。

「入るぜ？田崎センパイ、ギター、長い事サンキュ。」

ロッカーへ向かいながら、利知未が言った。

「もう、良いのかよ？」

利知未が、へへへ、と良い笑顔を見せる。

「離れて暮してる兄貴達が、誕生日プレゼントって、エレキ送ってくれたんだ！昨日から、そっち弄ってる。」

田崎から借りていたギターを、手渡しながらそう言った。

「一応、チューニングもしてきたから、直ぐに弾けるぜ？」

「ソーか、ンじゃ返してくれる前に、何か弾いて見せてくれよ？」

利知未は、照れ臭そうな笑顔を見せて頷いた。

そして利知未は、最近、始めた作曲作品の内の一つを、披露して見せた。歌詞はまだ着いていない。中々、良い音だった。

「やるじゃネーか！自分で作ったのか？」

やや赤くなって頷く。その様子は、セーラー服の所為もあるのだろうが、女の子として可愛い感じに見えた。田崎と橋田は、顔を見合わせて頷いた。

「お前、こないだのバンド、どう思った？」

利知未が、明るい表情を見せる。

「結構、気に入った。曲はチョイ、ポップスチックだったケド、イ感じだったし。ボーカルの声も綺麗だったよな？」

「ソーか。…実は、あのバンドな、定期的に音楽、変えてんだよ。」

「ソーなのか？」

「ああ。二、三年に一回くらいのスパンでさ。ポップスの前は、ニユーミュージック系だったかな…？で、その度にボーカルも変わってんだけどさ。次はロックやるつもりらしい。」

「へー…。面白いバンドだな！でも、メンバー全員、上手かったから、どんな音楽でもイケそうだよ。」

ニコリと笑う。さっき利知未が弾いて見せたのは、ロック調の物だ

った。

「で、オレ、頼まれちゃったんだけど。」

「センパイが、ボーカルすんの？」

利知未は少し、嬉しそうだ。しかし田崎は、首を横に振る。

「イヤ。…瀬川、歌ってみる気無いか？声かけて見てくれって、頼まれてたんだ。」

利知未は目を丸くした。

「俺が！？だって、歌えるかどうか知らなーよ?!」

「この前、話の中でさ、アン時初めて聴いた曲覚えて、チョイ口ずさんでたろ？その歌聞いて、リーダーが感心してたんだよ。一度しか聴いてない曲を、殆ど間違い無いメロディーライン辿ってたってさ。」

利知未はまた照れる。あの時は少し酒も入っていて、確かに少し調子に乗って、歌って見せてしまった。

「それで、次のロック期のボーカル、探していた所だったらしくてさ。弟ツテのオレツテで、声が掛かった。…どうだ？」

利知未は照れながら、暫く考えた。やがて、言った。

「…面白ソーだけど、俺まだ中二だぜ？それに、したら、ここにアソマ来れなく成っちゃうよ。この場所、結構好きなんだよな。」

田崎と橋田は、少し嬉しい気もする。

「マネージャーのまま、いればイーじゃなーか？タマには顔出したって構わなーよ。」

橋田が言って、田崎が後を引き継ぐ。

「折角、筋イーンだから勿体なーよ。試して見たらどうだ？」

二人に勧められて、利知未は気持ち少し動いた。

「…そーだな…。チョイ考えて見るよ。今度の金曜、また行ってくるからさ、その時、良く音を聞いてくる。」

「そーか。じゃ、ダチには一応話し通したって、伝えとくぜ？」

「ああ。」

昼休み終了の予鈴が鳴った。利知未はギターを田崎に返して、部

室を出て行った。

橋田と田崎は、五、六時間目、珍しく部室に残って話をした。

「櫛田さん、何て言うかな…？」

田崎が、自分が計画した事だというのに、少し不安そうな顔をする。

「…ソーだな。一応、連絡しておくか。」

「一度、櫛田さんが修行してる店まで行って見ないか？」

どんな反応をされるかは判らないが、筋を通しておきたかった。

「チョク話し、した方がイイかも知れネーな。」

橋田も頷き、二人で櫛田に会いに行く計画を立て始めた。

もう一つの問題は、佐伯達の事だ。利知未を部から遠ざける事で、その事についても半分は、片が着いた様な気もするが、悩み所はまだまだある。そして結局、放課後まで部室に籠ってしまったのだった。

その週の金曜、利知未は高坂、大野と共にライブハウスへ行った。

「へー、中はコンな、なってるのか。」

高坂は店内に足を踏み入れると、回りを見渡しながら呟いた。

「結構、狭いだろ？俺もこの前びつくりした。」

ライブは開始する前で、店内の音もそれほど騒がしい感じはしない。

「チケット、ワンドリンク付ってなってるな。折角だ、酒飲もう。」

二、と、まだ怪我跡の目出つ顔で笑顔を作り、大野が言う。

「イーンじゃネー？」

利知未も頷いて、カウンターに向かった。

店内は暗い。私服姿の三人は中二に見える事も無かった。利知未は折角だったので、朝美から誕生日プレゼントに貰ったサマーギャケットを引っ掛けてきた。

利知未のサイズは探すのが大変だったらしく、大人のレディースから選び出して来ていた。中学生が着るようなデザインでは無い。この三人組、どうやら高校一、二年生くらいでも通りそうだった。

この手の店は、アルコールを提供するのにもガードが緩い。流石に小・中学生相手なら躊躇うかもしれないが、常連の中には高校生くらいの客も多かった。アルコールも学生服でさえなければ大体、出してしまふ。

団部で既に酒の味を覚えてしまっている三人には、まるで天国だ。

カクテルとビールで乾杯し、カウンターの片隅で立ったまま飲み始めた。利知未はタバコまで出して、火を着ける。

「お前、タバコ吸うんだったな。」

大野が改めて驚いた。普段、制服姿では吸わないようにしている。大野達がそれを知ったのは、先日のお礼参りの時だった。

「ン？ああ。…最初は単なる反抗心ってヤツで、始めたんだけどな…？」

指に挟んだタバコの煙を見つめた。薄暗さと服装も手伝って、大人の女のように見えた。見ていたのが田崎なら納得したかもしれない。『女の成長は、早いんだよ』と言っていたくらいだ。

「お前さ、最近、一部のセンパイに、何か言われたりしなかったか？」

「何だよ？それ。」

「…イヤ、何となく。」

高坂の質問に、利知未はチョットびっくり顔を見せた。大野が、その高坂の頭を軽く小突く。『直接過ぎだっつーんだよ！』と、口バク付だ。

「…別に、特に、何にもネーよ？」

利知未は、少し考えてそう答えた。

「ソーか…。」

「いきなり変な事、聞くなよ。何かあったか？」

利知未の質問返しに、高坂が慌てて笑顔を作る。

「何にもネーよ。ワリー。」

「お、始まる見たいだぜ？」

大野が、ステージを振り向いた。

ライブの後、利知未達はステージを降りて来たFOXのメンバーと対面した。乾杯して一通りの感想を話し終えてから、リーダーが聞いた。

「で、参加する気になった？」

団部の喋りに慣れて来た利知未には、物凄く軽い喋りに聞こえた。やや戸惑う。高坂と大野は、何の話しか見当がつかない。

「…興味は、アンだけだな。」

「何かヤバイ事、あるかな？」

「学校にバレたらヤバイし…。俺、アンマ自信無いよ。」

「学校か…。確かに問題ありそうね。」

現ボーカルのアキが頷いた。リーダーは考えがあるような顔をしていた。

「ま、それに着いては、任せてくれよ？」

ニヤリと、不敵な笑みを見せたのだった。

## 五

七月も、既に中旬を過ぎた。直ぐに夏休みだ。

利知未は週一、二回、都内の貸しスタジオへ通い始めている。

FOXのリーダーから根気強く勧誘され、ついにバンドへの参加を承諾したのだ。高坂と大野は、利知未がボーカルとして声を掛けられていたと言う事を聞き、びっくりしていた。

しかも、団長と副団からも言われていたと聞いて、二度びっくりだ。

翌日、早速二人は田崎に確認を取りに言った。そこで、団長達も自分達と同じ様な事を、気にしていた事を知った。

つまり、一部の三年団部メンバーの、怪しい雰囲気だ。

それで高坂と大野も、利知未にバンド参加を勧めた。利知未自身は、FOXのリーダーに加えて、仲の良い四人にまで口を揃えられてしまい、半分、戸惑いながらの決定だ。

リーダーが考えていた案と言うのは、利知未が初めて練習スタジオへ顔を出した時に、判明した。

そのスタジオに初めて行ったのは、七月に入って直ぐの火曜だった。

兄達から贈られたギターを担いで、スタジオへ足を踏み込むと、FOXのメンバーが全員、喜んで迎えてくれた。

「俺、アンマ人前で歌った事、無いんだけど…、本当に良いのか？」返って、利知未の方が恐縮してしまった。

「全然、構わないよ。コレから慣れてくれれば。」

ニコリと、リーダーが言う。

「アキだって、バンドで歌ったのが人前で歌う、初体験だったモンな。」

ベーシストの秋葉 拓也が、現ボーカルの大原 亜希子に話を振った。

「私も、自信なんて無かったモン。大体、ウチのリーダーは強引過ぎな所があるのよね。」

ドラマー、北崎 敬太を振り向く。顔を合わせて頷いた。

「なに言ってるのよ？原石、見つけんの、オレの得意技だよ？」

リーダーが、歯を見せてニンマリと笑う。

このリーダーは、高校入学と同時にFOXを立ち上げ、つい先日、二十歳になったばかりだった。アキが今年十九歳で短大生。拓はリーダーの同級生だ。敬太は高三。早生まれで、まだ十八にもなっていないかった。そこに、まだ中学二年の利知未が入って、バンドの平

均年齢は約十八才と若い。若いからこそ拘りも無く、色々なジャンルに挑戦して行けるのかもしれない。頭も柔らかく、覚えも早い時期だから、自分達の可能性がどんどん広がって行く事を実感出来るのが、楽しいのだろう。利知末を受け入れてくれたのは、そんなメンバー達だった。

「原石って言われても、良く解らないな……。」

呟くような利知末の言葉に、リーダーがまたニヤリとする。

「自分から売り込む様なタイプは、単なる鍍金の場合が多いんだよ？」

メンバー全員を、チラリと目に入れて続ける。

「ウチのメンバーは全員、オレがスカウトして来てる。アキは知り合いのツテで、一緒にカラオケ行っただけだったけどね。拓は中学時代からベースやってるの知ってたし、敬太は別のバンドから引き抜いて来た。」

「ホント、強引なんだよ。」

敬太が初めてマトモに口を聞いた。顔は笑っていた。見ているこっちまでくすぐったくなる様な、可愛い笑顔だった。年上の男にそんな感想を持ったのは、利知末は始めてだ。

「ま、兎に角、やるだけやって見る。よろしく。」

改めて、利知末も笑顔で挨拶を交わした。

「さて、参加を決めてくれた途端なんだけど、取り敢えず何でも良いから歌って見てくれない？」

リーダーに言われて、利知末は黙って頷いた。少し照れ臭かったが、好きなバンドの曲を、ギターを弾きながらコーラスだけ歌って見せた。

全員、表情が変わった。思った以上だ。

利知末の声は、高い方ではなかった。どちらかと言うと、年の割に低めでハスキー掛かった、中性的な声質だ。ちょうど声代わりをし始めた少年のような歌声だった。しかし伸びは良かった。

偶にふざけて、団部の声出し訓練を真似して、参加していた事があった。知識としての複式発声は知っている。

歌い終わった時、メンバーが口笛を投げて寄越したり、拍手をしてくれたりして、利知未は、また少し照れた。

「イケルな。」

「ああ。」

リーダーの呟きに拓が頷き、アキが少々、気の毒そうな顔をした。

「真面目に、あれで行くの…?」

敬太は、やはり口を出さない。ただ、アキと似た表情で利知未を見ていた。

「前、学校にバレたらヤバイって話し、したよね?」

「ああ。それはマジ、ヤバイ…。俺、結構、学校から睨まれてるトコロあるから…。」

利知未はヤバイと言いながら、意外と呑気な様子で頭を掻いた。

リーダーは成る程と、頷いて見せる。

「正体、隠してステージに立って貰いたいんだけどな?」

軽めな調子で言う。

「隠すって、具体的にどうすんだ…?」

「先ず、年齢。十六くらいにや、見えるよな?」

メンバーに振る。全員それぞれ、頷いて寄越した。

「それと、性別…。」

利知未は面食らう。間違われて面倒臭くなって、誤魔化し通したことはあったが、始めから偽るつもりで行動した事は、無かったつもりだ。

「身長も、それ位あったら何とか通りそうだし。」

軽めの口調に戻って、リーダーが言う。

「そんなの、…ヘーキなのか?」

頭は余り働いてこなかったが、不安だけは浮かんでくる。

何かの拍子で、このバンドのファンにバレたりしないのだろうか…?



「オレの見た目では、誤魔化し切れると踏んだんだよね。それに年も性別も違うつて事で通れば、借りに学校に知れそうになったつて、その情報だけでかなり誤魔化せると思うんだけどな？」  
中々、良い案だろう？と、言わんばかりの調子だ。

確かに、あの薄暗いライブハウスの中で、1ステージ一時間程度だ。

声質も身長も、そして全体の見た目も、バレ無いでいる事は容易いかもしれない。何しろ、真つ昼間の河原から、店の中まで一緒に行動したアダムのマスターが、利知未の事を全く男だと思い込んだまま別れたのは、まだつい一年前の事だ。

その時も、利知未は騙そうとした訳ではない。普通にしていただけだ。

「…どーなつても、知らネーぜ？」

利知未は暫く考えてから、そう答えた。

「ヘーキだよ。責任取れなんて言わないから。」

リーダーはニヤリと、もう一度笑つて見せた。

そして一月後、FOXの新たなボーカリスト、『セガワ』が誕生した。

夏休みに入つて直ぐ、橋田と田崎は、櫛田に会いに行つた。

櫛田は、修行をしている店から徒歩五分ほどの距離にある、六帖一間の狭い部屋を借りていた。店の定休が毎週水曜と聞いていたのだ、橋田達は櫛田の休日に合わせて。

狭い部屋に上がり挨拶をした後、櫛田が自ら入れてくれた緑茶を、恐縮して受け取った。

「瀬川が音楽、始めました。」

田崎が、口を切つて本題に入る。櫛田は随分と落着いていた。

「そうか。ま、良いんじゃないか。アイツが楽しんでりゃ。」

雰囲気は一端の男だ。社会に出れば、自然とそんな風になるのだろうと、橋田は、何となく貫禄を増した様に見える櫛田を見ている。

「最近、どうも三年団員の様子が、危なく感じたんです。」

話しは田崎が進めて行く。利知未をバンドに繋げた自分が報告するのが、筋だと思っている。

自分の卒業後の、可愛い妹分の変化を聞き、櫛田は忙しい毎日に忘れ勝ちになっていた、応援団時代を思い出す。頬が少し緩む。イイ男の顔になっていた。橋田は自分の実兄と比べ見て感心した。環境は男の成長に、こうも影響する物か。

「櫛田を、どう面倒見て行くかは、お前等に任せた事だ。報告は感謝する。…お蔭で久し振りに、団部時代を思い出せたぜ。」

二、と、春に電車へ乗り込んだ時に見せた、櫛田らしい笑顔を見せた。

「その内、櫛田も連れて来い。アイツがそんなに女つばいトコ見せるようになったってんなら、約束通り奢ってやるって言うてな？」

櫛田が昔、良く見せていた不敵な笑顔を見て、橋田も田崎も何処かホッとした気分になった。

その後、櫛田は遙々、電車を乗り継いでやってきてくれた後輩に、近所の店で昼飯を奢ってやった。団部時代から、後輩にとって恐れ多い相手であると同時に、イイ兄貴分でもあった。

そして駅まで送ってくれ、別れ際に言った。

「櫛田の事は、引き続き宜しく頼むぞ。アイツは、どうしても危なっかしい感じがする。」

橋田と田崎は顔を見合わせて、面白そうな顔付きになった。

「櫛田さんは、やっぱり櫛田に惚れていたらしい。」

そう改めて感じた。利知未の話を聞いていた時の櫛田は、何とも言えない、嬉しそうな顔をしていた。ただ、その思いを告げるつもり

も無さそうだった。良い思い出にしようとしているのかも知れない。二人も感じていた。利知未には、男女のそう言った雰囲気は合わなそうだ。何時でも無邪気な顔で、自分たちの周りをチヨロチヨロしている様子が、周囲に何となく幸せな気分を与えてくれる。

「分かりました。オレらが、守り通します。」

田崎が改めて、請け負った。橋田も頼もしげに頷いて見せる。

「お前等も、イイ顔になってきたじゃネーか？」

その二人に、嬉しそうな顔をして橋田が言った。

「まだ、まだっす。飯、ご馳走様でした！」

「今度は、瀬川も連れてきます。」

「おう、よろしく言っといってくれ。じゃーな。」

「失礼します！」

キビキビとした礼をして、二人は改札へ入って行った。

櫛田は二人を見送り、来た道を一人、引き返す。

卒業式後、祝賀会の時に、校庭を眺めながら利知未が言った言葉を思い出した。

「…イイ女、ね。…センパイこそ、イイ寿司職人になってくれよな！？」

ニコリと笑顔で、そう返された。修行で躰き掛けた時、何時もその言葉は、櫛田を支えてくれていたのだった。

その夏休みの利知未は、忙しかった。毎週二、三日は、バンドメンバーと練習に励む。

三日間は、裕一のアパートにも泊まりに行った。偶には橋田のバイクを弄らせて貰いにも行ったし、宏治の喧嘩稽古にも付き合った。宿題もある。

そして、初めてライブハウスに立ったのは、八月三週目の、金曜日だった。

七月末、宏治が下宿へやって来た。偶々、玲子が玄関先に出た。  
「今日は！瀬川さん、いますか？」

まだ幼さが残る宏治の姿には勿論、見覚えがある。利知末の後輩、  
応援団部の一年だ。玲子は応援団部員に対して、余り良い顔はしな  
い。

『何でも直ぐに暴力で片付けるなんて、乱暴過ぎよ！』  
と、最近の利知末との口喧嘩理由ランキング、三位だ。

「少々、お待ち下さい。」

やや冷たい様にも感じる慇懃無礼な態度で、宏治を玄関先に待たせ  
ると、利知末を起こしに行った。そろそろ十時近くにもなろうと言  
うのに、昨夜も遅くに帰って来た利知末は、まだ夢の中だ。口喧嘩  
理由ランキング、堂々の一位である。

『女子中学二年生が、夜遊びなんて、不謹慎過ぎる！』  
と、言う事である。利知末が遅くなる日は、バンドの練習日だ。

里沙は最近、喧嘩で傷を作ってくるのと、どちらがマシか思案顔  
だ。

玲子に乱暴に起こされ、ぶつぶつと文句を言いながら、着替えと  
洗面を済ませ、利知末は階下へ降りて行った。

喧嘩稽古と言っても、利知末が宏治に教えているのは、合気道の  
触りだけだ。先ずは怪我をしない事を覚えさせ、次に自分の身を守  
れるくらいの、受け流し方を教えている。それで充分だと思ってい  
る。

元々、宏治は力も余り無く、身体も小さいので、どうしても攻撃  
力を上げるのは難しい。大体、宏治相手に喧嘩を吹っかけてくるの  
は、自分よりも弱そうな相手を探して歩いている、卑怯者ばかりだ。  
そんなヤツ等、マトモに相手にする事も無い。そんな相手に、障  
害を起こしてパクられたりしたら詰らない。

そしてこの訓練のお蔭で、宏治の生傷は徐々に減って行ったのだ  
った。

八月に入り、利知未は久し振りに、橋田のバイクへ乗せて貰った。バイクに興味を持った利知未に、橋田の兄も好意的に接してくれた。

橋田兄弟との交流を持つようになって、利知未は朝美と橋田兄が、クラスメートで有った事を知り、「世間は狭いな」と、まるで大人のような事を言って、橋田兄弟を笑わせた。

「トコロで、こないだ櫛田さんに、挨拶しに行つて来たぜ？」

バイク整備をしながら、橋田が言った。了、団長の方だ。兄は始と言う名前だ。橋田の両親は、息子二人で子作りを射ち止めにしたらしい…。

「えー、何で声、掛けてくれなかったんだよ!？」

膨れた利知未を見て、橋田が笑う。

「最近お前、バタバタしてたろーが？よろしくって言つてたぜ。今度、店に來いってさ。」

「連れてつてくれよ？俺、店の場所、知らネーモン。」

「そーだな。今度、案内してやんぜ。」

「約束だぜ!？」

橋田家の、庭先での事だった。利知未は部員名簿に書かれた住所をチェックして、いきなり電話をしてやつて来た。

「おい、了!この前のガソリン代、払えよ?…ン？」

橋田兄、始が、玄関を出て来ながら声を掛けた。珍しい客を見て眉を上げる。夏の服装は身体のラインも隠れないので、利知未の性別に誤解も生まれなかった。

「兄貴だ。元・応援団部・副団、橋田 始。」

「あー、やつぱ気合入つてンな!チース、お邪魔してまつす!」

利知未は始に、応援団式礼をして見せた。

「何だよ?生意気に!彼女か？」

橋田兄弟は体格が意外と良かった。どちらかと言うと細身にも見え

るが、絞まった筋肉が特徴だ。背は170センチ台と言う所か。先ず平均だ。

「チゲーよ、団部のマネージャー。」

「ケ、どっちにしたって生意気だな。俺らの時代はマネージャーなんていなかったぜ。それより金、寄越せ。約束あんだよ。」

『判ったよ』と言いながら、ポケットから財布を出して兄に金を払った。

その日は橋田のバイクへ乗せて貰い、定休日のスーパーの、広い駐車場まで行った。そこで少し、運転を教えて貰った。

初ステージに立つ前に、裕一のアパートへ泊まりに行った。

「ギター持ってこようと思ったんだけどさ、アンプが無いから音、出せネーんだよな。」

「普段は、如何してるんだ？」

「センパイのお古、譲って貰ったんだ。」

ニコリと笑う。態度や言葉使いは、対して変わらなかったが、微妙な部分がまた少し、少女らしく成長していた。笑顔が良い基準だ。

利知未自身は、昔と変わらない表情を作っているつもりだが、自分でも気付かない内に、変化して来ている。

『これは、意外と早くに女らしい利知未を見る事が、出来るようになるかも知れないな...。』

裕一は、そんな風に思って微笑んだ。

翌日から、また一泊だけ共に過ごした優とは、相変わらず喧嘩ばかりしていた。口喧嘩で、また舌を出し合う兄を見て、利知未はバンドの敬太を思い出した。ふと、真面目な顔をする。

『敬太って、優兄と同学年の筈だよな...？そーいや、橋田センパイの兄貴と、朝美も同じだ...！...何で、こんなに皆、違っんだろっ？』

その利知未の表情を見て、喧嘩中だった優も、気が反れてしまう。

「なに、急にマジな顔してんだよ？」

気が抜けた優の声に、我に返った。優の皿から惣菜を奪い返した。喧嘩の理由は、夕飯の惣菜の奪い合いだった。

「あ！テメー！！」

再び優が叫ぶ。利知未はへへっと笑いながら、奪い返した惣菜を口に入れた。

「もう遅いぜ？大体、チャンと人数分で分けてんだ。人の分、横取りすんなよな！？」

口に、いったいに頬張りながら言う利知未に、裕一もつい前日に感じた希望を、打ち消される思いがする。

『まだまだ、時間掛かるか…？やっぱり。』

諦めたような笑顔を見せた。

そして、八月・第三金曜日の夜。

利知未は薄暗いステージの上で、ギターの最終チェックをしながら、胸のドキドキと戦っていた。

『コレが、俺の初めてのステージだ…。上手くデキンのかな…？』

自分の楽器を調節しながら、リーダーと拓が、代わる代わるに声を掛けてくれた。『大丈夫だ、心配するな』小声で囁く。

全員の調節が終わったのを確認して、リーダーが敬太に合図を送った。

敬太が頷いて、スティックを打ち鳴らす。

「One・Two・Three・Four！」

そして…、闇から新しい音楽が弾けた…！

幸せの種 第三章 了（次回は、9月14日22時頃 更新予定です。）





### 三章 桜から、夏・新しい出会いへ…（後書き）

三章も最後までお付き合い頂き、有り難うございました。 < ー >

> 利知未中学編は、ここで漸く折り返し地点です。これから先、利知未の人生を決定する大きな出来事が待っております。只今、編集中です！

宜しければ、またお付き合いをお願いいたします。

## 四章 中二・新しい季節… 『FOX』

（前書き）

利知未の懐かしい中学時代の思い出話、第四章です。この作品は、'80年代後半から'90年代初めを時代背景としたフィクションです。（本文上の事件、出来事の下敷きとなっております。）  
中学二年の夏休み最後の金曜。利知未は初めて、ライブハウスのステージに上がっています。ここから、利知未の新しい世界が開けます。

この作品は決して、未成年の喫煙、ヤンチャ行動を推奨するものではないです。ご理解の上、お楽しみ下さい。

## 四章 中二・新しい季節… 『FOX』

### 四章 中二・新しい季節… 『FOX』

一

音が弾けた。利知未の前に、新しい世界が広がった！

初めて向かったマイクの前で、利知未は不思議な高揚感に包まれた。

『今、歌ってる…。音が回りに響いてる…。なんか、イー気分だ…。』

歌っている利知未の姿からは、イメージし難かったかもしれない。

ロックのリズムに乗りながら、利知未の気持ちは静かだった。静かに、けれど強い思いが、胸の内に溢れている。

一年の頃の、応援団部の仲間との出会いや、その中で感じて来た、嬉しかったり、ワクワクした気持ちを音に乗せていた。利知未が自分で作った曲だった。FOXのメンバーは、その曲を気に入ってくれた。バンドで演奏出来る様に皆が力を貸してくれ、アレンジまで完成させた曲だ。

曲が終わりポーズが決まった時、客席から拍手と歓声と口笛が飛んで来た。利知未は我に返り、急に恥かしくなった。

「どーも、FOXです！三週間ぶりっす！オヒサー！」

リーダーがマイクに向かい、軽い声を上げた。

「結成当時から聞いてくれていた皆！今回は恒例に則りチェンシグ・ライブだ！今回からロックで行きます！！」

リーダーが担当していた部分を利知未が担当して、ロック調にアレンジした持ち曲の、イントロ部分を短く演奏した。

元々はニューミュージック時代の曲だと言う事だった。歌詞は確

かに、少し暗めだった。今回はイントロ部分のみの演奏だ。

再び、リーダーがマイクに向かう。

「ボーカルもチェンジで、新メンバー！紹介しちゃうよ？！はい、その女の子、見惚れて無いで、名前も覚えちゃってやってくれよ！？」

カウンターで二、三人の友人らしい仲間に注目され、カクテルグラスを持ったまま、ボーっとしていた少女を指差した。

「今回からのボーカルは、オレ達の中で一番若い！なんとマダマダ未来ある *s i x t e e n*！！マイク前に立ってる美少年、その名は『セガワ』！！」

ファンファーレ代わりに、短い音が演奏された。客席から早速、女性の声援が飛んだ。利知未は思わず照れてしまう。その様子に、また黄色い声援だ。それに混じって野次も飛んだ。

「アキちゃん、止めちゃったの？！」

少年の声だ。アキファンらしい。

「おいおい、アキファンの君！何処に目、ついてんだ？後ろでキーボード弾いてたでしょ！？&コーラス部隊でマダマダ活躍して貰うよ！我 *F O X* の天使の歌声、止めるわけ無いでしょ！？」

このバンドの *M C* は何時もこんな感じで、客席と対話しながら進んでいるらしかった。それはそれで人気がある。リーダーが空気を作るのが上手かった。利知未は内心、感心してしまう。

「変わらない応援と、ご声援よろしく！」

アキがキーボードを軽く鳴らして見せ、『ヤッホー！』と手を振った。

アキファンが手を振り返す。自分に手を振られて嬉しそうだ。

「はい、セガワ。ご挨拶！」

アキに振られて、照れ臭いながらもマイクに向かい直した。

「……ども、始めまして。よろしく。」

その照れた利知未のローテンションに、リーダーが大袈裟にこけて見せた。客席からは笑いと、早速セガワを気に入ったらしい女性フ

アンから『可愛いー!!』と言う声が上がった。

「お前、もう少しハイテンションになれネーのかい?!」

リーダーの突っ込みに、利知未は照れたまま答えた。

「…って言われても、…ハズカシーンだけど?」

「歌ってる時と違い過ぎだっツーの!あのテンションは何処に行っ  
てしまったんだ!?!」

目を剥く様に見せながら、再びリーダーが突っ込んだ。

「そんなに違うかな…?歌ってる時は気持ち良かったんだけどな…  
?」

「…全く、お前は歌口ボツトか?プログラムされた事しか出来ない  
とか、言わないでくれよ?」

「歌口ボツトって、ジュークボックスとか言うやつ?」

利知未は素で惚けてしまう。再びリーダーがリアクションを見せ、  
二人の会話に客席からはクスクスと笑いが漏れ出した。改めて仕切  
りなおす。

「ま、普段はあんまり愛想良くないヤツだけど、声は抜群だ!可愛  
がってやって下さい。…では、セガワをハイテンションにする為に  
そろそろ次の曲、聞いて貰います!」

それからMCを入れながら、五曲ほど演奏した。

リーダーのMCは上手くて、それだけのファンと言うのも存在す  
るらしかった。偶にバイトで、結婚式の二次会の司会など頼まれる  
事があるらしい。

約一時間のステージが終わり、別のバンドが演奏を始めた。

FOXのメンバーは客席へ回って、軽い打ち上げ変わりに酒を飲  
んだ。

セガワのデビューステージ、成功の打ち上げ変わりだ。

利知未が客席へ回ると、早速ファンが近寄って来た。先ずは握手  
を求められ、照れながらそれに応じた。リーダーにも言われていた  
事だったので、精々、少年っぽく振舞いながら、ファンサービスで

軽く話しをする。早くも取り巻きが五人ほど出来てしまっていた。

その様子を、酒を飲みながら満足げにリーダーが見ている。アキは自分のファンと話をしながら、利知未の事を気にしてくれていた。取り巻きとの話題が突っ込んだ質問、「何処の高校？彼女はいるの？どんな子が好み？」等と言う事に入ってしまったタイミングで、利知未を自分の近くに呼んでくれた。ファンに断って、利知未は取り巻きの中から抜けた。

それから一時間ほどメンバーと飲み、九時前に店を出ようとした。

「次の練習日に、今日のギャラ渡すよ。」

リーダーから出掛けに言われ、利知未は少し驚いた。

「ギャラ？そんなモン、あんの？！」

「当然。自分でチケット売ればチョコ三割ギャラになるし、店で売ったチケット売り上げからも、いくらか貰えるんだよ。一種のビジネス。」

拓が説明してくれた。これは特殊な例らしい。本来は自分達でチケットを捌いて、売り切れない分は、持ち出しのパターンが殆どだ。

このライブハウスは客を呼ぶ為の手段として、このような体制を取っているらしい。初めてステージに立たせるバンドは、オーディションで決めていると言う。それ以降はバンドの人気に応じて、バイト料として支払ってくれる。参加しているバンド側にとっては、良いライブハウスだ。

自然、その中で人気を維持し、新ファンを獲得しようとするバンドの向上意識は高くなる。それで、このライブハウスに出演するバンドは、アマチュアの中でも高レベルな所が多いと言う事だった。

「へー。じゃ、もうちょい頑張らないとな…。」

目を見開いて言う利知未に、リーダーからチェックが入った。

「セガワ、目、見開き禁止な？」

囁き声である。

「何で？」

「そう言う顔すると、ガキっぽく見える。後、女顔に戻り易い。」  
利知末はもう一度、目を見張ってしまふ。

「学校にバレたら、ヤバインだよね？」

ニコリと、笑顔で釘を刺されてしまった。

店を出ると、いきなり声を掛けられた。

「FOXのセガワだよね？」

「ソーだけど、アンタ誰？」

良く見ると、自分が紹介された時にリーダーから指差されていた、カウンターの少女だった。

「アタシ、由美。ライブ、すっごく良かったよ！」

FOXのファンか、と思った。改めて少年らしく振舞う。

「……ども。リーダーや拓は、まだ中で飲んでるぜ？」

ニコリともしない利知末に、由美は、それでも構わず話し掛ける。

「アンタに用があんの。ちょっと付き合ってよ？」

近付いてきて、利知末の腕に自分の腕を絡ませようとした。利知末は反射的に、その腕をかわした。由美の息はかなり酒臭かった。

「……かなり酔ってんじゃネーの？ 酔っ払いの面倒見んのは、ご免だ。」

冷たくあしらわれ、由美の頭に血が上る。

「ファンを大事にしないと、痛い目見るよ？」

少女らしからぬ睨みを効かせた。利知末は少し感心してしまった。

由美の目は、それなりの修羅場を体験してきた目だった。

「どんな目を見るって？」

修羅場の数なら、利知末だって負けていない。相手がどう出て来るか隙無く構えながら、軽く睨み返して見た。

由美は完全に苛立ちを感じていた。酒の所為も勿論あったが、元々が短気な性格だった。利知末の実力は知らないが、自分には使い

なれた刃物があった。喧嘩に使うのではない。昔なら『カマイタチ』と呼ばれていた掬りの方法、バッグやポケットの下を刃物で切つて、財布を掬り取るために何時も持ち歩いており、手にも馴染んでいる刃物だ。

その凶器を素早く指に挟んで、利知未に対して振りかぶった。

利知未はそれ以上の素早さで、由美の腕を掴んだ。そのまま背中に擦り上げる。酔っ払った少女が、利知未に敵う筈は無い。

「危ネーな…。」

利知未は呟いて、小さく悲鳴を上げた由美の手から刃物を取り上げた。

「こんなモン、振り回してんじゃネーよ。」

言つて、トンと軽く背中を押してやる。前によるけるくらいの物だろうと思つていたが、由美は、そのまま転んでしまった。

それにも驚いたが、それよりも先ず、取り上げた刃物をどうし様かと考えた。軽く周りを見回して、青いゴミバケツを見つけた。

道に投げ捨てては危険だとも思い、利知未はゴミバケツの蓋を開けて刃物を捨てた。やや屈んだ所為で、背中のギターがずり落ちそうになり、それを直す。それから由美を振り向いた。

由美は転んだ姿勢のまま、少し妙な顔をして利知未を眺めていた。余りにも服装や、やっている事に比べて、律儀な利知未の行動に改めて興味を惹かれた。

「…このコ、可愛いかも。」

同い年の男だと思ひ込んでいる、バンドのボーカリスト相手に、母性がくすぐられる思いだ。初めて感じるような思いだった。

「悪かったな。まさか、其処まで足に来てるとは思わなかった。」  
言いながらジーンズで汚れた手を拭い、自分に差し出している手を、由美は掴んで、思い切り引っ張った。そのまま唇を奪った。

慌てて離れた利知未が、手の甲で唇を拭っている。

「…酒臭…。」

ぼそりと呟く様子が、また可愛く見えた。



利知未はシヨックを受けた。

男でステージに立っているのだから、こんな事があっても仕方が無いかもしれない。だが、本当の利知未は、まだ中学二年の少女だ。勿論キスの経験なんか無かった。初恋をした覚えさえ無いのだから当然だ。

利知未は、同性のファンにファーストキスを奪われてしまった。

「可愛ー。…アタシ、アンタの大ファンに、なっちゃった。」

挑戦的な笑みを見せ、由美が言った。そして自分で立ち上がり、洋服の汚れを軽く払う。再び利知未を確り見据えて、続けて言った。

「今日の一番始めの曲も気に入った。…アンタが作ったの？」

見つめられながら、利知未はシヨックを隠して呟いた。

「…ソーだよ。」

由美は、そっぽを向いてしまった利知未を、微笑して見つめ続ける。

「彼女いるの？」

「どーだってイーだろ？さっさと帰れよ。終電、無くなる。」

仏頂面のまま言った利知未の様子に、クスリと声を出して笑った。再び腕を絡めて行く。

外そうと身動きする利知未に、今度こそ逃げられない様に、さっきよりも力を入れた。

「アンタが駅まで送ってくれるんなら、帰ってもイーよ？」

「何で俺が！？」

寄り添う由美を睨みつける。

「さっき転んだ時、足くじいたんだけど。…責任、取りなさいよ。」

命令口調で言われて、利知未は渋々頷いた。

「…分かったよ。」

その言葉に満足げな笑顔を見せて、由美が言った。

「ファンは大切にしなきゃね。」

利知未はまた、そっぽを向いてしまう。

「…勝手に言ってるよ。」

そして、少し足を引き摺って歩く由美を、仕方なく駅まで送って行

った。

翌週の練習日、スタジオで利知未は前回のギャラとして、三千五百六円と言つ、半端な金を貰った。

「バンドへのギャラから練習スタジオ代引いて、五等分の金額だ。電車代くらいにはなるだろ？」

「こんなに貰えるのか？俺、精々、千円くらいかと思ってた。」  
目を丸くした利知未に、リーダーから突っ込みが入った。

「見開き禁止。あの日、オレ達のライブ時間に入った人数が49人いたんだよ。チケット代の四割計算。」

「へー。そんなに入るんだ。あのライブハウス。」

「最高六十八人が一応、キャパになってるらしいよ？どんな手使つて、あの広さをそんなキャパ申告してんのか、不思議だね。」

拓が笑いながら説明してくれた。リーダーがムードメーカーで、拓が実務担当の関係らしい。

「あのさ、あの時、再来週のチケット五枚売ってくれて、言われてたんだけど。どうすりゃ良いんだ？」

今度はリーダーが目を丸くした。初ステージでリピーターまで付けてしまった利知未の人氣に、自分の目の確かさを実感して、満足げな笑みを見せる。

「渡しとくよ。ココに自分で日付入れて、サイン入れて、金は先に貰っておいた方が良い。」

FOXのロゴが印刷された、ブルーの厚画用紙製のチケットを十枚渡された。店の名前と場所は印刷済みだ。時間は手書きで入っていた。

「皆、これ持つてんのか？」

「今ントコ、リーダーの集客が一番、多いかな？次はアキだね。」  
拓が説明してくれた。大体いつも一人平均、四、五枚は売っているという。先週のライブは三週間振りだったので、個人の売り分が余

り無かったと言う。

利知未は、その金を溜めて行く事に決めた。溜めておけばギター関係の物も買えるとは思うが、十六歳になったら直ぐにバイクの免許を取りたいと思っていたので、その資金にしようと思った。高校に入って直ぐバイトを始めたとしても、利知未の誕生日まででは大した金が溜まる訳がないと、思ったからだ。

「分かった。じゃ、今週のライブの時に、また来るって言うてたから、その時に売るよ。いくらで売るんだ？」

「当日入れば千六百で、前売り千四百円が基本だけど…、千はライブハウスに払って、後四百円分は相手の金によって、いくらか割り引いてやってるヤツもいるよな？」

拓がリーダーに聞く。

「別のバンドは、ソー言うヤツが結構いるらしい。オレ達は余りやらない。それだけの価値のあるライブをやるからって売ってるよ。」利知未は感心した。けれど自分のダチ関係には、いくらか安く譲ろうかとも思った。中学生の小遣いじゃタ力が知れている。

「…俺、中学生割引しても、良いかな…？」

リーダーの顔を覗き込んで見た。リーダーは笑顔を見せた。

「セガワの友達関係じゃ仕方ないな。ケド、酒は成るべく飲まない様に言っておいてくれよ？…一杯くらいなら多めに見るけど。」

それはそうだと利知未も納得した。何かあつたら責任問題だ。そして、そんな感想を持った自分に驚いた。

今までは、年上の先輩に守られて来ただけだ。自分が責任を持つ事、そんな事は考えた事も無かった。何となく、くすぐったいような気分になる。

「分かった。じゃ、千二百円くらいにしようかな。」

「良いんじゃないか？…さて、練習、始めよう。」

リーダーが空気を変え、メンバーが一斉に真面目な顔付きに変わった。

一月もすると利知未は、FOXのセガワとしてかなりの人気が出て来てしまった。ファンは若い女の子が多かった。チケットも毎回平均で十枚は売れる。毎週金曜FOXのライブ時間は、狭いライブハウスが満員電車並の混みようだ。

それに従いライブハウスからのギャラも、手取りで五千円近く入るようになった。一月大体、二万三千円余りの金の手元に残る。

利知未は溜まった金を通帳で見た時、改めて自分の実力を上げて行こうと決心し、努力もする様になった。

田崎は時々、ライブハウスに行って目を光らせている。利知未が少年としてステージに立っている事を知り驚いた。しかも人気もあるらしい。

九月下旬、利知未は久し振りに応援団部室へ顔を出した。

「瀬川、お前、本当に正体バレてないのか？」

部室へ入った途端、橋田に聞かれた。

「何が？…って、ああ、ライブの事か。…今ントコは。」

田崎から聞いたのだろうと直ぐに見当がつく。向かいの椅子に掛けた。

「ソーか…。ま、何にしても、お前が楽しけりゃ、それが一番かな。」

「…ソーだな、楽しんでるよ。張り合いが出来た感じだ。」

ニコリと笑顔を見せた利知未に、夏より更に少女らしい雰囲気を見た。バンドでは少年として振舞っている筈なのにと、少し驚く。その橋田の顔に、利知未が首を傾げた。

「俺、なんか変な事でも、やったか？」

キョトンとした顔が、また少女らしい表情だった。

「…いや。…今度、櫛田さんの店に行つて見るか？」

櫛田に判断して貰おうと思った。もしかしたら上寿司位には、有り付けるかもしれない。

「イーな！連れてつてくれよ？田崎センパイも一緒に、三人で行こうぜ！」

橋田の思惑に気付かないまま、利知未はニコリと頷いた。

## 二

十月。ある土曜日、利知未は現在の担任・須加から指導室に呼び出された。

最近、学校には真面目に来ているし、授業も受けている。喧嘩もしていない。思い当たる節があるとしたら、バンド活動くらいだった。

しかし、利知未がアマチュアバンドに参加している事は、学校側には知られていない筈だった。念の為、心の準備をして部屋に入る。  
「失礼します。」

「どうぞ。…取り敢えず座って。」

須加に勧められて、椅子へ掛けた。

「進路相談には、まだ早過ぎデスヨ？」

言葉にも一応は気を付ける。国語教師の須加は、一年の時の担任・体育教師の松田に比べて更に厳しかった。しかも、尊敬語、謙譲語、丁寧語など、現国の教科書まで持ち出して、説明を始める。利知未は、説明など長々されるのは大嫌いだ。巧い担任選択だ。

「そうですね。進路相談はまだ先で構いませんけれど…、まあ、その事については、最近の瀬川さんの生活態度と、成績を合わせて見ても、それ程、心配はなさそうですよ。」

先ずはニコリと、先制攻撃をされた。利知未は、この担任がやや苦手だ。

「ソーデスカ。では、何でス力？」

利知未も笑顔を作って見せてみた。須加から笑顔返しを受ける。

「今日は、ある噂が私の耳に入ったので、それを確かめる為に瀬川さんに来て貰いました。」

「はぁ……。」

軽く視線を外した利知未をじつと見つめて、須加が言った。

「毎週、火・水・金曜、帰宅が遅いそうですね？」

「……玲子か？有得る……。」

情報の出所を推察し、表情が変わってしまいそうな所を抑え、利知未は可愛らしく惚けて見せた。

「え？何かの間違いじゃないですか？昨日もウチにイマシタケド？

！」

「……そうですか。もう一つ。貴女によく似たヒトを、都内のあるお店で見掛けたと言う、噂が聞こえて来たのですけど……。まさかねえ……。」

須加が小首を傾げて、利知未の姿をマジマジと観察した。

「どんな店、なんデスカ？」

「……お店の名前は言えませんが……。……そこで見掛けた貴女に似た人と言うのは、どうやら高校一年の男子学生らしいと言うので……。瀬川さんは少々、中性的な顔立ちをしていますから、もしかして思ったのですか……。」

「やっぱ来た！……何処までも誤魔化し通すぜ！」

リーダーに言われた、女顔に戻り易いと言う表情。目を見開いた感じにして、精々、少女らしく見える様に小首を傾げてみながら返す。  
「え！？俺が高校一年の男に見えますか！？センセイ眼鏡合ってる？」

須加は、その言葉使いに反応した。

「瀬川さん、俺、ではなく、私。眼鏡は合ってます……。貴女と話している、ついペースを乱されてしまいます。」  
軽く溜息をつく。

「……まあ、言葉使いは今は良いでしょう。……そうですね。いくら顔

立ちが中性的とは言え、大勢の人を欺く事までは、そうそう出来る事では有りませんからね…。分かりました。結構です。教室に戻って下さい。」

「ハイ、失礼致しマシタ。」

心の中では舌を出していた。『へ、ザマ見ろ！』そんな気分だ。

利知未は出入り口で一礼し、部屋を出て行った。

次に来た十月の行事は、体育祭だ。

去年は体育祭でつい良い成績を残してしまい、結果、運動部からしつこい勧誘を受けてしまった。今年の体育祭は力を抜いて行こうと思っていた矢先、貴子の推薦で、クラス対抗リレーのアンカーに抜擢されてしまった。

「えー、冗談だろ?! 嫌だよ、そんな面倒臭い事!」

つい大声で反対して、貴子に笑顔で言われてしまう。

「このクラスの女子で、短距離走、一番早いのは利知未だね? 他に反対の人はいますか?!」

二学期の副委員長を仰せつかっている貴子が、教卓からクラスメイトに声を投げた。反対はいなかった。高坂までニヤニヤしている。

「おう、瀬川! オレがバッチリ応援してやんぜ?!」

その高坂に、貴子がニコリと頷いた。

「頼もしい応援団長もいるし、断れないよね? 利知未。」

「ケ、覚えてるよ?」

利知未は高坂を軽く睨みつけた。高坂はへへん、と舌を出す。

貴子は相変わらず小柄だったが、それでも二年になって、150センチ近くまでは身長が伸びていた。利知未は相変わらずジリジリと伸び続け、今は165に届くかどうかの長身だ。

そして貴子は、相変わらず田崎に片思いを続けていた。その所為もあるのかも知れないが、益々、可愛らしい外見へと成長して来た。

実は最近ちよつとモテている。

性格は相変わらずの強気、積極的な様子で、クラス委員として女子からも信頼が厚い。貴子の決定イコール、クラスの決定と同じ様な効力がある。利知未は、それで最近よく利用されていた。それでも変わらず仲は良い。担任も、利知未にとって良いお目付け役だと思っている節があつた。

貴子の、利知未・利用方法は、クラスの三分の一程を占めている、学校からは問題児と称される部類の生徒の、統一係りだ。

喧嘩は勿論、利知未がダントツ。成績もクラス単位で言ったら、いつも三位までに名前が挙がる。生活態度は少々不真面目な所も見受けられるが、利知未が学校行事に確りと参加すれば、自然と問題児グループも後に続くから不思議だつた。

実はそのグループ、FOXのライブを良く見に行っている。セガワの良い顧客だつた。

そこで利知未を見て、内心ファンになってしまっている生徒も多かった。自然、利知未に対する言葉使いも、団部の後輩と同じ様な感じだ。

そして変な虫がつかない様、クラスで目を光らせているのは高坂だ。

このクラス、やや別クラスに比べて異様な雰囲気を持っていた。だが、それが今の所は上手い事働いて、纏まりも中々に良い。

そんなクラスを委員として纏めるのは、やはり、貴子の様なタイプが打って付けだった。良いバランスである。

それから利知未は、体育祭までの約二週間、放課後の一時間をリレー練習に参加させられるハメに陥つた。ある日、クラスのセガワファンが、練習中に気の毒そうな声を掛けてきた。

「瀬川さんも大変っスね。バンドの練習も行つてんっスヨね？」  
その生徒も俊足で、嫌々ながら男子リレーに参加させられる事にな



った。細川 保と言う。

「ン？ああ…。貴子に言われちゃ、しょーがネーよな。お前こそ、良くOKしたじゃネーか？」

利知未の言葉に、細川は曖昧な笑顔を見せる。利知未が参加するのだから、自分達も断れない。しかし、問題児メンバーが利知未に対して、そんな義理を通そうとしている事は、知らない事だ。利知未が強制した事は、今までも一度もない。

「…仕方ネーっす。…トコロで来週、別の学校のダチ連れて行きたいんすけど…。」

「千二百で良いぜ。中学生だろ？酒の事は、言っておいてくれよ。」

「分かりました。じゃ、明日、金持って来ます。」

「毎度！」

そんな調子でまた、FOXのファンが増えて行くのだった。

体育祭、利知未たちのクラスは、優秀な成績で終了した。

最後のクラス対抗リレーの時、高坂が応援団で鍛えた喉で、約束通りクラス全員を指揮って派手な応援をかましてくれた。

利知未は走りながら、かなり恥ずかしい思いをした。どうやら、他のクラスの団部メンバー、取り分け団長・副団長は、遠目で眺めながら苦笑していたらしい。

翌日の応援団部室で、高坂が二人から突っ込まれていた。

「お前、なんツー目立った応援してたんだよ？」

ニヤニヤしながら、田崎が言った。

「アリヤ、誰の案だ？今時アイドルのコンサートじゃあるまいし。」  
橋田も、思い出し笑いをしてしまいそうなのを、堪えて聞く。

「アレは、ウチの副委員長が悪ノリして…。」

高坂も照れ笑いとも、単なる笑いともつかないような、微妙な表情だ。

話題に上っている応援は、利知未が参加する対抗リレーの時、ク

ラス全員がピンクと白の画用紙を使ってやった、人文字応援の事だった。高坂の号令に従い、『ハートマーク、セガワ、目指せ、優勝！』と、やった事だ。言葉も笑えた。

「我クラスのー！アイドルー！瀬川のー！健闘を祈ってー！」

と来て、途中で貴子始め、女子クラスメートが黄色い声援を上げていた。

傍から見ていたら、本当に面白かった。応援が良かったクラスに贈られる賞があった。その『応援団賞』は、見事、二年四組が頂いた。

対抗リレーの男子アンカーを務めた、問題児バージオンもあった。  
「二年四組　！最速の男　！細川のー！完勝を祈ってー！」

と来て、人文字は『稲妻マーク、細川、目指せ、完勝！』だ。画用紙は青と黄色だった。

因みに、皆でお揃いのハッピを引っ掛けていた。

その話題の時、利知未が応援団部室に顔を出した。

「二年四組のアイドル登場！」

田崎が利知未の顔を見て、クスクス笑いながら言う。

「止めてくれよ、スッゲー恥かしかつたんだ……！」

顔を赤らめて、斜め下を向いた利知未に、橋田が言った。

「櫛田さんの修行してる店、高坂と大野も連れて行こうと思っているんだが。お前はと思う？」

高坂が先ず、驚いた。利知未は顔を上げ、ニコリとする。

「良いんじゃないか。……って事は？」

「ああ。来年度は決めたよ。」

「おめでとう、高坂。来年度、団長決定だよ。」

利知未が笑顔を、高坂に向けた。田崎も頷いて見ている。

「……え？マジっすか？！」

「マジだよ。文化祭が終わったら、直ぐ権限譲渡すっからな？気い引き締めてかかれよ。」

田崎が言った。

高坂は驚いた顔を嬉しげな表情に変え、そして直ぐに引き締める。  
「光栄です！精一杯、後、引き継がせて頂きます！！」

キツチリと応援団式礼をする。橋田と田崎は顔を合わせて頷いた。

そこに大野が来て、決定事項を聞かされた。大野も驚いたが、直ぐに気を引き締め、高坂と同じく返事をして、キツチリと応援団式礼をする。

学校の裏を仕切る事、応援団を纏める事、そしてラスト一年の利知末の中学生生活を守る事。全てにおいて、この二人が一番適任だと橋田・田崎の二人は話し合っていたのだった。

十一月に入って直ぐ、五人は櫛田の店へ行った。

その日の朝、櫛田は店の親方と先輩方に対して、後輩が進路を考える参考に、自分の働いている所を見学したいと言っていると、断りを入れた。

親方は、この七ヶ月余りの櫛田の働き振りを見て、内心目を掛けていた。直ぐに良い返事をくれた。

「そうか、中卒で職人修行を考えてるヤツがいるんだな。分かった。精々、良い見本に成ってやんな！」

パツキリした職人氣質の親方で、下町人情が残っているような人だった。

「ありがとうございます！忙しい時間、ずらすよう言っておきましたんで、済みませんが、よろしくお願いします！！」

応援団で鍛えた声と、キビキビとした態度は、この修行に入ってからも役に立っていた。

最近では洗い物だけではなく、米の研ぎ方から徐々にではあるが、職人修行的な事も、教えて貰い始めていた。だが、まだまだ、下っ端だ。かつての後輩に、腰も低く、ヘコヘコしている自分の様子を見せるのは、結構な根性がある事だった。

それでも数日前、橋田から相談を受けたとき、見せてやるべきだと心を決めた。

橋田は、進学ではなく、中卒での修行人生を、考えているらしかった。

田崎は元々、授業態度も真面目な方だし、成績もさほど悪くはないので、高校進学組になるだろう。三年間、気を許し合って来た仲間と離れて行くのも、寂しい事ではあるが、自分の人生を歩く為には、仕方ない。既に、そんな時期だった。

利知未達が、昼の忙しい時間をずらして店へ入ると、客も疎らになった店内から、威勢の良い声が響いた。

「っラシャいませ！」

いら、が聞こえない寿司屋らしい、元気な声だ。櫛田の声も響いていた。

五人は恐る恐る店内へ踏み込んだ。ココは、正しく大人の世界だ。本来なら中学生が、保護者も無く入れるような所では、勿論ない。

「失礼します、櫛田さんの後輩です。今日は、そろそろ押し掛けて申し訳有りません！」

橋田がキビキビとした挨拶を交わした。今日、どう言う理由で持つてココへ来られたのか、全員、承知していた。素直に橋田の後に従った。

「いらっしやい！聞いてるよ！ま、座わんな。」

緑茶を櫛田が出してくれた。下っ端の仕事だ。五人共、恐縮して受け取る。

そして二時間ほどの間、カウンターから中の様子を見学しながら、櫛田の奢りで、『桔梗』という名前の並寿司のセットを戴いた。

その間、始めは緊張していた五人を、親方自ら色々話し掛けてくれ、気持ちを解してくれた。良い店だと思った。

奥の板場で、正しく下っ端仕事を黙々と続ける櫛田の姿に、不思議

議と感動を覚えた。社会へ修行に出ると言う事は、こう言う事なんだな、と、何となくでも感じる事が出来た。

仕事中の事でもあるし、櫛田と話す時間など無いだろうと諦め掛けた時、親方が言った。

「櫛田は中学時代、かなり暴れてたそうだな。だが、修行を続けられる根性だけは、ウチの店でも一番だ。将来、どう云う職種の道を行こうとしてんのかは知らねーが、あの根性は見習って良い。」

「はい、お蔭で決心つきそうです。」

橋田の言葉に切符の良い笑顔を見せて、板場に声を掛けた。

「櫛田！二時間、休憩行つて来い！夜の仕込みには戻れ！」

振り向いた櫛田が、驚いた顔をした。まさか、そんな事を言っただけとは思ひも寄らなかった。通常は一時間程の休憩だ。

「ハイ！有り難う御座います！！」

キツチリと礼をして、素直に厚意を受け取った。

店から徒歩五分の、櫛田のアパートへ六人で向かった。

櫛田は軽く飯を腹に入れてから仕事へ戻ると言う。利知未は思いついて、何か作ってやる事にした。狭いがキッチンもちやんとある。

「センパイ、俺が何か作ってやるよ！何が食いたい？！」

ニコリとした利知未を見て、櫛田がリクエストした。

「……久し振りに、お前の作った親子丼が食いたいな。」

「そんなんで良いのかよ？俺、アレから結構、腕上がってんだぜ？」

「！」

やや、膨れ気味の顔をした利知未を見て、櫛田は以前よりも女らしくなった様子に気付く。膨れ方が、ちょっと違う感じだ。

今、他のメンバーがいる事に、感謝半分、残念な気分半分と言う所だ。しかし、利知未の事は、そう言った対象にするつもりは無かった。

櫛田自身、良く解らないが、妹の様な感じが丁度良いような気が

している。男女の関係で見てしまい、何時かどうにかなって行くよりは、お互いが大人になった時、懐かしく語り合える女であって欲しかった。

利知未は特別だ。そう思った。

「俺が食いたいんだよ。腕の上達を見せてくれんなら、何かもう一つ作ってみるや。全員で吟味してやんぜ？」

昔の碎けた口調に戻った櫛田を、利知未は、やや眩しい物を見る様な思いだ。恐らく橋田達も、何かを感じている。

「分かったよ。じゃ、親子丼と、今日は味噌汁にすつか？で、後は…、魚でも焼いてやるよ。どーだ？」

冷蔵庫の中身を検分して、利知未が言った。炊いた飯はある。

「良いな。一時間で出来るか？」

「任せるよ?!」

「おれ達、何か手伝うか？」

「じゃ、買い物、行ってくれるか？今メモるよ。センパイ、紙と鉛筆。」

「足りない物、あつたか？」

首を傾げながら、櫛田が電話の隣に置いてあつたメモとペンを渡した。

「チヨイね。」

そ知らぬ顔で軽く口笛を吹きながら、利知未がさらさらとペンを走らせる。横で構えている大野に、一枚破いて金と一緒に渡した。

「二十分で戻ってくれよ？」

「了解。…でも、多くないか？」

「良いんだよ。よろしく。」

玄関から送り出して手を振る。高坂も一緒に出て行った。橋田と田崎は、櫛田の顔色を見るが、『ココにいる』と目で言われ、三人で色々な事を話しながら料理が出来上がるのを待った。

利知未は本当に一時間で親子丼と味噌汁、焼き魚を作って出した。「どーだよ？腕、上がってるだろ？」

自慢げに言い、正座のまま胸を反らして見せる。コンロの上では何故か、もう一つの鍋がグツグツと美味しそうな音を立てている。

「…ああ、美味い。」

本当に美味そうに食った。あつという間に平らげてしまった。利知未がキッチンに立つ。

「何、作ってるんだ？」

「センパイ、夕飯と明日の朝飯、兼用で食ってくれよ。…昔、ばあちゃんに教えて貰った煮物だけどさ？」

振り向いてニコリとした利知未に、一同、女を見た気がしたのだ。つた。

### 三

今年も文化祭シーズン到来だ。恒例通り応援団部は、校内警備の役目を仰せつかっていた。今年も利知未は部室に入り浸っている。

つい先日、橋田達と櫛田の店に行き、その働き振りを見せて貰って来たばかりだ。

「櫛田センパイ、何かカッコ良くなってたよな。」

同じく部室に入り浸っている、橋田と高坂に利知未が言った。

「ソーだな。やっぱ、社会に出ると違うんだろうな。」

高坂が言い、橋田は何か思う様な顔付きになる。

「橋田センパイ。職人って言うよりも、技術者になるのか？センパイの考えてる進路って。」

「ん？…ああ、ソーなるんだろーな…。だけど、修行するって観点から見たら、同じだとは思ってる。」

物思いから呼び戻された様子で、利知未に答えてくれた。微かな笑

顔だ。橋田も最近、随分と大人びた顔付きになっていた。

利知未は、身近な男達がどんどん格好良く成長している様子に、最近、自分でも良く解らない感情を持つ事がある。

偶に良い顔で微笑まれて、何となく照れ臭い気分になる。

『…やっぱり男と女は、成長の仕方が違うモノなのかな…？』  
そんな風にも感じている。

そうなつてくると、FOXでの自分の立ち居振舞いも、せめて身近な男達に見劣りがない様にしなければなら無いと思えてくる。改めて団部の仲間を、良く研究する様になった。

音楽は、やはり楽しい。バンドのメンバーの事も好きだ。歌っている瞬間は、本当に気持ちが良い。だから、まだ止めたく無い。もう少し頑張りたい。

そんな思いと裏腹に、このまま少年として貫き通す事が、本当に可能なのかと言う不安も感じ始めていた。やはり身近な仲間達の影響だろう。また応援団部は、男の中でも更に男っぽく成長をしていく連中が集まり安い。

「…今年は見回り、俺も一緒に回って見ようかな…？」  
ふと、利知未が思いついた事を口にした。

「良いんじゃないか？そろそろオレが行く時間だから、ついて来いヨ？」

高坂が二、と、笑顔で言った。

「ツイデに手塚も連れ回してやれ。」

「そーっスね。じゃ、チヨイ出てきます。瀬川、行くぜ？」

橋田に言われて、高坂が利知未を促しながら椅子から立ち上がった。

「橋田センパイは、ココにいるのか？」

「俺と田崎は、交代でココに詰める事にしたんだ。行って来い。」  
「了解！」

先に立って、入り口を出掛けていた高坂に続いた。



「高坂、チヨイ待て。」

橋田に呼ばれて高坂が振り向く。利知未は先に部屋を出る。

「…解つてると思うが、三年に注意しとけよ？」

低く、戸口の高坂にだけ聞こえる様に、橋田が言った。

「解つてます。もし何かあったら、手塚、ココに走らせます。」

確りと頷いた高坂に、頷き返した。

「何やってんだ、行こうぜ？」

廊下から利知未の声がして、高坂が部室を出て行った。

去年と同じく、正門横に警備詰め所を設け、そこには力のバランスでグループ分けされた一・二年が、時間交代で詰めている。

三年は、基本的には各自で校内を回っているが、時々、一・二年の監視に現れる。

「手塚、見回り行くぞ！ついて来い！」

「ハイ！」

高坂に呼ばれて、宏治は緊張気味に立ち上がった。

例年の事で、二年の実力高位者は、次期団長・副団として、現団長・副団長に直接指示されて動いている。仕事の引継ぎの為だ。それで去年も橋田・田崎の二人は、他の二年と別れて、都筑・櫛田の元で動いていた。今年も既に、次期団長・副団長は決定している。

一般の一・二年は、個人でどちらから声が掛ければ、警備グループから離れて従う。人選に深い意味は無い。

高坂について来た宏治に、利知未は物陰から軽く、手を上げて見せた。

立場上、堂々と見回りメンバーに加わるのも、変な噂の元になると思い、利知未は校舎の影で二人を待っていた。

合図を寄越した利知未に、軽い笑顔を向けた宏治が、おかしな顔をした。

利知未の後ろを、傍と見据えた。高坂も一瞬、緊張気味の顔をし

た。

利知未は二人の様子を見て、直ぐに後ろへ気を向けた。くるりと振り向く。三年の佐伯と、その他二、三人が、慌てて表情を取り繕った。

「センパイ達、まさか見回り、サボってんのか？」

利知未が少し、恐ろしげな笑顔を作って見せた。迫力がある。

「何、言ってるんだよ、一・二年の監視に来たんだぜ？な。」

顎を後ろへ軽く振って、佐伯が答えた。他のメンバーが合わせて頷く。

「ソーか。なら、イーけど。…タバコ吸ってきただろ？息、匂うぜ。」

利知未に隙は無い。そこに高坂が近付く。宏治は高坂に言われて、詰め所の大野を呼び、そのまま部室へ向かっていた。

「見回り、ご苦労様です！詰め所は今の所、問題有りません。」

高坂が、三年に対する礼儀を弁えた態度を取った。そこに大野も現れる。

三年・四人 対 二年・三人の間に、微妙な緊張感が走っていた。利知未は、この三年のターゲットが自分である事には何となく感付いているが、どう言った対象としてのターゲットであるかは、見当が付いていない。だから危ない。

喧嘩のつもりで構えていたら、全く別の行動に出て来られたと言うのでは、隙も生まれる。

五分ほどは、睨み合っていたかもしれない。

「珍しい顔が集まってるじゃネーか。どうした？」

橋田の声がして、息を切らせた宏治が後に続いていた。

情けない事に、佐伯達は橋田の睨みに恐怖を感じてしまった。同い年の男、たった一人を相手にしてだ。

「お前等、下級生の前で、団規乱そうとしてたんじゃネーだろーな…？」

怒鳴ったわけではない。ただ、ドスの効いた低音で、静かな一言だった。

「…んな事しネーよ。おい、詰め所も問題無さそうだ、見回り行くぜ？」

佐伯は少し蒼白した顔で、仲間に声を掛け、踵を返して行った。

それから見回りに大野も加わり、利知未と宏治、高坂の四人で校内を一回りした。見回りの途中で、利知未が高坂に言った。

「さつきは、助かった。サンキュ。」

「なんだよ？瀬川にしちゃ弱気な事、言ってるじゃネーか？」

「…なんか、佐伯センパイ達が目、…気持ち悪かった。」

眉を少し顰め、呟く様に言った利知未は、今まで見た中で一番、少女らしい雰囲気を持っていた。その後は何事も無く、文化祭が終わった。

翌週の頭に、恒例の権限譲渡式が行われ、新団長・高坂 崇史、副団・大野 俊平の、新制応援団が誕生した。

今年の譲渡式も、各運動部、練習を中断して眺めていた。

相変わらず格好良い。城西中学全体としても、この譲渡式は他校に誇れる恒例行事だ。何処から噂を聞き付けるのか、同学区内の小中学生や、近隣の高校生、中学生までが門外へ見物をしに来る。近所の住人もだ。

グラウンドから貴子は、目を細めて田崎の姿を追っていた。

「これが終われば、直ぐ冬休みで、三学期に入ったら直ぐに卒業式だ…。」

去年の、この時期よりも、更に寂しさが募る思いだった。

「今年は、田崎先輩も卒業しちゃうんだ…。」

恋する乙女としては、溜息が出て来てしまう。

利知未ならイザ知らず、貴子のような真面目な生徒にとって、応援団部員と言うのは別世界の人間だった。

貴子の恋は、心の中だけで追いかける形で幕を閉じ様としていた。

FOXのセガワとしては益々、少年らしさに磨きが掛かってきている。最近は団部メンバーの影響か、少年っぽさに男っぽさまで入り始めていた。不思議な物で、ギターを担いでロックバンドのリードボーカルらしい格好をすると、自然と言動も男らしくなってしまう。

お蔭でセガワ人気は益々、鰻登りだ。リーダーは益々、自分の眼光に自信を持った。

しかし、格好良い少年らしく成れば成る程、色々な苦労も背負い込んでしまう。一番困るのは『女にモテてしまう』と言う事だった。しかも十六歳と言っている。ライブハウスに通う少女達には、随分と色々な経験が豊富なコも勿論多い。初日、由美に奪われたキスは、まだまだ可愛らしい事件だったんだと、最近の利知未は思っていた。…それ以上を求められる事が、時々あるのだ。

年上の色っぽいお姉さんに誘いを掛けられた時には、どう対処すれば良いのか本気で戸惑った。最近利知未は、ソレがどう言うモノなのか、一般的にどんな印象で受け止められているかの参考になりはしないかと思い、青年誌やレディースコミックを手取るようになった。

勿論、下宿になんか置いておけない。

青年誌だったら、団部の部室に置いてあるのを、こっそりと読む事も出来るし、自分で買って見た雑誌を、そ知らぬ顔で誰かのロッカーへ紛らせてしまう事も出来る。が、レディースコミックは、正直処分にも困るし、買うのもちょっと恥かしい。…しかし、立読み

はもつと恥かしい。

けれど、セガワに誘いを掛けるのは当然、女な訳だから、青年誌よりもレディースコミックの方が、まだ参考になるような気もする。クダラナイ悩みだとは思うが、人に聞くのはもつと恥かしい。

ソレが今、利知未の悩み所の一つだった。

十一月三週目の金曜日。

今日もFOXのライブは、大入り満員だ。

最近は当日券では間に合わずに、ファンがFOXのライブ時間に入れなくなる事もある。

自然、メンバーからチケットを買うファンも増えてきた。これでは店の売上にも響いてしまうので、手売りチケットの枚数に、1ステージ一人十枚までと言う上限が出来てしまった。店から前売りを買うファンも増えている。

集客人数ダントツの一位は、やはりセガワだった。ただ、セガワファンでも本人の上限が間に合わない、メンバーが変わりに売ってあげたりもする。結局、五人の個人売り枚数上限は、毎回売り切れてしまう。

ライブの後、ごった返している狭いライブハウスの中で、人を掻き分けるようにしながら、由美が利知未に近付いてきた。

由美は最近、一部のセガワファンから偉く煙たがられている。積極過ぎるのだ。今日も取り巻きを押しつけるようにして、利知未の脇を奪い、腕を利知未に絡めて顔を近づけ、耳元で囁く様にして喋る。

「ね、今夜も送って行ってよ？」

利知未は、他のファンも群れている中で、返す言葉を探す。

「ちよっと、アンタさ、馴れ馴れし過ぎじゃない？」

由美に負けず劣らず気の強そうな少女が、由美を利知未から引き離

そうと手を掛けた。パシ！と音がして、由美の片手が少女の手を弾く。

「アンタ、新顔でしょ？アタシに手、出したら、痛い目見るよ？」  
迫力の睨みだ。由美のバックに付いている者を知っているファンは、どんなに由美が利知未に対して馴れ馴れしい態度を取ろうとも、自分の事を押し退けられようと、立て付く事はしない。利知未も薄々、感じ始めていた。彼女は、暴力団系列の事務所との繋がりを持っているようだった。

取り敢えず、こんな所で喧嘩を始められるのは勘弁して貰いたい。利知未がセガワとして、鶴の一声を上げる。

「由美…！」

低く名前を呼び、軽く睨んでやる。それで少しは大人しくなる。

「悪かった。根は悪いヤツじゃないんだ。ご免な。チケット2枚だったよな？お詫びにチヨイ割り引くよ？」

由美に手を弾かれた少女に、利知未が謝る。そうした態度が、またセガワファンを増やしている事は、本人、全く気付いていない。

早速、惚れ込んだ目をして頷く少女に、由美は面白く無さそうな顔をする。その様子を間近で見ている別のファンにも惚れ直される…。

その様子をカウンターから、リーダーが眺めていた。

「なんか益々、男っぽくなってきたよね。」

隣で拓も、利知未の様子を見ながら話す。

「あーや、役者にもなれるな…。」

リーダーが、茶化しと本気が混ざった様な顔をした。反対隣では敬太が、小さく笑っていた。

「ホント、器用な子だよな？」

滅多に自分の感想を述べない敬太が、利知未に感心して呟いた。

アキは自分のファンを相手に忙しくしていた。元リードボーカルとして、アキには熱狂的なファンがついている。

「リーダー！拓でも敬太でも、チケット余ってたら回して貰えるか

?!」

利知末が男らしい口振りで、カウンターの三人へ声を投げた。

それから三十分ほどで、取り巻きの相手とチケットのやり取りを終え、店のレジで売上分の一万六千円を支払い、利知末はやつとライブハウスを抜け出した。店から出た途端、ポケットからタバコを出して火を着ける。大体、何時もそうだ。直ぐに由美が追いかける様にして出て来る。別に、由美を待っていた訳ではなかった。

利知末の習慣を知った由美が、人垣を抜け出てくるのに五分くらいは手間取っても、利知末が帰宅する前に間に合うと知っただけだ。「セガワ！やったね、今日も間に合った！！」

ニコリとガッツポーズをする由美に、利知末は初対面の時よりも、いくらか好感を抱けるようになっていた。

「…一服場所、来週から変えるかな。」

煙を吐き出して呟いた利知末の言葉に、由美は直ぐに反応する。

「何処にしたって、直ぐ見つけてやるんだから。無駄な足掻きしない方がイーンじゃん？」

そして、また腕を絡めてくる。

利知末はそうされる度に、それでも少しは、少女らしい体付きをしている部分に気付かれはしないかと、内心、冷や冷やしている。

駅前のファーストフード店には、今月に入ってから毎週寄っていた。

利知末の取り巻きが増えるに付け、どうしても帰宅が遅くなる。利知末の裏事情のため、FOXのライブ時間は出演バンドの中で一番始め、十九時からになっていた。ココまで下宿から一時間は掛からないが、十八時半には入らないと間に合わない。夕食を食べる時間が無いのだ。里沙はどんなに遅くなっても、利知末の分の食事を取っておいてくれるが、腹が持たない。

今日もライブ後のバタバタで、あの店を出たのは九時半を回って

いた。真っ直ぐに帰っても十時半だ。それで、三十分位でハンバーガーを腹へ入れる様にしたのだ。由美は何時もついて来る。

今日も小さなテーブルを挟んで向かい合い、一人で良く喋る由美の話しを聞いていた。

「今日はチケット、ライブ八回分まとめて売ってよ？」

由美が話しの中で言い出す。少し驚いた。

「構わなーけど…。一気に一万以上も買う金、良くあるよな。」

「イーでしょ？だって最近、直ぐチケット売れちゃうんだもん。買える時、買つとか無いと、セガワのライブ見逃しちゃうじゃん？」  
肝心な事は答えない。利知未はその手の受答えは得意だ。

「っツーか、どーゆーバイトしたらんな金、稼げるんだよ？…俺、新しいアンプ買いたいんだよな。」

「そんなの、アタシが買ったげるよ？！」

「女に貢がセンの、好きじゃなーんだよ。イーバイトなら紹介してくれなーか？」

二、と軽く笑って見せる。由美に対して、滅多に笑顔は見せない。効果はあると思った。

「…チョイ、ヤバイ事だからさ、紹介は出来ないよ。」

少し俯いてしまった由美に、利知未はファンがしていた噂を思い出した。

『由美ってさ、コッチやつてるって噂。』

コッチと言いながら、人差し指を鉤型に曲げていた。掏りだ。

『暴がらみでさ、上がりの一部をケンジョーさせられてんだって。』

そんな噂話だった。

「ね、セガワ、…シてくれたら、もっと良い仕事、紹介したげるよ…？」



上目使いで利知未を見る。やや色を含んだ目と、言い方だ。

利知未は、内心では面食らっていた。そのまま表情へ出せば、禁止事項の目見開きに成ってしまう。敢えて目に力を込めて細めて見た。

違う表情に見えてしまった様だった。由美の瞳が、熱い思いを宿す…。

「…ワリー。ソーユー気は無い。」

テーブルの上で手を組み、目を伏せて、視線を斜め下へと向けた。

暫くの沈黙が落ちた。由美がふいに立ち上がり、バッグを持って早足で店を出て行った。

利知未は追い掛けない。追い掛けたって、どうにも成らない。

飲みかけの珈琲に手を伸ばし、ゆっくりと飲み干すと、タバコを出して火を着けた。とにかく一度、落ち着こうと思った。

由美は翌週、あっけらかんとした様子でFOXのライブを見に現れた。

利知未には、やっぱり良く解らない。

『どんくらい好きな相手だったら、あんな風に思っただろう…?』

自分も女だが、まだ、そんな風に思える相手には、当分出会わないだろうなと、自己分析をしたのだった。

#### 四

相変わらずの数字が並んでいる、利知未の二学期の通知表を見て、裕一は軽い溜息を吐いた。だが、通信欄には中々、良い事も書かれており、頬が少し緩む。

「成績は相変わらずだけど、真面目に学校には行ってる様じゃない

か。」

「一応ね。三学期入ったら、直ぐ進路相談が始まる見たいだし。そうなってから慌てるよりはまだマシだろ？」

円座卓の向かいに座り、食後の茶を飲みながら利知未が言った。

裕一はまた、久し振りに会った妹の成長を感じていた。少しは責任感も出て来た様子だ。

この夏から秋にかけての、FOXでの出会いと活動。それと、二つ年上のセンパイ、櫛田の生き方に、ホンの少しだが触れた事。色々な体験の中で、利知未の中に責任と自覚と言う物が芽生え始めていた。

「進路か…。お前は、どうしたいと思っているんだ？」

裕一の質問に、利知未は首を傾げて考えて見た。

アダムのマスターに筋が良いと言われ、将来はああ言う店を出す事が出来たら良いな、と思った時期もあった。櫛田の職人修行を見て、それよりも何か手に職をつけて行くのも、悪くないかもしれないと思う。FOXで音楽に触れ、楽器や音楽関係にも興味が出て来た。それと橋田の影響で、バイクや車の整備関係の仕事にも興味がある。

「…正直、まだ解らなーや。興味が有る事や、やって見たい事はいっぱいあるけど…、どれも本当に続けて行く事が出来るか、まだ自信無い。」

真面目な顔をして答えた利知未に、裕一は改めて利知未の成長を見た気がした。自然に笑顔になる。まるで父親のような笑顔だ。

「そうか。まあ、どんな道を進むにしても、高校は普通科へ行っておいた方が良くもな。校風や、それぞれ得意分野を持った教育方針の学校もあるだろうから、利知未が、ここなら納得出来ると思える高校を、探し始めたらどうだ？」

裕一の言葉に、利知未が頷いた。

「そーだな。出来れば制服とか無くって、規則もアンマ厳しくないような、自由な校風つてのが理想だな。」

「そんな学校、中々、無いと思うぞ？お前らしいけどな。」

余りに都合が良過ぎる利知未の学校選択基準に、裕一は笑ってしまった。

「そーかな？ケド、探せばきっと一校くらい見つかるんじゃないか？」

呑気な様子だ。それも利知未らしいと言えば、らしい。面白そうな笑顔のまま、裕一が言う。

「途中で詰まなくなつて、止められても勿体無いし、じっくり探して見れば良いよ。俺も大学の友達に、出身校の事でも聞いて見てやるよ。」

「サンキュー裕兄！」

ニツコリとして、利知未が言った。食器を持って立ち上がる。

「片付けてくる。茶、もう飲まないか？」

「もう良いよ。片付いたら風呂に行つて来よう。」

利知未は頷いて、キッチンへ消えた。

利知未は、鼻歌交じりで食器を洗っていた。

洗い物が終わり、布巾で食器を拭いて、棚へ片付けていく。今日は井物を作っていた。井は普段、余り使わない。高い所へ置くのも危険だと言う事で、いつも流し下のスペースへ片付けている。今日もそのつもりで下の戸棚を開き、動きが一瞬、止まってしまった。

「うわ！何で冬にコイツがいるんだよ！？」

キッチンから聞こえてきた利知未の叫び声に、裕一が部屋を出て来た。

「どうした？」

「アレだよ、アレ！殺虫剤あるか？」

利知未は、ソイツの事は余り好きではない。好きなヤツなど中々いないだろうとも思う。

「このアパート、古いからな…。どうしてもタマに、何処かから紛れて来るんだ…」

裕一はのんびりと構えて、食器棚の横に置いてある殺虫剤を持ってくる。

「早くしろよ！逃げられちまうだろ！？」

利知未がソイツの動きを監視しながら、裕一を急かした。

「何処だ？」

「ソコだよ、ソコ！」

指差している方向を見て、ソレを確認した裕一が、殺虫剤を撒いた。「うわ、出て来た！！」

利知未は慌てて裕一の影に隠れる。黒光りする脂ぎった羽、驚くほどの素早さで移動する無気味な姿…。一応、少女である利知未にとつて、一種の恐怖対象だ。

裕一が留めとばかりに、盛大に殺虫剤を吹き掛けた！

ソイツはヨロヨロし始め、羽を半端に開いた。嫌々ながら、じつと見守っている利知未。その利知未の顔を目掛けて飛んで来た！！「ウワッ！！」

反射的に目を瞑った利知未の髪に、ソイツがしがみつく！

「おい、利知未！！」

裕一も慌ててしまった。利知未は髪に何かくっついた感触に、何かなんだか分からないまま、手を上げて払ってしまった…！

「キヤッ！」

可愛らしい声が上がった。裕一は一瞬驚く。だが、それ以上に利知未に払われて、床にベチツと落つこちたソイツを仕留める事に集中した。

「ヤダ、ヤダ！変な匂いがするよ！？何？！気持ち悪い！！」

裏返った声を上げながら、利知未がソイツに触れてしまった手から立ち上る、臭い匂いに顔を顰めている。涙目だ。

慌てて蛇口を捻って盛大に水を流しながら、利知未は手と、この寒いと言つのに、ソイツの触れた部分の髪を物凄い勢いで洗い始め

た。

「利知末、大丈夫か？」

半泣きしながら、手と髪を洗っている利知末に、ヤツを仕留めて処分し終わった裕一が、戸惑いながら声を掛けた。

「臭いよ、なんか、油っぽい…。気持ち悪い…。」

本当に泣きながら、まだ洗い続けている妹に、どうしてやったら良いのか考えあぐねた。

「兎に角、水じゃ風邪引くから。支度して銭湯に行こう？」

利知末は泣き顔で鼻を吸いながら、裕一に渡されたタオルで髪と手を拭いた。気が違った様に拭く。拭き終わって直ぐに洗濯機へほおり込んだ。洗剤を入れて、そのタオルだけを洗い始めた。

銭湯へ向かう道、利知末は妙に脱力していた。裕一は心配顔だ。

本来、気が強く、滅多な事で涙は見せない。それに、何時もどうも男か女か判らない言動をする利知末が、余りにも女の子らしい声と言葉で取り乱した事を、戸惑いながらも妙に安心した気持ちで見ている。

利知末の方はこの体験で、すっかりゴキブリが苦手になった。元々、勿論好きでは無いが、見つけたら殺虫剤を拭き掛ける位は平気だった。

ところが、この日から利知末は、ソイツの姿を見るだけで怯えてしまい、見て見ぬふりをするか、その場から逃げるかの、どちらかの行動を取るようになった。飛んで来た恐怖は、今までの対面記憶に無かった事だ。

銭湯で利知末は、それこそ気が違った様に髪を洗い、手を洗い、携帯用のシャンプーを、すっかり使い切ってしまった。それでもまだ足りない気がして、更に石鹸も使って、その部分だけしつこく洗った。

何時もよりも長湯の利知末を、銭湯の番台近くで待ち、裕一は些

か湯冷めしてしまった。時計を見て、もう一度湯に浸かり直しに入  
って行った程だ。二度目に番台の所まで出て来た時、漸く少し落着  
いた様子の利知末が、女湯の暖簾を潜って出て来たのだった。

帰り道で、利知末が俯いて言った。

「…あのさ、裕兄…。」

「ン？」

「さっきの事、優兄には内緒にしておいてくれよ…?」

上目使いで、裕一の顔色を伺っている利知末に、微笑んで頷いて見  
せた。

「分かったよ。…けど、余りにも女らしい反応で、俺も驚いた。」

利知末の頬が赤くなってしまう。また視線を道端に落とす。

「…自分でも、びっくりした。」

呟いて、自信を失ったような顔をしていた。

翌日、優が泊まりに来た。既に大晦日だ。今年も長期休みの間中、  
アルバイトをしていたと言う。

「そんな事してて、入れる大学あるのかよ？」

昨夜の気弱な少女の顔は一切見せないで、利知末が憎まれ口を叩い  
た。

「オレは、スポーツ推薦、決定してるんだよ。知らなかったのか？」  
へん、と言う顔をして言った優に、利知末も裕一も驚いた。

「そうなのか？どうして言わなかったんだよ？」

テレビ画面には年末恒例の歌番組、利知末の後ろでは、石油ストー  
ブの上で薬缶が、カンカン鳴っている。

「本当に推薦で行けるかどうか、こないだの大会まで判らなかつた  
んだよ。…優勝しなきゃならなかったからな。」

優は答えて、蕎麦の汁を啜っている。照れ隠しか、呑気に見せてい  
るつもりなのか。

「……って事は、優勝したのか!？」

利知未が、びつくりした声を上げた。優の学校生活については、今まで殆ど聞いた事が無かった。空手部で毎回、大会に出るくらいの実力があつた事は知っていたが、まさか首位に上り詰められる程の実力があつたとは、裕一も知らなかった筈だ。

「そうか、おめでとう! 賞状とか、盾とかは無いのか?」

「……有るは、有るけど、持ってくんの面倒だし。……それに、今回は運が良かったただけだ。優勝候補が怪我してて、二回戦目で負けちまつたんだ。」

「何だ、そー言う事が! 驚いて損した!！」

利知未は素直に喜ばない優を見て、捻くれた言葉をかけた。

「テメー、相変わらず言ってくれんじゃネーか!?! それでも一応、優勝だ。普通は祝いの言葉くらい、出てくんじゃネーのか?」

口をへの字に曲げて言つた優に、心の中で『へん、素直じゃネーの!』と呟きながら、利知未は改めて言う。

「なんだ、やっぱ嬉しいんじゃネーか!……おめでとう、優兄!」

ニコリとする。優は少々、面食らう。

「折角だ。春休みにココに来る時、持つて来てくれよ? 賞状とか盾とか。裕兄だつて見たいよな?」

「ああ、そうだな。そうしたら盾と賞状を眺めながら、お祝いしよう。」

優の性格を把握し、上手く操縦している利知未に、内心感心していた。

「……ケ、ショーがネーな。荷物になつて面倒なんだけどな。分かつたよ、持ってくる。その代わり利知未、オレの好物、用意して待つてろよ!？」

「任せるよ! 優兄が好きなものつて、エビ天か? あ、カツ丼とかも好きだつたよな?」

「後、鳥の唐揚げも好きだぜ?」

「そんなん言つてたら、全部、揚げ物になっちゃうじゃネーか! も

う少し別のモノ思い付かネーのかよ？」

「ウルセー！オレの好物、用意してくれんだろ？文句言わネーで黙って作れよ?!」

「ケ、貧相な食イメージだな。…分かったよ、用意してやるよ。」

何時も通りの二人の会話を、裕一は笑顔で聞いていた。

「今年も、二年参りに行かないか？」

話しが落着いた所で、裕一が提案する。

「そーだな、行くか!？」

優が頷いて、利知末も舌なめずりをする。

「したら、またお屠蘇、飲めるな…?!」

「お前、中学で酒の味、覚えてんじゃネーよ！呆れたヤツだな。」

「まあ、正月のお屠蘇くらいなら、多めに見てやるか。…普段は飲んで無いだろうな？」

裕一に言われ、利知末は内心舌を出す。

「飲んでる訳ネーじゃん！お屠蘇だけだよ？」

「どーだか…。」

呟く優をチラリと睨んでやった。

去年も詣でた近所の神社で、また今年も、お屠蘇を振舞ってもらった。

利知末達三人は仲の良い兄弟として、去年、裕一にお屠蘇を振舞い直してくれた年配のオジさんの、記憶に残っていた。

お参りを済ませた後、利知末は社務所で販売していたお守りを買って来た。優には学業成就、そして裕一には何故か、交通安全のお守りだ。

「お前、なんで兄貴に交通安全なんだよ？免許も持ってたねーのに。」

「イーんだよ。交通安全って出先から無事に、家へ帰って来られる為のお守りなんだから！裕兄が登山行って、無事に帰って来る様に、これ買ったんだ。」



「普通、登山なら厄除けじゃネーのかよ？」

優に突っ込まれ、また口喧嘩が始まる。今年もまた、『新年早々、神様の前で喧嘩するな！』と、裕一が去年と同じ事を言いながら二人の仲裁をし、まだぶつぶつ言っている二人の背中を押す様にして連れて行く。

その喧嘩の様子を、振舞いのオジさんが今年も見ていた。

「相変わらず、元気な嬢ちゃんたちだね。」

笑顔で、今年は始めから、お汁粉ではなくお屠蘇を、利知未にも振舞ってくれた。

「明けましておめでとう！オジさん！！」

ニコリと言って、お屠蘇を受け取った利知未に、ちよつと驚いた笑顔を見せてくれる。『おめでとう』と、返してくれた。

「去年は本当に坊主かと思っただが、娘らしく成って来たねえ。…そう言う年頃か…。」

既に、娘を二人嫁がせて、去年には五人目の孫にも恵まれていたオジさんは、利知未の様子を、目を細めて見ている。自分の娘達が、利知未ぐらいの頃の事を思い出していた。

「騒がしい弟妹で、済みません…。」

裕一が照れ臭い笑顔で、お屠蘇を受け取る。

「利知未が変な事するからだ。普通じゃ考えられない思考回路だぜ。」

優はぶつぶつ言って、オジさんには笑顔を向ける。

「おめでとうございます。」

「おめでとう。ま、元気が一番だな。」

オジさんも笑顔で、優にもお屠蘇を振舞ってくれた。

三人でお屠蘇を飲み干し、今年はお御籤も引いて見る事にする。

「やった、大吉！」

利知未が嬉しそうに言う。優が自分のお御籤を眺めながら皮肉った。「大吉つてのは、後は運が下がるだけ何だぜ。そんなに嬉しい事かよ？」

「なんだよ？もしかして優兄、良くなかったんだろ？！」

ニヤリとして、利知末は素早く、優のお御籤を奪い取った。眺めて声を上げる。

「なんだ、小吉か！大凶でも引いたかと思っただぜ。」

お御籤に書かれている事を音読み、取り返そうとする優の攻撃を素早くよける。裕一は笑顔でその様子を眺めながら、自分の分を見た。「参ったな、凶は俺だよ。」

少し情けない顔をして言った裕一に、利知末の動きが止まった。その隙に優は、自分のお御籤を奪い返した。

「凶？…ヘーキだよ、元旦からそれなら、これからは、きっと上がって行くだけだって！」

ニコリと笑顔を作って、裕一のお御籤を覗き込む。そして、再び動きが止まる。笑顔も一瞬、消えた。

『旅立ち・悪し。今年は控えてよし。』

裕一が、利知末の微妙な変化に気付く。優は離れた所で、自分のお御籤を木に結んでいる。

「大丈夫だよ。こう言うのは、結び目を反対にして木に結ぶんだ。それが厄落としになる。…って、おばあさんが昔、教えてくれただろ？」

笑顔を見せた裕一に、利知末も少し無理をして、笑顔を作り直した。「そーだな。きっと、大丈夫だ。」

そして優の近くに行つて、二人で並んで、お御籤を木に結んだ。利知末のお御籤は、結び目を上に、裕一のお御籤は、結び目が下。

「なんだよ？兄貴、凶だったのか？」

今更の様に、結び目を見て優が言った。

「ああ。お前に言わせれば、今がどん底で、後は上がって行くだけなんだろう？今年一年は何事も慎重にしろって事だ。そうして気を使つて行けば、運は次第に上がって行くって言う、そう言う意味だろ？」

ニコリとした裕一に、優もへへっと、笑って見せた。

「そーだよ。後は上がるだけだ！二月の登山も、きつと平気だよ。」  
「そうだな。正しく山には登って行くんだからな。」

二人の様子を見て、利知末も一応、笑顔を作るが、内心では何となく不安感に襲われていた。

『バカバカしい。…お御籤なんて、占いと同じだ。当るとは限らない。』

小さく首を振って、悪い予感を追い払った。

今年も一月二日には、大叔母の墓参りへ行った。

利知末は神社で神様をお願いした事を、大叔母夫婦にもお願いした。

『裕兄が、無事に山から戻って来れます様に…。見守ってくれよ？』  
その事、一つだった。

随分と長い事、墓石に頭を垂れている利知末を、裕一は気遣わしげに見守っていた。優は相変わらず突っ掛かっている。

「何、長々と合掌してんだよ？」

後ろから聞こえて来た優の声に、利知末は漸く頭を上げた。

「ウルセーな、イーだろ?!」

軽く睨みつけ、フィと横を向いてしまう。

「また、お前達は…。何処でも構わず、喧嘩を始めるな。」

裕一が呆れ顔で、二人を戒めた。

翌日、利知末と優が帰って行った。

裕一はこの二月、三度目の冬山登山に向かう予定がある。

一度目、二度目の経験から、他の季節の登山に比べて、危険が多い事は重々承知だ。利知末の懸念も解るが、冬、雪の山頂から見える付近の山々の景色は、好きだった。

『無事に、帰って来れるさ。まだ俺には、やらなきゃ成らない事が沢山ある…。』

利知未に貰った交通安全のお守りを見つめて、改めて気を引き締めた。

## 五

冬休み最後の金曜日、FOXは『ニューイヤーライブ』で、一時間半の演奏時間を貰った。

普段は1バンド四十五分〜一時間のステージを、三、四回行っている。一時間半のステージを貰うという事は、それだけFOXの集客率が、別バンドに比べて高いという事だ。チケットも、何時もより二百円ほど高かった。それでもやはり売り切れた。

年末から、カウントダウンライブをFOXが仕切ってやって欲しいという依頼もあったのだが、メンバーの中で、利知未とアキの都合が悪く、そして敬太も、まだ高校三年だ。流石に徹夜は無理だと言って断った。

敬太は本来、大学受験を控えた受験生の筈だが、彼の通う学校は大学までエスカレーター式だった。学校での敬太は、アマ・バンに参加している事以外は、どうやら成績も並の優等生であるらしかった。

一月の始めに誕生日を迎える。その見込みで、この冬休み中に普通車の免許を取得してきた。敬太の免許取得を、特に喜んだのは拓だった。今まで機材運びは、拓がやっていた。FOXの音楽がポップスに変わり、敬太を別のバンドから引き抜いてきてから、もう二年間そうだったらしい。それまでの二年間はニューミュージック系で来ていたので、ドラム無しでも何とかなっていたと言った。

ニューイヤーライブ前日に、急遽一日だけ増やした練習日に、拓

が嬉しそくに敬太と話していた。

「お蔭で機材運び、手が増えたよ。車、買うのか？」

「一応、両親はそう言ってます。オレはドラムを積めるワゴンが良  
いんだけど…。管理は当分、親がする事になるから、どうかな…？」

敬太はまだ高校生だ。四月から大学生になるが、車の維持費を稼  
ぎ出す事は、やはり無理があるだろう。

「もし、敬太が納得すればだけどさ、知り合いに中古売りがつて  
る奴がいるんだ。…かなり安くしてくれそうだけど、見に行つて見  
るか？」

「そうですね。一度、見せて貰おうかな…？」

「じゃ、言っておくよ。」

「お願いします。」

ニコリとして言った。敬太の笑顔を見た利知未は、また少し気持ち  
が悪くすぐられる様な、可笑しな気分になる。

『あれ…？』

自分で自分が理解不能だ。敬太の可愛い笑顔は相変わらずだ。

確実に、今まで利知未の周りにいなかったタイプだった。敬太の  
笑顔を見ると、何となく気持ちがほのぼのしてくる。

『ま、イーか！コーいうヤツもいるんだ。世間ってやっぱり広い。』

そんな風に、自分の気持ちを片付けてしまう。

「練習、始めよーぜ?!」

利知未が明るく声を掛けた。

最近、メンバーの中でも、由美の存在が目立っていた。どうやら  
暴力団絡みの少女であるという事で、様々な懸念も広がる。

十二月の始め、利知未が楽屋で洩らしていた言葉があった。

『やはり、ずっと男で通さないとマズイだろうか？』

という事だ。その時は、拓に止められた。利知未は今も十六才・少  
年のままで通している。

実際そのお蔭で、学校にはバレずに済んでいると言う事もある。

何故、利知未がその時、あんな事を言っただかと言えば、十一月の中旬過ぎから、今まで以上に積極的に、由美が迫り始めてきた事が原因だった。

由美は十一月の三週目、かなり固い決心をしてセガワを誘っていた。

自分が関わっている事務所から、かなり割の良いバイトを紹介された。どんなバイトかと言えば「春を売る」と言う事で、…つまり売春だ。

由美はその時、まだそこまでの経験は無かった。

だからと言って、自分を大切にしたい等と、最もらしい事を言うつもりも無かった。既に、拘りで金を稼いでいる。表で売れない物を裏で売る事だって、勿論している。遊ぶ金、欲しさだった。

ライブでセガワを見て、一目で好きになった。

兎に角、格好良かった。顔も、綺麗な顔をしている。スタイルも由美好みだ。細身で足が長く、背は並だろうか？それでも155センチちよつとしかない自分とだったら、絶対に釣合うと思った。

声も良かった。同い年の男達に比べれば、やや高めの印象はあるが、ハスキーで歌っている時の伸びも良い。独特な感じの声だ。一度聞くと癖になって、また聞きたくなる。

ステージ上で照れた様子も可愛かったが、あの日、自分の手から凶器を取り上げた、あの身のこなし。そして、妙に律儀な、その後の態度…。

『母性本能をくすぐられるって、こんな感じなのね…。』

と、自分の心の動きにウツトリしてしまった。もう、どうしようもなく好きになってしまった。こんな感情は始めてだ。

『身体を売って金に成るなら、別にどうって事無い。好きでもない相手だって、金の為だと思えば割り切れる自信がある。…でも、そう、でも。』

『…初めての時くらいは、本当に好きな人と……。』

そう思っていた。今の自分の、その相手は、セガワしか考えられない。

『だから、あれからも一生懸命誘ってたのに…。なんで、彼はアタシの気持ちに応え様としてくれなかったんだよ?!』

あの日から、一月以上経っている。

元々、短気な性格の由美だ。最近、自暴自棄な気分には捕われている。

『…もう、どーだっていい…。』

そんな風に思いながら始めて取った客は、する事だけして文句を言い、金をベッドの上に投げつける様にしてホテルを出て行った。

その客からクレームが入り、由美はお仕置きとして、事務所の下っ端連中から散々、弄ばれた。それが、十二月の終わりの事だった。

年が明けた頃。由美は一人で、声が枯れる程まで泣き続けていた。涙が枯れ果てた時、無償にセガワに会いたくなった。

『アタシ…もう、キレイじゃないけど…。でも、やっぱり…。!』

そして、ニューイヤールライブの日、由美は二週間振りにライブハウスへ向かった。丁度その間の二週間は、FOXのライブがない週だった。

「Happy New Year! お待たせ致しマシタ! FOX・New year ライブ! 始めるぜーっ!」

リーダーの軽いノリから始まった。利知未は今回、挨拶原稿を渡されてしまった。最近、益々増えたセガワファンにサービスの意味を込めて、偶にはマトモに挨拶ぐらいしろと言う事だった。一応、暗記した。

曲を先ず一曲、演奏して、利知未がマイクへ向かった。

原稿を書いたリーダーをチラリと見て、さっさと行け!と促され

る。

「あー…明けまして、オメデトー。」

マイクに両手を当てて声が入る様に気を使いながら、俯きガチに始めた。

「オメデトー！…ちゃんとコツチ向いてえー！！」

セガワファンの少女の声が、客席から上がった。利知未はチラリと向いて見せた。目が合った気がして、直ぐに視線を動かす。

利知未は相変わらず、歌無しでステージに立っているのは苦手だった。兎に角、恥かしいのだ。ライブ後に客席で、普通にファンと話すのは大分、慣れてきた。しかし、そのギャップがまた魅力として見える。

「…去年の八月からココに立つようになって、もう四ヶ月も経った…。早いなって、思ってる。初めてココで俺が歌うようになった日、直ぐに声を掛けてくれた、…ファンの皆…。」

ファン、と自分で表現するのは恥かしかった。そんな人気者になる気も、なれる気も無かった。それでも、歌う事は楽しい事だった。

「…本当に、ありがとう。俺は…。」

原稿では、洒落も含めた言い回しで『俺はマジ幸せだよ。ファンの皆、愛してるぜ。これからもFOXの応援、よろしく！』と軽いノリで行け、と言う指示が入っていた。しかし、そんなこと言えない…。

「…ココで。歌う事が本当に楽しいって思うようになったんだ。…何て言うか、ソー言う気持ちくれたのは、今ココにいる皆だから…、だから、今年も頑張ろーって思ってる。これからも応援よろしく。」

リーダーが『このヤロウ』と言う表情をして、ギターを鳴らした。次の曲の合図だ。メンバーが一斉に良い顔になって、演奏が始まる。曲は去年、初めてセガワがココで歌った曲だった。

小気味よい、軽いロックのリズムが、ステージから広がった。



この曲は由美も大好きな曲だ。何度も、ラスト曲にリクエストをして聞いて来た。明るくて、それでいてチョット迫力もある。リズムが生き生きと弾んで聞こえる。歌詞の内容は友情がテーマになっているような感じだが、押しつけがましい感じではない。ワクワクと楽しい、そしてチョットだけ切ない。そんな感じだ。

セガワの素直な部分が、良く現れている曲だった。普段の彼からは、少し想像し難い。

由美は二週間振りに、ステージ上でセガワが歌い、喋っている姿を見て、何故か涙がジワリと浮かんできた。切ない気持ちになる。『どーしたんだろう……？こないだまでは、憎らしいくらいだったのに……。今、凄く……。…愛しい……。？って、感じなの？これ……。』目はセガワだけを追い掛けて、耳は歌声だけを、溢れている音の中から聞き分ける。それ以外の音は、単なる雑音だった。

ステージ上の照明が急に変わった。ギターが中心になり、アップテンポでアレンジされた、良く知っている曲が始まる。

「ハッピー・バースデー・トゥ・ユ・ユ・ハッピー・バースデー・トゥ・ユ・ハッピー・バースデー・ディア……敬太！！」

セガワがそこまで歌うと、アキが小さなケーキを袖から出して来た。敬太は聞いてない事だった。キョトンとした顔で、スティックを半端に構えたままだ。ギター二本とベースが、気が狂ったのでは無いかと言っくらの早引きで、音を掻き鳴らす。

「ハッピー・バースデー・トゥ・ユ・ユー！！！！」

バツチリと歌った。ギターが後を引き摺って、最後はセガワが決めて音を静めた。客席から拍手と「おめでとー！」と言う声や、口笛が響く。

「なにキョトンとしてんだ？敬太。」

セガワがドラムを振り向き、軽く吹き出して突っ込んだ。客席のセガワファンは、珍しいその笑顔を見逃さない。黄色い声が飛んだ。

「カワイイー！って、どっちに言ってるの？そこのおジョーさん？！」

リーダーが、すかさず突っ込んだ。客席から「セガワ！」と、女性の返事が飛んだ。それも確り拾う。

「ってセガワ、お前のファンだよ。今は敬太を祝う様に言ってるよ。」

客席から野次が飛ぶ。「ソーだ、ソーだ」と、少年の声だ。笑いも起こる。

明るい雰囲気広がっていく中、由美はセガワだけを見つめていた。

その後、ライブは後半に入り、何時もならばやらない様な、お笑いチックな演奏とMCが入る。『童謡笑劇場』と銘打ったその演奏は、リーダーが何時か、チャンスがあつたらやってみようと、長年温めてきたネタだった。

「FOXが、定期的に音楽変えてるの、みんな知ってる？」

リーダーが客席に振ると、昔からのファンの「知ってる！」と言う声と、セガワ人気の新たなファンからの「知らない！」と言う声が上がった。

「ソーか、良いチャンスが巡ってきた！やるよ、やるよ？FOXの新しいファンに、これまでの流れの紹介も出来るし！準備はOK？」ニヤニヤしながらメンバーに振る。

「アーあ、どーなつても知らなーぜ？」

セガワが、メンバーの代弁をする。リーダーはノリノリだ。

「我FOXは、今までニューミュージック・ポップスの時代を経て、今のロックの時代に入った訳だけど……。」

と、簡単に説明した。

「昔から良く知っている童謡を、それぞれの音楽にアレンジして演奏して見ようって事なんだ。面白そうなのだけ、チョコツとね？」そう言って、楽しく解説しながら二曲ほどを披露した。息抜きタイ

ムだ。

今回のライブは一時間半と長い。ファンを飽きさせ無い様にと、結構、真面目に考えてきたネタだった。

結果は…、意外にもウケた。リーダーのMCが上手かったからだ。特にウケたのは、アキがリードボーカルで歌ったシリーズで『童謡・ニューミュージック編』だった。面白いと言う意味でのウケだ。暗いだけでなく、やや色気を混ぜての歌声だ。…利知未には、不可能である。

意外と感心されたのはポップス編で、利知未はアキと良くハマった。ロック編は会場を巻込んでの、大騒ぎになった。

リーダーが空気を上手く操っていた。一曲で十分くらいの予定が、やや延びてしまった。

その後は時間調整でMCを減らし、曲のオンパレードになってしまい、利知未は初めて、ライブで歌って喉が疲れてしまったのだった。

由美は落ち込んでいた気持ちだが、このライブでちょっとだけ晴れた。セガワを二週間振りに見られた事に、恐らく大きな理由があった様だ。

ライブが盛況の内に終わり、FOXがラストの曲をいつも通り客席に問いかけ、アキとセガワのハモリがキレイに決まる、バラードが流れた。

「また来週、ココで！今日もサンキュ！」

リーダーが締め、薄暗い照明の中で次のバンドに場所を明け渡す。それから五分ほどすると、メンバーが裏を回って客席に出て来た。早速、取り巻きが群れ始めた。メンバー其々に勿論ファンが着いていた。ダントツに、その取り巻が多いのは、この二ヶ月程は、やはりセガワだった。

其々がファンとのやり取りを終え、カウンターで酒を手にして、まだ取り巻きに囲まれているセガワを呼ぶ。

「取り敢えず、乾杯だけしよーよ？」

「ああ、分かった。…悪いな、チヨイ待ってくれ。」

ファンに済まなそうな笑顔で詫びて、セガワが人混みから抜け出した。軽くキヨロリと周りを見て、由美の存在に気付いた。意外そうな顔をする。

「ほら、モスコ。」

利知未がカクテルを選ぶ時には、モスコミールを飲んでいる事は、皆、承知していた。拓がグラスを渡した。

「ああ、サンキュ。」

小さく笑顔を作ってグラスを受取り、利知未はメンバーとニユーイヤーライブ成功の祝杯をあげた。

乾杯が終わり、再びファンに取り囲まれたセガワを、由美は遠くから見つめていた。

その後、一時間くらい打ち上げに参加し、利知未は何時もより一時間程遅い時間に、ライブハウスを出た。由美の姿は途中で消えていた。

何時も通り、店を出た途端にタバコを出して火を着ける。軽く一吸いして、薄く煙を吐き出した時、由美が静かに、利知未の前に現れた。

「…どうしたんだ？元氣、なさそーじゃネーか。」

少し面食らう。何時もなら元氣いっぱい声掛け、駆け寄ってくる由美らしからぬ雰囲気だった。

由美はセガワに優しい声を掛けられて、心がきゅっと掴まれたような気分になる。戸惑い、その表情を隠す様に、笑顔を作って見せる。

「そんな事、無い。…ね、今日もハンバーガー食べてく？」

少し無理をしている雰囲気は感じたが、突っ込むのは止めた。

「…ソーだな。腹、減ってる。」

「じゃ、今日は、アタシが奢ったげるよ！」

元気に振舞い、いつも通りにセガワの腕に、自分の腕を絡めていっ

た。

『やっぱり、セガワが好き…。』

改めて、そう感じる。彼の声を聞き、姿を見ると、不思議と幸せな気分になる。どんなに落ち込んでいても、イライラしていても、気分が変わった。

何時ものファーストフード店で、向かい合って座り、話をしていた。

「良い金になるバイト、やっぱり紹介したげようか？」

話題がそこに行くと、利知未は構え直した。

「…交換条件、受けられなーぜ？」

「良いよ。そんな事…。だって、もう…。」

言い掛けて止まった由美の様子に、利知未の片眉が上がった。

「何でもないよ。…ちよつと、軽くて高い物、売ってんだけどさ…。

」

言葉を濁して話し始めた。話が進むに付け、怪しい気配がして来た。

「…チョイ待てよ。それって、ヤバイモン売るとか、そう言う事か

…？」

由美が声を上げて笑った。

「ヤーだ、セガワ、もしかしてビビッてんの？皆やってるジャン。」

由美が指す「皆」が、どの辺りの事を指しているか、しかとは解らないが、先ずマトモな連中の事で無いのは解った。

「…お前、ンなモン売ってンのか…？」

「アタシは、紹介してるだけ。自分では売らない。けど、それでも良い金に成るんだ。新しいアンプなんて直ぐ買えるよ？」

どうやら、麻薬の小売の話のようだ。最近ニュースで良く言われていた。数日前にもバンドのメンバーと、その事に着いて話していたばかりだった。

ライブハウス、一步裏に入れば、そう言うネタは結構、転がっている。

そのステージに立つ自分達が巻込まれないよう十分注意しようと、話し合っていたのだ。

「…止めるよ。ソー言つの。俺もソコまでヤバイ事は、するつもりネーよ。」

真面目な顔をして、由美を見つめた。由美は驚いた顔をし、吹き出した。

「やっぱ、ビビッてんじゃない！タイした事じゃないよ、こんなの。」

利知未は食べ掛けのハンバーガーを口へほおり込んで、さっと席を立つ。

「ちよつと、どうしたのよ？」

「そう言う事してるヤツと、飯は食いたくない。」

席を離れて行く。由美が慌てて追い掛けてきた。腕を掴む。

「なによ？そんなに嫌なの？！…分かったよ、止めるから…、…だから、もう少し一緒にいてよ…？アタシ…、」

泣き顔になってしまった。由美は自分でも解らない。こんな事で泣ける物なの…？そう思った。

由美の泣き顔を見て、利知未は何となく気の毒に感じた。由美が危険な事に手を出してしまったのは、本人の所為だけでは無いように感じた。

「…分ったよ。珈琲、飲み切るまではいるよ。」

踵を返して席に着く。直ぐに別のセガワファンが現れ、積極的に二人の席へ相席してきた。

最近は良くある事だったが、由美は面白くなかった。

## 六

利知未は、三学期のテスト三昧の日々を抜けながら、相変わらず

週、二回のバンド練習、毎週金曜のライブと、忙しく活動していた。偶には、応援団部室にも顔を出した。田崎は受験勉強のラストスパートに忙しく、ライブも最近は、見に行く事が出来ないでいる。変わりに高坂と大野が、利知未からチケットを買い、偶に様子を見に行っていた。

久しぶりにライブハウスへ顔を出した高坂達は、ステージ後、利知未が取り巻きの相手をしている間、リーダーや拓達と話をした。去年の夏から既に顔見知りだ。

三十分後、やっと人混みを抜けて来た利知未と話しが出来た。由美は最近、ちよつと大人しくなっていた。利知未がバンドメンバーや男友達と話しをしている間は、離れた所で常連仲間と飲んでいる。

「ワリーな、待たせた。」

「相変わらず、スゲー人気だな。」

「……まー、ね。」

小さく顔を顰めた利知未の表情に、大野が気付く。

「何か、気になる事でもあるのか？」

高坂は相変わらず鈍感だ。やはり大野とは良いコンビである。

「気になるって言うか……」

自分の男としてのモチ振りを、いくらダチだからと言って、相談するのは気が引ける。……恥かしくもある。それに、ココでは聞けない。

「ま、その内、聞いてもらうよ。……ライブ楽しんだか？」

「ああ。スゲー盛り上がったモンな。面白かったぜ。」

「そうか。そりゃ、良かった。」

ニコリと笑う。男前な顔だった。大野と高坂はやや、自身をなくすような思いだ。普段の学校での利知未は、最近、益々、少女らしくなってきた。敢えて本人が気を付け始めたこともある。また学校にバレそうになった時の、良い隠れ蓑になるからだ。

最近、利知未は本当の自分の素が、判らなくなってきた。学校では応援団部室にいる時だけは、昔と変わらないでいられる。

高坂など、クラスの利知未、団部の利知未、FOXでの利知未と、三種類もの顔を使い分けている利知未に対して、感心するばかりだ。本人、新団長として大変な事も始めてきたので、そちらに追いまくられているのも事実だ。その高坂に対して、最近の利知未は偶にふと、優しい態度を取ってくれたりもする。そこが、女らしくなってきた部分の良い現れでもある。

しかし実は、利知未本人は少々、疲れ始めてもいた。その疲れた感じに良く気付いているのは、バンドメンバーでは敬太の様だった。練習中に、ふと見せる利知未の変化に、一番良く反応してくれている。

「後ろでドラム叩いているとき、前で演奏しているメンバーの事、結構良く見えたりするんだよ。リーダーのノリが、ちょっと違うなとか、拓のベース、今日は良いリズム刻んでるな、とかね。」

だから、利知未の疲れている時の様子も、よく見えるのだという。利知未は、その敬太に対して最近、不思議な感情が芽生え始めていた。

その感情に近いのは、裕一と一緒にいる時の、安心感かもしれない。

「…辛かったら、相談してくれよ？この中で一番、歳も近いし。…オレ、口下手だから、アンマリ良い事、言って上げられないかも知れないけど…」

そう言っただけでくれた笑顔に、利知未は何回か救われた思いがした。

女同士の部分で、色々と気に掛けてくれているのはアキだった。ライブハウスのトイレを、最近ではセガワファンの女の子が多いからと理由をつけて、女子トイレと男女兼用トイレに変更してもらい、



汚物入れを双方のトイレに設置してもらう様にしたり、楽屋奥のスペースに、自分も必要だからと言って、カーテンで仕切った着替えスペースを作って貰ったりもしてくれた。かなり助かった。

店でトイレに行く時、どうしても女子トイレに入らなければならぬ日も勿論ある。しかし、セガワとしては不可能だ。…ライブ日があの日に当たる時もあるのだ。

そう言った事も通して、利知未は今、改めて自分を考えてしまう。それでもFOXのメンバーの事は好きだし、歌う事も楽しい。だから、自然と無理をしてしまう…。

「なあ、腹へらないか？」

利知未が高坂と大野に声を掛け、時計を見た。

「ソーだな。飯食ってネーし。」

高坂が言って、大野も頷いた。

「ファーストフード、寄って行こうぜ？」

何時もの店に寄って行こうと誘った。今日はそろそろ男らしくしている事に、少し疲れを感じていた。別に普通にしている也十分だとは思うのだが、やはり、この二人と並んでいたら、何時も以上に気を張ってしまう。二人共、最近また、ちよつとずつ男っぷりが上がって来ていた。

「ワリー。今日は、もう帰る。」

何時もより少し早めに切り上げようとする利知未に、リーダー達が返事をして、「お疲れ」と、手を上げた。

店を出て、何時もの習慣通りタバコに火を着けると、由美が遠慮勝ちに声を掛けてきた。

「セガワ、今日はその二人と帰るの？」

後ろからの声に、軽く振り向いて答えた。

「ああ。腹減ったし…、寄ってくけど、どーする？」

何となく由美も誘う。何だかんだ言っても、由美はそれ程嫌なヤツ

ではない。自分に一生懸命な様子は、困る事は困るが、大事にして上げなくてはならない相手だとも、思えるようになって来ていた。ここにも、利知未の成長がある。

「邪魔じゃない…?」

由美もニューイヤーライブ以降、随分と態度が変わってきていた。

由美としては、段々とセガワに取っての自分がどう言う立場にいるのか、嫌々ながら認めざるを得ない気分になって来ていた。

どんなに誘っても誘いに乗らない。危ない事をしている自分を嗜める。けれど、女としては見ては貰えない…。

それでも好きだった。だから、せめて嫌われなくなかった。

「このコ、一緒でも構わネーか?」

利知未が聞くと、二人は快く頷いてくれた。

「…じゃ、お邪魔シマーっす!」

言って、相変わらず利知未の腕を取った。利知未は軽く目配せして見せて、少し面食らっている二人に、ちよつと困つたような笑顔を見せた。

駅で別の線へ由美が別れて行ってから、三人はやつと肩の力を抜いた。電車の中で扉近くに立ち、話している。

「スゲー、積極的なオネーサンじゃネーか?」

高坂が少し呆れた顔をして言った。

「…なんだよな。一応、オレのダチって事で、もし、これから由美に会つても、同じ年な感じで頼むよ。」

軽く溜息を吐く。疲れている様子だった。

「もしかして、気に成ってる事ってソーゆう事か?」

大野が聞く。利知未は頷いて見せた。

「あの由美ってコが、一番積極的なんだよ…。良くわからネーんだ。」

「何が?」

「…何て言うか、…恋愛感情って言うのか?ソーゆうの。」

利知未の口から、そんな言葉が出て来るとは思いも寄らない事で、二人共かなり面食らってしまった。

「……って、おれ等だって、アンマ良くわからネーよ？特に、女のそれは。」

大野が当然な返事を寄越した。

「ソーだよな……。俺にも判らネーんだ。……本物の男に判る訳ネーよな……。」

もう一度、溜息をついた。二人は本物の男と言われ、改めて利知未が女である事を思い出す。ライブ中や、ファンの前での利知未を見ていると、ついその事を忘れてしまいかける。それ程にセガワは男っぽかった。

「……来週、学年末テスト始まんじゃん？お前等、大丈夫なのか？」  
利知未が話しを変えた。余り同じ事を長々と悩んでいるのは性に合わない。

「大丈夫な訳ネーじゃん？オレは瀬川と違ってバカだからな。」

利知未の性格を把握している高坂が、話に乗った。

「だよな、お前はマジ物覚えワリーモンな。」

大野がニヤリとして、高坂の物覚えの悪さについて、色々話し始めた。取り敢えず明るい雰囲気になしようと気を配った。高坂も槍玉に上がったからと言って、怒り出すタイプではない。

三人でバカみたいな話をし、最後は笑って、最寄り駅で別れた。

二月二十四日・土曜日。

授業中、利知未は緊張顔の担任に呼び出された。電話の呼び出しだ。

授業中の生徒を呼出すほどの、緊急連絡とはどんな物か……？

利知未の心に、言い様もない不安が襲う。家族の訃報での電話連絡。小学校の頃、優しかった大叔母の旦那さん、ジイチャンが危篤だと言う連絡を受けた事があった。

「まさか…、裕兄…！？」

ガタンと音を立てて、椅子を蹴って立ち上がった。

その表情を、貴子や、珍しく授業に出ていた高坂、セガワファンのクラスメートが、心配そうに見守っていた。

「利知未…？」

小さな声で貴子が声を掛けた。その声は、利知未には届いていない。急いで教室を出て、駆け足で職員室へ向かった。呼びに来た担任は追い付けない。

ガラリ！と戸を開いて、挨拶も無く電話に向かう。何人が残っていた教師が、緊張したような心配そうな表情で、利知未を見つめている。

「もしもし、瀬川です！」  
息を切らせて名を名乗る。

「瀬川裕一さんの、ご家族の方ですか？」

「はい、そうです、裕兄が…、兄に何か、あったんですか！？」  
電話の向こうに、静かな沈黙が流れた…。

「…裕一が…、亡くなりました…。」

辛そうな声が、小さな声で告げた。

「…何かの、間違いですよ？！裕兄が、裕兄がどうしたって…？！」

「…パートナーを庇って、雪崩に巻き込まれて…。」

「…嘘だ…。嘘だ！ちゃんと確かめてくれたのかよ！？本当にそれ、裕兄なのかよ！？なあ…、どうなんだよ…。」

受話器を握り締め、利知未が泣声で言った。後ろで担任の須加が、辛そうな顔をして利知未を見つめている。

「…：判りました…。これから、その病院に伺います…。」

電話の相手から、今、裕一の遺体は何処にあるのか伝えられ、利知未は小さく答えて、受話器を置いた。事務員が呼んてくれたタクシーに乗り、直ぐに病院へ向かった。

どの道を辿り、どう走っていたのか、全く分らなかった。  
まだ、利知未は信じていない。さっきの電話も、今、現在、自分が置かれている状況も。

漸く辿り着いた病院の玄関で、慌ててタクシーから飛び降りる。  
誰かがセーラー服姿の利知未を見つけて声を掛け、先に立って歩き出す。案内されるままに、地下階へと向かった。

地下にある霊安所で、右腕と、左の膝下の欠けた裕一の遺体と対面した。

まだ、信じない。信じられない。ふらふらとベッドの脇へ進み、裕一の遺体へ縋りつく。

「裕兄……？ 何で……、大学出たら、一緒に暮らすって言ってたじゃないか……？」

裕一は何も言わない。利知未と同じ様に、電話連絡を受けてきた優が、利知未の後ろで辛そうな顔を叛ける。利知未は裕一に語りかけ続ける。

「なあ、裕兄、寝てんのか？ 起きろよ！ 春休みは何時、泊まりに行けばいいんだ？ 何が食いたい？ 裕兄、酢豚また作ってやるよ……、裕兄？ 裕兄！」

……裕一の体から、その鼓動は響いてこない。裕一の体温は、全く感じられない。

目の前の現実には、利知未の意識が徐々に追いついて行く……。

「……約束、破るのかよ？ 裕兄らしくないよ？ なあ、裕兄……？ 裕兄……、裕兄……！」

遺体を揺さ振り、泣き崩れた利知未の後ろで、優はじつと動かない。  
「済みません……。僕が、雪崩に反応するのが遅くて、それで裕一が……。」

所々に包帯を巻かれ、車椅子に座った裕一の登山パートナーが、泣

きながら謝っていた。

「…腕と、足は…？見つけれなかったんですか…？」

漸う声を絞り出し、優が聞いた。登山で雪崩た雪の下になり、これだけの身体が揃っている事は、ある意味、奇跡的な事だった。裕一の遺体は継ぎ接ぎされている。

「探しました…。でも、見つけれなかった…。裕一は、自分からザイルを切ったんです…。それでなかったら、僕も巻込まれてた…」。

辛そうに、その状況を説明するパートナーに、怒りを感じる事は出来なかった。…この人を恨んでも、仕方ない…。相手は、冬山だ。利知末には、言葉が浮かばない。ただ、裕一の冷たくなったその身体に、必至で取りすがって泣き続けた…。

『何時になったら、女らしくなってくれるんだ？』

『お前が、どれくらい料理、出来るようになったか楽しみだ。今夜は何を作ってくれるんだ？』

『…ご免な、気付いてやれなくて…。』

『気味悪いって事、ないだろう？…そろそろ許してやったらどうだ？』

『分ったよ。…けど、余りにも女らしい反応で、俺も驚いた。』

『新年早々、神様の前で喧嘩するな！』

『大丈夫だよ。こう言うのは、結び目を反対にして木に結ぶんだ。それが、厄落としになる…。』

色んな裕一の言葉と表情が、脳裏に浮かんでは消え、浮かんではまた、消えていく…。

優は、利知末の様子を見ながら、泣きたくなくなるのを堪えている。

『…兄貴がいたから、オレ達は何時も笑っていられた。…なんで、兄貴がこんな事に…。』

悲しい、それ以上に、口惜しい…。

『俺の賞状と盾、眺めながら祝ってくれるんじゃない？ 兄貴。』

今まで、自分達を必至に守ってくれていた。

自分の歳が、裕一の歳を追いついて行く度に、優は裕一の事を尊敬し、感謝してきた。

兄貴が俺と同じ歳の時は、確か…。そう思い出しながら、その時々自分と比べ見てきた。そして、何時も思った。

『兄貴には、敵わない…』

優に取っても裕一は、誰よりも頼り甲斐のある父親のような存在だった。それと同じに、何時か兄貴の助けになりたいとも、思いつづけてきた。

『ずるいじゃネーか。…オレに、恩返しする時間もくれないで、逝っちゃう何て…。』

思い出はいくらでも浮かんでくる…。目の前で泣き続ける利知未に、何も言葉をかけてやれない自分が、辛い気持ちを益々、煽る…。

「…暫く、妹を頼みます…。」

小さく呟いて、優は遺体の引き取り手続きをしに、霊安所を出て行った。

親戚に連絡をするのは、優の役目になった。母親にも連絡を入れ、急いで仕事を片付け葬式までには日本に戻ると言われ、優は苛立ちを覚えた。

利知未は、何もする事が出来なかった。ただボーっと、裕一の遺体の傍に座り続けていた。

手続きを済ませて、霊安所へ戻った優にそっと肩を持たれ、利知未は漸く微かに顔を上げた。

「…これ、本当なのか…？ …夢じゃ、ないよな…。」

呟く利知未の言葉を聞き、優の目から、堪えていた涙が零れた…。

「…夢じゃ、無いんだ…。利知未…。兄貴は…。」

優の声が震えている事に気付き、利知未の目からも再び涙が溢れ出した。

「……兄貴、連れて帰るぞ……。」  
利知未が小さく、頷いた。

裕一の遺体を、アパートへ運んで貰った。

通夜の準備と葬式の準備をしに、葬祭屋が現れた。ほんの三ヶ月ほど世話になった親戚の伯父が、連絡をしてくれた。

実母が葬式当日しか現れないという事態に、葬儀屋はやや戸惑った。喪主は優が勤める事になった。

父親が慌てて飛んで来た。十年ぶりくらいの再会になった。

母が到着するまでは居てくれると言った。優も利知未も、父親の事は余り恨みに思っていない。怒りは母親に向いているくらいだった。

その代わり、父親として意識する事も出来ないでいた。気の優しい遠い親戚の小父さん、そんな認識しかない。二人にとっての父親代わりは裕一だったのだ。利知未が四歳、優が八歳の頃から……。その頃、裕一はまだ僅か十二歳の少年だ。必死になって、二人の事を守ろうと生きてきた。

利知未と優は、葬式が終わるまでこちらに居る事になる。その夜は仮眠さえも取らずに一晩中、裕一の傍らに座っていた。

父親が、自分のシヨック以上のシヨックを受けている二人の子供を心配して、色々と気遣ってくれた。それだけは有り難かった。

葬式は狭いアパートでは無理がある。翌日、祭儀場へと移動した。母親が現れたのは、その式場だった。一応、手続き等は全てやって行ったが、利知未は事務的なその態度に、心の底から苛立った。優も苛立ちを隠し切れずにいた。だが喪主として、必至に堪えて



いた。利知未はその姿を見て、自分も一生懸命堪えていた。

『何処でも構わず喧嘩を始めるな。』

呆れて嗜めていた、裕一の言葉を思い出した。

骨は、瀬川家の先祖が奉られている墓に収められる。祖父母は利知未が生まれる前に亡くなっていた。優も余り記憶が無いような頃だ。母は再婚をする気も無い様だった。

葬式の出席者は、少ない親戚よりも大学の友人の方が多い位だった。裕一はその人柄で、大学でも多くの友人に慕われていた。登山サークルの仲間も勿論、出席した。

低く読経が響く中、参列者が代わる代わる焼香に立ち、手を合わせる。利知未は優の横で、涙を堪え続けていた。これまで喧嘩ばかりしてきたが、今この時、唯一、同じ思いを分かり合えるのは、優だけだった。

三人だけの約束が、いつぱいあった。家族で明るく楽しい時間を過ごせたのは、兄妹三人でいた時だけだった。

葬式の後、どうしても一足先に戻らなければならなかった優の変わりに、裕一のアパートの後処理を一人で片付けた。半分は優と二人で終わらせていた。

主のいなくなった部屋で一人、利知未は静かに泣き続けた…。

## 七

その週FOXのメンバーは、利知未の兄の訃報を聞き、今週はセ

ガワなしのステージになる事を覚悟し、急遽四人での練習時間を増やしていた。

葬式後の木曜。利知未は亡くなった裕一のアパートから、練習スタジオに向かった。

「セガワ…。平気なのか…？」

暗い表情でスタジオに現れた利知未に、リーダーが気遣わしげに言った。

「…歌いに来た…。」

呟くような利知未の言葉に、敬太が声をかける。

「…歌ったら、少しは楽になれそうなのか？」

利知未は黙って頷いた。それに頷き返して、敬太が声をかけた。

「…リーダー、練習、始めよう？」

「…ああ、そうだな。」

利知未は手ぶらで現れた。裕一のアパートからの直行だ。アパートに少しだけ置いてあった服で、優のお古のトレーナーを、ぶかぶかな感じで着ていた。それが益々、体形の華奢な部分を引き立てていた。

利知未のパートのギターを、リーダーが変わりに弾いてくれた。

その歌声は切なく、メンバーの心に、何かがぐさりと突き刺さった感じがした。…全員の身体中に戦慄が走った。

利知未は歌いながら泣いていた。涙を流していたのではない。心の中に、悲しみが溢れていた…。

声を出す事で、その思いを相殺しようとしていた。悲しが多いほど、声に迫力が増す…。

一曲、歌い終わった時、バックの音がなくなっていた事に気付いた。

ドラムだけは、最後までリズムを刻んでくれていた。

「…スゲー…。」

拓が呆然と呟いた。

「セガワ、そんなに……。」

アキが泣いていた。リーダーは、じっと利知末を見つめていた。

「次、なに歌う……？」

敬太が優しく聞いてくれた。溜まってきた涙が、敬太の声を聞いて、一筋だけ頬に流れた……。

利知末は、その涙を袖口で拭い、悲しさを抑えた微笑を敬太に向けた。

「あれ、やってくれよ……？」

初めてライブで歌った曲の事だ。敬太が頷いて、リズムを取った。

歌い出して、途中からメンバーが曲を奏で始めた。

利知末は今、歌が在る事に感謝していた。

葬式の後、火曜までは優と一緒に居てくれた。裕一の遺品整理の為だ。

「後、本当に一人で、大丈夫なのか？」

寮に戻らなければならなかった優が、気遣わしい声をかけてくれた。

「元々、裕兄の荷物少なかったし。……医学書と大学の本、俺が持つて行っても良いか……？」

利知末の問いかけに優が頷いた。

「好きにして良いぜ。オレは登山道具、持つてくかな……。」

優が自分で山登りを始める気はない。幾つか小さな物だけ寮に持つて行き、後は大学の仲間が形見分けに貰って行った。それでも残った物は、中古品として売ってしまう。

洋服は利知末も少し貰い、後は大半、優が自分で着るからと言って引き取った。食器や家財道具はリサイクルショップ行きだ。

そこで出来た金と、裕一が貯めて来た金を合わせて、様々な支払いを終わらせる事になる。それでも残った分は大した額ではなかったが、優の大学入学準備に回す事にした。

片付けの途中、医学書を手に取って、見つめながら利知末が言っ

た。

「…俺さ、進路、決めたよ…。」

「どうするんだ？」

「…医者になる。」

「…そうか…。お前なら、なれるかも知れなーな…。」

微かに笑顔を作って、優が頷いた。裕一の夢を引き継ぐと決心した妹を、優は裕一の分まで、応援してやろうと決めた。

それから一人になった部屋で、昨夜は一晩中泣いていた。

死んでしまいたい様な気分にも襲われたが、裕一の夢を引き継ぐと決心した事で、生きる意味だけは見失わずにいられた。

それでも、どうしようもない悲しみに捕われて、利知未は今日、練習スタジオに現れたのだった。

練習が終わり、利知未は今夜もう一晩だけ、裕一のアパートに戻ると言った。

敬太が、拓の知り合いに安く譲ってもらったワゴンで、アパートの近くまで送ってくれた。

「明日のライブは、行くよ…。」

車を降りる時、利知未が言った。

「そうか。…じゃ、待ってる。」

敬太は優しい笑顔で言ってくれた。その笑顔を見て、利知未は葬式の後から始めて、少しでも心が安らいだ。

「…サンキュー、送ってくれて。…じゃ、お休み。」

「お休み。」

そして利知未を降ろすと、敬太は向きを変えて、車を出発させた。

翌日、利知未は遺品の最終的な処理と、様々な支払いを終え、昼頃に下宿に戻った。

戻った利知未を、里沙が少し心配そうな笑顔で迎えてくれた。

「お帰りなさい。荷物、届いてるわよ。利知未の部屋へ運んでおい  
たわ。」

「ただいま…。サンキュー、里沙。」

無理に小さな笑顔を作って、利知未が言った。その表情に、里沙は  
大人びた利知未の姿を見た。

「今日は早めに、ご飯用意するから。食べて行きなさいね。」

利知未が恐らく、バンド活動に向かうであろうと推察していた。

「…なんにも、聞かないんだな。」

「聞いても、仕方ないでしょう？利知未が話したい事があれば、い  
くらでも耳を傾けるわよ？…お風呂、入ってるから。」

里沙の言葉に、利知未は感謝した。

「ありがとう。着替えてくる。」

階段を上がり、服を着替えてから、バスルームに向かった。

十七時頃、里沙が用意してくれた夕食を食べてから、ライブハウ  
スに向かった。メンバーは待っていてくれた。

その日、セガワの歌声は、客席のファンを今まで以上に魅了した  
…。

ステージを降りたセガワを、何時もよりも多くのファンが取り巻  
いた。目に涙を溜めている少女までいた。初めてFOXのライブを  
見に来たと言っていた。

利知未はセガワとして少年らしく振舞っていたが、今までよりも  
更に大人びたその雰囲気、何かを感じたファンも多かった様だ。

店を出て、何時も通りタバコに火を着けた。そして、そのまま歩  
き出した。何時もは一本吸い終わってから移動をしていた。

「セガワー!!」

駆け足で由美が追い掛けてきた。利知未は振り向いた。

「今日は急いでるの？」

「…いや。そうじゃないけど…」

再び歩き出す。由美は何時も通りに腕を絡ませてきた。利知未は何も反応しない。その雰囲気の違いに、由美は何かを感じた。…腕を放した。

立ち止まってしまふ。利知未は、そのまま歩いて行く。

「ね、セガワ。…なんかあった…？」

「…別に。」

由美の声に軽く首を振って答えた。振り向いてはくれない。

追い掛けて、思いつく限りの面白い話をした。偶に見せてくれた笑顔が見たかった。それでもセガワは笑ってくれない。

「…ね、今日も寄って行こうよ？」

駅前に着き、何時ものファーストフード店を指差す。

「…今日は、帰るよ。…じゃ。」

暗い瞳のままで首を振り、そのまま改札に入ってしまった。

「…セガワ…」

小さく由美が、呟いた。

利知未は翌週から、やっと学校へ行き始めた。

久し振りに現れた利知未に、クラスメート達は気遣わしげな視線を向けた。この一週間、利知未がなぜ休んでいたのかは、みんな知っていた。

貴子や高坂は、利知未に変わらずに接してくれた。ただ、その反応は、今までの利知未からは想像も着かない程の暗さだった。

歌っている時だけは気分が変わった。それ以外の時には、どうしても明るい気持ちになれなかった。

バンドの練習とライブは、休まずに続けていた。

帰りは敬太が、毎回送ってくれていた。練習中も気に掛けてくれた。

利知未は、段々と落着く事が出来てきた。  
始めに気持ちが解れたのは、敬太に言われた言葉が切っ掛けだった。

三月二度目のステージに立つ前、練習後、利知未を送る車の中だった。

「…無理しないで…。ここならオレ以外はいないから、誰にも気付かれない。…泣いたって、構わないよ。」

葬式の後、利知未は決して涙を人に見せなかった。特にセガワとして行動していた時は、無理矢理、悲しさを消していた。歌にだけ乗せていた。そして今まで以上に、男らしく振るまっていた。

敬太の言葉で涙が溢れてきたが、零れ落ちない様に堪えていた。

「セガワじゃなく、利知未に戻って…。」

そう言った敬太の目は優しく、自分を見守り続けてくれた、裕一の目を思い出した。…熱い物が、胸の奥から沸いて来た。

その時ついに、利知未の目から涙が溢れ出した…。

両手で顔を覆い、小さく肩を震わせた。敬太は車を路肩に止め、その肩をそつと抱いてくれた…。

翌日のライブで、利知未の歌声に迫力と、深みが加わった。

まだ十四歳の少女だ。深みと言っても、それ程深い物とは違う。

それでも前日の練習の時よりも、また何か一つ、その歌声に足されていた。

メンバーは勿論それに気付く。そしてファンにも何か伝わる。

由美はしかし、その歌声に、セガワの何か深い苦悩のような物を汲み取っていた…。心配になった。けれど先週の彼の様子を思い出すと、ライブ後、セガワに付きまとう事は出来ないと感じた。

それでFOXのステージが終わると、早々に店を出て行った。そして、自分の気持ちがどうしてもセガワに届かないと思った時…。

益々、自暴自棄な気分には捕われて、…また客を取り始めてしまっ

た。

由美は、危険な深みに嵌まって行った……。

直ぐに卒業式が来た。その頃の利知未を、橋田と田崎も心配していた。

去年と同じ様に式は流れて行く。恒例のエール交換が行われ、応援団部員の勇ましく猛々しい声に、利知未の心が揺れた。

『去年は、櫛田センパイと都筑センパイが卒業して行った…。今年は、橋田センパイと田崎センパイがいなくなる…。FOXに出会えたのは、センパイ達のお蔭だった。俺にギターと歌と、バイクを教えてくれた…。ちゃんと、送り出さないと…。』

謝恩会まで終わらせた橋田達が、団部の祝賀会に集まった。

「三年間、ご苦勞様でした！」

今年は高坂が号令をかけた。それ一つを取っても、この約二年間の時が思い出される。利知未も一緒に声を出した。

「ご苦勞様でした！！」

涙が浮かんできたが、零れはしなかった。ただ胸の奥には熱い物が渦巻いている。団部の仲間との、色々な事が思い出された。

学校に来るのが苦痛でなくなったのは、この場所のお蔭だった。

始めの一年は櫛田がいた。何時も、素の利知未を受け止めてくれた。

次の一年は、橋田と田崎がいた。高坂と大野は、利知未の事を二人と一緒に守ってくれた。今は、三年の佐伯達が狙っていた事も何となく気付いていた。危ない一年だった。無事に過ごせたのは四人のお蔭だ。

利知未は、田崎のギターを借りて歌を歌った。



セガワとしてではなく、利知未としての歌声だった。始めてマトモな利知未の歌を聴いた橋田が感心した。

田崎や高坂達は、暫くぶりに聞いた歌声に、何かを感じた。田崎にギターを返して、利知未は久し振りに笑顔を見せた。「センパイ、色々サンキュー。」

その笑顔に、田崎も橋田も、やっと少し安心できた。

祝賀会の途中、利知未は一人抜け出して、去年、櫛田と最後に話した、校庭の見える階段に行った。

一人でボーッと校庭を眺めながら、櫛田の言葉を思い出した。

『…いい女になれよ。』

櫛田は、中学生生活最後の言葉として、利知未にそう言った。

初めて自分の手料理を、家族以外の男に振舞ったのは、櫛田に持って行った親子丼だった。

十一月に櫛田からリクエストされて作ったのも、思い出の料理だ。ふと、利知未は初めて気が付いた。櫛田が、自分に対して感じていた想いは…。そして、気付かない内に、自分が櫛田に感じていた気持ちは。

『…恋愛感情って、良く分からないけど……。』

…今、敬太に感じ始めている気持ちは…。

何となく、くすぐつたい様な気持ちがして、利知未は自分の膝を抱いた。頭を膝の上に置くようにして、目を閉じた。

「…瀬川。」

後ろから声をかけられて、ゆっくりと頭を上げて振り向いた。

「橋田センパイ…。どうしたんだ、まだ宴会してんだろ？団長が抜けたら白けちまうぜ？」

利知未は軽く笑顔を作った。橋田が近付きながら言う。

「…チヨイ、良いか？」

「構わネーけど…」

橋田は去年、櫛田が座っていた所に腰を下ろした。暫く沈黙が流れた。

「…歌、良かったぜ。」

少し躊躇った後、橋田が言った。利知未はまた、微かな笑顔を作る。

「…サンキュー。」

そして、また暫し戸惑ってから、橋田がポツリと言った。

「…まあ、聞き流してくれて、構わネーんだが…」

「なんだよ？」

膝を抱えたまま、利知未が聞いた。

「…その、な。…結構、お前の事、好きだったぜ。」

「……。」

突然、告白された。橋田は顔を上げ夜空を仰いだ。照れた笑顔を作る。

「アーあ、櫛田さんに知れたら、シバかれんな…！」

さっと立ち、キョトンとしている利知未を見下ろして、笑顔で言った。

「ソーユー事だ。…じゃーな。先、戻るわ。」

橋田の足音が後ろに微かになった頃、利知未は小さく呟いた。

「…サンキュ、センパイ…。」

利知未は初めて少女らしい感覚で、人を好きになると言う事が、どんな事が…、その事に、気が付いた。

卒業式は、三月十九日の事だった。

それから利知未は、セガワとしてステージに立ち続けた。

裕一の死後、落ち込んでいた気持ちを回復するには、もう暫く掛かった。その思いを引き摺ったまま、歌声は益々、冴えていった。セガワファンは1ステージ毎、増え続けていった。

気付いたばかりの恋愛感情は、歌声に益々、艶を足していた。利知末の中で、敬太の存在は、徐々に大きくなっていった。

由美はセガワの歌声を聞いて、彼がまだ、何か悩みを抱えている事を感じていた。

自分がその助けには成れそうもないと感じるたび、益々、自暴自棄な心に捕われ、ライブの日にも客をとる様になった。

ただ、FOXのステージだけは見つづけていた。客と会うのはライブ後にしていた。

… 由美は益々、危険の縁に、誘い込まれていく。

由美がセガワを、帰宅時まで追いかけなくなった、その頃。敬太はセガワの、隠し続けている少女らしい姿を、少しずつ見つけていた。

セガワが利知末に戻る瞬間を、徐々に愛し始めていた。けれど、まだ、お互いの気持ちを伝え合う事は、出来なかった。

利知末の心が、裕一の死からもう少し立ち直れるまでは、自分の思いを伝える事に踏み込めないでいる。

敬太の存在が大きくなるにつけ、利知末は敢えて、セガワの時の少年らしさに磨きを掛けて行く…。

気を張っていないと、気持ちがグズグズになってしまいそうだった。

春休みも、毎週ライブと練習は続く。

利知末はバンド活動をしている時、セガワに成り切ろうとする気持ちの張りで、少しは悲しみが誤魔化せている事に気付く。

そうして、徐々に心が回復して行った、三月下旬から、四月。時は流れ、利知未達も、進級・進学の時期を迎えて行った。

幸せの種 第四章 了 (次回は、9月21日22時頃 更新予定です。)

## 四章 中二・新しい季節… 『FOX』

（後書き）

今回も、最後までのお付き合いをありがとうございます。 < (――)

>

このお話を、現役中学生の方が読んで下さっていると聞きました、この場をお借りいたしましたので、お願いです。どうぞ利知未達ヤンチヤ者の行動パターンに、感化されませんように。

あなたたちを大切に思っているご両親に、心配をかけないでくれる事を、作者として心よりお願い致します。そして、利知未と歳の近い皆様、どうぞ利知未を自分の友達と思って、応援してあげて下さい。

大人の読者の皆様。次回より利知未は中学三年生です。また、大きな出来事が待ってます。只今、編集中です。後二回、最後までお付き合いましたら、心から嬉しく思います。

また来週、皆様とお会いできますように。

## 五章 春・闇夜を抜けて…『敬太』

（前書き）

利知未の懐かしい中学時代の思い出話、第五章です。この作品は、  
'80年代後半から'90年代初めを時代背景としたフィクション  
です。（本文上の事件、出来事の下敷きとなっております。）

最愛の兄、裕一を亡くした利知未の心は、暗く沈んでいた。その  
中で、一つ上の先輩・田崎からの一言で大切な事に気付く。少女と  
しても成長していく利知未の中学編、クライマックスです。

この作品は決して、未成年の喫煙、ヤンチャ行動を推奨するもの  
ではありません。ご理解の上、お楽しみ下さい。

## 五章 春・闇夜を抜けて…『敬太』

五章 春・闇夜を抜けて…『敬太』

—

その年、下宿に新しい住人が一人増えた。仲田<sup>なかた</sup> 冴史。今年、中学に入学する少女だ。利知未と玲子の後輩となる。利知未との初対面は、少しびつくりな事件となった。

この頃のFOXは、セガワの歌いたい気持ちに応え、練習日を週2日から3日に増やしていた。火曜を月曜に変え、水曜・木曜が練習日だ。ライブ日は変わらず金曜で、毎週、月・水・木・金の夕方は、セガワらしい格好でギターを担いだ利知未を、下宿でも見掛ける事に成る。

254

三月末の練習日、玄関先で玲子が誰かと押し問答をしていた。「ですから、ココには高校一年の男なんて、住んでません!」「そんな筈ないよ? 確かな筋からの情報なんだから!」「確かな筋って何ですか。興信所? 警察? それとも区役所の住民管理課かしら?!」

玲子は頭が良く回る。口喧嘩なら負けない。

「アツタマくん、このコ! セガワを出してって言うてるだけじゃん!?!」もしかして、アンタ、彼の彼女かなんか?!?!」

「嘘! セガワ、恋人なんかいないって!」

何処で調べたのか、利知未の住所を知ったセガワファンが、二、三人、玄関先に押しかけて来た。

最近、増えたファンの中に、こんな、とんでもない事をしてくれる様な子も混ざってきていた。

「ココに住んでるのは瀬川 利知未と言う、中学二年の女子ですけど？」

「えー、じゃ、セガワ違いって事?!」

「そんな事…、ア！セガワだ!!」

その時、利知未は廊下の影で様子を見ていた。だが、これ以上遅くなれば遅刻してしまう。今は歌う時間が少しでも欲しい。

息を吸い、気分を切り替えて、利知未はセガワとして姿を表した。  
「やっぱ、いるじゃん!」

ファンの勝ち誇った顔付きにカチンと来て、その怒りを利知未に向ける。玲子は利知未を振り返って、一睨みを効かせた。『なんで今、出てくんのよ?!』と、睨んだ目が伝えている。

利知未は軽く肩を竦め、玄関先に進み出た。

「…迷惑掛けて、ワリーな。」

玲子に呟く様に詫びた。セガワ・テンションである。玲子は一瞬どきりとする。そして半分、呆れた。

『本当の男、見たい…』

呆れた表情で固まってしまった玲子を、利知未は優しく押し退けた。  
「お前等、何処で聞いて来たか知らネーけど、ココは俺が住んでる場所じゃネーぜ?…姉貴が住んでんだよ。」

朝美に協力を頼もうと思った。

「ソーなの?セガワって、お姉さんがいるの!?すごいスクープ  
!!ね、どんな人なの?美人?ライブ、見に来てくれた事ある?!」

ここにいるファンの中でも、特に積極的そうな少女が、矢継ぎ早に質問を繰り出す。利知未はそれを手で制した。

「…今度、ライブ見に来て貰うからさ。…こんな玄関先じゃメーワ  
クダ。練習行くから、そこ空けてくれよ?」

ファンが「ご免なさい!」と、素直に利知未に謝って玄関を出た。

玲子は本格的に呆れた。それと同時に、何となく利知未が気の毒な気がして、そう感じた自分に驚いた。利知未は、まだ裕一の死から完全に立ち直ってはいない。



今までの利知未からは余り想像出来ないくらいの静かさで、玲子が生活の中で色々な注意をしても、最近は喧嘩にもならない。そんな精神状態の中で、それでも今のファンに対する態度は、ぶっきらぼうではあるが、優しい感じがした。

小さく溜息を吐いて、玲子は利知未とファンの群れを、横目で見送った。

玄関を出て、三人の派手な雰囲気少女達に囲まれながら、利知未は男っぽい様子で歩いて行く。歩き方を始め、身のこなしなど、最近は何部仲間を見て研究をしていた。益々、磨きが掛かっている。

その姿を、母親に連れられた冴史が見た。

道に広がって歩くファンに、ぶつかりそうに成る。冴史の母親は眉を顰めていた。

避けたつもりが、夢中になって話している少女が道へ膨らみ、冴史はぶつかって転んでしまった。

「でさ、セガワ、」

と、ぶつかった本人は全く気が付いていない。利知未が気付いた。

「おい、大丈夫か？」

ファンを退けて冴史に手を差し出した。冴史も驚くが母も驚く。

「済みませんでした。」

利知未は、転んでしまった少女を連れた母親に声を掛けた。親子はびっくりしていた。冴史は差し出された手を掴んで立ち上がった。

「…洋子、気付かなかったか？」

利知未がぶつかった少女を見た。少女は赤くなって俯いた。

「ごめん、気付かなかった…。大丈夫だった？」

その少女も、その服装や雰囲気の割には優しい声で、冴史に言う。

「大丈夫。」

冴史は小さく返事をした。利知未がほっとした顔をする。

「悪かったな、じゃ。」

言って踵を返して、歩いて行った。少女達が慌てて追い掛ける。洋子と呼ばれていた少女が、仲間の少女から軽く小突かれていた。

「派手な子達だったわね…。この辺りの子かしら…？」

母親が心配そうに呟いた。

少女達は、練習スタジオまで利知未を追い掛けようとした。利知未は、スタジオは関係者以外立ち入り禁止だと伝えた。

「あの家には迷惑を掛けて欲しくない。二度と押し掛けないでくれ。」

そう言っ、少女達に二度と、こう言う事をしてくれるなと釘を指す。

しぶしぶ頷いたファンから、来週のチケットを売って欲しいと言われて、それを売り、乗り換え線の改札まで連れて行き、少女達を帰した。

練習スタジオは、十八時から二十一時半まで借りている。通常は、其々の学校が終わってから集まり、スタートは十九時頃になる。

今日もセガワは、ただ夢中で歌を歌い、ギターを弾き続けた。

メンバーはその様子を見て、利知未がまだ、悲しみから立ち直れていない事を感じる。

「今の利知未を、一人で帰すのは心配だから。」

そう言っ敬太は、今日も下宿まで送ってくれた。

利知未は、敬太に送られる車の中でだけ、素の自分にいくらか戻る事が出来た。

「なあ、敬太。」

車窓からボンヤリと夜の街を眺めながら、利知未が言う。

「何？」

ハンドルを握った敬太が、前方の信号を注意深く確認しながら聞く。  
「…ちよつと、寄り道してくれないか？」

「…構わないけど、アンマリ遅くなると、心配されるんじゃないか？」

「ちよつとで良いんだ。下宿より、もう少し北西に向かった所に公園があつて。…少し土地が高くなつてゐる所で、…星が良く見えるんだ。」

街の明かりが後ろへと流れていく。人工的な光だ。利知未は今、無償に自然の光が恋しい気分だった。…裕一は、自然を愛していた。

「分かつたよ、少しだけね。」

敬太が軽く微笑んで、ハンドルを切った。

利知未の道案内で、下宿やアダムの在る街より、やや北側、小高い丘の上の公園に車を止めた。ライトを消すと、足元に街明かりが見えた。

利知未が車を降りた。敬太もエンジンを切つて車を降り、後を追つた。

少し先のベンチへ座った利知未が、夜空を仰ぐ。敬太はゆつくりと近付いて、その隣に立った。三月下旬の、暖かくなり始めた空気が風となつて、さらりと吹き抜けた。公園の植え込みも優しく揺れる。

「…気持ち良いな…。」

その風を頬に受けて、利知未が小さく呟いた。

「…そうだね。随分、暖かくなつてきたよ。」

利知未が少し敬太を振り向いて、声をかける。

「隣、座ンないか？」

「そうだな…。」

二人でベンチへ並んで座り、空を仰いだ。ふいに利知未が言い出した。

「…裕兄さ、自然が好きだったんだ。…山頂から見える景色とか、でっかいヤツ。…星も、好きだったな…。山の上で見える星って凄く綺麗なんだって、良く言ってたよ。」

「空気が平地よりも、綺麗だからかも知れないな。」

「後、周りが暗いからだってさ。土地も高いモンなって俺…、…あたしが、言ったら…、…笑われた。」

少し驚いて、利知未を見た。空を仰いだまま、照れた顔をしている。「…裕兄に、いつも言われてたんだ。まだ、俺って言ってるのか？って。一昨年の夏に会った時も言われた。…今更、遅いかもしれないけど…。」

泣きそうな顔になる。しかし、必至で堪えていた。

泣き顔は見られなくなかった。それでも滲んで来てしまった涙を、袖で拭う。止まってくれなくて、斜め後ろを見た。

必至で泣き顔を隠そうとしている利知未の背中を見て、敬太はそつと、その肩を抱いた。無理に覗き込んだりはせずに、そのまま空を仰いだ。

利知未は敬太の手の暖かさに、少しずつ気持ちが落ち着いていく。

徐々に涙が止まって行つた。そして、敬太を想う気持ちがなんなのか。改めて、言葉として理解した。

『あたしは、敬太が、好きなんだ…。』

敬太の前では、少女としての自分に戻りたいと思う。

FOXのセガワは作られた少年だ。だが、歌う事はまだ止められない。

「…ごめん。もう平気だ。…行こう。」

涙が止まった顔を笑顔に変えて、敬太を見た。敬太が頷いて立ち上がる。

悲しみを乗り越え様と頑張る、華奢な背中が愛しかった。

敬太は益々、少女としての利知未を愛して行く。

『…けど、もう少し時間が必要だ。』

自分の想いを、今の利知未に押し付ける事は、出来ないと思った。

下宿まで送り届け、笑顔を見せた利知未に軽く手を上げて車を出した。

一人、運転をしながら思う。

『利知未を、支えてやりたい…。』

FOXのセガワではなく、素のままの利知未を。その華奢な心を、自分が守りたいと思った。

利知未が玄関へ入ったのは、十一時過ぎだった。

練習日に利知未の帰宅が、十時半を過ぎるのは滅多に無い事だ。

里沙は心配して待っていた。利知未が静かに、玄関のドアを開けて入って来た音を聞き、リビングから慌てて出て行った。

『…遅かったのね。』

それでも無事な姿を確認して、少しホッとして迎える。

『心配掛けて、ごめん。』

利知未は短く詫びた。その雰囲気、里沙は何か微妙な変化を感じる。

「まあ、良いわ。無事に帰って来たんだもの。…けど、これから十時半を過ぎるような時には、必ず連絡をちょうだい。何処かで事故にでも巻き込まれたかと思って、心配してしまうわ。」

「分かったよ。」

呟いて答え、自室へ向かった。

「お夕飯、食べるわよね？温め直しておくわ。」

階段を登りかける利知未の後姿へ、声を掛ける。小さく返事が聞こえた。

翌朝八時ごろ、利知未は朝美の部屋に顔を出した。

朝美は今年、簿記の専門学校へ通う事にした。一年間の職業訓練校だ。その専門学校を出るまで、この下宿で暮す事に成っている。

「利知未にしては、珍しく早いじゃない。」

部屋に迎え入れ、テレビを見ながら話す。

「バイト、行くんだろ？」

「十時からね。で、どうしたの？」

朝美は、裕一の死後、落ち込んでいた利知未に対して、以前と変わらない様子で接してくれていた。利知未は、その態度に少し救われた。妙に心配顔で氣遣われるよりも、氣が楽だと感じている。

「来週の金曜日、何か用事あるか？」

「来週？学校はまだ始まらないし、バイトだけだよ？」

少しホッとした顔で、利知未が切り出した。

「ライブ、見に来てくれないか？セガワの姉貴の振りして。チケット代はいらないから。」

朝美は驚いた顔をして、利知未を見た。直ぐにニコリと笑顔を見せる。

「イーけど、…昨日のフアンの子達が原因？」

夕食の席で、玲子が話していた事を思い出す。

昨夜は新しい住人・冴史も、その席に着いていた。

朝美が同席していない、もう一人の住人、利知未の事を話してあげていたタイミングだった。玲子が夕方、玄関先での押し問答を話し出した。

「私、本当に呆れちゃった。元々、男か女か判らないのに益々、男見たいになって。それに、あの集団はいったい何なのよ？」

かなり苛ついている様子だった。事実、玲子は苛ついていた。

『何かバカみたい…。人の事、構っていられるような状態じゃないクセに。あんな人達にまで氣を使つて…。』

喧嘩相手の利知未が、傍迷惑な少女達相手に、優しい態度を取っ

て見せていた事に、何故か苛ついている。

利知未は玲子と対等に、口喧嘩でも勉強でも渡り合う良いライバルだった。利知未はアレで頭も切れるタイプだ。

「…もしかして私が、その道で擦れ違った人達かな…？」

冴史が小声で言った。

「派手な女の子を三人も引き連れた、見た目だけは良い顔のギター背負った男を見たのなら、多分、その集団よ。」

玲子が言葉を吐き捨てる。朝美は玲子のその様子に軽く吹き出す。

「…すっかり、地が出て来たネ？玲子。」

クスクス笑う。冴史は首を傾げる。玲子は照れ隠しに少し膨れている。

「二年近くも利知未を相手にしてたら、すっかり真面目に話してるのがバカバカしくなっただんです。」

食事を口にする。そのまま少し膨れた様子で、黙々と食べ進めた。

「その、瀬川利知未さんって、玲子さんと同じ学年の、お姉さんなんですよね？…あの時のヒトは、高校生くらいの男の人に見えませんでした。」

転んだ自分に手を差し出した、あの姿を思い出す。確かに、綺麗な顔をしたお兄さんの様に見えていた。変わった人…

「そう言う事にして、アマチュアバンドに参加してるの。学校には知られていないみたいだから、取り敢えずそつととしてあげてね。」

朝美は利知未の事を良く見ている。今、そのスタイルでバンドに参加している事が、利知未の心にとって、どれほど大切な時間なのかも薄々、感じていた。

「私が四月から通う城西中学の、三年生なんですね。」

何か思っている様子の冴史に、今度は朝美が首を傾げたのだった。

部屋の中まで進んだ利知未が、朝美の勉強机の椅子にドサツと座

る。

カーペットの上で、足を投げ出してテレビを見ていた朝美が、テレビを消して利知未の方へと向き直った。

利知未は、俺、と言い掛けて言い直す。責めてセガワでない時ぐらいは気を付け様と、昨夜、心に決めただけだ。

「…あたし…、一応、今年で高校二年になるって、誤魔化してるだろ？」

一人称が改まった利知未に、朝美が眉を上げる。

『どーした風の吹き回しやら…。…やっぱり、お兄さんの事かな？』

思うが、突っ込むのは止めた。利知未は女なんだから、それが普通だ。

「昨日、あの子達に、ここに二度と来ない様に言っておいたんだけど…。あたしがココから出て行った事の原因に、姉貴が住んでるって事にしたんだ。」

利知未が軽く溜息を付く。何となく少女らしい雰囲気磨きが掛かって来た様で、朝美の眉がまた上がった。

『…お兄さんの事だけじゃ、ナイのかも…。』

ニマリと、口元が緩んでしまう。それを目にした利知未が変な顔をした。

「…なんだよ？あたしって言うの、可笑しいか？」

本当は凄く照れ臭い。それでも裕一と敬太の事を思い出して、利知未は頑張ろうとしている。

「んーん、別に…。それが普通じゃん？」

朝美は、そっぽを向いて誤魔化した。もしも本当に、利知未に色恋沙汰が絡んできているのなら、その相手は十中八九、バンドの中にいるだろうと推理した。…これは面白そうかもしれない。

「で、来週ね？イーよ。楽しそうだし。…ね、何て呼べば良いの？」「何が？」

「姉貴って事になってるなら、セガワって呼ぶのも変だし。だから



って、利知未って呼んだら駄目でしょ？」

朝美に聞かれて、それもそうだと思う。暫らく二人で考えて、朝美が思い付く。

「…じゃ、智紀の名前借りちゃおう。あたしも、その方が間違わなくて済みそうだし。」

朝美の義弟の名前を、そのまま流用しようと言う事だ。

「ソーすると、瀬川 智紀って事になるのか…。なんか、あたしが混乱しそうだ。」

朝美の机に片頬杖を突いて呟いた。

「ゴロは悪くないんじゃない？」

朝美がニコリと言った。それを横目で見て、利知未が軽く頷いて見せた。

「…ソーだな。…チヨイ、騒がれちまうかもしれネーけど、ヘーキか？」

「まっかせなさい！」

朝美は胸を叩いて、快く引き受けてくれた。

## 二

四月頭の金曜日。FOXのライブに、約速通り朝美が現れた。

利知未は前日の練習日に、ファンの一部が下宿に押しかけてきた事、誤魔化す為に朝美を姉貴としてライブに呼んだ事。朝美が自分の名前を呼ぶ時には、朝美の義弟の名前を借り、智紀と呼ばれる事などを説明しておいた。

「オレが睨んだ通りだな。」

リーダーが控えめにニヤリと笑った。利知未が聞く。

「何が？」

「セガワを見つけた、自分の才能が恐ろしいよ。」

裕一の死後、利知未に気を使って、余り軽い様子を見せない様にしていたリーダーが、久し振りに軽い笑いを見せた。

「気楽な事、言わないでくれよ。結構、参ったんだ。…何であんな事、出来るんだろうな…？」

押し掛けてきた、ファンの顔を思い出した。

その日のライブも、客は大入り満員だった。

FOXはニューイヤールライブ以降、ステージ時間を一時間、貰うようになっていた。それまでよりも十五分、長くなったのだ。それに伴い、人気のある曲を必ず三曲、演奏メニューの中に組み込む様になっていた。その曲の中には、利知未が初めてココで歌った曲も入っていた。セガワの歌も変わっていた。

深い悲しみを知り、自分の想いを歌に乗せるようになった。人を好きになる気持ちに気付き始めた頃から、客席のファンに確りと視線を向け、心に呼び掛ける様にして歌うようになった。

一月間でのセガワの変化は、ファンの心を益々、魅了して行った。

由美はカウンター席からライブを見ている。以前ならステージ前まで進み出て、セガワを間近で見っていた。大人しくカウンター席から遠目で見るようになったのは、ニューイヤールライブ以降だった。

三月の頭以来、帰宅時までセガワを追いかける事も無くなっていた。今日はライブが始まって直ぐ、見なれないサラリーマン風の男がやって来て、由美と話をしていた。

客席の様子は、ステージから意外と良く見える。利知未は歌いながら由美の様子を見て、少々、不安を感じていた。

三曲目に、あの歌を歌い終わった時、由美が男の腕に自分の腕を絡ませ、店を出て行った…。

その姿を目に入れ、利知未の心が微かにざわめいた。悪い予感が襲った。利知未の微妙な心の変化に、敬太だけが気付いていた。

ライブが終わり、客席で取り巻きの相手をしている利知未の傍に、朝美がやつの思いで近付いてきた。

朝美は軽く深呼吸をして、声を出す。

「智紀！」

その名前で利知未を呼んで、少し変な気分になって小さく笑った。

「朝美、ワリー…。」

姉さんとか、姉貴と呼ぶのは、呼び慣れていないので止めておいた。弟が姉を呼び捨てにするくらいは、普通にある事だ。

「すっごい人気じゃん？始めて見たよ、ライブなんて。」

ニコリと笑顔を見せる朝美に、利知未はセガワとして、男っぽい笑顔を返した。朝美は、ちよつとびっくりした。

『玲子が言っていた通りだわ…。呆れちゃうくらい男っぽい…。』

言葉使いや態度が男っぽいのなら、この二年間の利知未を見続けてきたのだ。今更、驚く事もない。だが、笑顔の作り方まで変えている利知未の器用さに、感心してしまった。

「ね、誰？この人。」

フアンの一人、押しかけてきたメンバーでは無い少女が首を傾げる。

「俺の姉貴だよ。」

「えー！？セガワにお姉さんがいたの！？ウツソー！ホントに？！」

目を丸くして朝美を見た。朝美は中々、良い度胸をしている。そのフアンに堂々とした笑顔を返す。

「じゃ、この人がソーなの？…アンマリ、似てないみたい。」

洋子が『既に他のフアンよりも先にこのスクープを知っていた』という、自慢げな態度で口を出した。

「血は繋がってないもの。智紀が、お義母さんに連れられて来たの、まだ二歳の頃だもんね？」

家庭の事情もそのまま流用だ。その方が何かと都合が良い。

「エ？ソーなの！？」

洋子と一緒に、押し掛けてきていた少女の一人が、目を丸くする。

「ああ。…けど、仲は良いんだ。」

利知未も話を合わせる。朝美の家庭の事情は、この二年間の内に色々聞いてきている。口裏も合わせ易い。

「…って言うかあ、セガワって、智紀って言う名前なの？！」

やはり下宿に押し掛けた少女の一人が、新たな発見に少し興奮気味だ。

「そうだよ。」

短く利知未が答えた。

「なんで、名前の方でステージ立たないの？」

突っ込んだ質問が飛んで来た。利知未は素早く頭を働かせる。

「苗字だけの方が、覚えられ易いと思ったんだよ。人に名乗る時、苗字で名乗るヤツの方が多いだろ？」

団部では、そうだった。呼び方も苗字だ。

「ソーかな…？ソーかも…。」

何となく納得してくれた。利知未はココまでだと思い、話しを変える。

「それより、来週のチケット何枚、必要だった？」

「三枚。また新しい友達、連れて来るから。」

「判った。…ワリー、俺のチケットこれで終わりだ。」

「えー！？」

残りのファンが不満の声を上げた。朝美は、そのやり取りを近くで見、改めて感心してしまう。その雰囲気、正しく少年だ。

利知未はいつも通り、他のメンバーにチケットを譲ってもらった。朝美はチケットのやり取りが終わったファンに、利知未と共に囲まれてしまった。ファンの質問が矢継ぎ早に飛出す。

「ね、セガワって小さい頃は、どんな感じだったの？」

「やっぱり学校でも人気者なの？」

「どうして別々に住んでいるの？」

等、色々だ。適当に本当の智紀の話しを混ぜて、答えられる事だけ答え、タイミングを見て、利知未と共にFOXメンバーの席へ逃げ出した。

朝美の、あっけらかんとした明るい性格は、リーダーのノリと上手く噛み合った。二人で盛り上がっている様子を横目で見て、利知未は敬太の隣でカクテルを口にした。

「ライブの途中、何か気に成った事でもあった？」  
敬太が心配そうに聞いた。

利知未はライブの途中、見慣れない男と腕を組んで店を出た、由美の姿を思い出した。

「…由美が途中で、店を出て行っただ。」

「いつもセガワを追い掛けてる、あの子の事よね？」

反対隣でファンの相手をしていたアキが、その話しに反応した。

「見なれない男と腕組んで…。…何となく嫌な予感がしたんだ。」

呟く様に言った利知未の顔を、敬太が心配そうに見た。

「由美って、いつもカウンターで飲んでる、ショートカットの気が強そうな子だね？」

アキのファンが口を出す。由美は、この店で有名だった。

「…アンマリ、良くない噂を聞してるよ。」

利知未が、そのファンを見た。目で問い掛けている。

「…何か、さ。…売春してるって、そんな噂。」

少し言い難そうに教えてくれた。利知未は益々、不安感に襲われた。

『…来週、来てたら確認して見よう。』

噂は噂だ。ここで全てを真に受けるのは、嫌な予感を肯定してしまう事に成りそうな気がした。

「噂だろ？本当と決まった訳じゃないよ。」

無理に少し笑顔を作って、アキファンに言った。

「…そうだね。僕も余り言わない様に気を付けるよ。」

少し考えて、そう答えてくれた。彼は最近のセガワに、古くからのFOXファンとして敬意を払っていた。

その日は、朝美も一緒だから大丈夫だと言って、電車で帰った。敬太はいつも遠回りをして送ってくれていた。敬太と二人の時、素の自分でいられる瞬間は心も休まる。だが朝美に、その自分を見せるのは少し照れ臭い気もする。

帰りの電車の中で、朝美がニヤニヤして利知未を眺めていた。

「…なんだよ？」

朝美のニヤケ顔に見られ、落着かなかった。ムツツリと利知未が言う。可笑しな含み笑いをし、朝美が言った。

「…敬太君って、カワイイ感じだね…？」

利知未は少し慌てた様子で顔を赤らめる。

「カワイイって、朝美と同じ年じゃネーか。」

そつばを向く。女の子らしい雰囲気で照れている利知未が、朝美には可愛く見えた。

「りっちゃん、カワイイ！」

「…気味悪い呼び方、すんなよな。」

ニヤニヤしている朝美に、膨れた顔で利知未が言った。そして直ぐに真面目な顔付きになる。

「…それより、気になる事もあるんだ…。」

雰囲気之急に変わった利知未に、朝美も表情を変えた。

「何？」

「…由美って子が、いるんだけどさ…。」

そう言つて、由美の事を話し出した。

初めてステージに立った日から、由美は積極的だった。

キスをされた事だけは、話せなかった。

毎週、セガワを追い掛けていた。利知未は何度、戸惑わされて来

たか解らない。けれど今年に入ってから由美は、何となく変わってきた。大事にして上げないといけない相手だとも思い始めていた。そう感じるようになった頃、突然の裕一の死があり、利知未は自分の事だけで精一杯になってしまった。

「危ないコトしてんだ。その子。」

話しが一通り終わった時、朝美が真面目な顔で呟いた。

「今日、聞いた噂もちょい気になるし…。まだ決まった訳じゃネーケドな。…でも、」

話しは長かった。既に下宿の最寄り駅まで、後、一駅もない頃だ。

「帰ったら、もう少しゆっくり話そうよ？あたし、お腹空いちやつてマトモな思考回路が働かないよ。」

気分を解す様にニコリと笑顔を見せて、朝美が言った。

週が変わり、新学年。利知未の最上級生としての、学校生活が始まった。

今年も真新しい学生服を着た新入生が、舞い散る桜の花弁を纏って正門を潜る。

「瀬川さん！」

掠れた声を掛けられて利知未が振り向くと、宏治が勧誘活動の為に並んでいる机の向こうから、団部式礼を寄越した。

「…宏治だったのか。…またエライ声になってンな。」

「声変りみたいで…。何か、自分でも変な感じです。」

利知未は久し振りに、自分の周囲を取り巻く変化を受け止めた。

漸く心が余裕を取り戻し始めた様だった。宏治の成長に笑顔を見せる。宏治は、その表情を見てあきらかにホッとした様子を見せた。

「そーか…。もう、そんな歳なんだ。」

「そんな歳って、瀬川さんと一つしか違いませんよ。」

雰囲気が大分、男らしくなっていた。背もまた少し伸びた様だ。

「怪我もしてないみたいだな。」

「瀬川さんのお蔭です。この間もチヨイあつたんですが…。取り敢えず、足手纏いにだけはならずに済みました。」

そこに高坂が声を掛けながら、校舎からこちらへ向かつて来た。

「うつす！お疲れ様です！！」

宏治が団部式礼を格好良く決めた。利知未は去年、部室で宏治の手当てをしてやったゴールデンウィーク前を思い出し、比べ見て頼が緩む。

「宏治も、団員らしくなつてたんだな…。」

その穏やかな様子を目に留めて、高坂がイイ笑顔を見せた。

「瀬川、やっと落着いて来たみたいだ…。」

「おう。新団員、集まりそうか？」

「譲渡式を見て、昔から懂れてたつて言う新入生が何人か…。」

「そうか。…そういう時代なのかな…。」

また更に大人びた様な、そんな顔を見せた。

最近は近隣の学校との抗争も、大分減ってきた。それでもまだ少しは、気合の入ったヤツも残っており、偶にどうかすると応援団部員は喧嘩騒ぎに出向いて行く。

「手塚、結構ヤルようになってたぜ。瀬川が仕込んだつて？」

「仕込んだつて言う程の事はしてないよ。逃げ方、教えただけだ。」

「そーか。ンじゃ、後は手塚の持ち前の根性が成せる技つてコトか。」

「宏治にも、先輩らしいイイ笑顔を見せた。宏治は照れて俯く。」

「…まだ、まだっス。」

そう言った様子も、中々、男っぽくなつて来ていた。

「そー言えば、頭、固めてンな。いつからだ？」

「今日からだよ。大野が勧誘に立つんなら、バシツと見せておいた方が効果適だつて言つて、さつき手塚の頭、弄つてたぜ。」

高坂が答えた。大野も二年の頃から髪は固めていた。

「可愛がつて貰つてんじやないか。」



利知未がニコリと宏治を見る。宏治はやはり俯き気味だ。

「手塚と、今年、四組になった結城が、今ントコ団部二年中で一番イイ根性持つてるぜ。喧嘩はマダマダだけどな？」

ニヤ、と宏治を見た。少しはヤルようになってるが、やはり力は団員の中でも弱い方で、体格も小さい。しかし根性は二年随一だという。宏治はそんな風に誉められて、落着かなかった。

「あ！」

小さな叫び声を聞いて、利知未は正門側を振り返った。

冴史が保護者代理の里沙と二人、正門を抜けてきた所だった。

「里沙が保護者なのか？」

利知未が二人に声を掛けた。去年、一昨年の団長・副団長に比べればまだ大人しいが、高坂もやや気合の入った髪型で、学ランも気合が入っている。二人は目を丸くして、利知未と、その近くにいる高坂、宏治の三人を見た。

「ええ。…随分、ヤンチャそうなお友達ね。」

里沙は、それでも微かな笑顔を見せた。冴史は好奇心いっぱい目の向けている。『面白そう…！』心の中では、そう思う。

冴史は、お話しを作るのが大好きな少女だった。夢は作家だ。

利知未とは、下宿で何度か擦れ違っている。

この頃の利知未は、裕一の事、由美の事、敬太の事、バンドの事、様々な思いに捕われ、悩み、以前のような無邪気に騒がしい様子になり、を潜め、すっかり落ち着いてしまっていた。

元々、身長も高く、言動も少年のような利知未だ。余り冴史と親しく言葉を交わす雰囲気ではなかった。

それでも初めて下宿で会った時には、セガワとして、ファンに囲まれて歩いていた時の対面記憶があったので、短い言葉を交わしていた。

三月最終週。月の練習とライブが終わった翌日。土曜夜の事だ。

利知未が部屋を出て、風呂に向かおうとしていた時だった。

「…お前、新しい住人だったんだな。」

隣の部屋へ入ろうと扉に手を掛けた冴史に、呟くように言った。

「…あ、初めまして…？じゃ、ないのか…。」

冴史も驚いた様子で、小さく言った。

「この間は悪かったな。怪我しなかったか？」

「はい。大丈夫でした。」

「そっか…。取り敢えず、よろしくな。」

「よろしく願います。」

それだけの会話だ。直ぐに利知未は、階下へと降りて行ってしまった。

擦れ違った時に利知未からした、微かなタバコの匂いが印象に残った。

「応援団部の、団長だよ。」

高坂を指して利知未が言った。高坂は応援団式礼をした。目上に対する礼儀は、一年の頃から叩き込まれている。

「うつす！ご苦労様です！！」

新入生を連れて来た保護者に対して、そう言った。

里沙は微笑を感じした表情に変え、今度はにっこりと微笑んだ。

「利知未が、お世話になっていきます。今年から入学する仲田 冴史よ。この子の事も、よろしく面倒、見てあげてください。」

「うつす！」

もう一度礼をして、顔を上げた。一瞬、見惚れる。里沙は祖母の血を引いて、金髪碧眼の容姿を持った美人だ。年頃の少年としては当然の反応かもしれない。他の保護者に比べても格段に若い。

その高坂の様子を見て、利知未は昔の様な、楽しげな笑顔を見せた。表情は随分と大人びて、女らしくなっている。

今度は冴史が、その利知未に少しだけ見惚れてしまった。

利知末も中性的ではあるが、元々、綺麗な顔を持っている。二年の終わり頃から、学校でも少女らしく振舞う様になっていた。敬太に対する想いと、裕一の死から深い悲しみを知った利知末の成長は、少女らしい様子にも磨きを掛けていたのだった。

### 三

由美は事務所の一部屋に軟禁されていた。腕には、新しい注射針の痕が残っている。

四月に入って直ぐ、由美は以前から関りがあつた暴力団事務所の一部屋に、押し込められた。始めは何をされるのかも解らなかつた。また客からクレームでも入り、以前の様に、お仕置きを受けるのかと思つて構えていた。

あんなのは、二度と嫌だつた。

「由美、お前。最近、随分と客取る様になつたな。」

売春グループを纏めている、暴力団内で中堅所の位置にいる男が、ニヤニヤして近くに寄つて来た。

「……だから何？また客からクレームでも入つたの……？」

そつぽを向いて、由美が吐き捨てた。

「逆だ。近頃お前の指名客が多くてな。金曜の夜に、もう一人客を取ってもらいたいんだ。」

由美がビクリとして男を見る。男は変わらずニヤニヤしている。

「……イヤ。」

セガワに会えなくなる。その思いだけが、由美の心に浮かんできた。「ワガママ言つてんじゃねーぞ？！随分、目を掛けてやつただろーが？！そろそろ恩返し、してもらわねーとな？おい！」

ドアの外に声を掛けると、下っ端が二人、何かを持って部屋へ入っ

た。

「とは言え、良く稼ぐようになったからな。…褒美をヤルよ。」

何か嫌な予感がして、由美は逃げようとした。だが、その道のプロが三人掛かりでやる事だ。由美ごとき逃げられよう筈は無かった。

由美は、あつという間に抑え込まれた。腕に冷たい針の感触がした。

それから変な気分になり、妙に気分が良くなってきた。フワフワして、身体に力が入らない…。

その状態で由美は、去年と同じ様に男達に組み敷かれてしまった…。

四月十三日。

利知未は優と二人、裕一の四十九日の法要に出席した。

裕一の死から先の法要や行事に付いては、これまで余り面識の無かった親戚が気を使ってくれた。

「裕一君は本当に良い子だった…。息子に、裕一君の爪の垢でも飲ませてやりたかったよ…。」

ホンの三ヶ月間、世話になった親戚の父親が、墓前で呟いた。

困った息子を抱え、随分と苦勞をして来たのは確かそうだった。

前日は四月二度目のライブ日だった。利知未はステージの上から、由美の姿を探した。しかし、由美は現れなかった。これまでに無かった事だ。利知未の中で、また不安が膨らんだ。

だが翌日に、裕一の四十九日法要を控えていた。それで由美の事は気になっていたが、何も行動を起こす事が出来ずに、敬太に送られて下宿へ帰った。

帰宅した利知未は、真つ先に朝美の部屋へ向かった。

「由美が、ライブに来なかった…。」

不安を隠し切れない利知未の様子に、朝美は無理に笑って見せた。

「由美って子だって、風邪引いたりする事も有るんじゃないの？心配し過ぎだよ…。明日は四十九日でしょ？今夜は早く休んだ方が良  
いよ。」

朝美に宥められ、利知未は大人しく、その言葉に従った。  
帰りの車の中で、敬太にも同じ様な事を言われていた。

その頃の由美は、薬が切れると幻聴、幻覚が現れる様になっていた。  
た。

かなりハイペースで薬を使われていた。そして朦朧とする意識の中で、客を取らされ続けた。事務所の一部屋に軟禁状態が続いている。

隣の部屋から、話し声が聞こえて来た。

「次の取引は二十七日の深夜だ。ブツはいつも通り前日に運び込む。」

薬の効力の狭間で、偶に正氣に戻る時があった。この状態が暫く続くと、また禁断症状が表れる。身体の機能にも、影響を及ぼす。

由美は正氣が戻っている内に、カレンダーを確認した。よれよれの字で、忘れてしまわないようにメモを取る。

『二十七日、土曜深夜、山下埠頭、倉庫前…。二十六日にブツ…。』  
セガワの顔が浮かんでくる。歌が聞こえる様な気がした。

『セガワ…。会いたいよ……。』

「…あ…。う…。アア!!」

身体が禁断症状に震え出した。急いでメモを仕舞い込む。由美の足のカーペットに、独特な匂いを広げながら、いやな染みが出来た。  
「なんだ！？もう切れたのか!？」

ガチャリとドアが開き、男が顔を顰めて床に転がる由美を見た。

「また、やりやがったな!？」

つかつかと近寄り、由美の髪を引っ張って引き摺る。

「おい！誰かいねーか！？」

怒鳴り声。直ぐに下っ端が駆け付けた。

「お姫様を風呂に入れてやんな！シヨン便の始末もしておけ！」

由美をドサリと、その下っ端に投げつけた。ソイツは見た目にいやな顔をして、言付けられた事を片付け始めた。

その夜も由美は、客を取らされた。

三週目、火曜。利知未は浮かない顔をして、応援団部室に現れた。今年の団部内構成は、三年が高坂・大野を入れて七人、二年は宏治と、見所があると言われていた結城 一彦を入れて九人。新一年生は、それなりに気合が入った雰囲気の新入生が三人と、普通に応援団に憧れて入団した生徒が、五人程だ。総勢二十四名の部になっていた。

部室に入り浸っている生徒は、団長・副団から、喧嘩や根性を認められた二年四人と、三年のみだ。

宏治と結城は、その中に含まれていた。喧嘩は他の二年二人の方が強いらしいが、宏治はその根性と性格で、意外と団部内でも認められる存在になっていた。

宏治、結城以外で二年の一人、去年の団旗持ち高坂から、それを託された尾崎忠と言うのが、喧嘩で言えば二年の二番手になるらしい。

利知未は今年、最上級生だ。三年以外は如何な実力の持ち主でも、普通に話しをする事は許されない。団部規律だ。恐らく喧嘩の実力も、今年になって利知未が校内一の使い手だろう。ただし高坂と大野は、二年のお礼参り事件の頃に比べて、格段に強くなっていた。場数を踏み、力も体力も男らしく成長している。

利知未が部室に現れると、下級生が一斉に挨拶を寄越した。

「…随分、増えたモンだな…」

去年までは三人程しか、授業中に部室へ入り浸っている奴はいなかった。今年は五人。雁首揃えて、トランプなどやっている。

「宏治は、いないんだな。」

「手塚は、意外と真面目に授業受けてます。」

尾崎が、自分の手札からカードを捨てながら言う。

随分とフレンドリーな雰囲気になった物だと、利知未は思った。

「どうした？最近じゃ珍しいな。」

高坂が言った。利知未は裕一の夢を引き継いで、医者になろうと決心してから、真面目に授業を受けるようになっていた。

「ああ、チヨイ、気に成る事があつてさ。…授業、頭に入らネーから気晴らしに来た。」

言いながら、空いている席に座った。大野が心配そうな表情になる。「何かアンなら、カンなるぜ…？」

集まっている全員が、利知未に注目した。利知未は少し怯む感じになり、直ぐに小さく笑顔を作った。

「…心配かけたか？悪い。…何にもないよ。…あたしもゲームに混ぜてくれよ？」

利知未の一人称が変わっていた事を知っていたのは、クラスメートの高坂だけだった。大野が少しびくりした顔をする。二年は去年マトモに話した事が無かった。そのまま、その言葉を受け入れた。

今年の新人団員の中には、随分と女らしい雰囲気になった利知未に、密かに憧れを抱いた生徒もいるらしかった。勿論、利知未は知らない。

その週のライブにも、由美は現れない。利知未の不安はまた募った。帰りの車の中で、敬太に不安を打ち明けた。

「…確かに、ちよつと気に成るな…。…来週、また見掛けなかったら、ちよつと探って見ようか？」

ハンドルを握った敬太が、ミラー越しに頼もしい微笑をして見せた。

「敬太も、一緒に探ってくれるのか…？」

「利知未一人じゃ、手におえないだろ？」

敬太の言葉でやっと、少しだけ安心する事が出来た。

「サンキュ、敬太。」

小さな声で利知未が言った。敬太は小さく、けれど確りと頷いた。

翌週。四月最後の金曜日。二十六日。

明後日からゴールデンウィークに突入する、そんな日だった。

由美は今日もライブに現れない。利知未はステージ後、取り巻きの相手をしながら、イライラと落着かない気分を味わった。

ともすれば、自分を取り巻く少女達の中に、由美の最近を知っている子が居るかもしれないと、気持を切り替えて話を切り出して見た。

「なあ、最近、由美、見た奴いるか？」

チケットのやり取りをしながら、フィに言い出したセガワに、以前、由美と一悶着起こし掛けた気の強そうな少女が、首を傾げながら答える。

「由美って、あたしが前、喧嘩しかけちゃった怖い感じの子だよね？」

利知未が頷いて見せる。少女は眉を顰めながら続けて言った。

「…なんか、歌舞伎町辺りの怪しげなトコで、見た事があったよ…？あたしさ、新宿で、この間までバイトしてたんだけど…」

新宿は電車を使う場合の乗換駅だ。利知未は余り街に出て見た事は無かった。…しかし、この情報で如何すれば良いのかは見当が付かない。

「…それって、あの噂の暴力団事務所の、近くなんじゃない…？」

「ああ、由美ってコが関ってるって噂の…？」

ファン同士が話し始めた。利知未は黙って、その話を聞いた。

しかし、それ以上の情報も無く、利知未はチケットのやり取りを



終わると、直ぐに店を出た。敬太も席を立って、利知末の後を追う。

二人で店の外へ出た。利知末は目を細め、思案顔だ。

『ココから、どうやって探って行けば良いんだろっ？』

「あ、あれ…！」

敬太が驚いた声を上げた。利知末も顔を上げ、同じ方向へ視線を向ける。

「…由美…！」

ライブハウスの裏口がある、狭い路地の壁に寄り掛かって、朦朧とした視線をさ迷わせていた。利知末が駆け寄り、由美の肩を揺さ振る。

「由美！どうした？俺が解るか…？」

ギターがずり落ち、邪魔になつて敬太に預けた。改めて由美の両肩に手を掛けて支える。由美の顔を覗き込んだ。

「…あ…。セガワ…。良かった、元のセガワに、戻ってる…。」

ぼんやりとした目を、利知末の顔に向けた。敬太は利知末の直ぐ後ろから、その由美の目を凝視した。

「…これ、ヤバイぞ…。」

呟いた敬太の声に、利知末が顔を振り向ける。

「ヤバイって、どう言う…？」

「…薬、やってるヤツの目だ…。」

利知末が目を見開く。言葉の意味を頭で理解出来るまでが長かった。「前、参加してたバンドのライブの時、その店の便所で薬やってるヤツ等を見た事がある。…間違い無いよ…。」

敬太が呟く様に言い、利知末もやっと理解した。

「…どうして…？」

由美の肩を、もう一度揺さ振った。由美が脱力して利知末の肩に凭れ掛ってきた。意識が遠退きかけている…。

『セガワに…やっと会えた…。もう、イーや…どーなったって…。』

由美は、事務所に運び込まれた品物が、一時、何処に置かれているか知っていた。否。まだ、これ程の薬付けになる前に探り出していた。

『売春、他にも、させられてるコいるんだろうな……。アタシみたい……。』

十二月の終わりから四月に入って直ぐ、自分にされた事を思い出した。セガワに対する想いと狭間で悩み、苦しんだ自分を思う。

そして注射をされてからの、自分の扱われ方。

『セガワが言った通りだ……。こんなヤバイこと……。しちゃ、いけなかった……。ごめんなさい。言う事、聞かなくて……。』

心の底から後悔した。セガワに会いたくなかった。声を聞きたくなかった。

それと、自分の様な思いをさせられる少女を、これ以上増やしてはいけないと思った。由美も様々な体験の中で、人の事を思い遣る気持ちを知った。一番の切っ掛けは、本当に好きだと思える相手に出会えた事。

セガワの辛そうな歌声は、由美に相手を気遣う気持ちを教えていた。

好きな人が苦しんでいる、悲しんでいる。それを何とかしてあげられたら良いのにと、そう思える気持ちが自分にもある事を教えてくれた。

だから、今日。監視の目を抜けて、ソレをバッグとポケットに積み込んだ。今夜は客を取らされる予定だった。その待ち合わせ場所へ行く振りをして、電車を乗り継いでここまで来た。途中で薬が切れかけて自分で注射をした。コレを警察に持って行くまでは、正気でないかならないと必死だった。

けれど、その前にどうしても、セガワの顔を見たくてココへ来た。

「ごめん、セガワ……言う事、聞かなくて……。でも、自分から手を出

したんじゃないよ…。ソレだけは、信じて…。」

小さな震える声で由美が言った。

「前、セガワが言ってたから、コレだけは、絶対ヤルつもり、無かったんだ…。本当だよ…？」

肩に凭れる由美を、そつと抱きしめた。そして小さく頷いた。

「…ああ。分かったよ…。分かったから…、」

『アタシ、もう無理だ…。自分じゃ、コレ持って行けそうも無いや…。』

ポケットから、白い粉が入った小袋を掴み出す。震える手で何かを渡そうとしている由美に、利知末が気付く。しかし手が、もう普通に利かない様子だ。その二袋を地面に落としてしまった。敬太が拾い上げた。

メモも一緒に落ちた。ミミズがのたくっている様な字で、何とか読む事が出来るぐらいの文字だった。

「ソレ…。隠して…。お願い…。そんで、そのメモ…警察に…！」  
路地の表通りに車の止まった音がした。由美がビクリと身を震わせた。

「…アイツ等だ…！」

身体を離し、由美はふら着く足で路地を出て行こうとする。手を伸ばし、その腕を掴もうとした利知末の手を力なく払う。

「早く、ソレ、しまつて…。逃げて…！」

何とも言えない迫力に、一瞬、利知末の動きが止まった。だが直ぐに追いかけ様として、敬太に後ろから腕を掴まれた。

「駄目だ！彼女に言われた通りにしよう！」

低いが強い口調で制された。

「でも…！」

「オレ達が出てって何が出来る？！一緒に掴まってお仕舞いだ！そんな事になったら、由美が命がけで持ってきたコイツを、無駄にする事になる！…今は、堪えるんだ。…行くぞ。」

いつもの敬太からは、想像できないような迫力だった。

通りから声が出て来た。利知未は反射的に耳を覆う。

「コイツ、何処行ってやがった!? ブツをどうした?!」

バシんと、大きな音が響いた。由美の小さな悲鳴が上がる。

「バッグの中に、いっぱい入ってるぜ、兄貴!」

「コレで全部か?」

掠れた由美の声がした。

「...そーよ...。アタシだって、コレ、無い、と...う、あ...、うあ...!」

変な声が出て、男の声が叫ぶ。

「うわ! コイツ、またション便漏らしやがった...! 汚ネーな!」

「仕方ない、車に押し込め!」

車のドアが開く音、ドサツと身を投げられた音、ドアが閉まり走り出す車の音...。それらの音が、目を瞑って耳を塞いだ利知未の脳裏に、嫌な映像を流した。壁に頭を預け、動けない...

「...警察に、行こう...。」

敬太が利知未の両肩に、そっと手を置いて言った。

敬太の車で真っ直ぐに警察署へ向かった。

まだ中学三年の利知未が出て行く事は、返ってややこしい状況になるからと言って、敬太は一人で署内に入って行った。一刻を争う状況だ。遅くなれば、それだけ由美の命が危険に晒される。

敬太は利知未の事だけを伏せ、問題の薬とメモを出し、今、起こったばかりの事柄を通報した。

車の中で一人、利知未は不安と恐怖に震えていた。涙が滲む。

『由美...。あたし...俺の所為だ...。自分の事だけでいっぱい、由美の事を気に掛けてやれなかった...ごめんな...。どうか無事で...。』

パトカーが何台も走り出て行く。それから暫くして、敬太が出てきた。

「明日、改めて出頭する事になった。」

車に乗り込んだ敬太が、疲れを隠し切れない様子で言った。

「…何で、敬太が？」

まだ涙に濡れた瞳で敬太を見た。

「仕方ないよ。麻薬だから…。事情を詳しく説明するだけだよ。オレが問題、起こした訳じゃないんだから、心配しないで。」

利知未の頭をクシャッと撫でた。その手の感触で、利知未は少しだけホッとする事が出来た。

この騒ぎで約三週間、FOXのライブ活動は休止せざるをえなかった。

下宿に戻った利知未は朝美にだけ、今、起ったばかりの事件を話した。

そして二晩を数え…。暗闇の様なゴールデンウィークがやって来た。

#### 四

四月二十八日。日曜。

ゴールデンウィーク初日の朝、八時になったばかりだった。

朝美が利知未の部屋に、ノックをするのもどかしげに、慌てて飛び込んできた。

「ちよつと利知未！！テレビ！！」

二日間、殆ど眠れないでいた。寝不足でボーっとする頭で、朝美の姿を目に入れる。

「何？」

「何でも良いから、あたしの部屋に来て！」

腕を掴み、ベッドから利知未を引っ張り起こして、自分の部屋へと急いで連れて行く。自室のドアの開け閉てさえもどかしい。

利知未の部屋の隣室で、今の騒ぎを耳にした冴史がそつと扉を出た。

『何だろ……？騒がしいな……。』

廊下に出て、朝美の部屋の扉前へ向かった。ドアは半分、開いていた。

朝美の部屋へ入り、テレビの前に座らされた。利知未は、その映像と音声が伝えている内容を、何がなんだか分からないまま見つめる。

「二十六日・二十三時頃、警察がある若者の通報を受け、この暴力団事務所へ踏み込みました。そこには……、」

レポーターが真面目な、そして沈痛な面持ちで状況を説明している。「……今回の麻薬取引検挙事件での被害者は、都内に住む東野由美さんと言う、僅か十六才の未来ある少女一人でした……。」

利知未は頭の中で、理解が追いついて行けない。

画面に映し出された少女の写真を見て、一度に今、報道されている事件の情報が、雪崩の様に押し寄せた。

「……由美さんは、この暴力団事務所の少女売春グループで……、」

「……うそ……だろ……？」

利知未が小さく呟く。朝美はその姿を、辛そうな表情で見つめる。

『……間に合わなかった……。』

利知未の目から涙が溢れ出した。頭をハンマーで撲りつけられたような衝撃と痛みが走る。

冴史は、肩を震わせている利知未の後姿を、廊下から見つめていた。

後悔と、悲しみと、口惜しさが、聞こえて来た泣声に溢れていた。

朝美の部屋でそのまま泣き続けた。朝美は黙って見つめていた。冴史は利知未の泣声を聞いている内に、何だか自分まで悲しい気持ちになり、静かに自室へ戻って行った。

昼前に電話だと言って、玲子が利知未を呼びに来た。既に涙は消えていたが、その表情の暗さに玲子は驚いた。

『裕一さんの、お葬式の後みたい…。』

漸く最近、立ち直り掛けてきていた利知未を、今度はどんな悲劇が襲ったのか。玲子は想像も出来ないでいた。ただ、その暗い部分に態々、触れる事だけは止めておいた。

電話は敬太からだった。利知未は直ぐに会いに行った。

敬太は未成年だ。この大事件の第一通報者と言う立場で、マスコミに注目される中、警察の保護によって、その姿を晒す事だけは免れていた。

ライブハウスは連日、報道陣のカメラが張っていた。その所為でFOXのライブは暫く休まざるを得なくなった。練習スタジオも危ない。あの手の連中は何処でどうやって調べ上げてくるのか知らないが、大事件に関する人物と、それを取り巻く環境を、信じられない程に良く利く鼻で嗅ぎ当ててくる。

敬太は下宿の最寄り駅まで、父親の車を借りてきた。

いつものワゴンは、暫く使わない方が良い様な気がしていた。

保護されているとは言え、何処からどんな目が見ているか判らない。東京近辺から、少しでも離れた場所へ車を走らせた。静岡に入り伊豆の方まで向かった。

何処まで行っても、何かに追い掛けられている気がして落着かなかった。

漸く寂れた感じの小さな漁港で車を止めた。まだ初心者マークも取れない敬太には、やや疲れを感じる位の距離だった。利知未は助手席で、じつと俯き身を固くしていた。

「…ごめんな…。」

呟く様に詫びた敬太を、利知未はやつと目に入れる。

「…何で敬太が、謝るんだよ…?」

怯え切っている幼い子供のような利知未の様子に、敬太の胸が痛んだ。

「…オレがあの時、利知未を止めたからかもしれない…。あのコが…。警察は間に合わなかったんだな…。」

そう言つて目を伏せた。利知未は再び浮かんでくる涙を止められない。

「…敬太の所為じゃ無い…。あたしが…、FOXのセガワが由美を追いつめたんだ…。きつと…。」

泣きながら言葉を搾り出す。敬太の心がまた痛みを増した。

「…利知未。…バンド辞めるか…?」

これ程までに苦しんでいる利知未を、無理矢理セガワとしてステージに立たせていて、良いのか…?

しかし利知未は、首を振った。

「そんな事、今は考えられないけど…。でも、責任を果たさないと駄目なんだ…。由美がセガワをあんなに想っていたのなら、…俺は由美の為に、もっと歌い続けないといけない…。」

涙を無理に押し込めた。利知未はドアを開け、車を降りた。

敬太は利知未を、辛い気持ちで見つめている。

自分も車を降りて、海に向かって歩いて行く利知未を追う。

利知未は海に足をぶらりと投げ出して、港の端に座った。

遠景に網を手入れしている漁師が見える。仲間の漁師と言葉を交わして、豪快に笑い合っていた。

元気なその姿が、肩を縮めて海をボンヤリ見つめている利知未の



姿を、その深く沈んでいる様子を対照的に引き立てる。

敬太が、利知未の隣に立った。

「俺、今までは、自分のために歌っていた…。」

利知未がボソリと呟く。

「あたしは、それで救われた…。」

利知未の中で、FOXのセガワとしての思いと、自分本来の、少女としての思いが、混ぜこぜになって渦巻いていた。小さな呟きを繰り返す。

「俺は、由美を追い詰めた。」

「あたしは…、由美を追い詰めた…。」

セガワになったり、利知未になったり、くるくると思いが回転する…。

自分の肩を抱いて小さくなった…。震えている…。

後ろから利知未を抱きしめた。利知未の身体がピクリと反応した。我慢の限界だった。

少女の利知未へとスイッチが入る。上半身を敬太に預け、声を出して、泣き出した…。

涙を流しながら、利知未の気持ちに、一つの答えを導いた。

『…これは、罰かもしれない…。セガワとして色んな人を欺いて、そうまでして自分の心だけを守ろうとしてきた…。その罰だ。…だから…、逃げちゃ、いけないんだ…。…きつと。』

翌日、利知未はセガワとして、敬太と二人で由美の葬式へ参列した。

FOXのライブを見に来た事がある生徒は、この大事件で取り上げられているライブハウスを知っている。

『少女はあるアマチュアバンドのメンバーに証拠品を託した』と言う部分に注目して、『純粋な恋愛感情が生んだ悲しい結末』等と解説するコメンテーターのお蔭で、その場所は何度もテレビ画面に映し出された。

その麻薬取引検挙事件には、犯罪の低年齢化、騙された少女達、社会の暗部の今後の方向性を占う、と言う様な副題がついて注目度が高く、全国ネットで大きく取り沙汰された。

それでも飽きっぽい視聴者が多い時代だ。二週間もすると、また新しい事件が起こり、マスコミの興味はそちらの方へと向かっていった。

冴史はその頃、この事件の報道を良く見ていた。

入居して、まだやっと一ヶ月経った頃だ。何もかもが新しい環境の中、利知未を初めて見たときの記憶と、後に下宿で擦れ違った時の短いやり取りなどを通して、この同居人への興味は深かった。

その興味深い対象の利知未が、どうやら深く関っていた気配が強い事件だ。年齢的にもたった三、四歳しか変わらない少女の死は、かなり心に引く掛かる物だった。死に方にも凄まじい物を感じる。それで冴史は、利知未の事を良く観察するようになっていた。

冴史から見ても、ゴールデンウィークからこの二週間の利知未は、これまで以上に静かで大人しく、益々、暗い影を引き摺る様な雰囲気へと変わっていた。

最近の利知未は、ボーっとして何か考えている様子を良く見せていた。心の中では葛藤が続いている。

この二月。誰よりも信頼し、頼りにしていた長兄・裕一が突然、亡くなり、利知未の中から、幼少の頃の無邪気さが消えた。

それから将来の目標を定め、死にたくなるような気持ちと戦った。そんな中で、人を好きになると言う感情に気付き、…気付かせてくれたのは、団部の先輩・櫛田と橋田だ。そのお蔭で、自分の中の敬太への想いを認め、受け入れる事が出来た。

敬太の支えがあつて、漸く気を取り戻してきたタイミングで、今度は由美と言う少女の死…。

事件を取り巻く環境を思う。そして、由美の事を思い出す。やはり自分に、…セガワに、責任の一端はあると思う。

『もう、セガワとしてステージに立つ事は、止めてしまおうか…？』  
そう思う事もある。けれど、それでは自分が追い詰めてしまった由美に対して、余りにも無責任な気がする。

『セガワでいたら、辛い事を思い出すかもしれない…』

しかし、それは罰なのだとも思う。自分が犯してしまった罪に対する、キツイお仕置きだ。

『それなら、そこから逃げ出したらいけない…。益々、自分で自分を許せなくなる。…きつと。』

だったら、やれる限りやり通すのが、きつとで一番、正しい。  
『でも…』

敬太の事を思う。利知未の中で彼の存在は、この事件を抜けて益々、大きく育っている。

…そして利知未は、自問自答を繰り返す。

学校では利知未の活動を知っている生徒達が、好奇心を隠し切れない。

報道では、どのバンドの誰が警察に通報したかは、取り上げられないでいた。敬太の存在は警察からブロックを掛けられている。

だが、同じライブハウスで活動していた利知未が、何か知っている筈だと推測していた。

高坂と大野は、由美の存在とセガワの関係を知っている。  
一度だけ、利知未本人に確認をした。

高坂が、授業が終わり、帰ろうとした利知未を部室へ連れて行った。

「なあ、瀬川…。あの事件。…彼女、お前の所へ来たんじゃないのか？」

部員達を遠ざけ、大野と三人だけになってから、切り出した。

「詳しく聞こうとはオモワねーよ…。ただ、雑音が煩いからな。…おれ達なりに、お前の力になりたいだけなんだ。」

大野が、優しい声でそう言った。

二人は、小さく頷いた利知未に、それ以上を問おうとはしなかった。

それ以降、好奇心の赴くままに騒ぎ立てる生徒達を厳しく監視して、雑音がなるべく利知未の耳に入らない様に、気を配ってくれた。

利知未は、二人の協力に深く感謝をした。

ライブハウスは無事だった。返って知名度が上がって、客が増えたくらいだった。

FOXのファンが声を上げ、再びステージに立って貰いたいと、店からリーダーの元へ連絡が入った。活動再開に伴って、リーダーは利知未に問い掛けた。

「…利知未、まだ、歌えるか…？」

利知未は小さく、けれど確りと頷いた。

「俺は、これから客のために歌うよ…。客席の、由美の為に…。」  
そして、続けた。

「…けど、男の振りを何処までし続けられるかは、正直、判らない。」

自分の心は決まっていた。だが、身体の構造が違う。

四月の始め、宏治が声変りをしていた。つまり、体が男として成長を始めたと言う事だ。中学二年の宏治の変化。更に三歳も年上の少年だと誤魔化している、自分の歳。身体は、確実に男女で成長が違ふ部分だ。

これからは、身長だけでは誤魔化し切れない差が、早ければ一年待たずに生まれてくるだろう。

それを決定的に感じた時、セガワは、セガワでなくなる。

「…そうか、分かった。」

深い理由は聞かないで、リーダーが改めて話し始めた。

「…オレから、言っておく事が一つある。FOXのロック時代は、その期間を二年、三年以内と、始めから設定していた。次はハードロックかメタルになる予定だ。当然、そこでまたボーカルも変えるつもりだ。」

微かに笑顔を作り、そして軽く言った。

「これからFOXのロック時代は、セガワと心中するつもりでやるよ。」

つまり、利知未が限界を感じるまで、付き合ってくれ様という事だ。

「…サンキュ。」

小さく礼を言つて。利知未はセガワの表情になった。

『そこまで頑張ったら、許されるだろうか…？』

心の中では、そう呟いていた。

五月三十一日。約一ヶ月振りに、ステージに立った。

ファンは待っていてくれた。暗闇の中、新しい曲が空気を震わせた。

以前よりもパンチの効いた音。ハスキーな声が更に迫力を増していた。

「久し振りだな、皆！…待っていてくれて、サンキュ。」

始めの曲を終えて、セガワがマイクに向かって話し出す。客席が少

しざわめく。

「セガワが、話してる！」

少女の言葉が、ざわめきの理由を明かしている。

「…皆も知つての通り、何時もライブを見に来てくれていた一人の少女が、悲惨な事件の被害者に成ってしまった。…俺は、その事で責任を感じている。」

辛い気持ちを瞳に映し、一言、一言を客席に確りと届け様としている姿に、セガワファンの眩きが漏れた。

「…なんで？なんでセガワが、責任感じるの…？」

その、微かに聞こえる言葉を、利知未は確りと拾った。

「その子と、最後に話したのは俺だ…。…だから…。」

一瞬、言葉を詰まらせる。小さく被りを振って、真っ直ぐ客席を見た。

「もつと早くに、彼女の変化に気付いて上げられれば良かった。…

俺は、彼女のサインを見逃してしまったんだ…。自分の事だけに追われてた。」

少し俯いて、顔を上げる。寂しそうな微笑を見せた。

「だから、歌うよ。…これからは、客席の皆の為に…。…これから、俺達FOXを確りと見ててくれ。…彼女の分も…。」

言葉が切れて、曲が奏でられ始めた。

カウンターに寄り掛かり、高坂と大野がステージ上の利知未を見ていた。二人はこのライブに招待されていた。

「これから、あたしがどんな風になっていくのか、見ていてくれよ。…ステージ上で、少しでも女が見えたら…。その時は必ず教えてくれ。」

そう、言われていた。

固い決心の伺える表情を見て、二人は、利知未と約束を交わした。

まだ幼い顔付きの少年が、ステージ上のセガワを見て、何かを感じた。

『あのヒト…、なんかスゲー、格好良いな…』

声もリズムも。歌っている時の仕草にも、魅了される。

『俺、もっとハードな方が好きだと思ったんだよな。けど、こんな音も意外とイイかも知れネーな…』

帰ったら、自分のギターで弾いてみようと思った。

少年は、FOXがステージに立っていないかった、この一ヶ月間で初めてここへ踏み込んだ。

まだ中学二年に進級したばかりだった。背は歳の平均より高い。更に、そのヘア・スタイルが、少年の身長を目立たせている。

「…おれ等とは、違った気合が入った様な頭したのがいるな…。」

曲間のMCになっていた。リーダーが、沈んだ空気を変えていた。大野が気付いた視線の先を、高坂も眺めてみた。

「ゲ、マジかよ？モヒカン？！しかも、真っ赤じゃネーか。」

驚きの声を上げる。客席はざわめいていて、二人の会話は少年には届いていなさそうだった。

「メタルでも、やってんじゃないか？」

「そーかも知れネーな。格好も、そんな感じだ。…けど、新顔だな。」

「そーだな。」

以前、来た時には見掛けた事が無かった。今日のライブ客には新顔が多かった。あの事件の報道騒ぎで、店には新しい客がかなり増えていた。

再び曲が始まった。久し振りのライブだ。新しい客に自分達の音楽を聞いて貰おうと、昔から人気のあった曲のオンパレードになった。

その中には勿論、由美が好きだった、あの曲も組み込まれていた。

利知未は、その曲を歌っている時、カウンターのいつもの席で、微かに笑っている由美の幻を見た気がした。

『…ごめんな、由美…。…俺…お前の事、ずっと忘れないよ…。』  
少しだけ溜まった涙が、ライトの光りを受けて、微かに煌いていた。

## 五

都内でも、下町の雰囲気を残す町角。その一角のある家庭では、近頃、良く父子の激しい喧嘩が繰り広げられている。

「倉真！こんな時間迄、変な騒音させるな！！」

ギターを掻き鳴らす手を止め、父親を睨みつける。

真っ赤なモヒカン、ヤンチャそうな釣り目。父親譲りの頑固さをも伺わせる様な、眉尻がきゅっと上がった、幼さを残した顔。

「煩せーな！テメーの声のがソーオンだぜ！」

「なんだとー！？親捕まえてテメー呼ばわりするヤツがあるか！？」  
大きな平手が少年の頬を張った。ギターをベッドの上に投げ置き、少年・倉真は、父親に組み付いて行く。

「ちよつと！お兄ちゃん！お父さんも！！ウルサーツイー！！」

開け放たれているドアから、同じくハッキリした釣り目の少女が、パジャマ姿でキンキン声を上げた。耳にツーンと響く声に、父と兄の動きが止まった。

父と息子が揃って、耳を塞いで片目をきゅっと瞑る。

階下の台所では、母親が可笑しそうに笑っていた。



『一美が止めるのが、一番早いよ。』  
そう思った。鼻歌交じりで、明日の朝飯の米を研ぐ。

館川家では、昔から腕白だった長男・倉真が、中学に入った頃から妙な音楽に獲り付かれて、每晚遅く迄ギターを掻き鳴らす様子を、やや眉を顰めて見ていた。髪まで訳の分らない形にしている。

そして幼少の頃、下町で同じく、その腕白さで長年ガキ大将として君臨してきた父は、普段は繊細な和菓子を作る職人だ。

息子と娘は、父親が何故この仕事についているのか、偶に解らなくなる。性格を見る限り、漁師や魚屋、或いは寿司屋など、威勢が良く、どちらかと言えば荒々しいイメージの仕事の方が、絶対に合っていると思う。母親だけは家族の中で唯一、父の理解者だ。

「お前が一番、ウルサイ！」

倉真が、四つ違いの今年十歳になる妹を指差し、膨れてそつぽを向いている頬を突ついた。口に溜まっていた空気が、プツと音を出して漏れる。

「なによ！？お兄ちゃん達が、こんな時間に喧嘩始めるのが煩いんだから！お父さんも直ぐに、お兄ちゃん撲ったりするから、大騒ぎに成るんでしょ！？」

父親は妹に甘かった。一美に怒られるのが、他の誰に怒られるよりもよっぽど効き目がある。

「ごめん、ごめん。一美は、もう寝る時間だな。」

デレデレである。倉真はフン！と横を向き、そのまま部屋を出て行った。

「こんな時間に、何処へ行く気だ！？」

父親が倉真を睨む。

「ホッとけよ！」

倉真は吐き捨て、階下へ降りて玄関に向かう。母親が台所から姿を表した。

「何処へ行くの？もう十時半よ。」

「…コーラ買ってくんだよ。」

さっさと靴を履いて、玄関を出て行った。

その日、同じ頃。

利知未は練習を終え、いつも通り敬太に送られて下宿へ戻った。

一週間前に、利知未は十五歳の誕生日を迎えた。FOXのセガワも十七才の少年になった。幸いと言えるのか、利知未の身長はギリギリと伸び続け、今は166センチにまで成っている。

高校二年の男なら、やや低めの身長と言う事になるだろうか？その点では、バンド活動にも都合が良かった。

顔付きも相変わらず中性的で、着る服一つで少年らしくにも、少女らしくにも見える。セガワの時には徹底的に男っぽさに磨きを掛けていたので、今の所は上手く誤魔化し通せている。

悩みは相変わらずだ。最近、益々増えたファンに辟易させられている。

敬太の事は、今は心の奥に秘めている。ライブ中、敬太の刻むリズムを感じる瞬間、利知未としての本音の部分に強い安心感が生まれる。

その感覚を大事にしながら、セガワとしての少年らしさにも、更に磨きを掛けている。

『少しでも長い間、敬太と同じステージに立っていたい。』

その少女らしい思いが逆に、利知未を更に少年らしくしていた。だから心の奥に、大切に仕舞い込む事にした。

そして同時に、もう一つの意思も自分に訴える。

『まだだ…。まだ。まだまだ…！』

まだ罰を受け切っていない…。そのセガワとしての思いは、声に

益々、迫力を加える。利知未は今、二つの思いの狭間で揺れていた。

夏休みの直前になり、利知未は宏治に始めてチケットを売った。

「オレ達の代理だ。手塚も、セガワを良く見て来てくれ。」  
と、団長命令だ。

出来の良い利知未とは違って、高坂はそろそろ、勉強も少しは真面目に始めなければ間に合わない。大野も同じだ。大野はそれ程、勉強が苦手では無いが、得意と不得意の落差が激しい。

二人は元々、高校までは行くつもりがあつた。ただし、ランクが高い所を狙う気は更々、無い。親を安心させる為と言うのが一番の理由だ。最終学歴が中卒では、受け入れられ難い社会に変わってきてもいた。

川上中学新入生、渡辺 準一は、一つ年上の兄貴分、萩原 和泉いずみが、丘の上の寺から武道着を担いで出て来るのを待っていた。

「あ、和尚!!」

剃髪でキリリとした顔付きの、体格が良い少年が、参道を降りてくる。

「…なんだ、準一。今日も来てたのか？」

少し呆れた表情で、和尚と呼ばれた少年が返事をした。

「なー！行つて見ようよ！面白そうじゃん?!」

「…また、それが。行きたきゃ一人で行って見れば良いじゃないか？」

「だってさ、ライブハウスだろ？オレ、どう見たって中学生以上に見えねーモン。高校生くらいに見える和尚が一緒なら、入れて貰えるかも知れナイじゃん？だからさー。」

スタスタと歩き出す和泉の周りに、チョロチョロしながら纏わりつく。準一の顔つきは、まだまだ幼い。優しげに目じりが下がった、

大きめな瞳。髪は悪戯心で脱色して赤茶色。身体もまだまだ細く、ちよつと見では、それこそ小学生に間違われそうだ。小学生時代から、かなり落ち着きが無く、何時も方々で悪戯をして、近所の大人達には「要注意悪ガキ」として有名だった。

その準一が今、纏わりついている和泉は、家庭の事情から歳の割には落着いた少年だった。

病弱で幼い頃から入退院を繰り返している、一つ違いの妹がいる。両親は一生懸命働いているが、妹の入院費や治療代が嵩み、生活はカツカツだ。そんな中、聞き分け良く自分達を支えてくれる長男が唯一、夢中になっている少林寺修行にだけは、通わせ続けていてくれた。

「とにかく俺は、そんな余裕が無いんだよ。」

小遣いも勿論だが、成るべく毎日、可愛そうな妹の見舞いに出掛ける。

家に帰れば、共働きの両親を助けて、良く手伝いをする生活だ。

「じゃーさ、真澄ちゃんが今度、退院してきたら絶対、行こうよ？」

「！」  
準一も和泉の家庭の事情は良く知っている。和泉の妹、真澄も、調子の良い時には、三人で良く遊んでいた。

「そうだな。そうしたら付合ってやるよ。」

「絶対だよ?!」

頷いて見せた和泉にくつついて、そのまま真澄の入院している病院へ、お見舞いに出掛けて行った。

夏休みに入ったばかりの金曜日。宏治は初めて、セガワのステージを見た。

宏治も相変わらず背が低い。この夏に漸く155センチまでは伸びていた。だが見た目は歳相応の中学生だ。店にはセガワの格好をした利知未が、自ら連れて入った。

「お前は、酒は無理だな。ジュースでも飲んでてくれよ?」

行きの電車の中で、セガワとして少年らしく振舞っている利知未に、そう言われて来た。宏治は黙って頷いた。飲め無い訳では無いが、自分の容姿は自分でも良く判っている。迷惑はかけられない。それよりも、セガワの時の利知未を見て、内心、舌を巻く思いがしていた。

『なんか、おれよか全然、男っぽく見える...。』

最近の、学校での利知未を見ている分、その印象は更に驚きを伴う。

「...どーした?何か俺の顔についてるか?」

少し首を傾げて、つり革に掴まっている腕の向こうから利知未が聞いた。

「...いえ。なにも。」

宏治は少しだけ笑顔を作って、そう答えた。

この日。ライブの終了間際に、騒ぎが起こった。

人混みを掻き分ける様にして入って来た少年が、客席に紛れ込む直ぐに、まともな格好をした男女の二人連れが、少年を追う様にして店に入ってきた。

男女はキョロキョロと周りを見回す。頷き合い、二手に分かれた。

カウンターで、入って来たばかりの女性に声を掛けられ、宏治は一瞬、何がなんだか判らなかった。

「君、中学生よね?...こんな所で何をしているの?」

宏治のグラスを取り上げ、匂いを嗅ぐ。

「お酒は飲んではないのね。...でも、ココは貴方のような子がいい所じゃないわ。一緒に来てもらえるかしら?」

騒ぎを起せば、利知未に迷惑が掛かる。宏治は素直に従った。

後ろから両肩を押さえられ、準一は観念した。入った途端、聞こ

えて来たバンドの音と、ボーカルの歌声に聞き惚れてしまい、つい後ろへの注意を忘れていた。

男に連れられて擦れ違つて行く少年に、いきなり腕を掴まれた。

「テメ、何しやがんだよ?!」

倉真は、睨みを効かせた。少年を連れた男が、倉真を見た。

「…君は…、君も、どうやら中学生だな。一緒に来なさい。」

倉真はピンと来た。前にも夜の街で、そんな風に声を掛けられた事があつた。…冗談じゃネー!

男に掴まれた腕を振り解いて、逃げに掛かつた。

「コラ!!! 待ちなさい!!!!」

客席から始まつた騒ぎが、ステージ上の利知未にも良く見えた。

『なんだ? ヤバそうじゃネーか?』

歌いながら一瞬、そう感じた。宏治を探す。宏治の隣には見慣れない女性がいた。

追いかけてここが始まつた客席が、更にざわめき出した。

ラストの曲が終わつた。利知未がマイクに向かつて短くしめる。

「今日もサンキュ! また来週ココで!!!」

いつもはリーダーが言つていた。どうやら急いでいる利知未に合わせ、メンバーも速やかにステージ上を切り換え、次のバンドに明け渡す。客席では、倉真がまだ追いかけてここを繰り広げていた。

利知未達は一端、楽屋に戻つた。

「何か妙な事になつてたな。」

リーダーが言つた。拓も頷いた。

「補導員が、紛れて来た様だつたか…?」

「そうだな…。セガワ、お前の連れは平気だつたのか?」

リーダーに聞かれ、利知未はギターをケースへ入れながら、首を振つた。

「…判らネー。なんか、連れて行かれた様だったんだけど…。俺、追い掛けるよ。」

「オレも行くよ。」

敬太も頷いて、帰り支度を急いだ。

客席は大騒ぎになっていた。余り見掛けた事がない派手な頭をした少年が、大立ち回りをカマシている。

始めに補導員を引き連れて来てしまった少年は、人垣を擦り抜けながら出口を目指す。ライブスペースを出た所で、宏治を連れた女性補導員に掴まった。

客席で、利知未は補導員と立ち回っている少年の後ろに回り込んだ。

『コイツ何とかしネーと、収集つかネーな…。』

そう判断して、敬太にギターを預ける。

「宏治は、もう連れてかれた見たいだ。チョイ外、見に行つて貰えるか？」

ギターを渡しながら耳元で早口に言う。敬太は頷いて、人垣を抜け出て店の外へ向かった。

「掴まるかよ!？」

「この、聞き分けの悪い…!」

派手な頭の少年は、補導員の手を避けて、利知未に後ろ向きでぶつかり掛ける。

利知未は狭い空間の中で、器用に少年の身体を避け、右腕を後ろから掴んで擦じ上げた。

「…イツ!？」

変な声を出して、倉真は自分の腕を擦じ上げている相手を振り返った。

キリッとした表情を目に入れて驚く。身長は自分と対して変わらない。どちらかと言えば細身の体と腕から、信じられないような力を発している。何よりも、その相手は。

さっきまでステージ上で演奏していたバンド、FOXのセガワだ。五月最終週の復活ライブから、密かに気に入っていたバンドのボーカリストだ。

「ワリーな。俺の連れが補導された。お前も大人しくしていてくれ。」

腕を掴んだ力は緩めずに、少年にだけ聞こえる声で囁いた。  
倉真は小さく頷いて見せる。…大人しくしてやる事にした。

「君は、さっきまで、そこで歌っていたね？」

モヒカン少年の腕を、挟じ上げる様にして鎮めている姿を目にして、男の補導員は目を丸くした。

「高校生か？保護者は？」

「保護者って言うか…。オレがFOXのリーダーですが？」

補導員の後ろから、ナイス・タイミングでリーダーが現れた。

「一応、成人してます。彼は毎週メンバーが車で送っています。」

リーダーのフォローで、利知未は補導少年の列には加わらずに済んだ。

「弟が、もう一人の方に補導されてしまった様なんですが…？」

利知未は倉真を補導員に引き渡しながら、素早く頭を巡らせた。

「弟？ご両親は、君達がココに來ている事をご存知なのか？」

「俺達は母子家庭です。…母に連絡を入れてきます。」

そう言っ、店の公衆電話へ向かって行った。

利知未から連絡を受け、美由紀が店を途中で閉めて駆け付けた。何故か駅北商店街、大熊肉屋の主人まで一緒だった。

「り…。じゃなかったわ。」



利知未さん、と言いつけて止める。『詳しい訳を話してはいられないけれど、息子と言う事にしておいて下さい、頼みます。』と、さつき電話で言われていた。考えて、長男の名前を流用した。

「宏一、宏治は何処？」

利知未は軽く目配せをする。近くでリーダーが驚く。

『この前は智紀で、今度は宏一か…。オレも合わせないとマズいな。』

頭の中で現状を整理する。『FOXのロック期はセガワと心中』なのだ。

「コツチ。…美由紀さん、済みません。」

手招いて、近くに來た美由紀に小さく詫びた。

宏治は聞かれた事柄に黙秘を決め込んでいた。勝手に喋ったら、後で来る利知未と話が合わせられなくなる。

倉真は別の意味で黙秘を決め込む。何を聞かれたって答える物かと、口を真一文字に結んでいた。隣の準一を軽く睨みつける。

『コイツが補導員、店に呼んだんだな…。』

準一は倉真に睨まれて、ヘラリと笑って見せた。自分が街中で補導員に見つかったのが、原因なのは確かだ。

逃げ込むのなら、前から氣に成っていたライブハウスに入つて見ようと、勢い半分で飛び込んだ。隣のモヒカン少年の腕を掴んだ事に、深い意味はナイ。ただ咄嗟に、騒ぎを大きくすれば逃げられるかも、と思っただけだ。

「君。君は前にも補導されているね？」

倉真に補導員が聞く。倉真はそっぽを向く。

「名前は…たてかわそうま館川倉真か。以前は、お母さんが迎えに見えていたんだな。」

書類を見て頷いている。名前の読みも変わっているが、簡単な覚書に書かれた髪形の特徴などを見て、何とも言えない顔になる。倉真は面白くない。『んな事、記録されてたとはな…。』と、心の中で

愚痴る。

一時間もしない内に、少年達の親が駆け付けてきた。

「倉真！！お前ってヤツはっ！！！」

到着した途端、倉真の父は息子を思い切り張り倒した。周りにいる方が慌ててしまう。

「まっ、ま、お父さん、落着いて……。」

美由紀と一緒に表れた大熊氏が宥めに掛かる。騒ぎで今度は、準一の母親が泣き出した。

「準一！アンタって子は……。どうして何時も何時も……。」

準一と呼ばれた少年は、拘りも無い様子でヘラリとしていた。何となく笑えた。駆け付けた親の中で、冷静なのは美由紀だった。

「大変ご迷惑をおかけ致しました。息子の活動は、我が家では公認になっております。今日の所は引き取って行っても宜しいでしょうか？」

深々と頭を下げた。補導員も保護者から言われたのでは留め置く事もしない。軽い注意だけして解放してくれた。

敬太がワゴンの後ろの座席を出して、利知未、宏治親子と大熊氏を、バッカスまで送ってくれる事になった。

準備を終えたところへ、先ほどの騒ぎを少々離れた場所から眺めていたリーダーが近付く。呼びかけられて、敬太が振り向いた。

「中々、賑やかだったな。」

リーダーは何時も通りの軽い口調だ。敬太も苦笑いを漏らす。

「でしたね。」

「……あの赤毛モヒカン少年、これから暫らく要注意って事で。」

チラリと、少し先で宏治を呼び止めている様子を眺めて囁いた。

「その方が、良さそうだ。」

利知未の後輩、宏治は真面目そうだ。これから先あの少年に関わって、変な事に巻き込まれなければ良いけどな、と敬太は思った。

倉真はワゴンに乗り込もうとする宏治に、声を掛ける。

「お前、結構イイ根性、してる見てーじゃネーか。」

先に乗り込み息子を振り向いた美由紀が、チラリと倉真を見た。目が合い、倉真は軽く視線を外す。□元はニヤリと笑っている。

「お袋さんも物分り良さそうで羨ましいな。…また、店で会おうぜ？」

軽く宏治の肩を叩いて、ワゴンを離れていった。離れた所で、父親が息子を睨んで待っている。前を無言で通り過ぎようとする息子の首根っこを掴んで、強制的にタクシーへ突っ込んだ。

その様子を見て、宏治は小さく笑ってしまった。直ぐに美由紀に呼ばれて、後部座席へ乗り込んだ。

## 六

バツカスの前で大熊氏は、すっかり酔いの冷めた様子で言った。

「宏治。あんまり美由紀さんに心配かけるな。」

宏治は、素直に頷いて見せた。大熊氏は美由紀と挨拶を交わし、帰って行った。

「利知未さんには、もう少し詳しい事を聞きたいんだけど…。お家の方は大丈夫かしら？」

「店から、連絡は入れておいたけど…。もう一度、連絡入れた方がイイかも知れないな…。美由紀さん、電話、貸して下さい。」

セガワ・テンションが抜け切れずにいる。以前、会った時と様子が違う利知未に、美由紀は少し戸惑った様な笑顔を向けた。

「取り敢えず、中に入りましょう。」

利知未が頷いて、宏治と三人で店の中に入った。

店内に入り、始めに下宿へ連絡をした。美由紀も電話口に出て、今夜は利知未を預けてくれる様にと、里沙に断りを入れる。それから改めてカウンターの椅子にかけると、美由紀が薄い水割りを出してくれた。

「…これ？」

一口飲んで、利知未が目を上げる。

「少しお酒が入った方が、話し易いかと思ったの。…今日だけね。」  
軽い笑顔で、そう言った。宏治も驚く。

「応援団で覚えてきたでしょう？時々、店のお酒が減ってるのよね…。」

何気なくチクリと、母親に痛い所を突かれた。宏治はバツが悪そうに視線を反らして、水割りを一口飲む。

「さあ、詳しく聞かせてくれるかしら。どうして利知未さんは、男の子の振りをしてたの？それと、宏治が何故、補導されるような事になったのか？」

利知未は去年、FOXのステージに立ち始めた時から、今日までの事を、酒の力を借りながら話した。途中で、裕一の事にも少し触れて泣きたくなった。けれど涙を流しはしなかった。

由美の事には、触れることが出来なかった。まだ、話しが出来る程には落着けない。

宏治は素直に、酒を店から持ち出していた事を、認めて詫びた。

今日の補導に纏わる事については、説明の仕様が無い。運が悪かったとしか伝え様が無いと思った。それに付いては利知未が詫びた。

「…宏治が補導されたのは、あたしの所為です。本当に済みません。」

利知未は漸く、素に戻った。最近の、学校での利知未だ。

美由紀は利知未の家庭の事情に少し触れ、大切な兄との死別を聞き、心が痛む思いだった。

離婚して母子家庭と言う点では、自分も同じだ。それでも、こうして二人の息子と一緒に暮している。お蔭で、自分は今まで随分、救われた思いをして来た。そして、母親の立場で考える。

『利知未さんのお母さんは、本当は家族で暮したいのではないかしら？』

身近に守るべき子供がいれば、壁にぶち当たるような事があっても、何とか乗り越えていける物だと、実感として感じて来た。利知未の母が、どんな人物なのかは想像するしかないが、子を持つ母親同士としては、深い同情心も浮かんでくる。

ただ利知未に、その思いを伝えても逆効果だろうとも思った。どうやら彼女は、母親をかなり憎んできている節がある。それも解らない事ではなかった。暫く黙って考えた。それから漸く声を出す。

「…利知未さん、色々大変だったのね…。貴女は、まだ中学生なのに…。随分、辛い思いもしてきたのね…。」

優しい美由紀の言葉に、利知未の心が微妙に揺れる。

『お母さんって…、「お母さん」って、こんな感じ…？』

自分の母を思い出す。どうしても、美由紀の雰囲気とは重ならない。

『この子の事、本当の娘だと思って接して行こう…。』

微妙に揺れた利知未の瞳を覗き込んで、美由紀は、そう決心した。

「…利知未。私は、これから貴女を本当の娘だと思う事に決めたいわ。」

「ニツコリと、笑顔でそう言った。利知未の揺れた瞳が、美由紀の姿を確りと映した。」

「だから、何時でもココへいらっしやい。」

「…じゃ、瀬川さん、これから、おれの姉貴だ。」

宏治がニツコリと母親を見た。その笑顔を見て、息子の成長に気付いた。

…随分、大人びてきた物だ。

酒の入った利知未は、いつもより素直になっていた。宏治親子を

見て、驚きと、何となく嬉しい気持ちだが、混ぜこぜになって照れ臭い。

「それにしては、随分と派手な頭した子が、一緒だったわねえ…。」  
美由紀が話しを変えた。真っ赤なモヒカン少年の姿を思い出していた。

「…あたしも、チョイ驚いた。」

「…面白そうなヤツだったな…。」

宏治の呟きに利知未が反応した。…宏治って、こんな言葉使いだったか？と。今までのイメージとは重ならない。

「どうかした？」

宏治が、利知未に見つめられて首を傾げる。

「…いや。別に。」

視線を戻して、利知未が小さく首を振った。

「今日は、もう遅いから一度帰りましょう。利知未。明日、帰る事にして、今夜は家に泊まってらっしゃい。」

時計を見ると一時を回っていた。バツカスの閉店は二時だ。それでも、いつもよりは早仕舞いだ。どの道、宏治を引き取りに行ったので、今日はもう店を閉めていた。

「…お袋、ごめん。…金曜は稼ぎ時だったんだよな。」

宏治が美由紀に詫びた。

「全くよ。宏治、高校生になったら扱使うからね？覚悟しなさい。」  
美由紀は大袈裟に宏治を睨んで見る。宏治はバツが悪そうな笑顔を見せる。利知未は二人のやり取り、特に宏治の様子をじっと見てしまった。

「判ってるよ。…瀬川さん？」

じつと見られて、宏治はまた首を傾げる。利知未は宏治が家でどんな言葉を使っていたのか、初めて知った。

初対面から二年も経つ。その間に宏治も随分、男っぽい様子になっていたらしい。益々、セガワとしての自分を考えたのだった。

『男の成長か…。あたしも、もう少し頑張らないとな。』

そう思う。宏治に軽く笑顔を見せた。

「美由紀さんの許可が下りたら、またライブ見に来いよ。」

「って、言ってくれてるけど、良い？」

「仕方ないわね。でも、そこで、お酒を飲むのは禁止よ。」

美由紀が言って、小さく溜息をつく。

「どうしても飲みたい時は、保護者の前で飲みなさい。…利知末もね？」

どうせ酒の味を覚えてきてしまった子供達だ。禁止したからと言って、止めるとは思えない。それなら責めて自分が監視してやろうと思った。

そして、この日を切っ掛けに。利知末はバツカスへ、美由紀に会う為に良く顔を出すようになった。そして美由紀はこれから先、ヤンチャな子供達の良き母親変りにもなってくれた。

それから半年もしない内に、ヤンチャな息子の数も増えたのだった。

翌週の練習日。帰りの車の中で、利知末が敬太にお礼を言った。

「この前は、皆で送って貰ってサンキュ。帰り遅くなったよな？」

「平気だよ。オレはもう大学生だからね、親も寛大な物だから。」

チラリと利知末を見て微笑んだ。利知末はその笑顔を見て、心がきゅつと掴まれたような感覚に陥る。

『素のままの自分で、ゆっくりと会えたら良いのに…』

そう思った。…誘って見ようか？今は、夏休みだ。

「…今度の練習日…」

「何？」

「水曜日さ、練習の前。…なんか用事、あるかな…？」

意を決して聞いてみた。何となく恥かしくて下を向いてしまう。

「バイトは休みだし…。うん、今の所は空いてるかな？…どうしたの？」

ドキリとして、心臓が鼓動を早める。…ちょっと誘おうとしただけで、どうして、こんなにドキドキするのだろう…？小さく息を吐いてみた。

敬太は利知未の言葉を待っている。少しだけ心配そうだ。

「…あのさ、…練習の前、ちょっと…」

何て言おう？思いつけない。視線を恥かしげに反らす。

『顔、見えるから緊張するんだ。…変なの。何時も見てるのに…。』  
自分の気持ちがあくすぐりたい。敢えて車窓に視線を向ける。

「ちよっと、時間あるかな？」

隣の利知未の様子は、心配するような種類の物では無さそうだ。そう感じてホッとした。

「時間なら、いくらでもあるよ。…何処に行きたいの？」

敬太から聞いてくれた。心の底から嬉しい気持ちが沸いてくる。

また、くすぐりたい様な感じだ。…こう言つの、何て表現したら良いんだろう…？…幸せ、って言うのかな？

「…何処でも良いんだ。…って言うか、タマには普通に遊びに行きたいかなって、思ったんだ。…付き合ってくれるか…？」

自分の表情を、少し不安そうに見ている利知未。可愛くて笑ってしまった。

「…なんか、可笑的い…？」

「違うよ。…可愛い顔だなんて、思ったんだよ。」

一気に利知未の顔が赤くなった。可愛いなんて、今までそんな事、自分に言ったのは朝美くらいだ。恥かしくなって俯いてしまう。

「…じゃ、何処へ行こうか？利知未を迎えに行つて、そこからなら…、横浜の観光地巡りも偶には面白そうだね。」

敬太から行き先まで考え始めてくれた。その言葉と雰囲気新鮮な感じだ。今までダチと何処かへ行こうと盛り上がった時では、感じた事の無い嬉しさと、ドキドキ感がやって来た。

『…相手が、敬太だからだ…。』

そう感じた利知未の表情に、少女らしい笑顔が広がった。



可愛い笑顔に、今度は敬太が戸惑った。

『今まで見て来た中で一番、良い笑顔だ…。』

自分の前で利知未が素に戻る時。寂しさや悲しみを、必至で堪えている姿が多かった。だから利知未への愛しさが増す程、敬太は自分の気持ちを抑えてきた。…まだ自分の気持ちを伝えられる時期じゃない。

けれど、もしも。…もし明後日、彼女の様子が変わっていたら。

『…もう、大丈夫なのだろうか？』

敬太は少し期待した。伝えられるかもしれない。

「…何時頃、迎えに行ったら良いかな？」

再び優しい笑顔で問い掛けられた。利知未はその笑顔に、心がもう一度きゅっと優しく掴まれる。…自分が、どんどん少女に戻って行く。

「…何時でも良いよ。…だけど、敬太の家から車で四十分くらい掛かるんだよね…？なら…、十一時位なら、敬太も慌てないで済むかな？」

語尾が少し優しくなっている事に、利知未本人は気付かない。

「そうだな…。じゃ、十一時に迎えに行くよ。それで良いかな？」

「良いよ。ありがとう。…待ってる。」

まだ少し顔が赤い、照れた笑顔で利知未が答える。

「じゃ、明後日。寝坊しない様にしないと。」

下宿に着いた。利知未が車から降り、笑顔で手を振り見送った。

水曜日。敬太の車が十一時ジャストに、下宿の前に到着した。

利知未は、同居人達に知られるのが気恥ずかしい感じがして、玄関の前で待っていた。ギターを背負い、何故かスポーツバッグを持っている。服装は、朝美から去年の誕生日に貰った、サマージャケツト姿だった。

「待った？…そのバッグは、どうしたの？」

ニコリと、車窓から笑顔を向ける。

「…セガワ用。この格好じゃ、練習スタジオ入れないから…。」  
ちよつと照れた様子が可愛らしかった。このジャケットは、身体のラインが綺麗に見えるデザインだ。

服装は悩んだ。けれど折角、敬太と素のままの自分で会うのだから、それなりの格好をしたかった。乙女心である。利知未はそんな風に考えている自分が、なんだか別人のような気がして照れ臭かった。

「そつか。偶にファンが待ち構えてるモンな。」

敬太が笑って頷いた。利知未が助手席に乗り込む。中華街辺りから攻めて見ようと話しをして、関内へ向かった。昼前には着く。

中華街の駐車場に、車を入れて街へ出た。利知未は初めてだった。近過ぎる観光スポットで、今まで敢えて来て見ようと思った事が無かった。メイン通りの土産物屋を物色して行く。

「何か、意外と面白かったんだな。」

チャイナドレス。手の混んだ刺繍に、ちよつと感動する。手先器用な中国人ならではの、籐籠やバツク。四千年の食文化。

利知未は、この頃、意外と料理が好きになっていた。台所用品を眺めて、巨大な包丁に目を丸くした。中華鍋を振ってみて、重さに驚く。

素のままの明るい利知未を見て、敬太の気持ちは決まっていた。そして改めてその笑顔に、心を惹かれて行く。

『こんなに明るい、可愛い笑顔を見せる子だったんだな…。』  
そんな風にも思った。

「あれ？瀬川さん！？」

メイン通りで擦れ違った、ちよつと気合の入った少年に声を掛けられた。利知未は一瞬、どきりとした。

「細川と…、鵜野！？…もしかしてデートか…？」

クラスメートの中でも、気合の入ったグループの二人だった。鵜野は、茶髪で派手目な女子生徒だ。二人ともFOXのライブを見に来た事があった。二人は当然、敬太も見知っている。

「バレタよ…。ま、いーか！もしかして、もしかしくても、ドラムの敬太さんですよね？」

鵜野がミィハーチックな笑顔で敬太に言った。敬太は一応、笑顔を作るが、目では利知未に聞いている。『この子達は…？』

「…クラスメートの、細川と鵜野。ライブ、良く見に来てくれたんだよ。…っても、見覚え無いか…？いつも直ぐ帰ってたから。」

利知未に言われ、敬太は思い出そうと努力してみた。

「イーよ、気にしないで。アタシ、敬太さんの隠れファンだったんだ！」

ニコリと、細川と利知未に言った。敬太は済まなそうな顔をする。思い出せなかったのだ。

「…って言うかぁ、利知未さんこそ、もしかしてデート！？イーな、羨ましいー！！」

地団駄を踏む。細川が呆れ半分で言って、利知未に問い掛けた。

「おれが相手に悪かったな…。今日はFOXのセガワで遊んでんのか？」

「…そう言う訳じゃないけど…。タマには息抜きも必要だろ？」

敬太と軽く視線を合わせた利知未の様子に、鵜野がニヤリとした。

「だったらチヨイ変装、必要かもね。…ね、利知未さん、ちょっと来て！」

女は恋愛については鋭い。利知未の微妙な雰囲気の違いにピンと来た。

雑貨店へ、利知未を引っ張って連れて行く。

「結構、有名人なんだから。これくらいシナキヤだね。」

そう言って、伊達眼鏡とキャップを選んだ。

「…この格好でいるのか…？」

後ろ髪をキャップに仕舞い、伊達眼鏡をかけた利知未が変な顔をし

た。

「さつきライブハウスで見た事ある子が、いたんだよね。最初は何処で見かけたか判らなかつたんだけど、利知未さん見て思い出した。」

腕を頭の後ろに組んで、チラリと笑顔を見せる。

「…ね、デートでしょ…？悪いこと言わないから、その格好でいなよ。」

利知未は俯いて顔を赤らめた。鵜野つて、意外と良く見てる。そう感じた。

「…ソーする。」

小さく答えて、会計を済ませて店を出た。敬太が細川と待っていた。「さつき、FOXファンに声掛けられたぜ…？」

細川が利知未に言った。敬太は隣で困った笑顔を見せる。

「…そつか。サンキュ、鵜野。…今度、ライブに招待するよ。」

「どー致しまして。じゃ、ココでバイ！…頑張つてね？」

最後は小声で囁いた。二人と別れて場所を移動する事にした。

「素のままでいるの、難しいのかな…。」

移動中の車の中で、利知未が呟く。敬太は気遣わしげな顔をした。

「…けど、オレは本当の利知未と、もつと一緒にいたい…。」

表情を引き締めて、敬太が利知未をミラー越しに見る。心が決まる。

「今、伝えよう…。」

利知未が驚いた顔をして、敬太の横顔を見つめている。

「…この半年。利知未が、辛い思いをしているのを見てきて…、言葉が続かない。敬太は口が上手い方ではない。考える。」

「…ずっと、オレも…。…本当の事が言えなかつたんだけど…、」

敬太が何を言おうとしているのか、じっと待った。

…恐い。けど、先が聞きたい…。

「…お兄さんの代わりには、成れないと思うけど…。」

信号が赤になって車が止まる。敬太は利知未を正面から見る。

言葉が出なくて、見詰め合う。

「…敬太？」

後続車からクラクションが鳴らされた。信号が青に変わっていた。

「…やっぱり、本当の利知未が、好きだから…。」

再びクラクションが鳴らされ、敬太はギアを変え、車を発進させた。

「…だから、もっと本当の利知未と一緒にいたい…。」

恥かしくなって、利知未は俯いてしまった。ドキドキと鼓動が煩い。

答えを探した。言葉が上手く出てこなくて、やっと一言、呟いた。

「…あたしも、もっと普通でいたいよ…。…敬太の前でだけは…。」

車内に柔らかい沈黙が下りた。もっと二人きりになれる場所が欲しい。

「…観覧車…。」

桜木町の大きな観覧車が、利知未の目に入る。

「…行ってみようか…。」

ゴンドラの中なら、邪魔が入らないかもしれない。

ゴンドラに乗り込み、利知未はキャップと伊達眼鏡を外した。やっと敬太と二人切りで、素のままの自分で向かい合う事が出来た。

敬太の前で、利知未は誰にも見せた事が無い、少女らしい自分に戻れた。

目の前の利知未が、やっと本来の姿を取り戻した。ゴンドラが登って行くスピードに合わせる様に、気持ち溢れ出す。

…二つの想いが、一つになった…。

二人は、初めてキスを交わした。これが、本当のファーストキスだ。

唇が重なった、その瞬間。利知未の中で、女の心が芽生え出す。

『あたし…、敬太とだったら…、敬太になら…。』

由美の気持ち、利知未にもやっと理解出来た。悲しい気持ちも甦った。

そしてこの夏。利知未に、初めて恋人と呼べるパートナーが出来た。

幸せの種 第五章 了 (次回は、9月28日22時頃 更新予定です。)

## 五章 春・闇夜を抜けて…『敬太』

（後書き）

五章も最後までお付き合いくださいまして、ありがとうございました。<—————>

利知末中学編は次回で最終話です。中学編の纏めとして、少女としての利知末の成長をご覧下さい。次回も22時掲載できるよう頑張って編集作業を進めております。

それでは、また来週、皆様と再会できますように。

## 六章 卒業・その先の未来へ

（前書き）

利知未の懐かしい中学時代の思い出話、第六章です。この作品は、  
'80年代後半から'90年代初めを時代背景としたフィクション  
です。

中三の夏休み、利知未と敬太の心が通じ合った。初めての恋人を得  
て、利知未の心はまた成長を遂げる。

そんな中、新たに現れた年下のヤンチャ少年達。その中の一人が、  
将来の伴侶となる少年・倉真だった。

中学編の最終話として、お贈り致します。どうぞ最後まで、お付  
き合いの程を…。

この作品は決して、未成年の喫煙、ヤンチャ行動を推奨するもので  
はありません。ご理解の上、お楽しみ下さい。



## 六章 卒業・その先の未来へ

### 六章 卒業・その先の未来へ

—

中学三年の二学期が始まった。

学校で久し振りに顔を合わせた貴子は、利知未の雰囲気休み前と比べて、随分と柔らかくなっている事に気付いた。

「ね、利知未。夏休みに何かあったの？」

始業式の日。放課後、帰り支度をしている利知未を捕まえて聞いてみた。

「…何かって？」

照れた様に誤魔化そうとする利知未に、貴子は益々、怪しいと感じる。

「解らないから聞いてるんじゃない。…なんか、やっと落ち着いた様にも見えるし、もうちょっと違う感じにも見えるし…。」

首を傾げ、利知未の姿をマジマジと見つめる。貴子の視線から逃げようと、利知未は軽くそっぽを向いた。

「…何にも無いよ。貴子の気の所為。…あたし、部室に寄ってくから。」

じゃあ、と手を上げて、教室の出口へ向かう。その利知未の腕を掴んで、貴子が笑顔を見せた。何か企んでいる様な笑顔だ。

「利知未。…なんか可愛くなったんじゃない…？」

利知未は顔が赤くなってしまう。その変化を貴子は見逃さない。益々、怪しげな笑顔が広がる。

「タマには一緒に帰る？じっくり、聞かせて貰いたい事が出来ちゃった！」

「…って、部室に寄って…。」

「イーよ、私も今日は部活、無いし。一緒に行くから！」

何時も通りの積極的な様子で、利知未の腕を引っ張って教室を出た。

部室へ入ると珍しく、高坂と大野がロッカーに置きっぱなしにしている参考書を開いていた。数学の参考書だ。古典と英語の参考書も頁を伏せて置いてある。

「お、瀬川！ 斎藤も一緒だな。丁度良かった！ またチヨイ教えてくれよ。…ここんトコロ…」

高坂が問題を指差しながら、利知未を見た。

「…雨でも降ってきそうだ。」

利知未は窓から、良く晴れた空を眺めて見せた。

「マジ、ヤバインだって。今学期のテストって重要だろ？」

大野が本気で参った顔を見せた。その表情に利知未が笑った。

「シャー無い、見てやるよ。貴子は古典、見てやってくれよ。」

言いながら空いている椅子に掛けた。利知未は部室にいる時だけはそれでも昔の少年の様な雰囲気、いくらか戻る。

「仕方ないな…。どれどれ？」

貴子も椅子へ座り、机に並んでいる参考書の中から古典を手にとった。

「ワリー。恩に着るぜ。」

高坂が隣に座った貴子へニコリとする。

貴子は最近、高坂と何となく仲が良い。利知未繋がりだ。去年の体育祭の応援騒ぎから、少しだけ意気投合し始めていたらしい。

「…って、コレこないだ教えたばかりじゃないか！」

夏休みの最終週、利知未は二人からヘルプを出され、二、三日、宿題を片付けるのを手伝ったばかりだ。

「…コークー、暗号型の教科は苦手なんだよ…」

大野が情けない顔を見せる。利知未は呆れ、そして少し吹き出す。

「…高坂の物覚えの悪さ、笑えなーじゃん？」

「ソー言うなって…」

利知未達はそれから二、三時間、二人に付合った。応援団部室では、その場に不似合いな勉強会が行われた。

帰り道、高坂と大野が付き合つて貰った礼だと言い、駅前のファーストフード店でハンバーガーを奢ってくれた。

話題が利知未の事に集中する。貴子が聞きたくてウズウズしていた。

「高坂君達なら、なんか気付いてるカモと思ったんだけど。」

貴子がハンバーガーを食べながら、いきなり話を切り出した。

「なんの事だ？」

高坂と大野がキョトンとして貴子を見る。

「利知未の、恋話！」

利知未が珈琲にむせる。隣で大野がびっくりして、背中を叩いてくれた。

「ちょっと、待てて。」

咳込みながら異論を唱え様と努力した。貴子は構わず高坂に振る。

「利知未、休み前に比べて、凄く可愛くなったと思わない？コレってソーユー事だって、私は見たんだよね？」

「そーなのか？」

鈍い高坂が気付いている筈は無かった。貴子と一緒になり利知未に聞く。大野は何となくではあるが貴子の意見に賛成だ。

「どーだってイーだろ？」

やっと咳が止まった。片頬杖を突いてそっぽを向く。顔が少し赤い。

「やっぱ、ソーなんだ！」

赤くなつた利知未を見逃さずに、貴子がニマリとする。

「好きなヒト出来たの？どんなヒト？何処の学校？」

ポンポンと質問が飛出す。高坂は目を丸くして貴子と利知未を見ている。大野は利知未が照れ臭さを誤魔化す様に膨れているのを見て、

少し笑ってしまう。：FOXの誰かな？：そう、ピンと来る。中々、鋭い。

「ソー言う貴子は、どうなんだよ？：田崎センパイ…。」  
反撃する事にした。田崎の名前をニヤリとして囁いて見る。

貴子が密かに田崎を見ていた事は、流石に三年も仲良くしていたから気付いていた。ただ去年までは、利知未がそう言う話しに興味を持てなかった。突っ込んだ話しはした事が無い。

「：利知未、気付いてたんだ。」

意外そうな顔をして貴子が言った。しかし今は、貴子が気になる相手は他にいる。田崎に対しての思いは、どちらかと言うと憧れに近かった。

「：一応ね。けど、興味無かったからな。：あの頃は。」

呟いてしまつて、『しまった！』と思つた。貴子の顔に、再び好奇心が溢れだす。もう遅い。

「ふーん、あの頃は、ネー…。」

ニヤニヤしている。利知未は照れながらも、観念せざるを得なくなつた。

「：……バンドの仲間。」

ボソリと言つた。貴子は益々ニヤニヤし始める。高坂は驚いたままだ。大野は一人で納得した。

「：けど、アンマリ人に言いたく無いから…。広がったらマズイし。」

「イーよ、広げたりしないし。：けど、私達には白状するよね？：」  
当然よね？と云う言葉が、貴子の表情にくつついて見えた。

それからポツポツと白状させられ、『好きな人』ではなく『恋人』である事が判明し、高坂は勿論、貴子と大野まで本気で驚いていた。利知未は照れ臭い。だが反面、秘密が一つ外に漏れた事で、少しだけ楽になった。：この仲間なら、噂にはしないだろうと信頼もしている。

三人は利知未の信頼を裏切る事は、しないでくれた。三月に中学を卒業するまでと、それ以降も。

この話を聞いてから後、貴子が中学時代に一度だけ、ライブを見に来てくれたのだった。

敬太は忙しい。一週間の予定は、大学とバンド活動とアルバイトで、全て埋っている。

夏休みが終ってから、利知未と二人で過ごせる時間は、スタジオとライブハウスから下宿まで送る、車の中だけだった。

「あーあ、また敬太と、どこか行きたいな…。」

九月初めの週。木曜日の練習後に、車の中で利知未が言った。

「そうだね。…ごめん、中々、時間が無くて。」

頷いた敬太が、少し済まなそうな顔をする。

素のままの利知未は、随分と少女らしい雰囲気になっていた。それは敬太の前でだけ見せる表情だ。

夏休みは、あのキスを交わしたデートの後、それでも二日程は二人で過ごす事が出来た。そんな時の利知未のスタイルは、相変わらずキャップと伊達眼鏡だ。

どうしても街中で会う時には気を使う。何処にファンがいるか本当に分からなかった。デート中にも遭遇してしまう。利知未はその度にセガワになってしまう。それは少し残念な事だった。

二度目のデートの日、シルバーアクセサリーのペアリングを買った。普段はチェーンに通してネックレスにしている。二人の指に、お揃いのそれを着けて街中に出るのは、やはり憚られた。利知未は敬太に会えない日だけ、その指輪を普通に身につけた。

下宿で食事中、利知未の右手に指輪を発見した朝美が、ニヤリとした。

「りっちゃんっては何時の間に、そんなお洒落に目覚めたのかな？」  
恋愛ネタで利知未をからかう時、朝美は利知未を『りっちゃん』と呼ぶ。

「…そんなんじゃないよ。イーだろ別に…。」  
赤くなってしまった利知未を、ニマニマと眺めた。

「利知未も、漸く女の子らしくなっただって事ね。喜ばしいことじゃない？」

里沙が笑顔でフォローをする。

「そのデザイン、可愛くは無いわね。」

玲子が少し突っ掛かる。最近また、以前のように口喧嘩に反応する様になった利知未だった。…玲子はそれが、ちよつと嬉しい。

「…あたしが、可愛いを選ぶ訳じゃない。」

好みも確かにあるが、ペアリングなので、敬太が着けても可笑しくないデザインを選んでいた。

「でも、それなら男の人みたいな時でも、大丈夫そう。」

冴史が小さい声で感想を述べた。利知未以外の三人が冴史を一斉に見た。

「…ソーかもな。冴史との初対面は、あの時だからな…。」

利知未は、何も気に成らない様子で、普通に言葉を交わす。

そうして貰って、冴史は少し頬がほころんだ。冴史は利知未に、大変な興味を持っている。利知未を見ていると、お話しのネタが色々浮かんでくる。だから本当は、もっと話しをして見たかった。

けれど、冴史が入居した頃の利知未は、色々あった時期で、どうしても打ち解けて言葉を交わす雰囲気ではなかった。最近、敬太のお蔭で明るい様子を取り戻してきた利知未に、少しだけ声を掛ける事が出来る様になって来た所だ。

下宿の他のメンバーは、冴史と利知未がマトモに話しをするのを見たのが、初めてだった。

「なんだよ？」

三人の様子に気付いて、利知未が、不可解な顔をする。

利知未は冴吏と廊下で擦れ違ったり、リビングで顔を合わせた時には、ほんの少しでも言葉を交わす様になっている。それで、皆の様子が腑に落ちない感じた。

住人の中で冴吏の隠れた趣味に気付いているのも、どうやら利知未だけの様だ。それについては以前、利知未との短い会話中、冴吏が自ら打ち明けていた。話の流れで偶然、知っただけだ。冴吏は最近、お芝居の台本作りに挑戦していた。

九月の二週目。ライブに、ちょっと懐かしい顔が現れた。

「瀬川！ 久し振りだな。」

利知未が取り巻きの群れを抜け、メンバーの席に近付くと、田崎が軽く振り向いた。

「田崎センパイ！ 久し振りだな、元気だったか？」

田崎の隣に見慣れない少女を見つけ、利知未は慌てる。

「平気だよ。唯ゆいには、瀬川の事チョイ言っておいたから。」

少女はニコリとして、挨拶をした。

「初めまして。私、水城 唯ゆいって言います。真のクラスメートなの。」

田崎の名前だ。名前呼び合う仲と言う事かと、利知未は納得した。「ライブハウスって始めて来たの。びっくりしちゃった！ 凄い迫力ね。それに格好良かったし…。真から聞いていた以上で、驚いちゃったよ。」

どちらかと言うと、おっとりとした優しい喋り方をする子だった。セミロングのストレートヘアで、ふっくらとした頬のラインが優しい美人と言うタイプでは無いが、育ちの良いお嬢様チックな雰囲気だ。貴子はどちらかと言うと、元気な感じで可愛い。

田崎の好みを知り、利知未が呟いた。

「…成る程。」

いつものカクテルを店員から受け取り、田崎の隣に座る。

「なんだよ？成る程ってのは。」

変わらない呑気そうな眉を軽く上げて、田崎が言った。

「いや…。何でも。」

利知未はニヤリと笑って見せた。セガワ・スマイルだ。

「ま、イーケドな。…それより、バレて無いみたいだな？」

以前に比べて身のこなしまで男っぽくなっている利知未を、半分感心して眺めた。利知未はライブ活動中、少女らしい雰囲気は絶対に出さない。声の高さまでワントーン落としている。

「中々の、役者だよ。」

リーダーがニコリとして言った。

その日も、敬太が車で送ってくれた。

「…疲れた。」

小さく溜息を吐いて、利知未が言う。田崎と、その彼女が近くにいる間、利知未は何時も以上に気を張っていた。気を抜くと、無邪気に団部センパイ達の周りをチョロチョロしてた頃の自分に、戻ってしまいそうだった。心は敬太のお蔭で、そこまで回復していた。

そして敬太の前では、新しい自分が現れる。

「今度の連休、何処か行こうか？」

敬太がニコリとして言った。

「バイト休めるのか？！」

セガワの時より、声がワントーン上がって戻っている。目を見開いたその表情も可愛い。敬太はそんな利知未を見ると、何となく嬉しい気分になって頬がほころんでしまう。

「うん。月曜なら。…練習の前になっちゃうけど。」

少しだけ済まなそうな顔をする。本当なら時間を気にしないで思う



存分、二人で遊びに行きたいと、敬太も思う。

「構わないよ、そんなの！そっか…、何処、行こうか…？」

利知末はニコニコして、嬉しそうに考え始める。

「…タマには、映画もイーかな…？」

「何か見たいのあるの？」

「特に、そう言う訳じゃないけど…、映画館なら、周りの視線、気にしないで済みそうだし…。」

ちよつと情けない顔をする。…本当は、そんな事は気にしないで、二人でいたい。

敬太も考える。夜までたっぷり時間があれば、少し遠くまでドライブをするのも良い手かもしれない。けれど、その日は練習日だ。どうしても、夕方には都内に戻っていなければ成らない。

「…そーだな。何か面白そうな映画、探して見ようか？」

敬太の言葉に、利知末はニコリと頷いた。

敬太との約束の前日。祝日と日曜日が重なった、その日曜日。

朝、利知末が階下へ降りると、何故か朝美がエプロン姿で、キッチンから姿を表した。

「…何してんだ？」

目を丸くした利知末に、朝美が頬を膨らませた。

「利知末、遅い！もう九時だよ？早くご飯食べて！片付かないから…！」

ダイニングへ入ると、カウンタータイプの調理スペースの中で、朝美がフライパンに卵を割り落としていた。

「コレから日曜と祝日位は、成るべくあたし達で家事を手伝おうつて、この前、玲子達と話してたの。」

「何時のことだよ？」

「こないだの金曜。」

利知末の分の朝食を支度しながら、朝美が説明した。

「実はね、この前、里沙が、ちょっと具合悪くなっちゃったんだよ。」

「…そうなのか？」

びつくりした。利知未は初耳だ。毎週・月・水・木・金の四日間は、練習とライブがある。その日は、朝、学校に行ってから夜遅くに帰宅するまで、里沙の顔を見ない事も度々あった。

里沙は何時も、利知未が帰宅するまで、起きて待っていてくれた。

朝美に言われ、先週末の三日間は、里沙が起きていなかった事を思い出す。昨日は、明日の敬太との約束で頭がいっぱいで、周りの事には余り気が行っていなかったのも、確かだ。

「ソーなの。で、あたし達、里沙に甘えていたなって思ってた。それで、これからは住人で、休みの日はローション組んで、里沙を助けて行こうって話しになったのよ。」

「里沙は、大丈夫なのか？」

「今はね。ちょっと風邪引いただけだったみたい。でも、それでも休めない訳じゃない？あたし達の世話が忙しくて。だから、利知未も協力してよね？」

「分かったよ。…確かに里沙、今まで休めなかったんだもんね。」

「で、今日はあたしがヤルから、来週の日曜はよろしくね。明日は玲子が引き受けてくれたから。」

利知未の朝食を、テーブルに並べる。

「ああ。…朝美、もしかして料理苦手なのか？」

焦げた目玉焼きを、箸で摘んで持ち上げた。

「…文句ある…？」

朝美が腕を組んで、利知未をチロリと睨み見た。

同居人の間で始まった、毎週日曜・里沙の休日は、この日から利知未が大学三年の春まで、約六年半の間。…里沙が、遅い結婚をして、この下宿を出るまで、続いて行った。

十月。今年も、体育祭シーズンの到来だ。

利知未と細川は、今年もクラス対抗リレーのアンカーに決まった。また二週間、放課後の一時間は、リレー練習の餌食だ。

やはり、細川と付き合っていたらしい鵜野が、応援ついでに練習風景を眺めていた。

「利知未さん！頑張れ！！保に負けるな！！」

運動場の隅から大声を張り上げる鵜野に、細川が文句を返す。

「凌子<sup>りょうこ</sup>！！テメ、どっちの応援だよ！？」

「んなの、決まってんじゃン！利知未さん！！」

「…んだとー、この！」

細川は、かなりの負けず嫌いだった。鵜野はその性格を良く知っている。利知未の応援をすれば、負けるものと必死になると踏んでいた。

「…単純バカ…」

鵜野が小声で言っつて、そっぽを向いて小さく舌を出していた。

利知未はその様子を見て、小さくクスリと笑ってしまふ。

『鵜野つて、細川の操縦が上手いな。』

優と自分の関係を思い出した。裕一の事も思い出す。少し寂しさを覚えた。

沈んだ表情を一瞬、見せた利知未に、練習の後、鵜野が声をかけた。

「…利知未さん、敬太さんと何かあった…？」

「特に何も無いよ。なんで？」

「練習中、ちよつと寂しそうに見えたから。」

利知未はまた驚いた。…鵜野って、今まで思っていた以上に敏感だ。「敬太の事じゃないよ。…チョイ、兄貴の事、思い出したんだ…。」小さく笑顔を作って答えた利知未に、鵜野は少し気の毒そうな顔をする。

「…そつか。…ね、またチケット売ってよ？アタシ、FOX好きなんだ。」

直ぐに笑顔で話しを変えた。利知未は二年の頃から鵜野と、もっと仲良くしていれば良かったと感じた。…意外と気が合いそうだ。

「勿論。ただ最近、二週間先位の分まで直ぐに売り切れるんだ。だから都合が良い日があったら、早めに言ってくれよ？」

「判った。…トコロで、敬太さんとは上手く行ってるの？」

夏にデートを鉢合わせして以来、始めて聞かれた。鵜野は話しても平気そうな相手だと思った。

言葉で言うのが少し照れ臭くて、利知未はチェーンに通して首に掛けているシルバーリングを、手繰り出して見せた。

「…コレ、お揃いなんだ。…内緒にしておいてくれるよな…？」

鵜野が目を見開き嬉しそうな顔をして、照れている利知未の顔を見た。

「良かったジャン！ソーか、アタシも保とお揃いの買おうかな。ウン、勿論、内緒にしとくから安心してよ！…その代わり、その指輪ドコで見つけたのか教えてよ？いくら位だった？他にも良いのあった？」

二人で店の話しと、売っていた指輪の値段やデザインについて、二十分くらいはお喋りを交わした。今までの利知未には、余り無かった事だ。

それから鵜野は利知未にとって、貴子以外で敬太の話しが出来る、数少ない友人になった。卒業まで後、半年を切った頃の事だった。

その月の中旬。夏以来、久し振りに宏治がライブを見に来た。

そして赤毛のモヒカン少年・倉真と再会した。  
更に、補導事件の原因を作った、脱色髪少年・準一とも。

倉真は久し振りに再会した宏治を、ライブが始まる前に見つけていた。

「ヨ、やっと会えたな！」

カウンターで前回と同じ様に、コーラを手にした宏治に声を掛けた。

「…あの時の！<sup>たてかわ</sup>館川、だったよな？」

「覚えてたか？久し振りだな！今日もセガワと来たのか？」

店員からビールを受け取り、宏治の隣に立った。7、8センチの身長差があった。この頃、宏治はやっと158センチまで伸びた所だ。

「そーだよ。お前は今日も一人か？」

「ああ。俺のダチ、メタルの方がイイって言ってさ、良いバンドだからって言っても、来ようとするヤツいないんだよな。」

ビールに口を付け、面白く無さそうな顔をした。

「お前、宏治って言うんだっけ？」

頷く。改めて自己紹介をした。

「手塚 宏治。お前は、館川…ソーマって呼ばれてたよな？あの時。」

「

「ソーだよ。倉真。館川 倉真だ。コレから仲良くしようぜ？」

ヤンチャそうな笑顔を見せた。

準一はライブが始まる寸前に、和泉を連れて店に入った。

「お前、本当にココ、一人で入ったのか？」

呆れた声で和泉が聞いた。

「入ったって言うか、逃げ込んだ。…結局、掴まっちゃったけど。ヘラリと笑う。和泉は準一を呆れ顔で眺めた。

「…良くストップ掛けられなかったモンだ。」

「あはは。走り込んだ。受付けの人、驚いてたよ。」

準一らし過ぎる呑気な笑顔に、和泉は軽く溜息をついた。

「…お前は、ドコまでも本当に呑気だな。」

「だって終わった事じゃん。…あ、ライブ始まる！」

ワクワクした顔で、人混みを掻き分けて客席の中程まで進んだ。

倉真と宏治はライブが始まる前、客席の中程より、ややステージ近くに移動した。倉真は移動する前にビールを飲み干し、カウンタ―にグラスを返して来ていた。偶に宏治のコーラを貰う。

初対面から、まだ二回目の出会いだ。それでも二人は話している内に、お互い何となくウマが合うと感じていた。すっかり仲良くなっている。倉真は他人に対しては、余り拘りの無い性格だった。けれど好き嫌いはハッキリしていそうだ。それなら逆に、判り易くて付き合い安い。

倉真はこの数ヶ月で、すっかりFOXとセガワのファンになっていた。

「やっぱFOXの音ってイイよな！？ボーカルの声もイイよ。それにカッコイイ！」

そう言って、ステージ上の利知末を見て、ワクワクとした目を輝かせる。

セガワの事に付いては、宏治としては少し複雑だ。けれど、ステージの利知末は、本当に格好良く見える。それにもハッキリ言って複雑ではある。自分より背も高く、喧嘩も強い。

宏治が利知末と初めて会ったのは、もう二年も前の夏だ。

あの頃の利知末は、明るく捻くれた態度を取る割には、感情的な所もあって、生き生きとしていた。

そして、本当に少年の様に活発だった。…裕一も、まだ生きていた。

しかし、宏治がセガワを見たのは、今年の夏が始めての事だ。あの補導事件があった夜。利知末のセガワとしての変貌振りは、見えてこない。

だからこそ、セガワの男っぷりに対して、ただ目を丸くして驚く事しか出来なかった。それゆえ宏治は益々、利知未に頭が上がりない感じでもある。

『おれも、もう少し男っぽくならないと駄目だな……。』  
最近、宏治は利知未を見る度に、そんな風に感じていた。

騒ぎが起こったのは、FOXのライブ時間が中盤を過ぎ、後半に向かおうとしていた十九時半過ぎの事だ。

倉真の目の前に、もつと近くでライブを見ようと、進み出てきた二人組が割り込んできた。それだけでも傍迷惑な感じがしたが、自分も偶にやることでも有るし、仕方が無いかとも思った。

それでも、どんなヤツ等か顔を見てやろうと思い、その二人連れの小さい方の影を注視した。

「……あ！ テメ、ショー懲りもなく、また来やがったな！？」

倉真が指の間接を鳴らす。ライブは丁度、中盤の盛り上がりを見せていた。

目の前に割り込んできた奴の一人には、見覚えがある。覚えがある所では無い。三ヶ月前に、コイツが引き連れて来た補導員に補導された。

しかも、コイツが連れ去られる時に、自分の腕を掴んだ所為だ！

「あれ？ あー、あの時のモヒカン！！」

驚いた顔をした準一の顔面目掛け、倉真が行き成りストレートパンチを放った！ 準一は全く構えていなかった。その準一を庇う様に、連れの少年がパンチをモロに受けた。

「和尚！」

準一が叫ぶ。客席から悲鳴が上がる。準一を庇った少年・剃髪頭の和泉は、倉真のパンチでステージ上まで吹っ飛ばされていた。音が止まった。

セガワも驚いて歌が止まる。客席からまた悲鳴が上がる。足元に飛ばされてきた少年が、跳ね起きて自分をふっ飛ばした少年に向かって行く。懇親の力を込めて、撲り返した！！

今度はモヒカン少年が、カウンターまで吹っ飛ばされた。

『アイツ等……！』

ライブをメチャクチャにし、客席をパニックの渦に巻き込んだ少年の派手な頭には、見覚えがある。セガワはマイクを使って呼び掛けた。

「宏治！モヒカンを止める……！」

倉真は既に立ち直り、和泉に向かって組みついている。

客席が大乱闘になった。関係無いヤツラまで酒の勢いで殴り合いを始める。中心のモヒカンと剃髪の喧嘩を、手を振り上げて煽っている脱色髪にも見覚えがある。

マイクを使って指示を飛ばされた宏治が、ヤレヤレと言う顔で、倉真達に向かっていった。

セガワはステージを飛び降り、何故か楽屋に向かって走り出す。

「おい、どーする気だ……！」

リーダーがステージ上から声を投げた。

「ホース、長いヤツあったよな……！」

セガワが叫んで、リーダーに確認した。そうしながらも走って行く。「楽屋じゃない！便所だ……！」

拓が返事をした。敬太も利知未の思惑が解らないままにステージを飛び降りて、その後に続いた。アキがステージ上からマイクを使って、喧嘩を止める様にと叫んでいた。

トイレに掛け込んで長いホースを見つけ、手洗い場の蛇口に嵌めようとしている利知未に、追いついた敬太が聞いた。

「何をするつもり……？」

「水ぶっかける……！」



一言叫んで、ホースの片側を持ってステージ上に戻った。拓にぶつかりそうになり、拓は慌てて横に飛び退く。

「アキ、マイクー!!」

両手でホースを握っているセガワに、アキがマイクを向けた。

「敬太!」

マイクを使つて合図を送ると、敬太が手洗い場の蛇口をいっぱいまで開けた。ホースが低く唸つて、口を掴んで勢い良く飛ぶように調節された片側の出口から、水が噴出した!!

「テメーらっつ!!!いーかげんにしろっつ!!!」

マイクに向かってセガワが叫んだ。スピーカーが割れた音を、客席中に響かせた。

水を掛けられて、中心で大喧嘩をかましていた二人以外は鎮まった。

カウンターの中では店員が、壊れたグラスや酒瓶を片付けるのに大奮だ。落着いたファンが一人、また一人、その片付けを手伝い出した。

宏治は中心の二人が組み合つたまま、お互いに引き摺り合う様にして店の外へ出たのを追い掛けた。準一も煽りながら付いて行く。ステージの上で、やっと鎮まった客席にホッとして、メンバーが店の片付けを手伝いに降りて行った。

利知未は敬太が様子を見て蛇口を閉め、水を止めたホースの口を持つたまま、目に怒りを宿して荒い息をついた。

「アイツ等ア……。」

ホースを投げ出し、再びトイレに走って行く。そして今度は、バケツを引っ張り出して水を張る。敬太はホースを手繰り寄せて、片付け始めた。

水を張ったバケツを持って、物凄い形相で店の外へ駆け出すセガワを、ファンが恐ろしげに見送った。

店の外で二人が、激しい取っ組み合いをしている。喧嘩の腕は五分五分だった。宏治はとばかりを上手く避けながら、何とか二人を止め様と、必死で努力している。準一は変わらず、二人の喧嘩を面白そうに煽っていた。

「宏治、避ける！」

利知未の声に、宏治が素早く反応した。

バシャ！！

バケツの水が、喧嘩をしている二人の頭に、見事にヒットした。

「うわー！！」

二人同時に叫び飛び離れると、興奮したままの形相を利知未に向けた。

「てめー！！」

「何しやる！？」

二人の喧嘩は止まった。だが今度は、水を引っ掛けて来た人影に向かつて、揃って突進してきた。利知未がバケツを投げ捨てた。右と左から掛かって来た二人を、利知未は冷静に左右に避け、その勢いのついた利き腕を掴んで弾みをつけた。合気道の技は、まだまだ健在だ。

二人はそれぞれ掴まれた腕を中心にして、弧を描く様にふわりと飛び、次の瞬間、地面に叩きつけられた。身体中に走った衝撃で、倉真と和泉は漸く我に返った。

仰向けに倒れているモヒカン頭の胸座を掴んで、拳を上げる。ガツと鈍い音が響く。剃髪頭の少年にも、同じ様にして拳を振り上げた。

「お前等、店メチャクチャにしゃがって！何考えてんだ！？」

撲られてまた転がった二人を、立ち上がって上から見下ろした。二人はお互いに睨み合って無言だ。その様子を、迫力の睨みを効かせ

てセガワが見る。宏治が逃げ掛けた準一を捕まえて、近くまで連れて来た。

「…お前も、止めもしネーで良くも煽っていたな…？」  
準一にも鋭い睨みを効かせる。

「…だって、いきなり撲りかかられたんだ。モヒカンに…。」  
剥れた顔をしている。利知未は準一にも平手を食らわす。

「理由がどうかじゃネー！お前等の所為で、店もライブもメチャクチャだ。立て！」

半身起こして睨み合っていた二人を引っ立てた。

宏治は真面目な顔の裏で、利知未の様子を感じて眺めている。

「…やっぱ、カッコイーな…。」

セガワに引っ立てられた二人は、まだ睨み合っている。

一触即発な雰囲気だ。それに気付いたセガワが、二人を放してもう一度鋭い睨みを効かせた。

「テメーら…、まだやろうつてのか…？いーかげんにしろ…！」

パンパンツと、二人にビンタを食らわせた。それで漸く二人の睨み合っていた視線が、最後の一睨みを交わしてから、フンと左右に離れた。

和泉は、もう一度セガワに向かって行きそうな雰囲気だった。だがセガワに隙は無かった。

「このボーカル…、何者だ…？」

しかし、それでも段々と冷静にはなって行く。水と拳は正直効いた。倉真はセガワに張られた頬の痛みに、やっと自分がやらかした事に対して、やや反省の念が浮かび出す。

「セガワのライブをぶっ壊したのは、確かに悪かったな…。にしては…。」

隣を歩く剃髪頭を、ちらりと見た。

「コイツ、中々ヤルな…。今度きっちり、ケリ着けさせて貰おう…。」

血の気が多い事を思っている。

店の中に入り、店員の前で三人を土下座させた。セガワと宏治も、一緒に頭を下げた。

「ご迷惑お掛けして申し訳ありません。店の損害は、俺が弁償します。」

セガワが言う。宏治を含めた少年四人が、一斉にセガワを見る。

ライブで稼いで来た金があった。免許を取る為に溜めてきていたが仕方がない。こいつ等の小遣いじゃ払える筈も無い。どうせ親にも内緒で来ている筈だ。…何時か、こいつ等に返して貰おう…。そう思っていた。

倉真と和泉は、驚きながらもセガワの言葉を聞いて本気で反省した。

「セガワって、」

「…このボーカル…。」

自分達を張り倒して制裁を加えた強さ、一緒になって店に詫びを入れ、弁償まですると言う、その面倒見の良さ、潔さ…。

二人はセガワに、憧れにも近い様な、不思議な印象を持った。

準一は、一度にセガワが気に入った。撲られた事は腹も立つが、自分が悪い事をしたと言う事くらいは理解している。

「兄貴だ…！」

少年誌の不良漫画や青年誌のヤクザ漫画の、義理と人情の世界を思い出した。…セガワって、格好イイ…！そう素直に感動する。

宏治は、改めて見直す感じた。

「…瀬川さん、こんなコトしたヤツ等のために…。」  
また、頭が下がる思いだった。

その日のFOXのライブは、混乱の内に終わってしまった。

次のバンドがステージ時間を三十分ほどずらして、店はそのまま営業を続けた。警察なんかには通報しない。叩けば誇りが出るのは確かだ。

利知未は店の請求書を眺めて、溜息を付いた。

『ざっと、十四万か…。半分以上、貯金無くなるな…。』

そしてその日、メンバーと少年達は店の最寄り駅のファーストフード店で反省会だ。といっても、FOXのメンバーが三人に説教をする為の…。

セガワに撲られ、店との弁償問題の話し合いをして、三人はすっかり反省していた。それでFOXのメンバーも、セガワの顔を立てて一応、許してくれた。

少年達はそれから、宏治と利知未のヤンチャ仲間になってしまった。

倉真と宏治はウマが合い、和泉と準一はセガワに大きな借りが出来た。勿論、倉真も。

その倉真と和泉は、ココから暫く喧嘩相手だ。顔を合わせる度、小さな事を原因とした殴り合いが恒例となる。準一は何時も二人を煽っている…。宏治はその三人を、利知未と共に呆れて眺める。

そしてバツカスにも、困った常連が出来てしまった…。

### 三

十一月に入った。文化祭シーズンである。応援団部は例年通り、

校内警備係だ。

今年の舞台発表は、朝美が見に来た。冴史の力作を鑑賞するためである。冴史が夏から頑張って挑戦していた芝居の台本は、舞台発表で演劇部が公演した。校内評価は中々、好評だった。

正門横の警備詰め所で、利知未は一年の監視に立っている宏治と雑談をしていた。

「倉真が、この前、家に来ました。」

「あのモヒカンか？ ヤバイな。ココ等辺りうろつかれたら、あたしの正体バレるかもしれないな……。」

腕を組んで思案顔だ。その利知未を、偶にチラリと横目で見ている一年がいた。利知未の隠れファンだ。セガワの、では無い。

「佐々木、どうした？」

宏治が優しい顔で問い掛けた。

「いえ！なんでも有りません！」

佐々木と呼ばれた一年は、やや慌てた様子で返事をした。そしてまた、利知未の姿をチラリと盗み見る……。宏治はその視線の意味を理解している。軽く苦笑いしてしまう。

「……ま、佐々木は学校での瀬川さんしか、知らないからな……。」

利知未は顔を上げて宏治を見た。その苦笑いを見て問い掛ける。

「何かあったか？」

「いえ、何も。」

言って見た所で仕方ない。宏治には、利知未は色恋沙汰には興味が無さそうに見えている。それに佐々木のソレは、憧れの方が強そうだ。

宏治は力で後輩を抑えつけるタイプではない。

今年の一年団員の大半は、裏の仕事よりも、応援団その物に憧れ、入部してきた様な生徒が占めている。それらの下級生を纏めるのが、二年の中では宏治の役目になっていた。

ヤンチャ系の小人数を纏めるのは、結城や尾崎が引き受けている。

「利知未！」

朝美の声がした。呼ばれて正門を振り向く。朝美が軽く手を上げて、合図を寄越して近付いてきた。

「ここで会えて良かった。冴史のお芝居、見に来ただけど。ドコでやるの？案内してよ！」

「本当に見るのか……？」

利知未が、明らかに不満そうな表情をする。宏治はそれを見て、また少し笑ってしまう。

冴史の書いた台本は、利知未を見て思い付いたらしい内容だった。性格にかなり斑のある少女が主人公だ。一幕芝居で、その少女が一人で留守番をしている所に、色々な訪問者が現れる。

その訪問者と少女の、相手と気分によってクルクル変わるやり取りを、コミカルに描いた物だ。

そのやり取りは、利知未の言動が、相手によって色々と変わる事をヒントにして書かれた物だった。利知未を良く知っている人が見たら、一目瞭然で主人公のモデルが誰なのか判ってしまう。そういう意味でも、一部の生徒には大ウケをしていた。

利知未は昨日の校内発表を見て、放課後、応援団部室で宏治や高坂、大野を相手に、膨れっ面でぶつぶつ文句を言っていた。

利知未の不満そうな表情を見て笑っている宏治に、朝美が気付いた。

「何々？そんなに面白いお芝居だったの？」

朝美に問われて、宏治は自分をチラリと睨んでいる利知未に、小さく肩を竦めて見せた。逃げるが勝ちだ。

「うっす！ご苦労様です！舞台発表は体育館で行っております！自分が案内します！」

応援団らしい態度で格好良く朝美を案内して、その場を離れて行く。  
「…宏治のヤツ、逃げたな…。」  
利知未が小さくぼやいて、二人を見送った。

宏治に案内されながら、朝美は校舎裏の体育館へ向かった。

「ね、利知未って、学校ではどんな風なの？」

最近の利知未の変化に、興味津津である。何しろ朝美は、初めて下宿に表れた頃からの利知未を、間近に見てきている。

「どんな風って…、そうですね。人気があります。」

「ソレって、どんな感じ？まさか校内女子のアイドルってんじゃないでしょうね…？」

朝美の質問に、宏治は少し考えてから答えた。

「男にも、女にも人気があります。」

宏治の返事に、朝美が感心した様な驚いたような顔をする。

「ソーなの？…やっぱり、あの外見か…。」

「それだけじゃ無いと思います。…隠れファンの方が多いかな…？」  
佐々木を始め、思い当たる顔が幾つか頭に浮かぶ。男女の関係抜きで見た場合、現団長・副団長も、ある意味、利知未を大事にしている。

FOXのライブに定期的に行っているらしい生徒も、何人か知っている。

「へー、隠れファンね…。貴方も、その一人？」

二、と笑顔で宏治の顔を覗いて見た。覗き込まれて宏治は引いた。

「自分は…、瀬川さんには、恩を受けてるんで…。」

そう言われて、この少年には見覚えがあつたような気がした。

「恩、ね…。そう言えば、去年の夏頃、良く利知未を訪ねてきてた？」

その頃からは髪形も変わっているし、雰囲気も何となく変わってきているが、意外と可愛い感じで整っている宏治の顔には、覚えがあ



る。

「行つてました。貴女の事も見覚えてます。朝美さん、でしたね？」  
宏治は何度か、利知末から朝美の名前を聞いた事があった。どんな感じの人かは半分想像だが、下宿住人の顔は全員見て知っていた。その中で利知末の話と、さっきの様子を見ると、彼女が朝美だろうと推測した。

「良く覚えてるね！そう、あたし、朝美。」

びっくりした顔で肯定した。自分はこの少年の顔しか知らないのに、大したモンだと思う。しかもさっきまで、見た事がある相手だと言う事も忘れていた。宏治も大分、雰囲気違ってきているので仕方が無い事ではある。宏治は去年の夏からこの秋までで、随分、成長していた。

「着きました。体育館です。演劇部の公演がそろそろ始まると思います。」

「そ、ありがと。」

「では、自分は失礼します！ごゆっくり。」

応援団式礼をして踵を返しかけた宏治に、朝美が呼び掛けた。

「ネ、また後で利知末のこと教えてよ？何処にいるの？」

宏治は少し考える。自分の今日の予定は…？

「…時間が出来たら、さっきの詰め所で後輩に聞いて見て下さい。

自分が空いていれば、校内の案内させてもらいます。…失礼します

！」

もう一度礼をして踵を返した。

朝美は宏治の後姿を見送って、ちょっとだけ感心した。弟の事を思い出した。

『智紀も中二の頃から確りしてたな。…あの子の家も何かあるのかな？』

そう感じた。家庭の事情が複雑だと、あの位の歳でスッパリと2パターンに分かれるものだと、朝美は思っている。歳より確りするか、逆に捻くれて非行に走るタイプか…。

あの少年は、その折衷パターンだろうか？それならそれで、もう少し話して見るのも面白いかも知れないと思った。

宏治が詰め所へ戻ると、同じ二年の結城が一年の監視に立っていた。

「手塚！団長が部室で呼んでンゼ！」

利知未の姿は無い。宏治は結城の言葉に頷いて、応援団部室へ向かった。

宏治が部室に顔を出すと、高坂、大野、利知未が、揃って雑談をしていた。

「お、来たか。ま、座れよ。」

大野の言葉に短く返事をして、宏治は三人の近くの椅子へ座った。

「手塚。お前、コレから先の事どう思う？」

座った途端、高坂に質問をされて、宏治が理解不能な顔をする。

「バカかお前は？今、来た手塚に話しの流れの説明もなしで解るかよ？」

大野が高坂に呆れて突っ込んだ。利知未が簡単に話しだした。

「…コレから先ってのはさ、最近、近隣校との抗争が減って来ただけ？」

宏治は頷く。確かに一年の頃に比べて、格段に減っていた。

以前は一、二ヶ月に一度の割合で、喧嘩騒ぎに狩出されていた。

それが今年度に入って見ると、いきなり少なくなっていた。この前騒ぎに出向いたのは四、五ヶ月も前の事だ。

「時代が変わってきたんだろうって…。今、話していた所だよ。」

大野が、利知未の言葉の先を続けた。

「確かに街中で気合の入った奴、見掛け無くなって来たからな。偶にそんなヤツを見ても、格好だけの奴も増えてる。…今なら手塚も街中でソー言う連中相手に喧嘩しても、多分やられる事は無いだろ

う。」

そう言つて大野が、軽く首を竦める。

「で、こつからが本題だ。…今年の新入生、真面目なヤツ等が多い  
だろ？」

宏治はまた頷く。恐らく本気で殴り合いの喧嘩経験のあるヤツは、  
一握りのヤンチャメンバーくらいだろう。

「そうなつてくると来年の下を纏めるのも、喧嘩が強いだだけの奴じ  
や無理だろう。そんな奴だけが締めていたら、真面目な部員が辞め  
ちまう。そうなりや部員数が減つて、団部その物が廃部になる可能  
性も出て来る。…ソレは、ヤバインだよ。何だかんだ言つても、ま  
だ、おれ等みたいな奴等だつて残つてるだろ…？影の部分の仕事も、  
完全に出来なくなるのは危険なタイミングだ。」

「ソレに現団長・副団長としては、団部の伝統を守り、伝えて行く  
義務もある。…解るよな？」

利知未が言つて、宏治を見た。宏治はもう一度、頷いて見せる。

「で、だ。来年度の団長・副団は選考に悩まされてな。」

高坂が言つてニヤリとした。大野がまた説明をしてくれる。

「先ず、どうしても団長は喧嘩上等なタイプで無いと、気の荒いヤ  
ツ等の纏めがつかない。その点では、結城が現・二年団員の中じゃ  
適任だろ？アイツが一番、同学年で喧嘩、強かつたよな？」

宏治が頷いた。次に強いのは尾崎だ。自分は喧嘩だけで言つたら、  
もう一人の二年の下だ。全九人中、宏治の腕っ節は四、五番目だ。

「お前、結城と仲良かったよな？」

高坂が再び口を挟んだ。それにも頷く。団員二年の中では、宏治と  
一番ウマが合う相手が結城一彦だ。

「喧嘩だけで選ぶなら、副団は尾崎なんだが…、アイツは、どうも  
そういう立場に置かれるのは遠慮したい様なんだ。それに尾崎じゃ  
来年、真面目な団部後輩を纏めるのは難しそうだしな。」

尾崎はマイペースなヤツだ。呑気過ぎ気味な所もある。

「…それで、だ。色々、瀬川とも相談して見たんだが…。」

大野がチラリと、利知未に視線を向けた。利知未が目で合図を返す。  
「手塚。お前、来年度・副団、引き受けてくれないか？」

「…自分が、ですか？」

大野も高坂も頷いた。利知未は宏治の様子を観察している。

「考えたんだが、丸つきり喧嘩騒ぎに縁の無い二年には、やっぱり無理だ。それなりにソツチでもある程度、活躍出来るヤツじゃ無いとな。」

大野が言い、高坂が続けた。

「所がウチの二年ときた日にゃ、根性はお前と結城がダントツだ。後の連中は、喧嘩は強くても下に対して面倒見る事も出来ネーヤツ等だろ？」

「で、現副団の権限としてだ。手塚に来年度の副団を命じたい。」  
副団長命令では逆らえない。宏治に自信が有った訳では無いが、心を決めて頷いた。

「…分かりました。自分が、どれだけ出来るか判りませんが、精一杯、後、継がせて頂きます。」

高坂達三人は、ホッとした笑顔で頷きあった。

「頼んだぞ。結城はもう知ってる。明後日、譲渡式やるからな。」  
「うっす！了解しました。」

宏治は椅子から立ち、団部式礼をキリツと決めて見せた。

「そー言や、朝美どうした？」

話しが纏まった所で、利知未が宏治に聞いた。

「多分、演劇部の公演、見てると思います。」

「ソーか…。さっきは良くも、逃げ出したよな…？」

利知未がニヤリとして宏治を見る。宏治はその視線を外してやや慌てた。

「…自分は、一年監視してきます！」

部室を出ようとした。利知未がすかさず確認を取る。

「高坂、宏治は今、フリーだよな…？借りてイイか？」

「ああ。別に構わないぜ？」

「…と、言う事だ。チヨイ付き合えよな…?」

何となく迫力の有る利知未の様子に、高坂と大野が苦笑いをする。

『手塚のヤツ、何やらかしたんだ…?』

二人同時に思った。宏治は冷や汗が垂れてくる。

「…行こうか?」

利知未が椅子から立ち、自分より5、6センチは背が低い宏治の肩に、後ろからポンと片手を置いた。

さつき宏治が自分の様子を見て、笑っていた事は怒ってはいない。ただ、モヒカン少年の事について、もう少し詳しい話を聞こうと思った。

宏治が何となくビクついている様子が面白くて、からかったただけだ。

外来の客や、時間を作って展示や即売を眺めている生徒達で賑わう校内を歩きながら、<sup>ひとけ</sup>人氣が無さそうな所を探す。その間も、ぼちぼちと話しをしていた。

「…で、結局アイツ、何処に住んでるヤツなんだ?」

やや後ろを付いて歩く宏治に、利知未が聞いた。

「都内でも東の方です。新宿・渋谷辺りのライブハウス来るなら、浅草の方が近い位だって、言っていました。」

「そんな方から、お前の家まで来たのか? 電車、乗り継いで?」

「…それが、ダチに借りたって、バイクで来ました。」

「バイク!? 当然、無免だろ?…アイツの交友関係どんなんだ…?!」

「音楽仲間だって言ってたけど…。メタル好きな仲間がいて、その中にバイク持つてる高校生もいるって。」

バイクに音楽。利知未も同じ所に興味がある。そーするとアイツは、いったいどんなヤツなんでしょう?と、多少、興味も沸いてくる。宏治はこの頃、バイクにも興味を持ち始めていた。それで、倉真

とそのバイクに乗って、遊びに出掛けた。実はその時、パトカーに見咎められて軽い追いかけてっこを繰り返していた。

「…母も気に入って、『息子がもう一人増えた様だ』何て言っていました。」

付け足す様に宏治が言う。利知未は軽く目を見開く。

「美由紀さんが？…って事は、バツカスもヤバイな…。」

軽く溜息を付いた。セガワが利知未である事を知られない為には、自分の行動範囲も制限されてしまいそうだ。

「…まだ、判らないけど…。倉真は平気そうな気もする…。」

宏治が呟いた。二人は話しながら、校舎裏の人氣が無い所まで来ていた。

それにしては、美由紀に気に入られるとは…。いったいどんな態度を、美由紀に対して取っていたのだろうか？と、利知未は思った。

「手塚さん！詰め所に面会の方が、お待ちです！！」

佐々木が走って来て、息を切らしながら宏治に告げた。校内中を探し回ってくれたらしい。宏治の隣に利知未の姿を見つけ、照れて俯く。

「分かった。探し回ってたのか？悪かったな。」

先輩らしい態度になる宏治を、利知未は少し感心して眺めた。

『コレなら来年度の副団も、大丈夫そうだ。』

そう感じて微笑が浮かぶ。その表情は中々、イイ女に見える。もしも、ここに櫛田がいたら、嬉しそうな顔をして今の利知未を眺めるだろう。

「朝美さんだと思いますが、瀬川さん、どうしますか？」

宏治が聞いた。朝美の案内なら、利知未の方が良いかも知れない。

「…そーだな。でも、芝居、見た後なんだよな…。」

視線だけ抛り目気味にして空へ向けて、何とも言えない表情を見せる。

『今、朝美に会ったら、絶対、笑われるんだろうな…。』

そう思うが、宏治が笑顔で促した。

「朝美さんは、瀬川さんの姉貴分なんですよ？邪魔でなければ、おれも一緒しますから、瀬川さんが案内した方がイイと思います。」  
佐々木の手前でも有る。敬語を崩さない様に注意をした。

「……シャー無い……。ソレも一理有るな。……行くよ。」

溜息を付いて、宏治と佐々木を促して詰め所へと向かった。

翌日は文化祭の振替で、学校は休みだ。火曜になり、恒例の譲渡式が行われた。今年は部活を引退した貴子も、屋上まで見学に来た。  
「私、一回でいいからコレ、間近で見たかったんだ！やっと見れた！」  
そう言つて喜んでいた。

譲渡式は、やはり格好良い。団部のメンバーが、いつもの三割増くらい魅力的に見える。貴子は団長・高坂を見直した。

今年も校外まで見学者が来ていた。その中に、川上中学の学生も少し混ざっている。例年の事で珍しい事では無いが、今年の見学者には、困ったヤツが混ざっていた。

「アレだろ？有名な、城西中学応援団部、権限譲渡式！？すっげー！！結構、迫力有るんだね！！和尚は去年、見に来たの？」

「俺は来なかったよ。今年もお前に引つ張つてこられなかったら、来るつもりも無かったからな……。」

校庭を眺めやる。丁度、新団長・副団長が、団旗を翻した新たな団旗持ち以下、下級生を引き連れて、グラウンドの端へ向けて行進をしてくる所だった。その姿、中々、勇ましい。

「……ン？……あれ……？あの先頭の一人、何か見覚えあるな。」

準一が気付いた。和泉も気付く。

「……アイツ、城西の応援団部員だったのか！？」

二人が見つけたのは宏治だった。和泉は反射的に周りを見回す。

もしや、あのモヒカンも、何処かにいやしないだろうか？と。

和泉も、喧嘩であそこまで自分とやり合ったモヒカンに、内心、ライバル心が燃えている。セガワに付いては、撲られた事も当然の事だと、今は思っている。何よりも、あの事で借りが出来てしまった。

そして少し、憧れに近い様な感情も芽生えている。勿論、男同士のソレである。『尊敬』と言った方が合っているかもしれない。

宏治も、グラウンドの金網にへばり付く様にして見学している、二人の姿に気付いた。内心、『ヤバイ』とも思う。

利知未は上級生だから、マネージャーとは言えグラウンドへ下りてくる事も無い。しかし、エール交換の対象にはなっている。瀬川と言つて良い物だろうか…？考えるが、FOXのセガワは高校二年と言つ事になっている。多分大丈夫だろうと思ひ直して、そのままエール交換を行った。

取り敢えず、宏治の心配は懸念に終わった。

譲渡式は無事に終了し、新団長・結城 一彦、副団・手塚 宏治の、新制応援団が発足した。

#### 四

十二月。空気が急に、肌寒さを思わせる様な、冷たさへと変わる頃。

下宿に気持ちが悪くなるような、来訪者が現れた。

来訪者の名前は、葉山 修二。三年前、里沙が下宿を始める切っ掛けとなった朝美の事件で、その頃の朝美を気遣ってくれた実習先生だ。



「本当に久し振りです。この前、実習時代のノートを見つけて。あの頃の生徒と、体育祭の時に撮った写真が出て来たんです。…高田さんが、あれからどうなったのか。ちょっと気になってしまいました。…」

香り高い紅茶を出して貰い、リビングで里沙と向かい合って話をして、いる若者は、今年、二十五歳になる好青年だった。

「態々、有難うございます。朝美は、あれからこの下宿に入って、高校も無事に卒業しました。今は此处から、簿記の専門学校に通っています。」

里沙の笑顔が、何時も以上に優しげだった。

「葉山先生は…、もう先生って言うの变かしら…？」

言い掛けて、里沙はクスリと笑う。彼が実習先生として東城高校に通っていたのは、もう三年も前の、たった二週間だ。

「…はあ、いえ…。僕は今、都内の高校で教師をしていますから、先生と言うのも間違いでは有りません。」

葉山も変わらない、誠実そうな笑顔を里沙に向けた。

「そうなんですか？…人気、有るのじゃありませんか？」

里沙の、にこやかな表情に、葉山は少し照れた顔を見せる。

「いえ、そんな事は。野沢先生は、まだ教師をされているのですか？」

「私は、ここで小さな事務所を構えて、インテリアのデザインをしています。下宿の大家、兼業ですけどね…。ちょっと、お待ち下さい。」

立ち上がり、仕事部屋へ名詞を取りに行く。

葉山が一人、紅茶に口を付けて待っていると、リビング隣の廊下を利知未が通りかかった。来客の気配に一瞬、足を止める。

『里沙の仕事相手か？』

そう思っ、チラリと来客の姿を目に入れる。

名詞を持ってリビングへ戻った里沙が、利知未を見つけた。

「利知未、これから出掛けるの？」

十六時前。この季節では、後三十分もすれば日が暮れてしまう。

「ああ。夕飯いらないよ。」

利知未はこれから、敬太と会う約束があった。キャップと伊達眼鏡はポケットの中だ。

「…余り遅くならないでね？心配だから。」

里沙と話している利知未を、葉山が少し振り返って見る。

「分かった。十時前には戻るよ。…失礼します。」

その葉山に軽く会釈をしてから、利知未は玄関へ向かった。

里沙は、十時前と言う利知未の言葉に、軽く溜息を付いた。

『それでも、練習日より早くに帰ってくれるのね。』

そう思い、やや呆れた笑顔で利知未を送り出した。

この日の約束は、敬太のバイトが終わってからだった。利知未はこれから電車を使い、都内の敬太のバイト先へ向かう。

敬太と会えるのは十七時頃だ。ある資料を受取る事になっていた。勿論、そんな受け渡しはバンドの練習日にしても良さそうな物だが、今の利知未は例え少しでも、敬太と素のままで一緒に過ごす時間が欲しいと思っている。だから、理由をつけて会いに行く。

葉山は、朝美がバイトから戻るのを待っている。顔を見て元気な様子を確認したいと思った。葉山にとって、教師として初めて教えた生徒だ。朝美は特に、葉山にとって印象深い生徒だった。

朝美は、それから一時間半程してから帰宅した。その間、里沙は葉山に聞かれて、今までデザインしてきたインテリアの資料を見せながら話しをしていた。勿論、懐かしい思い出話しも出て来る。

「ただいま。」

玄関からの朝美の声を聞いて、里沙は時計を確認して見た。十七時二十分。つい話し込んで、夕飯の支度がまだだった事を思い出す。

「大変。もう、こんな時間…。朝美、お客様よ？」

「誰？」

パタパタとスリッパの音をさせて、朝美がリビング隣の廊下を通りがかりながら、中を覗き込んだ。振り返った葉山の姿に驚く。

「葉山先生じゃん！？懐かしい！どーしたの？」

「どーしたのって事は無いでしょう？朝美の事を気に掛けて下さって、様子を見にいらしてくれたのよ。」

里沙が呆れた顔をした。朝美はまた驚いて、リビングへ踏み込んだ。「えー、ソーなの！？…本当に？」

少し葉山を疑わしげに見た。…本当は、里沙に会いに来たんだっ तरीして。等と、勘ぐって見る。

「元気そうで安心したよ。…高田さんの顔も見られたし、余り遅くなると迷惑ですね。僕は、これで失礼します。」

言った葉山を、朝美が急いで引き止めた。

「イーじゃない！折角だから、ご飯一緒に食べて行ってよ？あたしも色々、話したいし！」

「そうね、そうして頂きましょうか？どうせ利知末が夕飯いらないうて言って、出掛けて行ったから、材料が余ってしまうし…」

里沙の言葉に、葉山が恐縮して遠慮する。それをまた朝美が引き止める。

結局、二人に言われて葉山は、その日、下宿で夕飯を戴いて行く事になった。里沙が料理をしている間、今度は朝美が葉山の相手をして盛り上がる。朝美も、葉山には感謝をしていた。

その夕食の席で、玲子と冴史も葉山に会った。紹介を終えて玲子が言った。

「私が今この下宿にいるのも、その事件があったからと言う事に成りますね。…それなら、感謝しないとらないわ。」

玲子の小さな呟きに、里沙が小さく微笑んだ。

玲子が初めて入居してきた年。利知末と毎日の様に繰り広げられた口喧嘩も、今の玲子にとっては、良い思い出になっている様に感

じた。

「私も、この下宿に来られて、良かったと思うから…。」

冴史も小さく呟いた。

冴史も、思う存分お話し作りが出来る今の環境を、気に入っていた。

良いネタ提供者もいる。利知未と出会えたのは此処に入居したからだ。

「里沙さんは、ご自分の夢を実現されたんですね…。」

葉山も笑顔でそう言った。

それから食後にまた少し話しをして、二十時前に帰宅して行った。

利知未は十七時過ぎに、敬太に会った。敬太のバイトは飲食業の店員だった。週に三日、バンド活動の無い日はバイトだ。土日祝日が基本だ。

それで利知未とのデートの日が、中々、取れない。毎週四日は会える事は会えるが、バンド活動中の利知未は、FOXのセガワとして少年らしく振舞っている。帰りの車の中でだけ、利知未に戻る。

「バイト先で、つてのは落着かないから、何処か適当な店を探そうか？」

そう言って街に出た。利知未はキャップと伊達眼鏡だ。指輪も外して、チェーンに通す。その様子を見て敬太が聞いた。

「それ、何時もそうやって持ってるの？」

「え？うん。…だって、敬太と二人でいる時には、着けられないから…。」

少し残念そうな笑顔を見せた。街中で会う時には、服装にも気を使う。身体のラインがハッキリするのはご法度だ。何時、何処で、フアンに見つかってしまいかも知れない。

「…もう暗いし、キャップは脱いでも平気じゃないかな…？」

敬太も本当は、そんな変装をしている利知未ではなく、そのままの

利知未といたいのが本音だ。それは利知未も同じだった。

「でも、街の中は明るいよ。」

「…何か、考えようか…。」

「変装、変えるの？」

「…そうだな。返って本当に女の子らしい格好をした方が、誤魔化せないかな…？」

「…ソレって、どんな格好？」

首を傾げる利知未を見て、敬太は何かひらめいた顔をする。

「…洋服、見ようか？」

利知未の手を取り、ファッションセンタービルへ連れて行った。

先ず洋服を見た。身体のラインが隠れない様な、セーターを選ぶ。

「どう？ソレじゃ、寒いかな…？」

試着室の中の利知未に、カーテン越しに声をかける。

「このセーター、薄いけど暖かいよ。…でも、高いな。」

「心配しないで。バイト料が入ったばかりだから。」

利知未はカーテンを開けて敬太を見た。少しびくりした顔だ。

「敬太が、買ってくれるの…？」

軽く顔を振り向けた敬太が、ニコリと笑顔を見せる。

「もう直ぐ、クリスマスだから…。プレゼントするよ。」

「…でも、」

「今度はコッチ、着て見てよ？」

敬太が、セーターと同じ素材のミニワンピースを手渡した。何か言い掛ける利知未を、再び試着室へ押し込んだ。

「着替えたら、見せて。」

試着室の中で、利知未は自分の姿を映す、全身鏡と対面する。少し顔が赤いと、自分でも思った。少し考えて、ワンピースを試着し始めた。

「…これ、やっぱり恥かしいな…。」

制服以外のスカートは持っていない。ワンピースなんて勿論、一着も無い。二年半前の夏、裕一と入った衣料品店で試着して見たのが、初めてだった。その時の事を思い出して、悲しくなる。

「着替え、終わった？」

カーテン越しに、敬太の声がした。

「…ウン。でも、やっぱり恥かしいよ…。」

「開けるよ？」

カーテンが開いて、敬太が鏡に映った。利知末も映り込んでいるその鏡を、敬太が笑顔で見つめた。

「似合うよ。…それにしよう。」

利知末の表情が、少し哀しげだった事は見えていた。

「金、払ってくるよ。着替えて。」

カーテンを閉める。利知末は小さく頷いて、着替え始めた。

それからビル内を回って、スパッツとブーツと、コートまで選んだ。全部、敬太が買ってくれた。総額で二万くらいは掛かった。利知末は嬉しい反面、申し訳無い様な気持ちだ。

一揃え買い整え、ビルの手洗い所で着替えた。着てきた服は、今、買って来た服が入っていた、ショッピングバックに押し込む。

ワンピースは膝丈で、体のラインも隠れない。鏡に映った自分の姿を見て、利知末は凄く照れ臭かった。

着替えて出て来た利知末を、敬太が嬉しそうな笑顔で迎えた。

「利知末、指輪は？」

「まだ、首に掛けてる。」

「見せて。」

言われて、チェーンを手繰り出す。それを敬太が受け取って、チェーンから外し、利知末の右手に嵌めた。敬太は既に身に着けている。「これで、在るべき位置に着いた。」

ニコリとして利知末を見る。利知末は照れる。自分の顔が嬉しさで、

紅潮して行くのが分かった。

「でも、本当に大丈夫かな…？」  
不安げに呟く。

「…オレは、もしも気付かれたら、その時はその時だと思ってるよ…。そんな事は気にしないで、そのままの利知未と一緒にいたいから。」

優しい笑顔で利知未を見つめる。

「…そーだね…。あたしも、本当は…。」

少し照れて視線を反らす利知未に、左腕を差し出した。その腕に、利知未は自然な感じで自分の右腕を絡めた。シヨッピングバックは敬太が持ってくれた。

ビルの最上階にあるレストラン街へ向かった。値段が手頃な感じの、イタリアンレストランへ入り、初めて恋人同士らしい雰囲気で食事を共にする事が出来た。

幸い、FOXファンには見つからずに済んだ。

食事をしながら、敬太が約束の資料を渡してくれた。

「一応、他校から入学してきた友達に頼んで、貰ってきたけど…。」  
高校の資料だ。三、四校分あった。

「サンキュ。この中に、良い所があれば良いんだけど…。」  
笑顔で受け取って、ざっと眺める。

「将来はどうするか、決まってるの？」

「…うん、一応。…裕兄の夢を、あたしが引き継ごうと思ってるから。」

「裕一さんの夢？」

「…医者に。」

敬太は初めて、利知未が考えている進路を知った。

「…そうか。それなら、理数系に強い所を選んだ方が良いね。」  
少し驚きながらも、笑顔で利知未にそう言った。

食事を終え、二十時半頃。敬太と利知未は腕を組んで、駅に向かっていた。

途中、広い公園を突っ切って行く。そこを回り込んで、倍近くの間が掛かる。

二人でいられる時間は長く欲しいが、利知未はまだ中学生だ。傍目には、その長身と大人びた外見で、高校生くらいにも見えるが、余り遅くまでは連れ歩けない。

「今日は車で来てないからな…。送って行けなくて、ごめん。」

「良いよ気にしないで。…それより、今日は散財させちゃってごめん…。」

やや俯いて歩く様子が、いじらしく見えた。

「…服、ありがとう。」

敬太の顔を、少し下から覗き込んで笑顔を見せる。その笑顔は可愛らしかった。…綺麗にも見える。敬太は改めてどきりとした。

「…何時も、こんな風にしていられたら良いのにな…。」

そう思う。その思いは、利知未も同じだ。

『本当はもっと、…もっと、敬太とこうしていたい…。こんな気持ち、初めてだ……。…敬太と……。…敬太に……。』

その先の思いは、言葉で表現するのは恥かしい。そして、その思いは。

…悲しい記憶も呼び覚ます。

目を閉じて、耳を塞いでも心に甦る…。辛く、そして口惜しい記憶。

…由美と言う少女の、悲しい思い出…。

敬太に対してのその思いが強くなるほど、…由美の想いも思い知る。

哀しそうな、口惜しそうな利知未の表情を見て、敬太の足が止ま



った。利知未の足も止まる。

敬太に身体の向きをそつと変えられ、瞳を覗き込まれる。

「…利知未、どうしたの…？」

「…どうって？」

「泣きそうな顔、してるよ…。」

利知未の瞳が揺れる。まつげが微かに震える…。眉が、哀しげな角度に歪んでいく…。唇も、何か言いたげに小さく開く…。

涙が零れてきそうな予感に、利知未は慌てて俯いた。

『もう、敬太に泣き顔は、見られたく無い。…笑顔でいたい…。』

「…ごめん。そんな顔、してた…？」

無理に作った笑顔を、その笑顔の裏の心を、敬太は受け止めた。

「利知未…。」

抱きしめる。無理は、しないで欲しい…。責めて自分の前でだけは暖かい敬太の腕に抱かれて、利知未の心が、少しずつ和らいでいく。

『…もつと…、…もつと強く、…敬太を感じたい…。』

『…利知未の、全てを…。』

腕の中の利知未は、今、本当の、本来の姿を取り戻している。

少女としての、…これから女へと成長をして行く、丁度その中間…。

異性を愛しいと想う気持ちを持った少女が、その先への階段に一歩、足を踏み出した。

…気持ちが高まる。けれど、利知未はまだ十五歳。

二人の想いは、その距離を駆け足で縮めて行く。

目と目を合わせ、お互いの心を確認している。

利知未が目をそつと閉じ、敬太は、その求めに応える。

暗い街燈の明かりが、ほのかに公園の冬枯れの樹木を照らし出す中、二人は静かに唇を重ねた。

利知未の中で、また女の心が成長を遂げる…。

敬太の中で、利知未を抱きたいと言う想いが強まった…。

唇が軽く離れた。まだ、足りない。もっと近くに…。もっと、強く。

けれど、敬太は小さく呟く。

「利知未は、まだ十五だから…。オレも、もう少し我慢しないと…。」

その言葉の裏に秘められた想いを感じ、利知未は自分の中で疼く何かに気付いた。想いが、素直に言葉と成る。

「…あたしが、我慢、出来無いよ…。きつと…。」

敬太は堪えた。…まだ、駄目だ。彼女を傷付ける事に成ってしまう…。

「…もう少しだ…。もう少し…。」

呟いて、抱きしめる腕に力を加えた。

敬太の優しさが歯痒くもあり、安心感にもなる。

利知未は、力が加わったその腕に身を委ね、そして自分の腕にも力を込める。強く抱き締め合い、想いを徐々に鎮めて行つた。

『大切に、してくれてるんだ…。きつと…。あたしが我が儘言っちゃ、駄目だ…。今は、これが…。…でも、』

でも、もう一回…。…責めて、キスをして…。

熱い想いが籠った利知未の瞳に、敬太は、もう一度応えてくれた…。

駅までは、今まで以上に確りと、腕を絡め合い歩いた。

敬太は途中の乗り換え線の駅で、降りて行く。もっと二人でいたい気持ちを抑えて、利知未は、笑顔を作って手を振った。

下宿に着き、自分の服装を改めて見る。

『この格好、皆に見られたら…恥かしいな。』  
そう思つて、利知未は黙つて玄関を入つた。リビングの扉が閉まつていて、ほんの少しホツとする。

誰にも見つからない様に注意して、急いで自室へ向かつた。

## 五

冬休みが近付いた、その頃…。

利知未は芽生えたばかりの女の心で、敬太を強く求めている自分の気持ちに、戸惑つていた。

『利知未は、まだ十五だからな…。』

そう言つて強く抱き締めてくれた敬太の、その時の言葉が、頭の中から離れない…。

『…こんな気持ち…、恥かしいな…。』

勉強机の前に掛けてある、三十センチ四方形の鏡に、自分の顔を映し見ては、溜息が漏れる。

『十五つて、やっぱり、マダマダなのかな…？』

何に對してマダマダなのか。その部分に考えが触れる度、利知未は恥ずかしさで、顔が赤くなつてしまう。

『…誰かに、相談して見ようか…？でも、いったい誰に…？！』

貴子や鵜野には、やはり聞けない。里沙や朝美にだつて、恥かしい。団部の男達になんて、それこそ聞けない…。アキも、FOXの活動中は、セガワとして男らしく振舞っている自分だ。やはり聞けない…。

『…！美由紀さん。…美由紀さんになら。』

思い立つて、時計を見た。火曜の十九時を指した頃だ。今ならバツカスは開いている。

思い付くと、居ても立つてもいられなかった。

利知未はクローゼットから、先週の日曜に敬太が買ってくれた一揃えを出して来て、着替え始めた。それなりに、少し大人っぽく見える格好でなければ、営業中のスナックには、入り難い。

着替えて指輪も身に着け、利知未はそつと部屋を出た。

足音を忍ばせて玄関を出る。外はもう真つ暗だ。利知未は早足で、駅北商店街の外れへと歩き出した。

バツカスに着き、鈴を鳴らして扉を開き、そつと覗き込んでから足を踏み入れた。客は一つのボックス席を占めている、四人だけだった。

「いらつしゃいませ！」

笑顔で振り向いた美由紀が、利知未の姿を見て少し驚いた顔をした。

「あら、利知未！…珍しい格好してるわね？」

美由紀は何時も、離れて暮している娘が帰って来た時の様な、そんな雰囲気以利知未を迎え入れてくれる。…酒も、出してくれる。

…話しの解る母親だ。

「…変かな…？今、忙しい？」

ちよつと照れた様子の利知未に、優しい顔で首を振る。

「そんな事、無いわよ。良く似合ってる。…その格好を態々、見せに来てくれた、って言う訳じゃないわよね？」

小さく頷いて見せた利知未を、笑顔で手招いてくれた。

「いらつしゃい。カウンターの方が良いわね？」

利知未が頷いて店内へ進む。先客が酔い始めのイイ感じで美由紀に聞く。

「誰が来たんだい？雑貨屋のジイ様か？」

「違うわよ。…娘が遊びに来てくれたの。」

「娘！？美由紀ちゃんは、息子二人だったよね？」

うんうんと頷き合う様子を面白そうに見て、美由紀が答える。

「最近、娘と息子が増えたのよ。さ、利知未。」

少し足を止めてしまった利知未を、もう一度、手招く。

「私の可愛い娘よ。利知未って言うの。熊さん達も可愛がってあげて。」

利知未の両肩に優しく手を置いて、常連の客に紹介した。

熊さんと呼ばれた男性には、見覚えがある。夏の補導事件の時、宏治を美由紀と一緒に、迎えに来た男性だった。

利知未がバツカスに顔を出すのは、何時も開店前だった。営業中に邪魔をするのは、流石に遠慮していた。半年近く前に一度、見た切りの利知未を、商店街肉屋店主・大熊は、見覚えていなかった。

あの時は、セガワとして少年として振舞っていた。今、ワンピース姿の少女らしい利知未を見ても、ピンとは来なかったらしい。それには少し、安堵する。

カウンターの片隅に腰掛けると、美由紀が薄い水割りを作って出してくれた。利知未は今日の相談内容を、素面で話すのは恥かしかった。素直に、その水割りに口を付けた。

「…何か、悩み事？」

グラスを半分ほど空け、やっと少し落ち着いた利知未の様子を見て、美由紀が優しく聞いてくれた。酔っていた訳では無かったが、そんな振りをして、利知未がポツポツと話し出す。

「…美由紀さん、あたしと同じくらいの頃、恋人っていた…？」

利知未のイメージに、余り無かった質問をいきなり投げかけられて、美由紀は一瞬だけ目を丸くする。直ぐに優しい母親の顔になる。

『そんな年頃よね…。』

自分にも覚えがある事だ。

…利知未は今、そう言う事柄に一番、戸惑う年かもしれない。

「ソーね。いたかしら…？」

自分の記憶を甦らせて、その頃、好きだった男子生徒の事を思い出す。

「…十五歳って、やっぱり微妙なのかな…。」

利知未は小さく呟く。常連組は盛り上がっていて、利知未の呟きは届いていない。

「微妙って？」

「…好きなヒトと、…ソーいう事したいって思うの、やっぱり変な事かな…。」

真っ赤になつて俯いてしまう。やっぱり、恥かしい。

「…呆れられるかな？怒られるかな？…笑われるかな…？」

恥かしさに堪え切れなくなり、利知未は残りの水割りを一気に飲み干してしまった。…少しだけ、酔いが回った。

「そんな飲み方して…。大丈夫？」

小さく頷く。美由紀は考えて、ロックにしてお代わりを出した。

『アルコールがきつい方が、無茶飲み出来ないかもしれないわね…。』

利知未が、どうやら酒に強い体質らしい事は、何回か見て気付いていた。

だからと言って良い事では勿論、無いが。…きっと今、利知未には必要なかもしれない。随分恥かしいのを我慢して、話している様子だ。

「…普通の事だと思うわよ…。利知未、もう生理あるでしょ？」

聞かれて頷いて、何故そんな質問が出たのか、後付けで考える。

「…心が追い付けないの。今はまだ。…私は、そう思うわ。」

「…どう言う事…？」

「…そうね、どう言ったら良いのかしら…。」

軽く首を傾げて考える。身体の成長、心の成長。利知未はまだ十五歳…。

「…そう感じられる相手がいるって事は、本当は凄く素敵な事よ。」

相手の人柄、環境も判らない。下手な事を言うのは返っていけない。

「…敬太が、『利知未は、まだ十五だから、オレも、もう少し我慢しないと』って、そう言ってた…。」

ロックも三分の一ほど飲んで、もう少し酔いが回って来ていた。ポ

ロリと恋人の名前を漏らしてしまう。

けれど、美由紀には少し安心出来る情報だった。少なくとも、遊びや、不真面目な気持ちで利知末に対している相手では、無さそう  
だ。

「…そう。…イイ恋人ね。敬太君って言うの？」

問われて小さく頷いた。…きつとお酒の所為だ。何か、素直になれ  
る…。

「…でも、あたしは…。」

それでも肝心な言葉にはブレーキが掛かる。…やっぱり、恥かしい  
…。

「やっぱり、いけない事なのかな…？こう言う気持ち。」

少女と女の狭間で揺れる、利知末の想いは良く判った。

ただ、やはり、まだ早過ぎると思う。美由紀も人の親だ。

「いけない気持ちって事は、無いと思うわ。…でも、その敬太君が  
利知末の事を本気で大切に思ってくれて、そうして我慢してくれて  
いるのなら、利知末も、もう少し大人になって、落着いて考えない  
とね…？」

「…こう言う気持ちは、持ってもイイのかな…？」

酒で潤みかけた瞳を、美由紀に向けた。真剣なその瞳に、美由紀は  
優しく微笑んで見せる。

「…女だもの。当たり前前の感情よ。…でも、まだ利知末は、大人に  
成り切れてもいないのよ。焦らず、ゆっくり。その関係を大切にな  
さい。」

美由紀の優しい言葉に、利知末の心が少しだけ安静を取り戻す。

ゆっくり、確りと頷いて見せた。

「敬太君って、何時か車で私達を送ってくれた、あの男子？」  
環境は確かめておかenいとならない。…母親として。

頷く利知末。再び美由紀を見たその瞳に、人を愛しく想う事を知  
っている者だけが持つ、柔らかい光りを宿す。

「…どんな子？優しそうな感じだったわね…。」

敬太の事を思い出しながら、美由紀が言った。

「…うん。優しくて、暖かい。…敬太と居ると、裕兄といった時みに安心出来る…。」

「大学生？」

「大学一年。だから、優兄と同じ年なんだけど…、全然、違うよ。」

美由紀は、また少しだけ安心する。妻帯者や社会人が相手というよりは、中学三年の利知未の相手として、理解出来る範疇だ。

「今度、改めて紹介してね。私がじっくり吟味してあげるわ。」

「分かった。…でも、宏治や他の皆には、言わないで。」

落ち着きを取り戻した、利知未の照れた様な笑顔に、美由紀はやつと胸を撫で下ろす気分だ。

「そうね、私と利知未だけの秘密にしておきましょう？」

頷く利知未は、とても少女らしい雰囲気だった。美由紀は娘らしく成長をして来た利知未を見て、嬉しい気分になった。

冬休み最初のライブは、利知未の知り合いのオン・パレードになった。

「やつと冬休みに入っだし、受験勉強の息抜きに皆で行って見ようよ！」

貴子が言い出して、高坂、大野、宏治。そしてクラスメートの、鵜野と細川カップル。それらが、連れ立ってやって来た。

更に、偶然にも川上中学コンビ・準一&和泉が現れ、赤毛のモヒカン倉真まで、姿を表した。

利知未は内心、また騒ぎが起こるのでは無いかと冷や冷やしていたが、倉真と和泉も前回の事は反省しており、店の中では大人しくしていた。

セガワに、憧れと尊敬の念が芽生えてもいる。無茶をしてまた迷惑を掛ける事だけはないようにと、そう思っていた。



利知未はセガワとして立っている間、今まで以上に自分の少女としての想いにキック、蓋をした。敬太はバックでドラムを叩きながら、その後姿を見つめる。…セガワの時の利知未は、益々男っぽくなっている…。

『苦しくは、無いのだろうか…？』

偶に、そんな気持ちだが、ふと頭を過る。

「今年もFOXを見てくれてありがとう。次はニューイヤーライブで！」

ラストの曲が終わり、セガワがマイクに向かって締めた。

いつものMCは、やはりリーダーがするが、何かの区切り時の挨拶は、最近ではセガワがしていた。セガワファンが多いからだ。

ステージを次のバンドに空け渡し客席に下りると、早速ファンに取り囲まれてしまう。セガワは相変わらず、イイ男っぷりを発揮している。

カウンターの近くでは、宏治と倉真が話している。そこへ和泉が近付いて行く…。準一は少し、ワクワクした顔でついて行く。

近寄って来た剃髪頭に気付いて、宏治が注意深い視線を向けた。その宏治の視線の先を、倉真も振り向いた。ニヤリと、不敵な笑みを漏らす。

「何だ、この前のケリでも、着け様つてのか…？」

倉真の挑戦的な態度に、宏治が構え、鋭く小さな声で言う。

「倉真。ここで騒ぎを起こすな。」

「…判ってるよ。」

本当に判っているのかと思う様な、挑戦的な睨みを和泉に向けた。

和泉は軽く手を上げて、その倉真をいなす。

「心配するな。俺もここで、騒ぎを起こす気は無い。」

宏治に言う。そして倉真には軽く一睨み。火花が見えたような気がして、準一はワクワクと、好奇心いっぱい目の見開く。

「…何の用だよ？」

「お前じゃない、そっちのヤツ。…お前、城西の応援団だったんだ。」

倉真の言葉を見無視して宏治を見た。倉真はその態度に力チンと来る。それに気付いた宏治が、倉真を軽く見て注意を促した。

「倉真！」

「…分かつてる…。」

準一は何処までも呑気に、これから先の展開に期待する。宏治は剃髪頭に視線を移し、呼びかけようとして、名前も知らなかった事に気付く。

「…悪い。お前の名前、知らなかった。おれは手塚 宏治。さつき言ってた通り、城西中学応援団・副団だ。」

平団員ではない為、そこまで自己紹介をする。近隣校に睨みを効かせなければならぬ立場としての、義務みたいな物だ。それも仕来りだった。

「俺は川上中学二年、萩原 和泉。こいつは、一年の渡辺 準一。」

「同じ学年だったんだな。上かと思ったよ。」

宏治の言葉に、和泉は軽い笑顔を見せた。宏治の事は特に意識している訳ではない。それ所か、尊敬するセガワの親しい知り合いのようだ。

宏治は、面白く無さそうな顔をしている倉真の様子を気に掛けながら、川中コンビと会話を始めた。

カウンターでは、FOXのリーダーと高坂、大野、貴子が話していた。

鵜野が敬太の傍へ行き、細川がその近くに着いていた。

「敬太さん、ちーっす！相変わらず格好イイね！！」

言いながら、店員からコーラのグラスを受取った鵜野が、敬太の隣に座った。細川は面白く無さそうに、やけっぱちな感じで店員にビールを注文した。利知未と約束の一杯は飲んでしまっていたが、焼き餅半分の自棄酒だ。始めの一杯を飲んで時間も経っていたので、

酔う事は無い。

「…利知未さんね、最近、学校で凄く可愛いんだよ？」

小声で囁く鵜野に、敬太は少し照れ臭そうな笑顔を見せる。

夏のデートを鉢合わせした後も、鵜野は偶にライブに現れていた。いつもは直ぐに帰っていたのが、あれ以来、ファンの相手に忙しい利知未に声を掛ける変わりに、敬太に声を掛け、少し話してから帰るようになっていた。細川も、その内の何度かは一緒に来ていた。

その鵜野の隣に、細川がビールを飲みながら腰掛ける。そのまま三人で話しを始めた。

その席から少し離れた、同じくカウンター席では、貴子が始めて見たライブの感動を、いつも通りの積極的な態度で、初対面のリーダーに話している。高坂と大野も、隣で楽しそうだ。拓もその輪に加わった。

「それにしても、利知…、じゃない。セガワって本当に格好良いんだ。びっくりしちゃった！初めてまともに、セガワの歌を聞いたんです。音楽の時間はサボりの常習犯だったから。」

最後は小声だ。少し周りを気にする。貴子も利知未を困らせるような事はしたくない。リーダーは、ニコニコして聞いている。

「貴子ちゃんだったよね？利知未は最近、学校でも落着いてるの？」拓が聞いた。学校の話をするのなら、利知未と呼んだほうが安全だ。貴子も賢く、そこを汲み取る。

「はい。夏休み前までは、まだ、ちょっと心配だったんですけど、…夏休み終った途端、なんか落着いた様子で学校に来たんです。」

ニコリと笑顔を見せる。拓もリーダーも、敬太と利知未の関係は薄々、気付いていない事も無い。へー、と言う顔をして、チラリと敬太を見る。

敬太は、鵜野と細川の話し相手で向こうを向いており、二人の意味ありげな視線には気付かない。

やっとファンの群れを抜けた利知未は、宏治達の所で話していた。  
「お前等…。何時の間に仲良くなっただんだ？」

川中コンビと宏治の様子は、平和的だった。ただ一人、倉真だけが平和的な会話に茶々を入れて行く。利知未はセガワらしく振舞いながら、呆れてその様子を眺めた。…少し面白くもあった。

一人、浮いた感じになる倉真に、セガワが話を振った。

「お前、倉真って言ったよな？宏治の家までバイクで来たって？」

気さくに話し掛けられて、倉真は少し感動する。柄にも無く照れる。

「セガワさんは、免許は？」

セガワさん、と来た。その様子に、宏治も軽く笑顔になる。

「今、金貯めてるんだ。貯まったら取りに行くつもりだ。」

男っぽい、セガワスマイルで返事をする。…こいつ、始めの印象よりはマシなヤツかもしれない…。そう感じた。

「けど、乗るんスよね？」

ニツと笑顔を返して、倉真が聞く。イメージではそう感じている。

「まあな。今は弄れるバイクも無いからな。免許取ったら次はバイクだ。」

本当に男同士ののような会話に、宏治はまた感心する。

「今度、ダチのバイク貸しますよ？」

「…って言うか、大事な弟分、あんまヤバイ事に巻き込むなよな？」  
笑顔を見せながら釘を指した。宏治もそれを聞いて、バツの悪そうな笑顔を見せた。

そのまま暫く話をしてから、セガワは高坂達の席へ移動した。

「…やっぱ、イイな。…格好イイよ。」

セガワが高坂達と話をしてしている後姿を見ながら、倉真が呟く。ついつられて、和泉と準一も頷いてしまった。

目が合い、お互いに照れ臭い顔をした。宏治は取り敢えず安堵した。

今年の正月は、裕一はいない。

利知未は、一月二日。大叔母の墓参りにだけ、優と出掛けて行った。

裕一の四十九日法要と、初盆の墓参り以来、久し振りの再会だ。

利知未は去年、忙しい生活の中、月に一度は裕一の墓参りに出掛けていた。

大叔母の墓石に頭を垂れて、利知未は礼を言った。

『裕兄は、雪崩に巻き込まれて死んじゃったけど…。それでも、身体があれだけ揃って帰って来れたのは、きつと、ばあちゃんのお蔭だね…。』

思うと泣きたくなる。けれど、その事だけは、やっと落着いて来た利知未の心を、僅かだけでも救ってくれる事実だ。だから、礼を言った。

『裕兄の墓参りに行くと、どうしても泣いちゃうけど…。』

人に泣き顔は見せたくなくて、いつも一人で、出掛けていた。

『けど、あたしは…。裕兄の夢を代わりに叶えるまでは、もう二度と人に涙を見せないようにするよ…。』

そして顔を上げ、哀しげでも強い決心を秘めた瞳を墓石に向けた。

頭を上げた利知未を後ろから見つめ、優が声を掛ける。

「…行くか。」

利知未は頷いて静かに立ち上がり、優を振り向いた。笑顔を見せる。

「次は、裕兄の一周忌だな。優兄、病気すんなよ？」

随分、大人びてきた利知未の笑顔に、優は心の中で呟いた。

『利知未も成長してるぜ…。？兄貴。ばーちゃん達も、見てるかな…？』

向きを変え、残された兄妹二人、仲良く並んで帰途に着いたのだった。

三学期。受験勉強に追いまくられるクラスメートを尻目に、利知未は相変わらずバンド活動に忙しかった。

それでも受験生のセガワを気遣い、FOXの練習日は、この頃、漸く週三日から二日へと戻された。曜日も火曜・水曜に戻った。

利知未も今は、歌だけに心の解放を求める事は無くなっていた。それ以外の周囲の状況が、慌しく動き出した所為もある。

最近、倉真が益々、宏治と仲良くなり、家だけではなくバツカスにも表れる様になっていた。和泉と準一も、宏治とは因縁がある訳では無い。隣の学区内と言う近距離に生活している事も知れた今、良く宏治の家やバツカスまで、顔を出す様になっていた。

利知未はお蔭で、登下校時にも気が休まらない。

休日近所へ出かけるのも、キャップと伊達眼鏡の愛用だ。思い付いて最近、登下校時にも伊達眼鏡をかけて見る事にした。

学校での利知未は益々、可愛い感じになって来ていた。後二ヶ月と少しで卒業してしまうこの時期になって、隠れて利知未に好意を抱いていた少年達から、告白合戦を受けている。

利知未はびっくりした。今は敬太と言う恋人を得て、利知未自身が人を好きになる感情に付いて、理解出来る様になっている。

告白してくる少年達の大半は、どちらかと言うとファン精神や、憧れに近い感情を持って、その思いを伝えてくるのだが、利知未は冷たくあしらう事は、しなかった。

宏治も、そんな利知未に驚いていた。つい去年の秋頃まで、利知未にはそう言う色恋沙汰に、興味が無い様な印象を持っていた。

ところが利知未は、そう言った少年達に、相手が誰かは明かさずに『恋人がいるから』と言って断りを入れている。

それが噂で聞こえて来て、漸く利知未の学校での様子が随分、女

らしくなつて来ていた事にも合点がいった。あれは去年の夏休み過ぎ頃からである。と言う事は、その頃からそう言う相手が居たと言う事かと、改めて驚かされた。

佐々木は、その噂が聞こえて来た頃、見た目に明らかに落ち込んでいた。それでも憧れの感情が消える事も無く、相変わらず学校で利知未を見かけては、照れた様子で俯いてしまふ。宏治は、その様子にも注目していた。

二月に入り、私立の高校受験から始まつた。

高坂と大野は、親に『私立のランクが低い所でも良いから、取り敢えず、高校だけは行ってくれ』と、去年の夏から泣かれていた。

成績もさほど差の無い二人だ。どうやら高校まで、友人関係が続いて行きそうな感じである。二人の志望校は同じだった。

一足先に受験を追えてきた二人と、久し振りに部室で話をした。「どうだった、受かりそうか？」

ニコリと聞いた利知未に、二人は力の抜けた笑顔を見せる。

「まーね。併願してなきゃ、余程な理由が無い限りは入れてくれる学校だからな…。おれ等の場合、喧嘩騒ぎが漏れなきゃの話しだけだな。」

大野の言葉に、高坂も頷く。

「ま、部活の部長・副部長経験者って事で、いくらか誤魔化し効いてくれた様だったけどな…。」

「なんの部活か、聞かれなかったのか？」

「…聞かれたよ。」

「それで大丈夫なのかヨ？」

面白そうに利知未が笑う。笑い事ではないのは確かだが、笑う以外無いのも確かだ。

近隣の高校では、城西中学応援団部は結構な有名さだ。

「瀬川のお蔭で、テストは何とかなったから、…大丈夫だとは思う

けどな…。」

片頬杖を突いて溜息をついて見せる高坂を、クスクスと笑って眺める。

「ま、合格したら、皆で集まって騒ごうぜ?」

利知未の言葉に、二人はやつと普通に笑顔を作る。

「ソーだな…。お前の方は、滑り止めも受けないで平気なのかよ?」

「誰に言つてんだよ?あたしの成績、知ってるだろ?」

ニヤリと笑つて見せる。

「そりゃソーだ。釈迦に説法つて言つのか?コ―言つての。」

大野の言葉に、利知未が言い返す。

「チョイ違う。でも、ま、言いたい事は解つた。そんな難しい事じやなくつても、余計な心配つてんで充分だろ?」

「…それもソーだ…。受験勉強で頭クタクタだよ。おれ等はもう関係ネーし、また来週辺りのチケット売ってくれよ。気晴らしに行きたいし。」

高坂に目配せをした。高坂も頷く。

「そーだな。久し振りに行くか!?」

「毎度。じゃ、折角だから、いつもより負けてやるよ。千円でどーだ?」

「イイのかヨ?金、溜めてんだろ。」

「イーよ。今回だけな。」

利知未は、部室にいる時だけは、昔まだ裕一が生きていた頃の様子に戻る。その様子を見ると、高坂も大野も少しホツとする。先輩から引き継がされた、利知未を守ると言う大役を、それでも何とか無事にこなしてこれたんだなあ…。と、胸を撫で下ろす気分だ。

利知未も、FOXの事も敬太の事も関係無く、昔の気分を取り戻す事が出来るこの場所は、大好きだった。…ここにはいつも、仲間がいる…。

その大好きな場所とも、後、一月ちよつとでお別れだ。

一年の頃、同じ時期に櫛田が、この場所で感慨深げに呟いていた



様子を、思い出す。『珍しい』と、からかった利知未に、『タマにはこんな気分になる事だってあんだよ。』と、軽く睨みを効かされた。

あの櫛田に対して抱いていた不思議な感情が、どうやら自分の初恋であった事は、もう気付いていた。櫛田の事を思い出す時に感じる、甘酸っぱい様な感覚は、今の利知未にはくすぐたく、何となく気恥ずかしい感じである。

その思いでクスリと笑ってしまった利知未を見て、高坂と大野はまた、利知未の少女らしい部分を意識した。ちよつと、どきりとする。

高坂は首を軽く振って、その感じを頭から払い落とした。

大野は素直に、その感じを受け入れる。だからと言って、利知未に対して特別な感情を抱いているつもりはなかった。

ただ、自分の周りを見ても、この三年間でこれ程までに急激に成長を遂げた同級生は、他に知らない。

そう言う意味で何となく、何時までも心に残りそうなダチであるとは思っている。大野は、頭で考えるタイプだ。

「今週のチケットは売り切れてるから、来週分で構わないか？」

物思いを頭から払って、利知未は目の前にいる二人に話を戻した。

「ああ、構わなーよ。来週って十四日だな？」

高坂に日付の確認をされて、敬太の事を思い出した。

今年の一月四日。敬太の誕生日を、彼のバイト後に待ち合わせて祝った。その時に用意したプレゼントで、もう一つの候補と最後まで悩み通した物があつた。

『バレンタインデーか…。この前、渡しそびれた方、プレゼントしようかな…。？まだ、売ってればイイけど…。』

再び、少女らしい様子で物思いに入つた利知未を見て、高坂と大野は顔を見合わせて、首を傾げたのだった。

十四日のライブ。セガワは多くの少女ファンから、プレゼント攻撃を受けた。その様子をカウンターから眺めている高坂と大野は、やや呆れた表情だ。相変わらず、凄い人気だ。

「オレ達も少し貰ったけど、やっぱりアイツには敵わないな…。」

リーダーも少し呆れた顔で、その様子を眺めていた。

「リーダー、拓！敬太も。はい。一応、義理チョコ。」

アキが三人に、デパートのワゴンで山積みになされて売られている、正しく義理チョコらしいチョコレートを手渡した。そして高坂と大野には、もう少し見栄えの良い物を渡してくれる。

「コッチは、FOXの男の子ファン用。いつもありがとう。」

綺麗可愛い元FOXリードボーカル、アキからチョコを渡されて、二人は少し照れた。頭を搔いて礼を言う。

「二人共、利知未と同学年なのよね？進路は決まったの？」

学校の話をする時は、利知未と呼んで話す。それが一番、安全だ。

「一応。昨日、学校に合格連絡が来ました。」

「そう！おめでとう。利知未とは、違う学校になるのよね。」

「そうなります。」

「そっか…。でも良かったらまた、ライブ見に来てね。」

「うっす！勿論、見に来ます。…瀬川との約束もあるし。」

大野が言った。高坂も頷いた。

利知未との約束。由美の事件後に、真剣な目で言われた言葉。

「これからあたしが、どんな風になっていくのか、見ていてくれよ。」

『

そう言って、その後。

『ステージ上で少しでも女が見えたら…、その時は、必ず教えてくれ。』

そう、頼まれた。

今までを見る限りでは、二人ともそれは感じない。しかし、本当に男女の差が現れるのは、恐らく高校生になった後だろうと思って

いた。

『瀬川は、まだ贖罪を受ける必要を感じているのか？』

大野は思う。それでもダチとして、その約束は果たさなければならぬ。

高坂も同じ気持ちだ。幸い、大野とは同じ高校に進む事に成る。利知未の、セガワとしての限界判定人としては、都合が良い事だった。

ライブの後、高坂と大野には悪いが、今日は敬太の車で帰る事にした。

バレンタインデーのプレゼントが多くて、電車で帰るのは一苦労だ。それに、利知未から敬太に渡したい物もある。

この頃、流行っている物で、ペンダントヘッドが鍵と鍵穴に分かれている、男女のペア・ネックレスがあった。

指輪はやはり着けていられないけれど、ペンダントなら平気だろうと思った。それで、誕生日に贈ったプレゼントと最後まで悩んだ物だ。

それに何となく、誕生日のプレゼントは相手の欲しい物、役に立つ物を贈るのが、良いだろうと思ってもいた。

しかし、恋人同士が気持ちを伝え交わすバレンタインデーなら、返ってこう言う、二人の絆を深めてくれそうな物が、相応しいとも感じた。

「本当は、もうちょっと違う格好の時に、渡したかったんだけど…」

利知未は暖房の効いた車の中で、責めて男物の上着だけは脱いだ。その様子を見て、敬太は車を路肩に寄せた。

「バレンタインデーだから、チョコ、渡そうと思ったんだけど…。それだけじゃ詰らないから。…これも、受け取ってくれるかな…？」  
脱いだ上着のポケットから、片手に収まってしまう小さな箱と、細

長い、ラッピングされた箱を出して手渡した。

「ありがとう。開けて良いかな？」

笑顔を返してくれた。頷いた利知未を見て、包装を剥がす。箱から出して見ると、鍵形のペンダントヘッドのネックレスが出て来た。

「指輪じゃ着けていられないから…。あたしの鍵穴と、ペアなんだ。」

身に着けていたネックレスのチェーンを手繰り出し、自分のペンダントを敬太に見せる。照れた笑顔が可愛らしかった。

「ありがとう…。そうだね。これならライブの時も身に着けられる。」

「着けてくれるの？良かった…。ありがとう、嬉しいよ…。」

益々、可愛い笑顔を見せる、利知未に頷いて見せ、その場で身に着けようとした。ネックレスの小さな繋ぎ目が、上手く通らないそれを見て、利知未が手を伸ばし繋ぎ目を止めた。

二人でペンダントヘッドを見せ合い、微笑み交わす。そのまま暫く見つめ合い、キスを交わす。唇を合わせる度に、お互いを求める気持ちは高成って行く…。

敬太は、また堪えた。利知未も、我慢した。

『利知未も、もう少し大人になって、落ち着いて考えないとね…？』  
そう優しく諭された、美由紀の言葉を思い出す。

『責めて、十六に成るまで…。そうしたら、あたしは…。』  
…そう、心に決めていた。

バレンタインデーから十日後。二十四日・月曜日。

利知未は裕一の一週忌の法要に出席するため、学校を欠席した。

一月半振りに再会した利知未の様子が、また少し大人びてきた様な気がして、優は繁々と妹を眺めた。

「…なんだよ？」

言葉は、どうやら相変わらずそうだった。

「…いや。別に…」

優は視線を外して誤魔化した。

優にも大学に入って、好い相手が出来ていた。

二つ年上の女性で、裕一の死後、ショックを受けていた優の事を、色々と気に掛けて力に成ってくれた人だった。

彼女が来年、大学を卒業するまで関係が続いていたら、結婚しようと言う約束まで交わしていた。

まだ利知末に言えないでいる。何しろ、もし本当にそうだったのなら、優は学生結婚をする事に成る。

ただでさえ、家族に知らせるのは照れ臭い事なのに、そんな大それた事を考えている関係など中々、口に出す事は出来ない。

「優兄、なに考えてるんだよ…？」

そっぽを向いて何か考えている様子の優に、利知末は、疑わしげな視線を横目で向けた。

「…何も考えてネーよ。お前こそ受験、大丈夫なのかよ？」

「優兄とは違うからね、心配無いよ。…心配は別の所にあるし。」

最後を小さく呟く利知末の言葉に、優はすかさず突っ込んで聞いた。  
「なんだよ？心配って。」

利知末の心配は、高校に入学してからの事だ。もし、その高校にFOXのライブを見た事がある生徒がいたら…、マズイ事に成りそうだ。

それは吟味して、どちらかと言えば横須賀に近い立地の高校を選んでいるが、心配なのは変わらない。

利知末が選んだ高校は、以前、裕一に聞かれて答えた通り、私服登校可能な、自由な校風の学校だ。そして実は、入試レベルの高い学校だった。利知末の成績でやっと、ほぼ合格出来るだろうと言われるレベルの高校だ。それでも利知末は、滑り止めを受けない事にした。

そこしか受けないと決めておけば、嫌々ながら受験勉強にも力が入るだろうと、自分を追い詰める事にした。面倒臭がりな性格は中

々、直らない。だから自分を追い詰めて、頑張る事にしたのだ。

「ま、優兄には関係無いよ。…そろそろ、始まる時間だよ。」

「そうだな。移動するか…。」

法要が始まるまでの、待合室代わりに設定されている寺の一室から、二人は親戚一同よりも、早めに退出して行つた。

その様子を、母が来られないと言う連絡を受け、責めて二人の助けになってやろうと、駆け付けて来た父親が、切なそうに見送っていた。

受験を三月の始めに終え、無事、合格連絡を受け、更に約一週間後。

三月十八日。利知未達の卒業式がやって来た。

当日は午後から登校すれば良かったのだが、利知未は昼前に登校して来て、応援団部室に向かった。

色々と思ひ出深い場所だ。式が始まる迄の僅かな時間だけでも、その場所でゆつくりと過ごしたかった。

誰も居ない部室に入る。一年の頃から何時も座っていた、利知未の指定席に腰掛けた。

初めて、この場所を訪れたのは、何時の事だったろう…？

一年の秋、櫛田に親子丼を持って行ったその前から、偶に部室を覗いていた。そこで当時の団長・都筑経一に出会い、無口な団長に、やや取っ付き難い印象を持った。

保健室でサボっている時以外は、大体ここに居ると櫛田に聞いて、何度か授業中に遊びに来た。都筑は案外、部室に居る事が少なくて、何時もここには櫛田と、当時二年の橋田が屯していた。

体育祭の後、名前だけマネージャーとなり、それから一年生の間は、ここで授業をサボり始めた。櫛田・橋田コンビと街中に繰り出した事も結構ある。その中で橋田からバイク、同じく当時二年の田崎からは、ギターを教えて貰った。

櫛田が卒業してからは、ここから少しだけ足が遠のいた。

その時には気付いていなかったが、今、思うと、その頃の自分は、この場所に櫛田が居ない事が寂しかったのだと思う。その頃から、自分は恐らく、櫛田を初恋の相手として意識していたのだ。

二年になって直ぐのゴールデンウィーク、宏治の怪我の手当てをした。それからまた直ぐの六月には、お礼参りの相談をここでした。初めて自分で作曲した曲を披露したのも、ここだった。あの時、橋田と田崎は感心してくれた。それから、FOXと出会った。

橋田に告白されたのは、ここで開かれていた祝賀会の席を脱け出した時。裕一の死後、落ち込んでいた心に始めに光が灯ったのは、あの時だ。

…初めて人を好きに成る事に気付かせてくれた、大切な、思い出の場所…。

物思いにふけている利知未を、高坂が呼びに来た。

「やつぱり、ここだ。…ホームルーム始まるぜ？」

その声に現実へ戻されて、利知未は顔を上げて返事をし、立ち上がった。

『サヨナラ…。あたしの、大切な中学時代…。…ありがとう…。』

部室を出る時。軽く振り返り、心の中で呟いた。

「…何してるんだ？遅れるぜ？」

「…分かった、行くよ。」

高坂に、もう一度声を掛けられて、利知未は静かに扉を閉めた。

謝恩会まで終わらせ、利知未達は恒例通り、団部の祝賀会に向かった。

「三年間、ご苦労様でした!!」

新団長・結城一彦の号令で、在校生が一斉に唱和する。

今年は下級生に送り出される立場だ。実感としてそう感じたのは、この瞬間だった。卒業式の間は、まだ実感が伴わなかった。

宴会の途中、利知未は今年も脱け出して、校庭の見える階段に腰掛けた。

『三年なんて、あつという間だ。…この場所にも、思い出がある…。』

櫛田と橋田を思い出した。二人共、今は社会人として頑張っている。

『二人に、会いたいな…。』

自分に、大切な事を教えてくれた二人のセンパイ。会えなかった間の事を、色々と聞いて貰いたい…。何よりも、二人のお蔭で人を好きになる事を知ったと言う事を。

…言つて、櫛田には初恋の話しを…。

「瀬川さん!」

声をかけられ振り向くと、今年は宏治が現れた。何となく、可笑しな気分になる。

『ここは自分と深い関りを持った相手が、必ず現れる場所なのかな…?』

「どうした?副団。」

笑顔に向けて、宏治に言った。

「…副団つての、まだ言われ慣れないよ…。」

少し照れ臭そうな宏治の言葉が、学校で話す時と違っている。



「…お袋が、春休み中に一度、顔を見せて欲しいって。」

今年は宏治が、櫛田、橋田の腰掛けた所へ座った。

「…そーか。分かった。行くよ。」

頷いて見せた利知末に、宏治が少し言い難そうに切り出した。

「…倉真が、後、和泉と準一も。最近、良くバツカスに顔を出すように成ったんだ…。」

「みたいだな。」

宏治が一度、顔を伏せ、小さく頷いて話し出す。

「…おれ、思うんですけど…。アイツ等には、正体がバレても平気そうな気がするんです。…だから今度、来る時にどうでしょう…？」

利知末は眉を上げる。意外な言葉に、少し驚いた。

「…宏治はアイツ等の事、そう見たのか？」

聞いた利知末に、確りと頷いて見せた。

「…辛いと思うんです。利知末さん、本当はかなり無理してませんか？」

言って、利知末の顔を確りと見つめた。小学生の頃、初めて会った時と同じ目をしている。

『宏治は、あの頃からのあたしを見てる…。…心配してくれてんだ。』

そう感じて、同時に宏治の成長も実感した。

こいつは、ちゃんと男だ。

男が腹を割って話している事だ。確りと答えてやら無いとならない。

「…そうだな。正直チョイ辛いよ。…けど、まだまだなんだ…。まだセガワは止められない。…あたしの心の中が、納得して無いから…。」

由美の事を思い出す。…まだ、まだまだ、まだだ…。

「…そうですか。…そう言うと思ってました。…でも、」

一瞬、言葉を切り、改めて笑顔で言った。

「…でも、もう少し楽にいられる仲間、増やしても構わないんじゃない

ないかな…？…おれは、そう思う…。」

弟に諭されている様な、不思議な気分になった。利知未は小さく微笑んで、宏治の事をじっと見つめた。

「…サンキユ。…良く、考えて見るから。今、直ぐには答えられない。」

真摯な光を宿した目に、宏治は利知未の強い決心と、深い思いを汲み取った。

その思いは恐らく、由美と言う少女への贖罪。

「…分かりました。…生意気言つて、済みませんでした！戻ります！」

立ち上がって、団部式礼を確り決めた宏治を、頼もしげに眺めた。

「瀬川さん、皆が待つてます。気が済んだら、戻って下さい。」

そう笑顔で言い残し、踵を返して戻って行った。

『あたしは、色んな人に支えて貰つて来たんだ…。宏治にも、感謝しないといけない…。』

弟分に諭されて、利知未はまた一つ、成長した。

一人で頑張つてしていると、思い込んではいけない。自分一人で乗り越えられるなんて、思い上がっては駄目だ。…自分を支え様としてくれている相手が、こんな近くにも存在していた。

その事に気付いて、利知未は改めて、自分を取り巻く友人達に、感謝する事が出来た。

…自分はもう少し、素直に成らないと駄目だな…。

反省をした。人の心を、もっと信用しなければ。

そしてこれが、利知未の中学時代、最後の成長だった。

## エピソード

幸せと言う大輪の花を咲かせる種は、あの時期に蒔かれた。花を咲かせ、実が成る迄には、これから先、幾つもの出来事を越えていく。

あの出会いから、二人の心が繋がるまでには、まだまだ、色々な出来事が待っていた。

中学時代に知り合った、困った弟分達との幾つもの思い出。

下宿の妹分達は、あれから七年のうちに、四人も増えた。

裕一の夢を引き継ぐ事を決めた、利知未が辿った大変な道程。

利知未が、倉真と結ばれるまでの、幾つもの愛情物語。

リビングの置時計が、綺麗なメロディーを奏で、午後三時になる事を告げた。

長い、もの思いから、利知未の心は、今の現実へと再び戻る。  
閉じていた目を開き、自分の、少し目立ち始めた腹を優しく撫でる。

「そろそろ買い物、行って来ないとね。倉真、今日もきつと、お腹空かして帰って来るから。」

…この子は、好き嫌いとか、ない子に育って欲しいな…。  
幸せそうな微笑が、その頬へ浮かぶ。

「その内、段々と話してあげるね。」

自分の身体の中で、今は、安らかに眠っている新しい命へ、利知未は小さく囁いた。

死にたくなる様な思いも、経験した。  
悲しい経験を超える度、自分の中で、何かが一つずつ成長を遂げた。

今はこうして、幸せな日々を実感できる。  
それは全て、あの街から始まり、今へと繋がってきた。

自分が、生きているから。  
愛しい人と、知り合えたから。

…だから、今の幸せがあるのだから…。

この先にくお話は、まだ、終わらない。長い、長いStoryが、待っていた。



## 第六章 卒業・その先の未来へ

(後書き)

利知末シリーズ中学編『幸せの種』に、最後までお付き合いいただきまして、ありがとうございます。

この作品は、一章の前書きにもあるように、今年の春、ある出版社のコンテストに応募した作品です。書き始めたのは、今から二年と数ヶ月前になります。(早いものだ。)

現在、・高校編・大学編・インターン編と、その後のお話で、完成したものが存在しています。

高校編からは、利知末も大人の恋愛に進んでいってしまうので、15R指定が入ると思われます。今回も、途中で指定を入れるべきか悩んだのですが、もしも年若い読者の皆様の目に止まるのなら、敢えて、読んでみて貰うのも良いかと思いました。丁度、利知末達とあまり変わらない速度で成長していく年頃の皆様に、無茶やヤンチャを勧めるものではなく、これから先、漕ぎ出して行く事になる社会の中には、多くの危険が待っている事実を、少しでも考えてみてもらえる切っ掛けになればと、思っていることです。

保護者の皆様には、ご心配をおかけした事と思います。この場を借りて、お詫び申し上げます。

この作品のその後ですが、読者の皆様がお付き合いくださるのなら、二週間ほどの間をいただき、10月の二週目辺りから、利知末シリーズ高校編『大地を捉えて』を、掲載させていただきたいと思っています。その頃、また覗きにきてみて下さいませ。(キーワードに、「利知末シリーズ」と登録しておきます。)

それでは、本当にここまでのお付き合い、ありがとうございます。また、皆様とお会い出来ることを、心から期待させていただきます。

す。  
(…ズーズーしく。)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5648c/>

---

利知未シリーズ中学編 『幸せの種』

2011年6月22日03時15分発行